ISSN2434-5814

# グローバル・コンサーン 04号

*Global Concern No.4*

［巻頭言］アカデミズムとアクティヴィズム …… 澤田稔

［特集1］コロナ対策をジェンダー視点から評価する（三浦まり）

- 税・社会保障 x 非正規雇用 x フリーランス x ひとり親 x 女性に対する暴力・DV x 妊娠・リプロ x 医療・看護 x 移住女性 x 保育 x 障害 …… 大沢真理、竹信三恵子、森崎めぐみ、藤原千沙、北仲千里、中島かおり、小松廉則、稲葉奈々子、町田ひろみ、佐々木貞子

［特集2］連続セミナー 地域発：脱グローバル経済の未来（幡谷則子）

- 海でつながる地域づくり …… 中野佳裕
- 都会と田舎の壁を超える里山コモンズ …… 林良樹、下郷さとみ
- 内山節講演会「現代的共同体のデザイン」講演録 …… 内山節

［報　告］

- 社会的養護出身の若者の困窮リスクと支援制度 …… 小田川華子、濵田江里子
- 第41回 IGC-SSRI 国際シンポジウム 差別と心理学 …… 出口真紀子
- ブックフェア「マイクロアグレッション～差別と心理学～」 …… 佐藤和子
- 『映画 太陽の子』上映会 …… 徳田悠希、中村涼香
- みんなでつくる「被災者とコミュニティ」を中心にした支援入門! スフィア・スタンダード …… 福田紀子
- オンライン哲学対話は続く …… 寺田俊郎

［資　料］

- 「#入管被収容者にも生理用品を」プロジェクト …… 田中雅子、乾友菜、川村ひなの、萩原千賀
- 「ニュース女子」による人種差別裁判に対する意見書 …… 樋口直人

研究所活動報告

*Institute of Global Concern, Sophia University*

# 目　次

**巻頭言**

アカデミズムとアクティヴィズム　・・・・・・・・・・・・・・・・・　澤田稔　1

**特集 1　コロナ対策をジェンダー視点から評価する～現場からのリレートーク～（三浦まり）**

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　三浦まり　4

税・社会保障　事前が酷く事後もお粗末　・・・・・・・・・・・・・　大沢真理　8

非正規雇用　「夫セイフティーネット」幻想から脱却した制度を

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　竹信三恵子　20

フリーランス　フリーランスの現場から～アーツワーカーズの悲鳴～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　森崎めぐみ　32

ひとり親　ひとり親にかかわるコロナ対策評価　・・・・・・・・・・　藤原千沙　42

女性に対する暴力・DV　女性に対する暴力～性暴力・DV・ストーカーなど～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　北仲千里　53

妊娠・リプロ　「セクシュアルリプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR）」が保障されない私たちの社会～妊娠葛藤相談窓口、「にんしん SOS 東京」の現場から～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　中島かおり　61

医療・看護　コロナ禍の保健所、医療現場から　・・・・・・・・・・　小松廉則　71

移住女性　在留資格に運命を左右される女性たち　・・・・・・・・・　稲葉奈々子　77

保育　命とくらしと社会を支える保育労働（ケア労働）の評価を

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　町田ひろみ　85

障害　障害のある女性の立場から　・・・・・・・・・・・・・・・・・　佐々木貞子　88

おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　三浦まり　95

**特集 2　連続セミナー 地域発：脱グローバル経済の未来（幡谷則子）**

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　幡谷典子　97

第 1 回　海でつながる地域づくり　～山口県室積半島のコミュニティ経済～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　中野佳裕　98

第 2 回　都会と田舎の壁を超える里山コモンズ～房総半島・釜沼集落の共感経済～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　林良樹、下郷さとみ　102

第 3 回　内山節講演会「現代的共同体のデザイン」講演録　・・・・　内山節　115

**報告**

社会的養護出身の若者の困窮リスクと支援制度
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小田川華子、濵田江里子 130
第 41 回 IGC-SSRI 国際シンポジウム 差別と心理学 ・・・・・・・・ 出口真紀子 133
ブックフェア「マイクロアグレッション〜差別と心理学〜」 ・・・・・ 佐藤和子 169
『映画 太陽の子』上映会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 徳田悠希、中村涼香 171
みんなでつくる「被災者とコミュニティ」を中心にした支援入門！
スフィア・スタンダード ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 福田紀子 173
オンライン哲学対話は続く ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 寺田俊郎 176

**資料**

「＃入管被収容者にも生理用品を」プロジェクト
・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田中雅子、乾友菜、川村ひなの、萩原千賀 181
「ニュース女子」による人種差別裁判に対する意見書
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 樋口直人 209

**研究所活動報告** ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 241

# 巻頭言
# アカデミズムとアクティヴィズム

澤田稔

本研究所の目的は、その公式ウェブサイトに、「上智大学の建学精神に基づいて、人間の尊厳と連帯を脅かすようなさまざまな問題をグローバルの視点から研究し、その成果をもって学生や社会に意識化の場を提供し、さらに変革のための実践を通じて世界のひとびとの尊厳と連帯を実現する人材を養成すること」と記されている。改めて注目しておきたいのは、ここに、学術的な研究・啓蒙活動にとどまらず、「変革のための実践」をも自らの取り組みの中に位置付けている点である。つまり、この研究所においては、アカデミズムだけでなくアクティヴィズムをもその活動のバックボーンに据えることが、その設置趣旨で宣言されているのである。

言うまでもなく、学術研究機関が社会的・政治的問題に関するアクティヴィズムを標榜する必要はない。それだけに、本研究所があえてそうした志向性を選択しているという点は、その重要な特徴の１つだと言えよう。この点が本研究所の研究紀要である本誌にも体現されており、本号もその例外ではないことが、目次を一瞥していただくだけでも明らかになろう。

しかしながら、こうした姿勢は、単に本研究所が自覚的に選択したものというだけではなく、後期近代における社会諸科学のおかれた状況とも明らかな関連がある。たとえば、日本を代表する社会学者の一人、盛山和夫は、現代社会が直面している様々な危機――すなわち、ベック(Beck, Ulrich)がリスク社会という概念で捉えようとしたような、人間社会がよかれと考えて作り出した営みが私たち自身に跳ね返ってくることによって生じる「再帰性」を特徴とする危機的諸問題――を正面から見据え、そのより望ましい解決策としての新たな秩序構築に向けた「公共社会学」を構想する中で、社会学が取り組むべき課題を、「一次元的視座」及び「二次元的視座」に対する「三次元的視座」という観点で捉えている（盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編『公共社会学 [1] ――リスク・市民社会・公共性』東京大学出版会、2012 年)。この観点は、アカデミズムとアクティヴィズムとの往還あるいは接合の必要性を私たちに再認識させることにつながるように思われるのである。

盛山の言う「一次元的視座」とは、社会問題を単に管理・制御の対象とみなし、それに対して科学技術やこれに基づく合理的な政府の政策によって対処可能と見るような機能主義的な構図で、これが近代国民国家による法制度や教育制度の確立、経済の発展、社会保障制度の整備という諸過程を主導したのに対し、「二次元的視座」は、この構図に反旗を翻して、それが装う客観性の奥に隠された自文化中心主義を告発し、その「脱構築」によって一次元的視座が構築した秩序の抑圧・差別・権力などからの解放を企図するものであった。が、盛山は、後者の重大な欠陥として、前者に対する有効な代替選択肢の提示に失敗している点を

指摘する。「一次元的視座」は超越的であれ社会の秩序づけを目指したのに対し、「二次元的視座」はその超越性の批判的解体に終始したと。これに反して、社会に対し超越することなく、いかにして社会の秩序づけに参加しうるかという課題を引き受けるのが「三次元的視座」であり、この視座に立って社会問題にアプローチしようとするのが「公共社会学」の構想であるという。

ここで注意したいのは、盛山自身が喝破しているように、公共的により望ましい秩序の構想は常に不完全さやある種の偏りを伴うことになるという点である。とすれば、そこでは経験科学・規範科学の双方を含む学術研究だけでなく、現実的な社会秩序の再構築を目指す上で、具体的な「現場」におけるアクチュアルな試行錯誤や当事者・実践家・実務家との対話・コラボレーションといったアクティヴィズムの積み重ねとその反省もまた重要な意味を持つことになろう。本誌は、まさにこうした意味で、学術研究のみならず、そうしたアカデミズムとアクティヴィズムとの往還・接合を試みるフォーラムとしても捉えることが可能で、1~3 号と同様に本号も、本研究所のそうした持ち味が存分に発揮された充実のラインナップとなっていると自賛してもお許しいただけるのではないだろうか。とはいえ、そこに見られる各試みが抱え込む不完全さや偏りの評価については、本誌を繙く読者の方々に委ねるしかない。様々なご感想や忌憚のないご批判をお寄せいただければ幸いである。

以下、そのラインナップを残された紙幅で瞥見しておきたい。

本号における「特集」 2 本のうち「特集 1」は、パンデミックがもたらした社会問題に対して講じられた諸政策をジェンダーという視点から評価し直すという研究企画で、この問題に関連するいくつもの重要な切り口が用意され、それぞれを専門とする研究者や実務家の報告に基づくリレー報告となっている。きわめて充実した具体的なデータや現場の声に基づく議論により、パンデミック自体だけでなく、それに伴い講じられた諸施策によって生じた複合的なジェンダー格差・不平等問題に関する立体的理解が得られる貴重な報告集である。「特集 2」も、パンデミックをモチーフとした企画だが、ここではその事態が浮き彫りにしたグローバル経済の脆弱さに鑑みて、ローカルなレベルでの共同体の再構築及び脱成長型経済の創成可能性を、事例研究を含めて探求するという意欲的で刺激的な試みである。

これら特集以外に 2021 年度に本研究所が実施した企画については「報告」で紹介されている。「社会的養護出身の若者の困窮リスクと支援制度」では、家庭で適切な養育を受けられず施設等での社会的養護を経験した若者が退所後の生活で直面するリスクのあり方を踏まえて具体的な支援上のポイントや課題が考察されている。「第 41 回 IGC-SSRI 国際シンポジウム 差別と心理学」は、内外から専門家や当事者・実践家らを招いて 2 日間にわたり開催されたオンライン・シンポで、マイクロアグレッションをメインテーマに据えて様々な種類の差別問題に関して考察を深める非常に充実した企画であった。ここでは、本研究所所属の企画者による企画概要と海外研究者による基調講演の文字起こし原稿が再録されてい

る。「『映画 太陽の子』上映会」は、二次大戦中に日本にも存在した原爆研究に巻き込まれた若者を描いた映画を鑑賞し、その監督とともに現代の核兵器問題を考えようと、本学学部生が中心に運営した企画で、報告も当該学生たち自身による。「みんなでつくる『被災者とコミュニティ』を中心にした支援入門！スフィア・スタンダード」は、人道支援上の国際基準として知られる sphere standards の入門的理解を目指して、海外だけでなく日本でも熊本震災時に支援活動に携わった実務家を招いて開催された。この報告は、この基準の意義に関する初歩的理解を得る貴重な契機を与えよう。「オンライン哲学対話は続く」は、本研究所でシリーズ化している名物企画「ソフィア哲学カフェ」に関する報告であるが、各回対話のテーマ紹介とともに、哲学対話の意義について改めて反省的に再考した報告内容も目を引く。

「資料]というカテゴリーに収められた 2 本は、ともにその言葉から連想される水準を遥かに超える密度の高い論考である。「『＃入管被収容者にも生理用品を』プロジェクト」では、本学学部生がある授業の一環として、「生理の貧困」という概念を軸に、入管に収容されている当事者の声を聞きつつ進めたソーシャル・アクションの軌跡がまとめられている。「『ニュース女子』による人種差別裁判に対する意見書」は、学外からの貴重な寄稿で、東京メトロポリタンテレビジョンが放映した番組「ニュース女子」による名誉棄損を争点として起こされた裁判のために、2022 年 2 月に東京高裁に提出された原告側意見書である。これは一審で扱われなかった当該番組の人種差別的性格に関する、排外主義の社会学研究を専門とする寄稿者による意見文で、いわゆる「犬笛政治」の具体的な事例の理解に資する考察となっている。

これらの原稿が校了しつつある段階で、ロシアによるウクライナ侵攻というまさに人間の尊厳と連帯を踏み躙る事態が生じ、パンデミックにも増して大きなグローバル・コンサーンを私たちは抱え込むことになった。ようやく今号の発刊に漕ぎ着けたばかりだが、早くも次号に向けて漕ぎ出さなければならない。

澤田稔（さわだ みのる）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学総合人間科学部）

# 特集 1
# コロナ対策をジェンダー視点から評価する
# ～現場からのリレートーク～

（2021 年 9 月 4 日開催）

## はじめに

三浦まり
上智大学教授、グローバル・コンサーン研究所副所長

今日のテーマは「コロナ対策をジェンダー視点から評価する」です。今日は 329 人の方に登録いただいており、99%が女性なのではないかという状況です。

「コロナ禍」、そして「コロナ対策禍」として、女性不況（she-cession） や影のパンデミック（女性への暴力の世界的広がり）をもたらすということが早くから警鐘が鳴らされていましたが、残念ながら日本においてもそのような状況になっています。

そのため、女性たちが経験しているコロナ禍やコロナ対策によって生じた様々な打撃に対し、多くの関心が寄せられています。この間、2 年近くになろうとしていますが、政府も様々な対策を打ち出してきたわけですが、それが果たして十分な支援策なのか、本当に困窮している人たちに届いているのか、そしてそこにはジェンダー視点が入っているのかということを「評価」し、そしてあるべき政策へと繋げる必要があるのではないかと思っています。

「コロナ禍がどのように女性への打撃になっているのか」については、政府も研究・調査・分析をしていますが[1]、今回の企画の主眼は「政策を評価しよう」という点にあります。というのは、政策によって状況が改善することもあれば、むしろ状況を悪化させ、「人災」と言われるような事態を引き起こしかねないからです。

女性が被っている状況に関する議論とかメディアの報道は、まだまだ足りないですが、それでも少なからずあるように思います。しかし「政策に関してきちんと評価していく」ということはまだ少ないように思います。今日がそのような機会になれば幸いです。

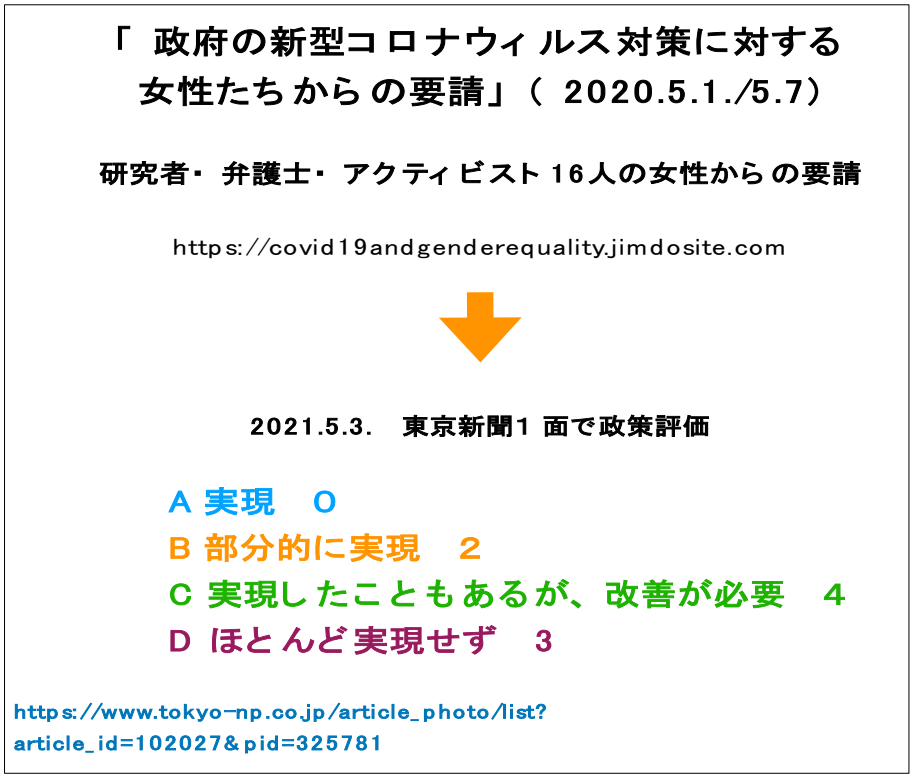
また、今回は「ジェンダー視点からの評価」をテーマにしていますが、同時に気をつけていきたいのが、コロナ禍での経験の仕方は非常に多様であるということです。多様な属性によって経験の仕方がそれぞれ異なっています。そこで、ジェンダーと交差する様々なマイノリティ性に目を向けていきたいというのが今回の企画趣旨です。全ての多様性を本日の企画で網羅することはもちろんできませんが、可能な限り視野を拡げていきたいと思

[1] 内閣府男女共同参画局「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会」（https://www.gender.go.jp/kaigi/kento/covid-19/index.html）を参照。

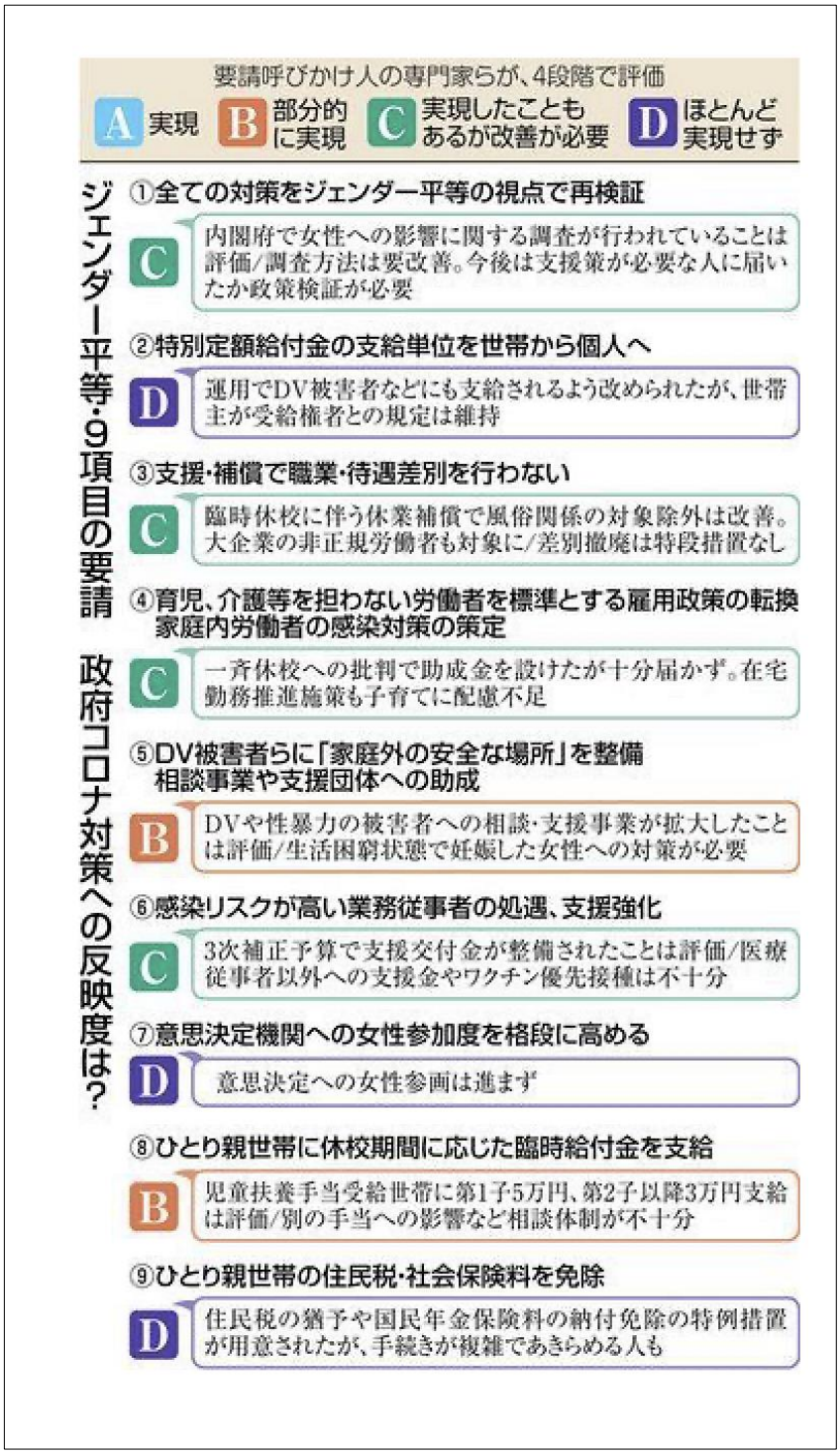
っております。皆様からは質問をお寄せいただければと思います。「こういった視点も必要ではないか」というようなコメントもいただければと思います。

それでは、まず「ジェンダー視点から評価する」という点につき、どのような活動があったかについて、私と、本日のリレートークの参加者でもある大沢真理さんと竹信三恵子さんが参加した試みについて、私の方から最初にご報告したいと思います。

2020 年 5 月冒頭、研究者・弁護士・アクティビストなど 16 人の女性たちのグループで、政府のコロナ対策に対し、政府関係者・各政党に要望を送りしました。また、各党の党首含めた関係者とオンライン・ミーティングの機会を持ち、「女性たちはこういう点で困っているので政策改善してほしい」と要望を伝えました。それは緊急的な要請だったのですが、それから一年が経ち、東京新聞からの企画で「政策評価をしないか」という話を頂戴しました。非常に重要なことですので、16 人のチームで、2020 年に出した要望がどのくらい政府の政策として実現しているのかを A~D の 4 段階で改めて評価しました。




スライド 1




**スライド２　（出典　東京新聞 2021 年 5 月 3 日）**

A の「全部実現」という評価は全くなかったのですが、B の「部分的に実現した」ことは２つ、C の「実現したこともあるが、改善が必要」は４つありました。D の「ほとんど実現せず」も 9 項目中 3 項目、つまり、1/3 ありました。

本日のリレートークでは、もっと細かい点や最新の話を踏まえてご発言いただくので、私からのご紹介はこの辺にします。このような試みを通して色々な現場で声が上がり、政

策を刷新していくことによって、私たちの生きづらさ、今抱えている苦痛が和らぐように願っています。今日のイベントもその一つのきっかけになればいいなと思っています。

イベントのチラシ

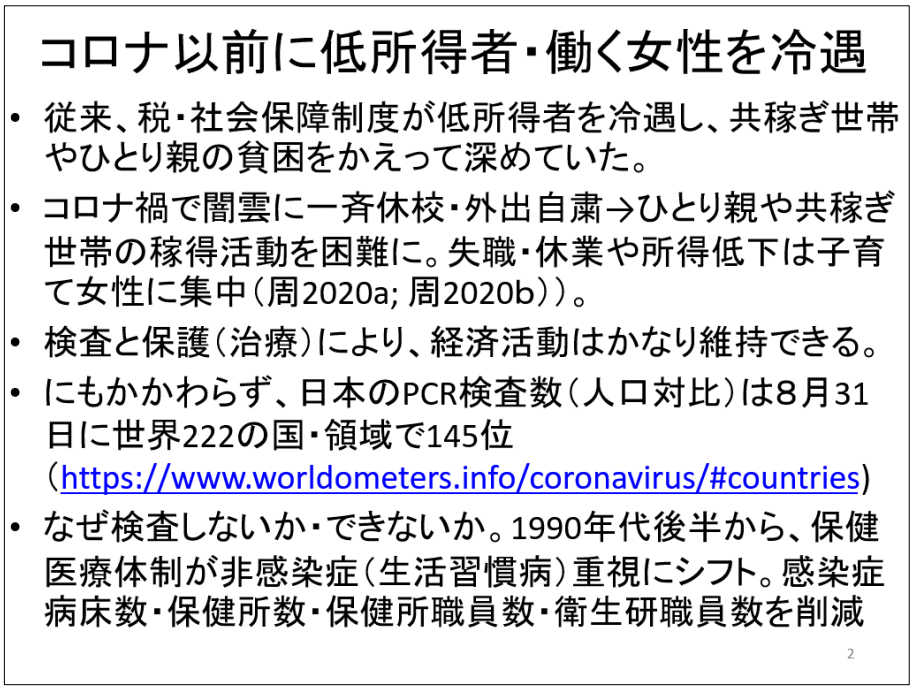
税・社会保障

# 事前が酷く事後もお粗末

大沢真理（東京大学名誉教授）

日本政府のコロナ対策を、税・社会保障制度にそくして評価すると、一言で、「事前が酷く事後もお粗末」につきます。その結果、コロナよりも政治に殺されるという状況になっています。

## コロナ以前に低所得者、働く女性を冷遇



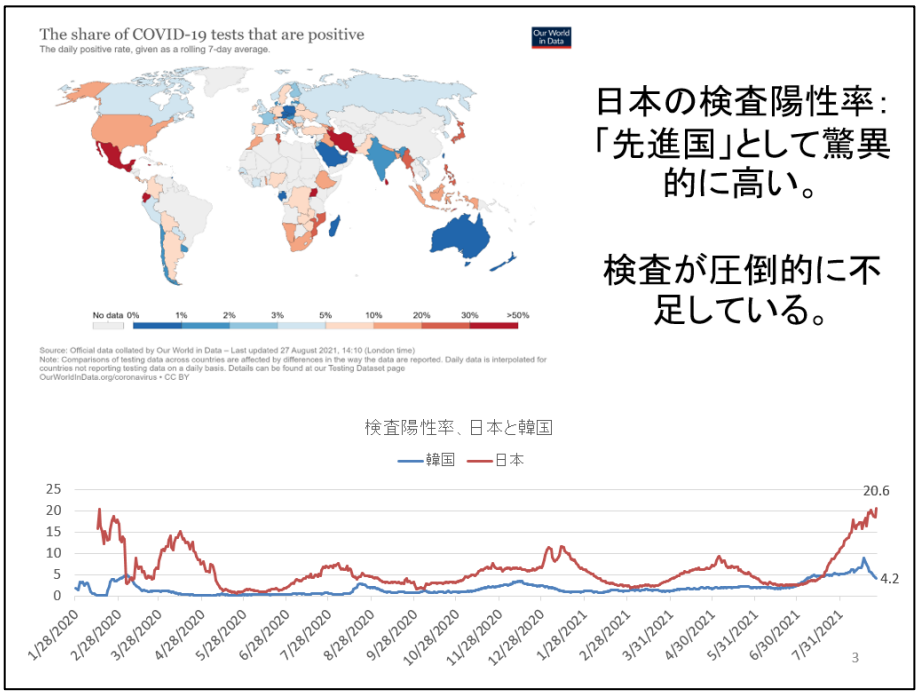

スライド１

スライド１に論点を列挙しました。日本の税・社会保障システムは従来、つまり新型コロナ感染症が蔓延するずっと以前から、低所得者を冷遇し、共稼ぎ世帯や一人親の貧困をかえって深めるように機能していました。

コロナ禍が問題になると、まさに闇雲に一斉休校や外出自粛が要請されました。それは、ひとり親や共稼ぎ世帯の「働いて稼ぐ活動」をただちに困難に陥れました。失職や休業による所得低下は子育てをする女性に集中していたという検証結果が、早くも 2020 年 6 月には出ています。

考えれば、PCR 検査を広く行い陽性者を保護することにより、経済活動はかなり維持できます。同時期の感染者の人口比率は高く見積もっても 1%に届きません。99%の人に休校や自粛を要請する必要はないわけです。

にもかかわらず、日本の PCR 検査数人口対比は、2021 年 8 月 31 日時点で世界 222 の国・領域で 145 位、10 月 27 日時点でも世界 222 の国・領域で 144 位と、圧倒的に低いと言っていいと思います。感染が少ないから検査数が少ないのか、検査数が足らず陽性者を見逃しているのか、この点を推測する指標に、検査陽性率があります。

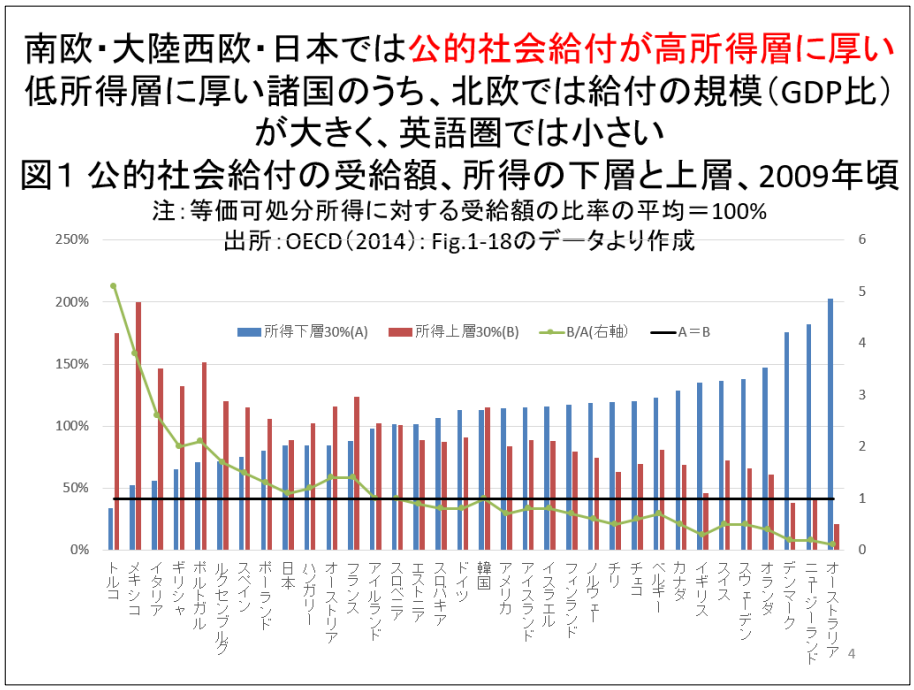



**スライド 2**

話の先取りになりますが、スライド 2 は、Our World in DATA で 8 月末時点の検査陽性率を見るものです。世界地図のオレンジ色は、検査陽性率が 20%超の諸国であり、日本以外のいわゆる先進国には見られません。日本は先進国の一員として検査陽性率が驚異的に高く、検査数が圧倒的に不足していることを意味しています。スライド 2 の下段の図は、同じデータから試みに日本と韓国の検査陽性率を比較したものです。

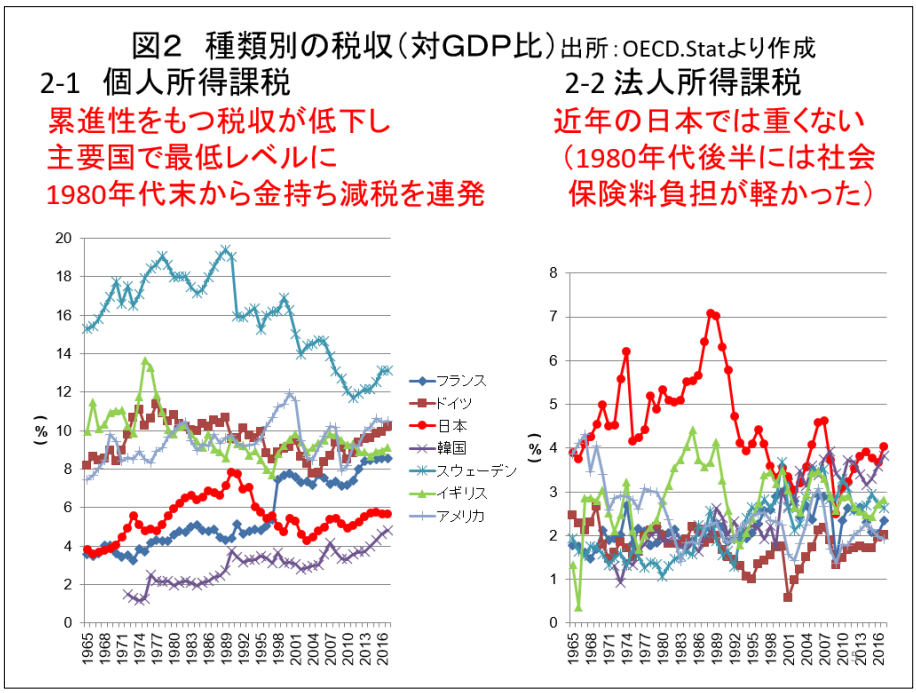
スライド 1 に戻ります。「なぜ検査しないか・できないか」。これが当初から私を捉えた疑問でした。手探りで調べた結果わかったのは、日本では 90 年代後半から保健医療体制が非感染症、中でも生活習慣病重視にシフトしてきた、それにともない感染症病床の数や保健所の数、保健所の職員数、地方衛生研究所の職員数が削減されてきた、ということです。

公的社会給付と課税は誰に




スライド３

公的社会給付が、所得の上層と下層のどちらに手厚いのかをグラフに表したのがスライド３の図１です。特徴だけをいうと、南欧や大陸西欧および日本では、公的社会給付が高所得層にかえって厚い。日本はわずかではありますが、所得上層に厚い。低所得層に厚い諸国というのはグラフ右側の諸国です。この中には二つのタイプがあり、北欧は給付の規模（対 GDP 比）が大きいです。 英語圏では給付の規模が小さく、低所得層に集中していても、格差や貧困の削減効果は限られています。

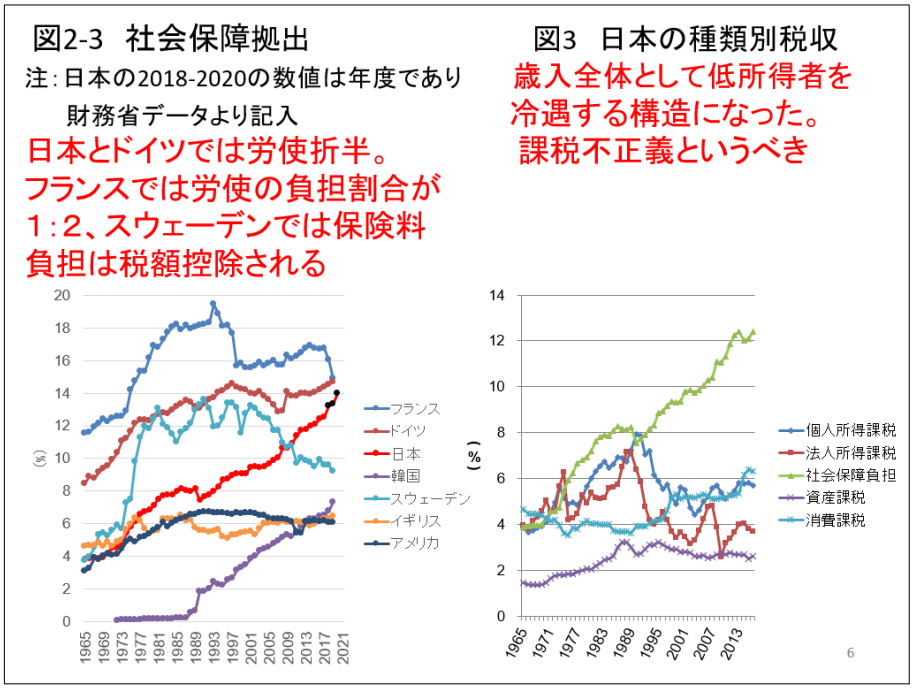



スライド 4

では、住民税を含む「個人所得課税」の負担の方はどうかというと、スライド 4 の図 2-1 のようになっています。日本では 1980 年代末をピークに GDP 比で基本的に下がっています。とくに国の所得税は累進性を持つほぼ唯一の税種ですが、その税収が低下し、主要国で最低レベルになっています。これは 80 年代末から「金持ち減税」を連発したためです。

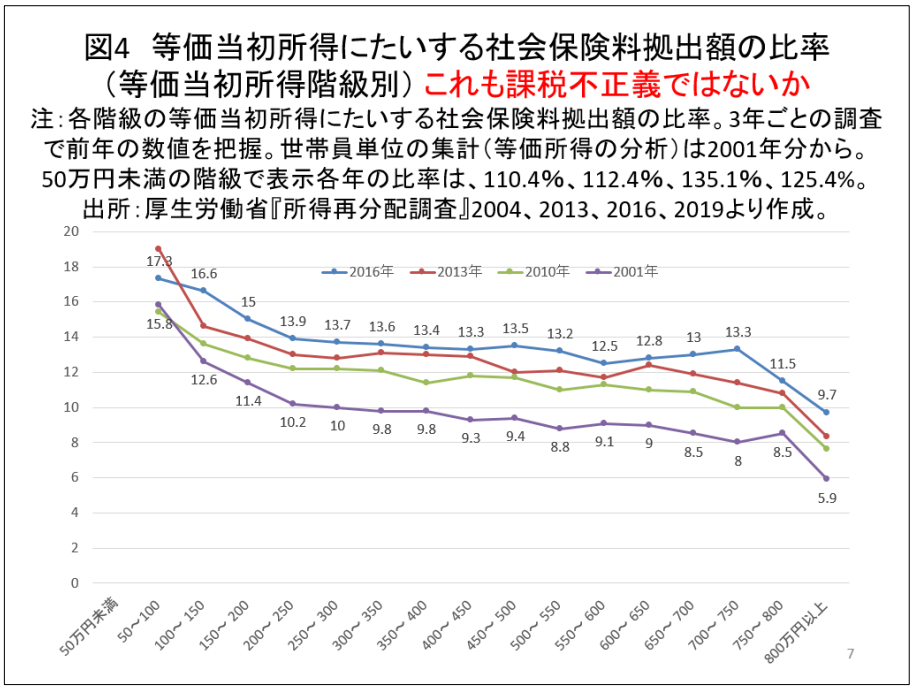
日本の法人所得課税の負担は近年ではそれほど重くありません（図 2-2）。普通の国並みです。他方、スライド 5 で示されているように、社会保障拠出、そのほとんどは社会保険料負担ですが、その GDP 比推移を見ると（図 2-3）、日本の数値がうなぎ上りしている結果、フランス・ドイツ・日本が、高いほうに固まってきました。このうち日本とドイツでは社会保険料は労使折半です。フランスでは使用者の負担割合が労働者の二倍、スウェーデンでは個人の保険料は全額税額控除されますので、個人の負担は実質ゼロです。

ということで、日本は個人の社会保険料負担が世界的にみても高い国になってきました。




スライド５

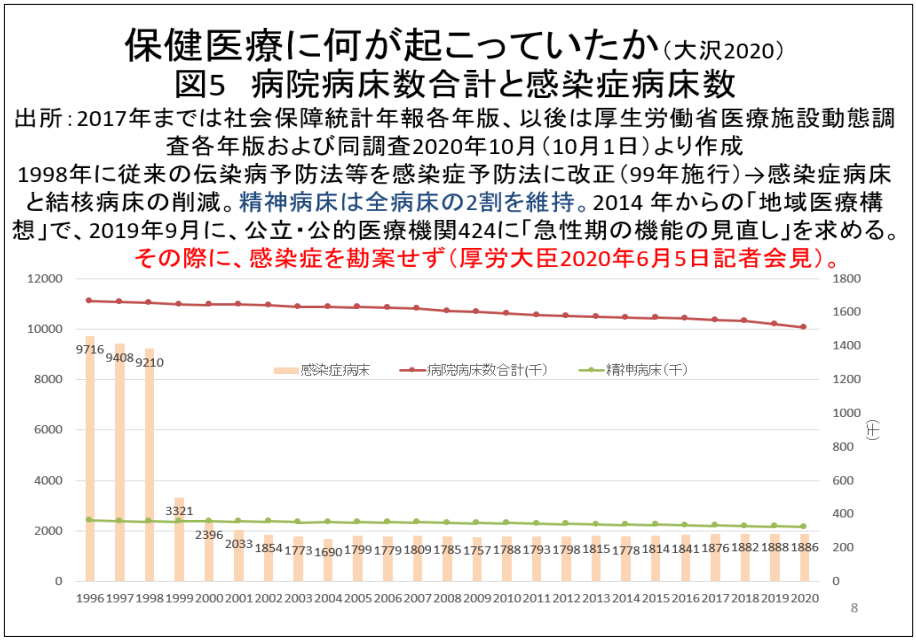
図３は、日本について種類別税収の推移を見ています。他の税種では低下か横ばいで、社会保険料負担がうなぎ上り。これは、歳入全体として低所得者を冷遇する構造となったことを意味します。「課税不正義」と言い換えてもいいでしょう。スライド６の図４が示すように、社会保険料負担というのは収入に対して、たいへん逆進的である。つまり、収入が低い人ほど負担率が高くなる。これも課税不正義と言えるでしょう。




スライド６

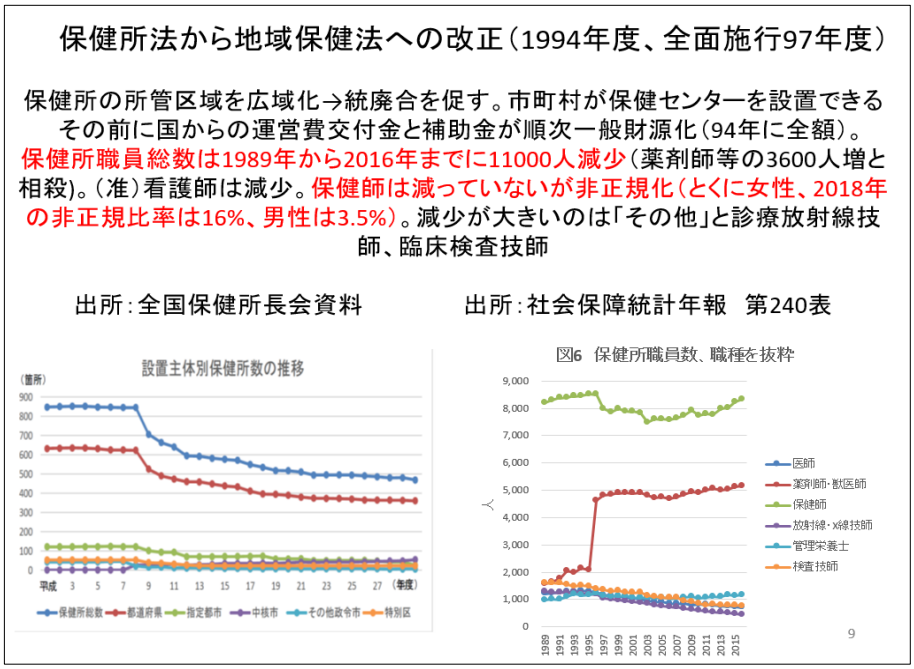
**保健医療に何が起こっていたか**

冒頭で申し上げたように、病院の感染症病床は大幅に減らされました。スライド 7 の図 5 に示すように、その画期は、1998 年に従来の伝染病予防法等が感染症予防法に改正されたことです（99 年施行）。病院病床総数もわずかに減っていますが、感染症病床の減り方はドラスティックです。そういう中で精神病床は全病床の 2 割を維持しています。日本の人口当たり病床数は、OECD 諸国でも最多ですが、その 2 割は精神病床だということです。




**スライド 7**

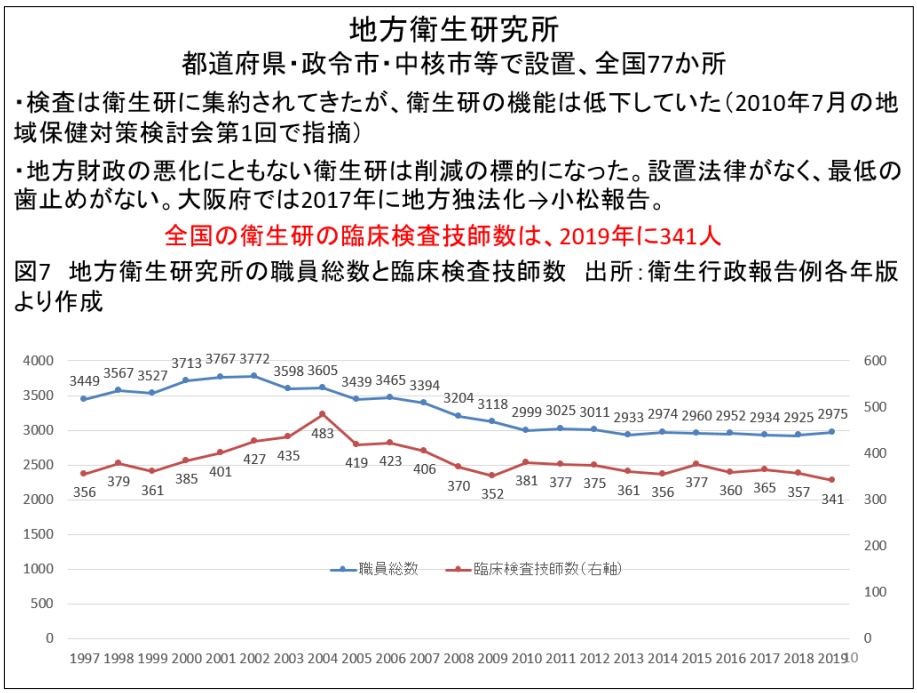
なおかつ、2014 年から「地域医療構想」が推進され、2019 年 9 月には、全国の公立・公的な病院のうち 424 に対して、急性期の機能の見直し、つまりは急性期の対処を統廃合することなど求められました。その際、感染症の問題を全く勘案していなかったことが、2020 年 6 月の厚労大臣の記者会見で判明したのです。




スライド 8

次に保健所についてスライド 8 を見てください。保健所の数が減ったことは比較的報道されていますが、保健所職員総数も 1989 年~2016 年までに 1 万 1000 人減少しています。図 6 では、準看護師・看護師の減少が明らかで、保健師は減っていないように見えますが、非正規化しています。特に女性保健師の非正規比率は直近では 16%になっています。また減少が多いのは事務職と診療放射線技師、臨床検査技師、とくに臨床検査技師です。

しかし、これだから「PCR 検査ができない」というのは早計です。スライド 9 にまとめたように、2010 年の段階ですでに、検査は地方衛生研究所に集約されていると指摘されています。同時に、衛生研の機能が低下していることが憂慮されていました。地方財政の悪化に伴い、衛生研は削減の標的になりました。設置法律がないため、予算や人員等の最低基準の歯止めがありません。大阪府では 2017 年に地方独立法人化してしまいました。

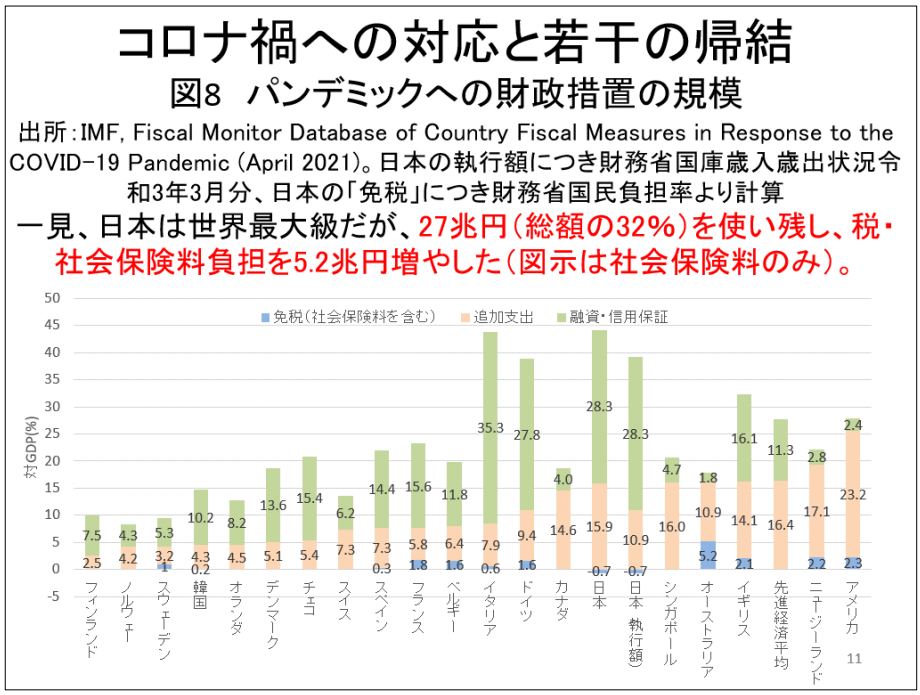



スライド 9

この問題は、医療・看護に関してお話しされる小松廉則さんの報告と関連します。

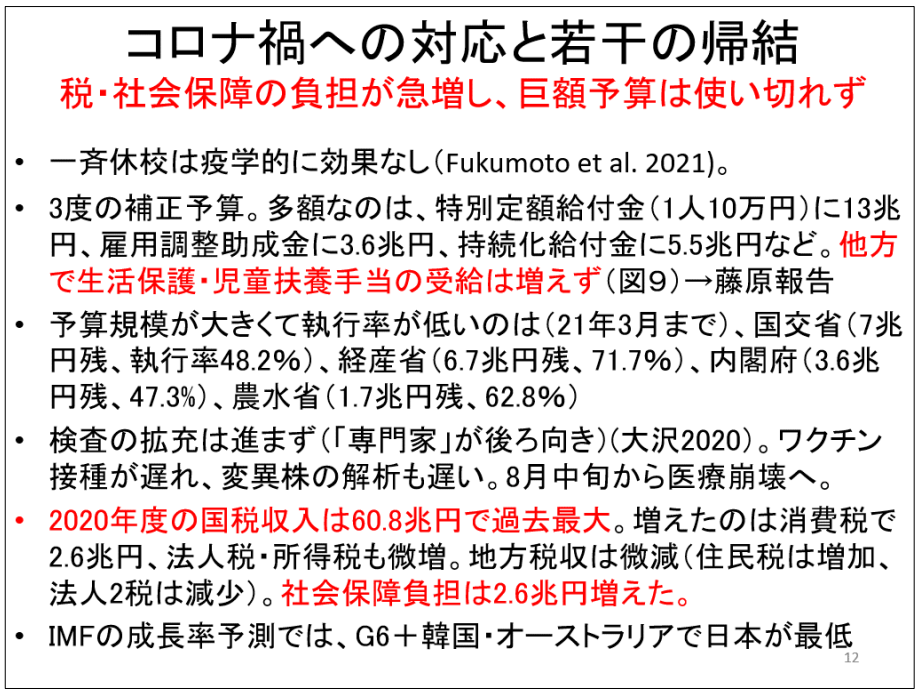
図 7 で、全国の衛生研の臨床検査技師数を見ると、2019 年において 341 人です。全国で 400 人もいないのです。これは「検査ができるはずもない」ということを意味しています。

## コロナ禍への対応と若干の帰結



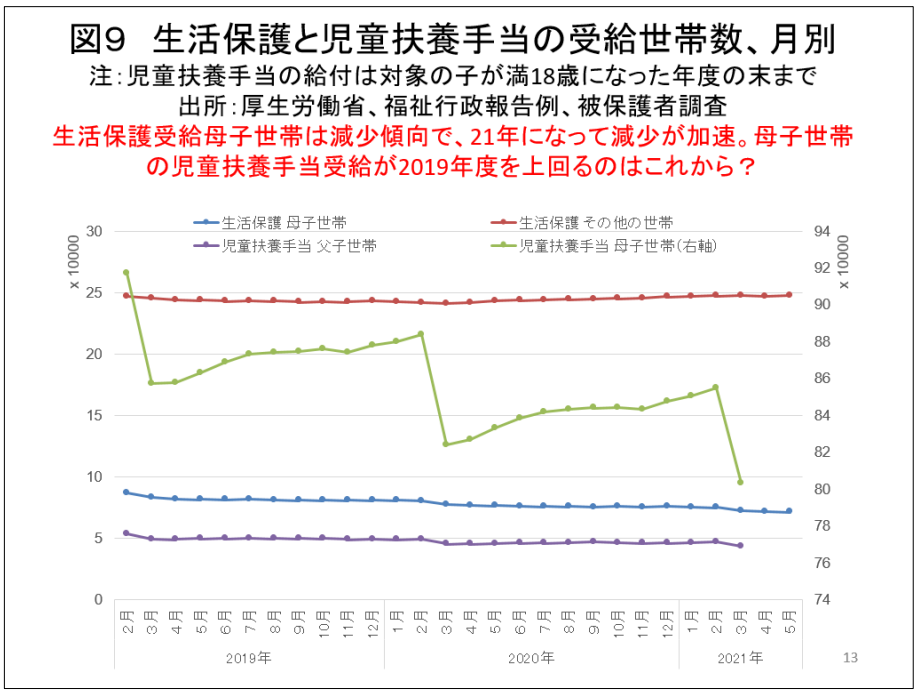

スライド 10

ここからはコロナ禍への対応についてお話しします。まず、スライド 10 の図 8 で、国際通貨基金（IMF）が把握したデータで財政措置の規模を国際比較してみましょう。一見日本は世界最大級ですが、日本の財務省の統計によれば、実は 2021 年 3 月の段階で財政措置の追加支出のうち 27 兆円、総額の 32%を使い残していました。IMF は使い残しを把握していないので、執行額という棒グラフは、私がつけ加えたものです。半面で日本は、これも財務省のデータによれば、税・社会保険料負担を 4.3 兆円増やしました。図 8 のグラフの中で、日本だけ社会保険料の減免を含む免税がマイナス（－0.8%）になっている。つまり、増税があったということです。大きな免税を実施した諸国がある中で、負担増とは由々しい事態と思います。




スライド 11

安倍政権のコロナ対処策の第一弾というべき「一斉休校」は、疫学的に効果がなかったということが、すでに医学系の論文によって検証されています。一斉休校の社会的経済的効果を問えば、共稼ぎ世帯やシングルマザーに偏った失職・収入減少であり、対策どころか打撃です。そのうえ、対処策の巨額予算の 3 分の 1 を使い残しただけでなく、税・社会保険料の負担を増したのです。




スライド 12

3 度の補正予算のなかで、単一事業で非常に多額だったのは一人一律 10 万円（特別定額給付金）ですが、ほかに雇用調整助成金、持続化給付金などがありました。他方で注目するべきなのは、生活保護の母子世帯や児童扶養手当の受給が増えなかった、かえって減った、ということです。スライド 12 の図 9 は、生活保護と児童扶養手当の受給世帯数を月別に見るものです。生活保護母子世帯は減少傾向であり、しかも 2021 年になってから減少が加速していることがわかります。母子世帯の児童扶養手当受給が 2019 年を上回るのは、これからなのでしょうか。下手をすると上回らないかもしれません。

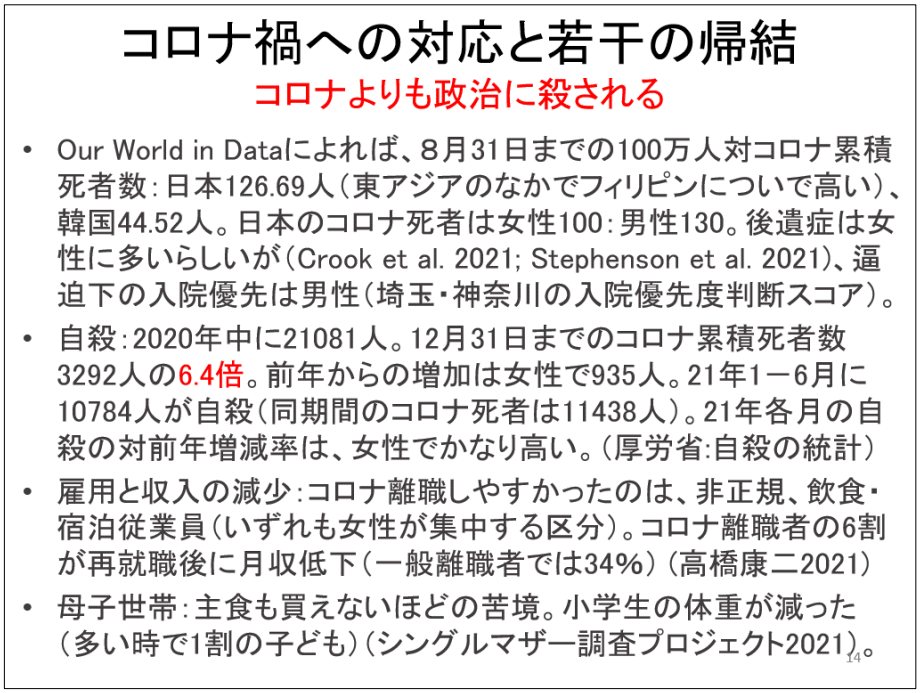
これらの具体的な内容は、後でシングルマザーについてお話しする 藤原千沙さんの報告で見えてくると思います。

2020 年度予算に戻りましょう。省別に予算の執行率を見ると、国交省が低いほうの筆頭で、経産省、内閣府、農水省と続きます。他方で、コロナの検査の拡充は、案の定、進みませんでした。当初から「専門家」が検査を拡充することに「後ろ向き」だったから、当然でしょう。ワクチン接種の開始も遅れ、変異株の解析も遅いです。そして、8 月中旬から東京を中心として医療崩壊に至ってしまいました。

反面で、昨年度の国税収入は 60.8 兆円となり過去最大でした。それだけ国民が余計に負担したということです。増えたのは税率が変わった消費税が大きいですが、法人税・所得税も微増しました。地方税収は微減ですが、減ったのは 法人 2 税で、住民税は増加したので、個人の負担が増加したということです。

繰り返しになりますが、社会保障負担も 2.6 兆円増えました。これだけ「やらずぼったくり」をしているのですが、巨額の予算が成長を促進できるかというと、IMF の成長率予測では G７＋韓国・オーストラリアのなかで日本が最低、とされています。

**コロナよりも政治に殺される**



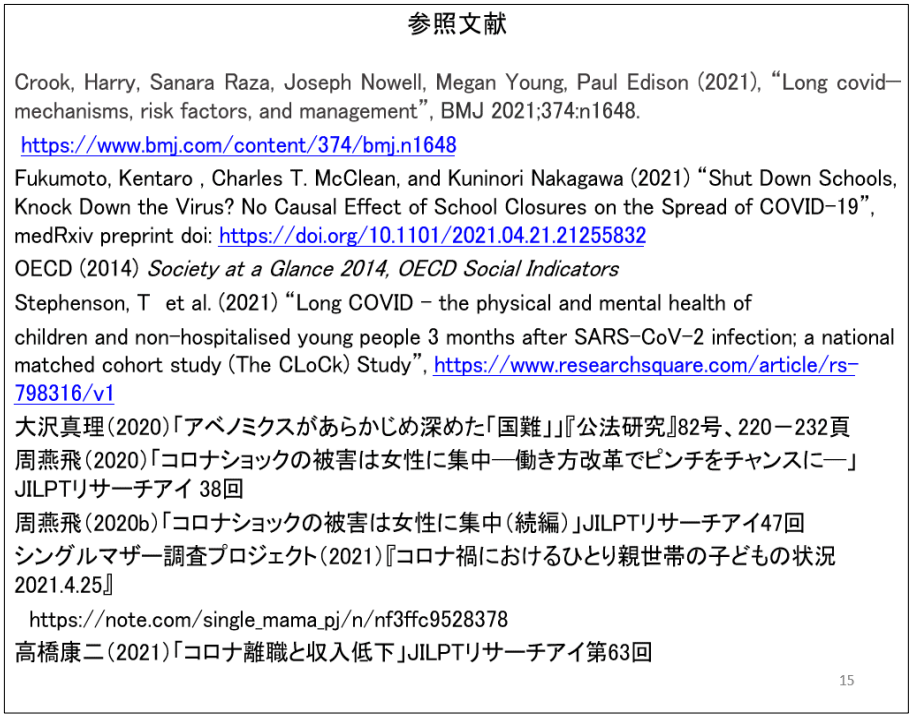

スライド 13

Our World in Data によれば、2021 年 8 月 31 日までの、日本の対 100 万人コロナ累積死者数は 126.69 人で、東アジアではモンゴル、フィリピンに次いで高く、韓国の 3 倍に近いです。死者は男性の方が多いです。後遺症に関しては、2021 年 5 月くらいから研究が進み、女性に多いと、主としてイギリスの研究によって報告されています（Crook et al. 2021）。ところが、この病床逼迫下で、入院優先の基準は男性に有利になっています。埼玉県と神奈川県の入院優先度判断スコアによれば、他の条件が全て同じでも男性であるというだけで 1 点加算されます。これが行き着くところは「制度的フェミサイド」ではないでしょうか。

さらに、自殺の問題があります。これはよく論じられているのであまり言いませんが、昨年 2020 年ではコロナで亡くなった方の総数の 6.4 倍の方が自殺で亡くなっています。増えたのは比較的若い女性です。2021 年になっても各月の自殺の対前年増減率は女性でかなり高い状況です。

雇用と収入の減少については、この後、非正規雇用についてお話しされる竹信三恵子さんやほかの方が論じてくださいます。コロナ離職しやすかったのは非正規、飲食、宿泊施

設従業員で、いずれも女性が集中する区分です。コロナ離職者の 6 割は再就職後に月収が低下しました。一般離職者の 34%が再就職後に月収低下なので、コロナ離職者は再就職後にも月収が低下しやすいということですね。母子世帯については、主食も買えないほどの苦境に陥った方が少なくありません。そのため、シングルマザーの子どもである小学生の体重が減り、多い月では１割の子どもで体重が減ったそうです。たいへん由々しき事態であると思っています。参照文献のリストを最後に付けました。ありがとうございました。




スライド 14

**コメント（三浦まり）**

凝縮したご報告のなかに様々な貴重なデータをご紹介くださって、ありがとうございます。「コロナよりも政治に殺される」ということでした。まさしく私たちがこの間の政策について感じたことです。コロナ前から「課税不正義」の状況となっていたわけですが、さらに保健医療に十分お金を使わず、人を支えてこなかった結果、コロナ禍で「制度的フェミサイド」が起きているということを重く受け止めたいです。菅総理は今後、総裁選に出ずコロナ対策に専念するということですから、私たちも声をあげていきたいと思います。

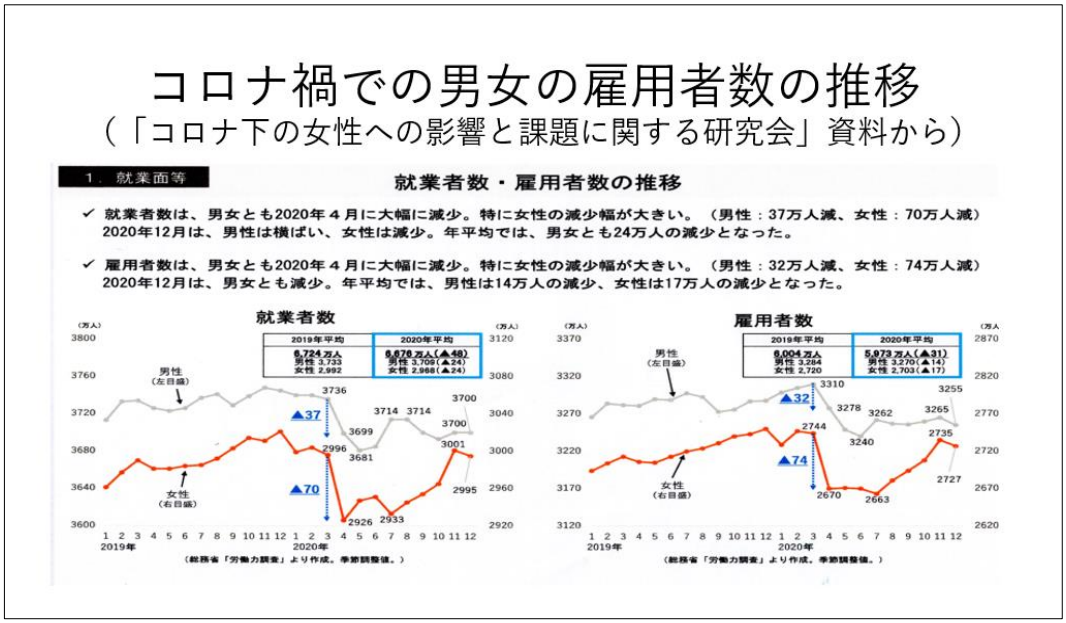
## 非正規雇用
# 「夫セイフティーネット」幻想から脱却した制度を

竹信三恵子
和光大学名誉教授、ジャーナリスト

### 女性に大きかった雇用と収入のダメージ

「コロナ禍での男女の雇用者数の推移」をみますと、女性のほうがはるかに影響度が大きく、就業者数も同様です。このグラフの産業別の構成比にあるように、サービス関係、対人サービスのほうにダメージがありますが、そこは女性が６割くらい占め、「非正規雇用」が多いのです。「非正規」というのは非常に打ち切りやすい雇用形態、働かせ方です。以前から非正規雇用の７割近くが女性であり、働く女性の過半数が非正規だった状況があり、そこへコロナ禍が来たわけです。

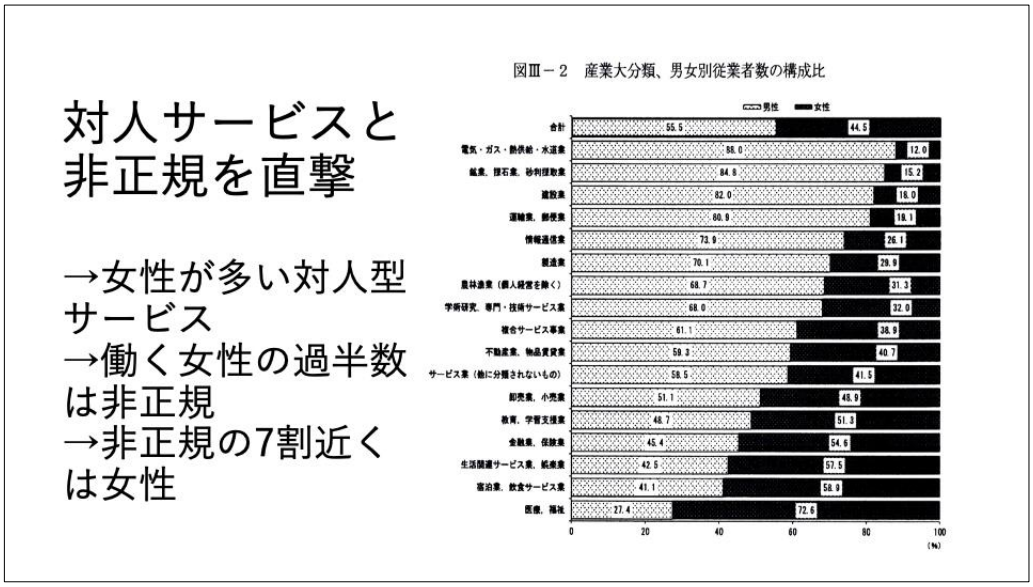
### 非正規＝低賃金の背景としての「夫セーフティネット」




スライド１

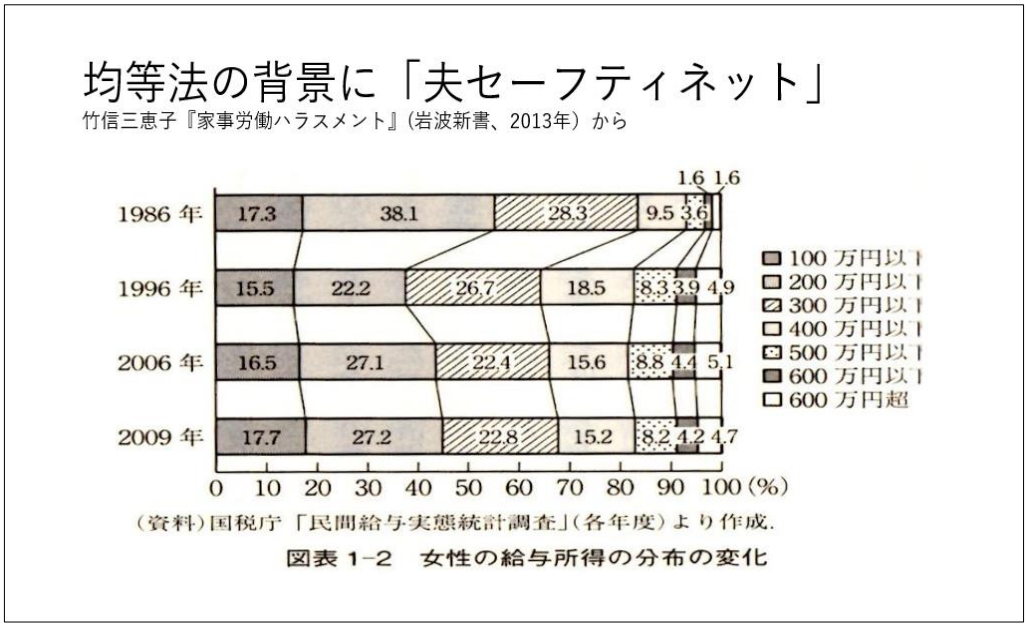
実は日本の労働のうち４割が非正規なのですが、基本的に女性を中心に「持続可能ではない働かせ方」を平気で作ってきた、そういう歴史を持っています。ですから、一旦仕事が無くなるとセーフティネットが全くなく失業手当も受給しにくい状況です。社会保険も、最近ではやや拡大しましたが、時間で区切る形なので、それを避けるために会社は労働時間を週 20 時間以下に抑えます。「細切れ雇用」を増やし、そこに女性を張りつけるという政策をとってきたのです。

そういう政策が平気で通ってきたのは、女性には「夫セーフティネット」があるという架空の前提により、政策が行われてきたからです。「夫セーフティネット」というのは「夫がいて扶養されていれば、女性は低賃金でもいい。セーフティネットが公的になくても良い。家に帰ればなんとかなる、その合間に働けばいい」といったものです。現実に則さない前提で政策が進められてきたのです。




スライド 2

**均等法～「妻つき男性モデル」の前提～**



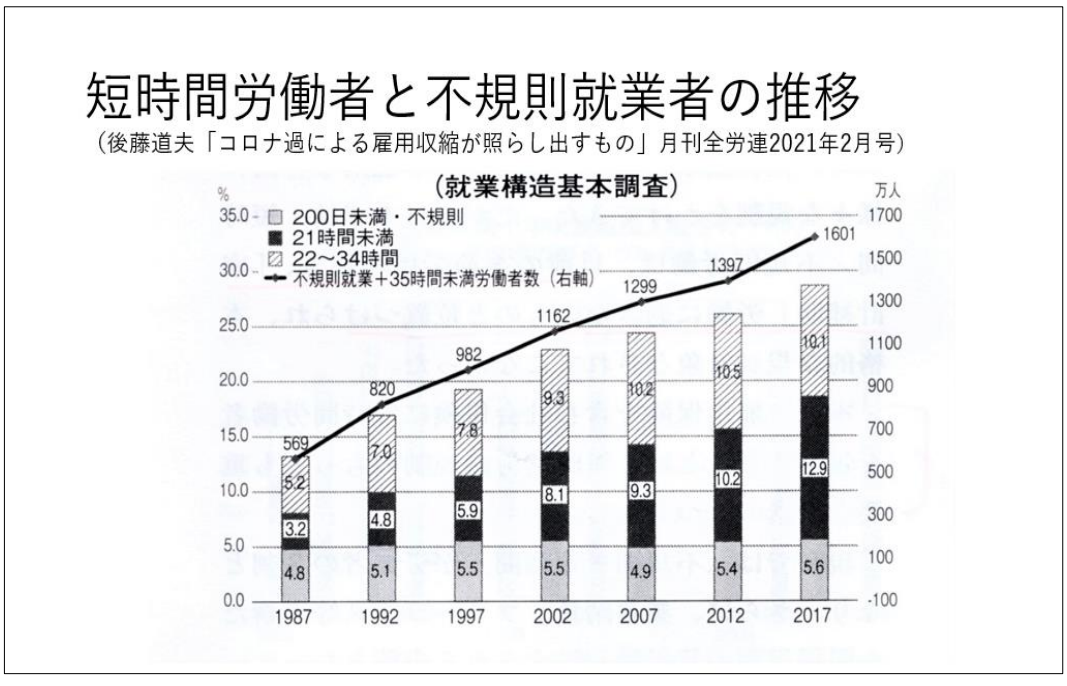

スライド 3

「均等法」が問題を解消したと言えないのがポイントの一つです。日本で「均等法」が

でき「よくなった」というのは半分正しくあり、半分はそうでもありません。「妻がいて働ける、長時間労働できる」というところに合わせた労働基準法改定で、女性保護から撤退。また女性保護の代わりになるはずの男性の労働時間規制をしなかったため、男性も「妻がいる働き方」に合わせられる人以外は総合職になりにくいし、なれない、という状況ができてしまいました。

その結果、1986 年の「均等法」施行時には、8 割もの人が年間給与所得 300 万円以下という酷い給与所得だった訳ですが、改善はしているのです。女性であることを理由にした処遇格差は禁止されたので、採用段階での女性の門前払いは原則なくなり、職域も拡がり、その結果、年収 300 万以下は 6 割まで減った。しかし、その後はほとんど変化がありません。

これは「妻つき男性モデル」です。つまり、「妻がいて長時間働ける方以外は、生活保障と安定補償のある職業にはつけないが、それでいい」という設計にしてしまったのです。そして、多くの女性もこちら側に仕分けされていました。こういう状況下で、コロナ禍が来たのです。コロナ以前から短時間労働者やシフト制などの不規則労働者はどんどん増えていました（スライド 4）。比率からいうと週の労働時間が 21 時間未満の人が非常に増えています。増加した不規則労働者の多くが、このような短時間労働者だったというのが、この間（1987~2017）の変化です。

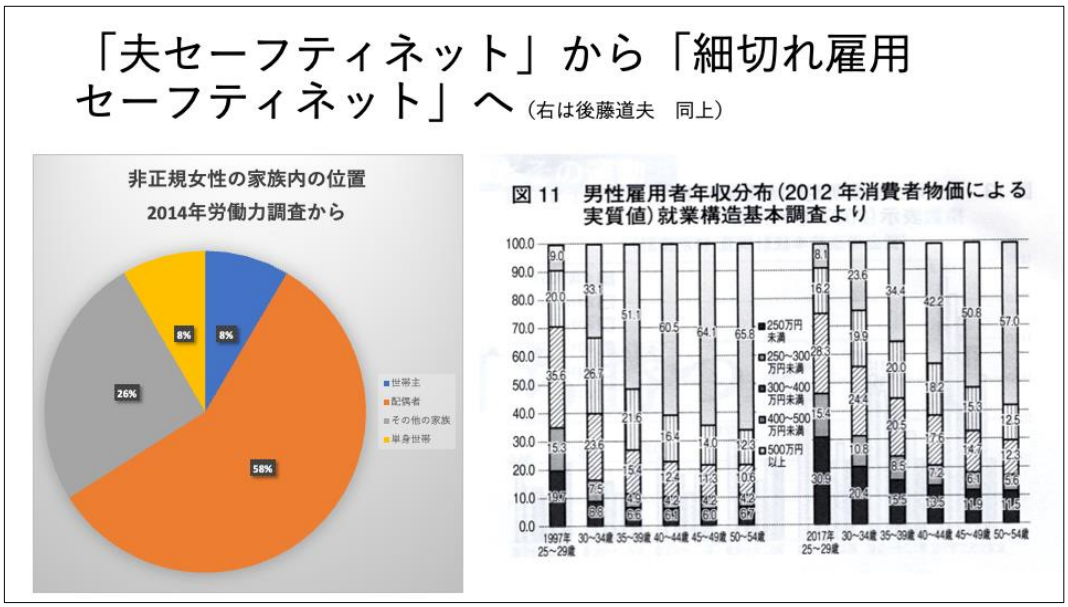



スライド 4

非正規雇用では労働条件が非常に悪くても「どうせ夫セーフティネットがあるからいい」という架空の合意が社会にあります。そして、さらに「社会保険は 20 時間以上の労働」な

どとしてしまいました。時間で切ったために、企業側は「じゃあ、それを避けて 20 時間以下にしよう」とますます細切れ化雇用をしてしまいました。こうして、短時間労働者と不規則就業者が女性を中心に増えていったのが、現在の私たちが住んでいる世界です。

## 「夫セーフティネット」の現実




スライド 5

「どうせ夫セーフティネットがあるからいいんだ」という前提は非現実的とすでに申し上げましたが、女性の家族内での地位でいうと、自身の配偶者、つまり夫がいる方は、全体の 6 割弱しかいないのです。それ以外は非正規雇用者であっても「そうではない方々」です。しかもその「夫セーフティネット」なるものを担うはずの男性の収入が、スライド 5 をみると、どんどん減ってきてしまっています。男性の年収 250 万円未満が黒の部分となりますが、1997 年の頃に比べ、このように増え、しかも 30~34 歳の働き盛りで占められています。

政府は、本来、労働時間規制をきちんとやり、男女が仕事と家庭を両立できる仕組みをきちんと作らなければならなかったのに、かなりの人が自立できない、再生産不可能な働き方に落とし込んでしまいました。「夫が面倒をみるんだ」というありもしない仮定でやってきたからです。

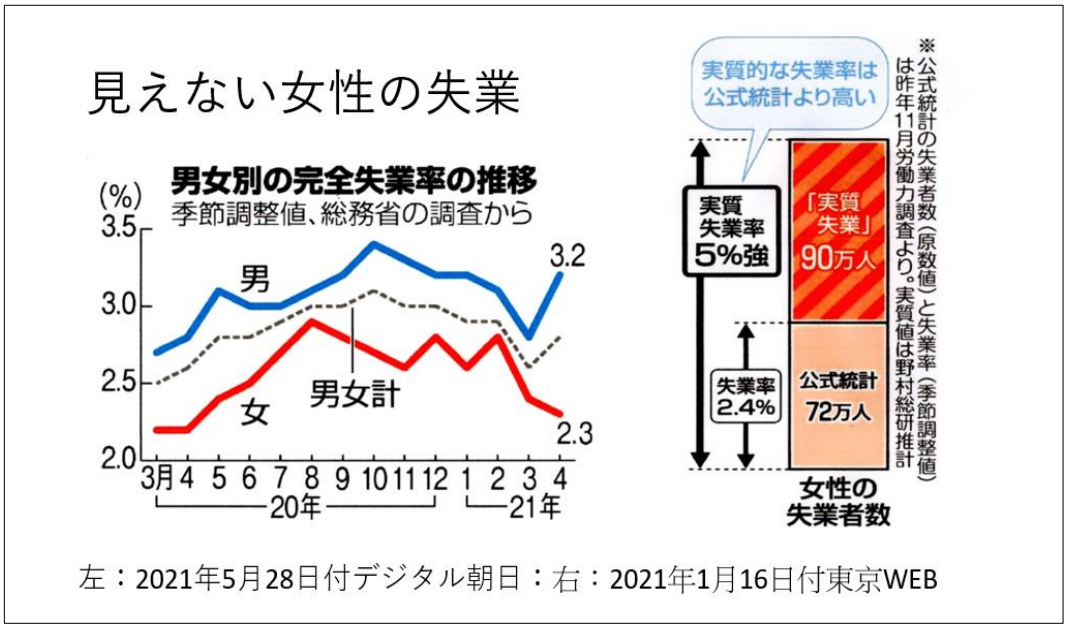
## 動き始めた補償制度と「思いこみ」

そこに来て、コロナ禍に対人サービス分野の方々が直撃されていったのが現在です。もともと法的セーフティネットが非常に弱い状態で、休業手当にしても基本的には「正社員」

に出る作りなので、労働組合では、大変だという悲鳴のような声が上がっていました。そこで、労働組合やメディアが懸命に働きかけ、政府も慌てて色々な給付金や補償を急遽作り、どんどんあてていくということをしました。これ自体は「多少はやったよね」という感触はありましたが、届かなかったものも多くありました。

コロナ以前から、非正規でも受けられる補償規定は一応存在していましたが、雇用主は助成金を申請してくれません。雇用主に「夫がいるから要らないでしょう」という気持ち、「パートや非正規には補償がない」という思い込みがあるからです。

それはシフト労働で顕著でした。シフト労働制とは細切れ雇用ではなく、定時で一週間や一ヶ月のどこかにバラバラに張りつけていくと言うやり方ですが、契約ベースで「週 0 時間でも構わない」という条項が結構あるのです。雇用側がシフト減らしをやり、ゼロになっても OK で「(契約時に) それでいいとあなたが言った」という形で、休業手当も申請してくれないのです。シフト制も含め、非正規の人が基幹労働力であり、かつ自分で生計も立てていたにもかかわらず、です。

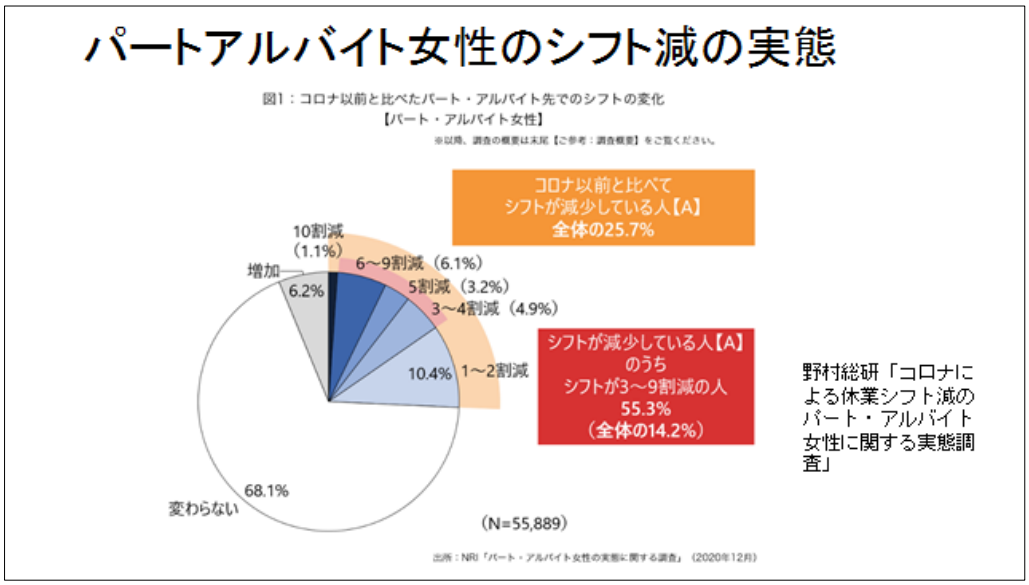



スライド 6

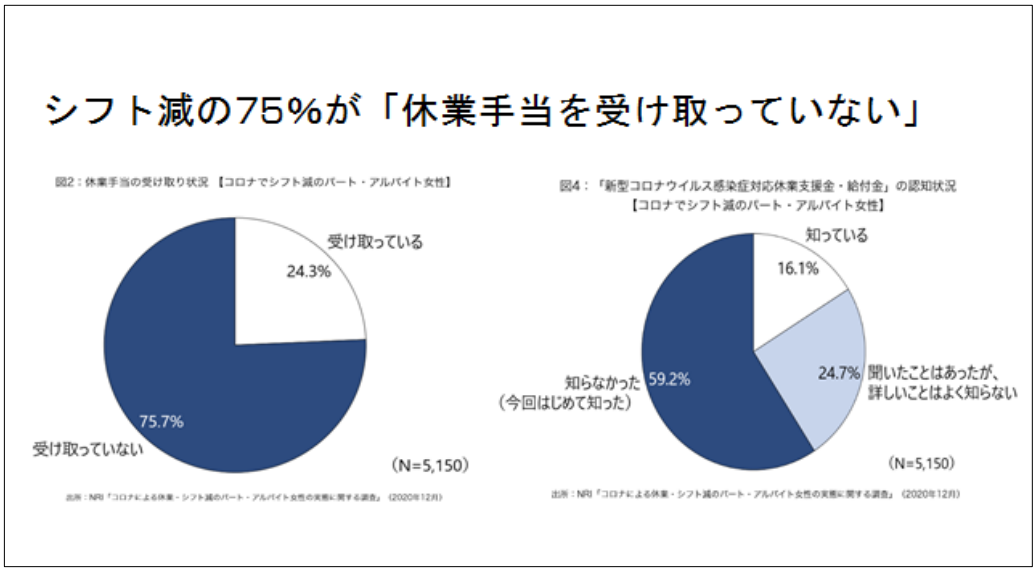
女性の労働力は、夫がいたとしても家計にとって非常に重要な役割を担っています。正規雇用の場合は女性の家計での収入比率が 4 割、非正規でも 2 割という調査があります。そういう状況ですから悲鳴が出てくるのも当たり前です。ということで、政府が急いで、個人が申請できる休業給付支援金を主にシフト減らしをイメージして作りました。しかし、こちらも十分には届きませんでした。

野村総研による「コロナによる休業シフト減のパート・アルバイト女性に関する実態調

査」[1]（スライド 7 およびスライド 8）でみてみましょう。シフトが 5 割以上減ってしまい、かつ休業手当を受け取っていないパート・アルバイト女性を実質的失業者として計算してみると、グラフの多数が占められます。公式統計は 72 万人ですが、実際の失業率は 5%強だったのではないでしょうか。数字だけだと、女性の失業率は下がってきているようで、会社を育てるための体温計であるはずの統計に反映されない働き方が、女性を中心に出てきてしまっていたのです。




スライド 7

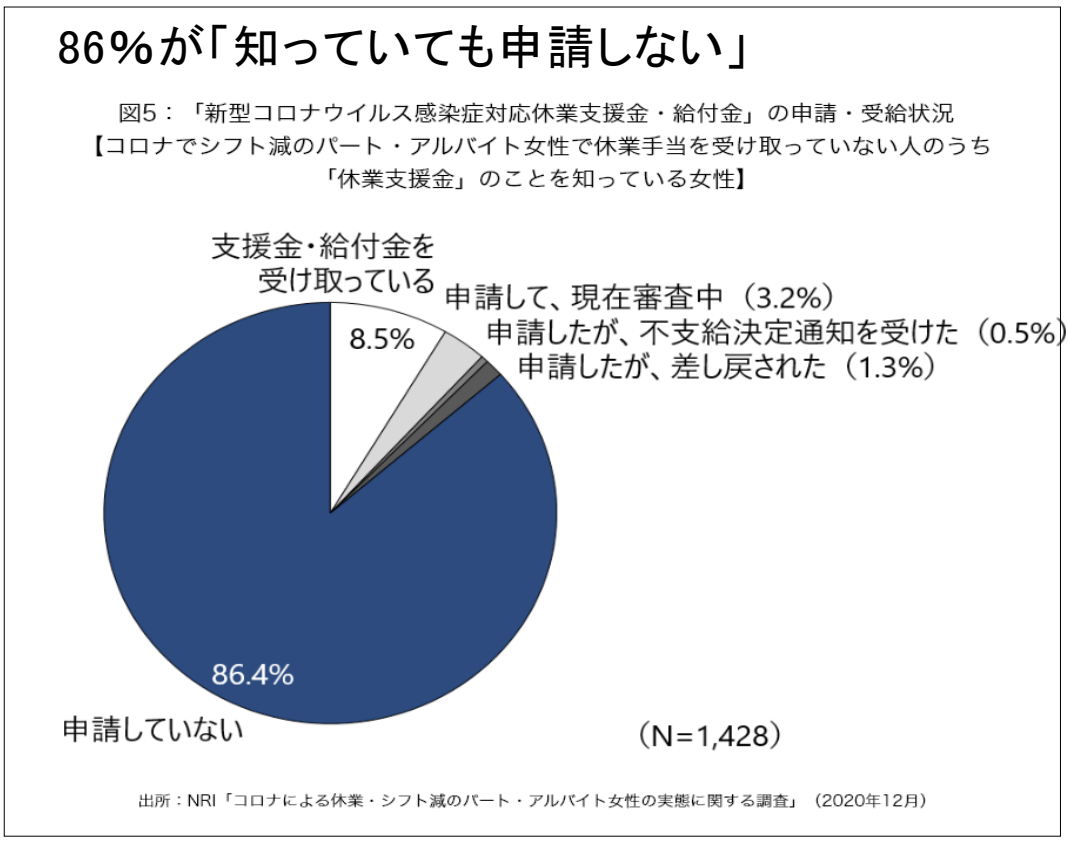



スライド 8

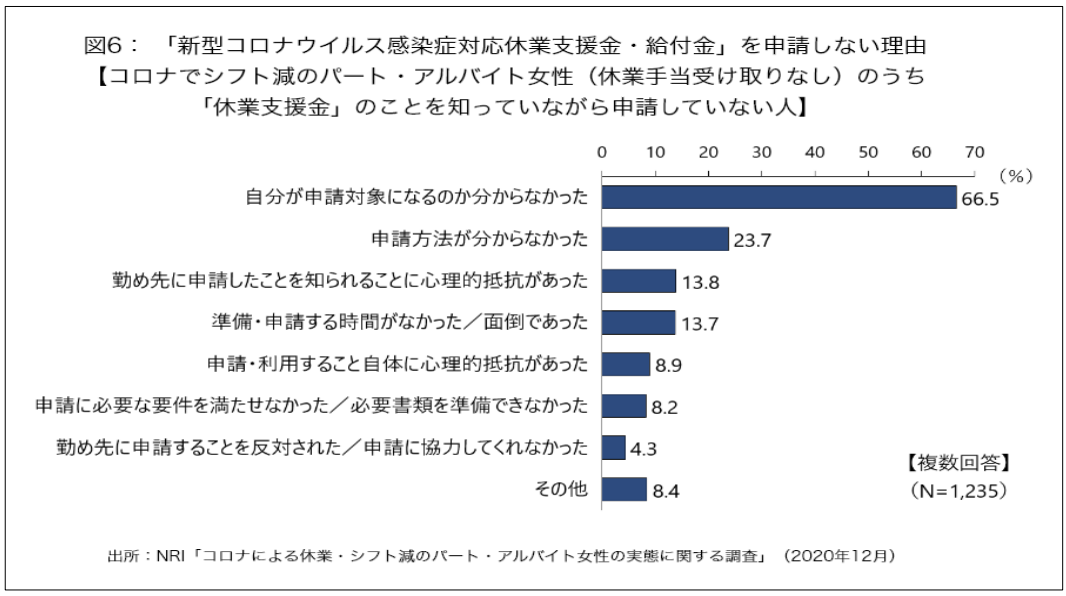
[1] https://www.nri.com/jp/news/newsrelease/lst/2021/cc/0716_1

**届かなかった給付金のなぜ?**

それでは、休業給付支援金はどうして届かなかったのでしょうか。シフトが減ったのに休業手当を受け取っていない」人は 75%、知らなかった人が 59.2%、「聞いたことはあったが、詳しいことはよく知らない」人も含めれば 8 割くらいになります。そういう状態であれば、申請しようがありません。これはメディアのせいという人もいますが、本来、労働組合や組織に属していれば、あるいは会社が周知していれば、知っていたはずです。しかし、会社も周知しないし、組合にも加盟できていない。つまりは、「支えが全くなく、支援してくれる団体もない」中でシフト労働者の女性たちを働かせてきたのです。




スライド 9

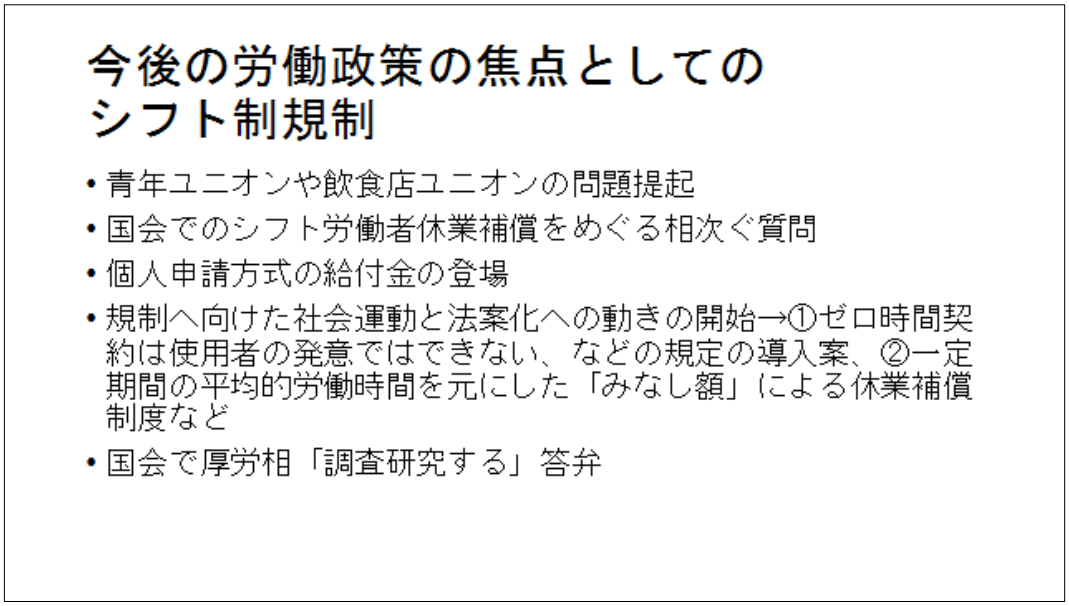



スライド 10

深刻なのが「知っていても申請しない」ということです。複数回答となりますが、「自分が申請対象になるのかわからなかった」が 66%います。これは「自分などはそういう労働者ではない」という排除意識があるのでしょうか。しかし、実は、非正規の女性たちは、基幹労働者なのです。

たとえば、スーパーマーケットなどの販売業では、非正規雇用者は基幹労働力です。そういう方々に労働者意識を持たせないような「シフト」という働かせ方で、雇っていた。そのために、労働者側は「自分は資格がないのかもしれない」と申請をしなかったということです。

これはさすがに大きな問題となり、次の焦点になるだろうと言われています。まず青年ユニオンや飲食店ユニオンなどが問題提起を盛んにし始めるでしょう。国会でも「シフト労働者に支援がいっていない」という質問が相次いで行われます。そして、先程申し上げた「個人申請方式の給付金」が出てくるでしょう。




**スライド 11**

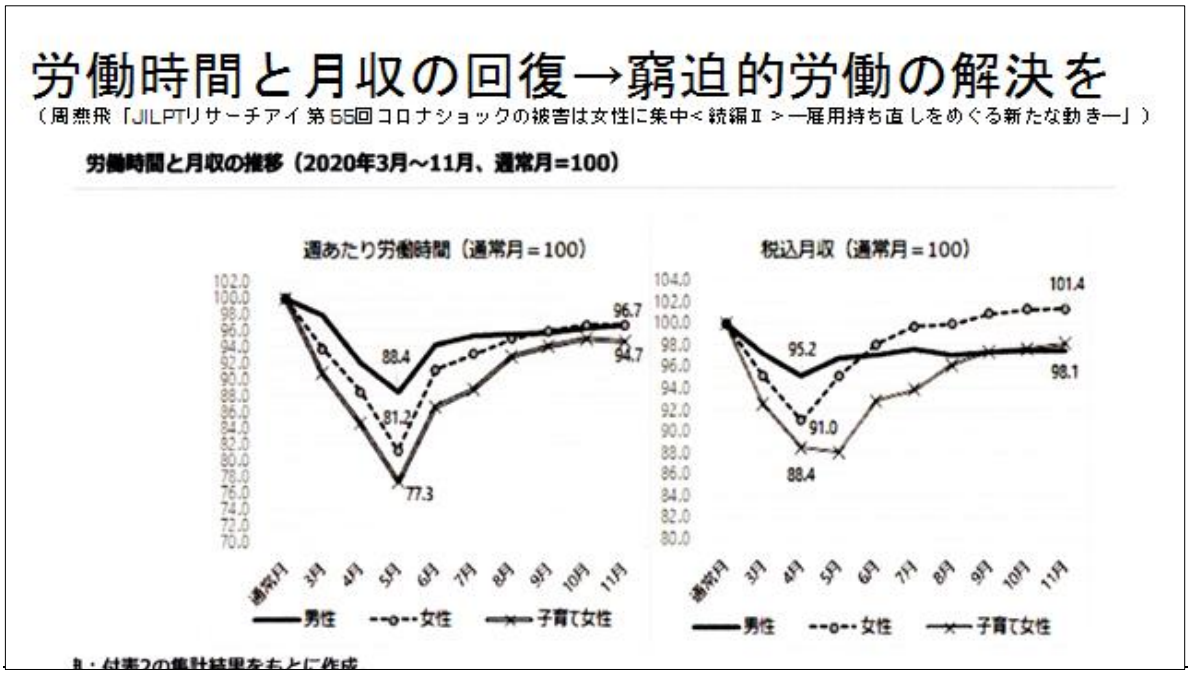
**法制化への動き**

そういった形で、規制へ向けた社会運動と法案化へ動き始めています。確かに「ゼロ時間契約」は労働者側にも「それでもよい」人がいるかもしれません。日本のように正社員の凄まじい奉公制度、長時間拘束では家事・育児にも支障がでるからです。そこにつけ込んでシフト制が広まった訳です。対案としては、「使用者の発意では禁止」、「労働者がやりたいと言った時には良い」などの規定導入案が検討されるでしょう。

さらに、一定期間の平均的労働時間を元にし、これだけの収入があったという「みなし額」による休業補償枠が設定されます。現在、雇用側がシフトを減らしているので、直前の平均額を出すと 1~2 万の補償になってしまい、ほとんど補償の意味がありません。その前の半年から 1 年前の労働時間を平均化し、「これだけは稼いでいた」という休業補償のベースとなります。

ということで、実態にあった契約条項、休業補償を入れていくべきだという案が持ち上がっています。これについて国会で質問された田村厚労相の答弁は「調査研究する」というものでしたが、少しは動きが出てきたのが今の段階です。

## 仕事も生活も「窮迫」した女性たち

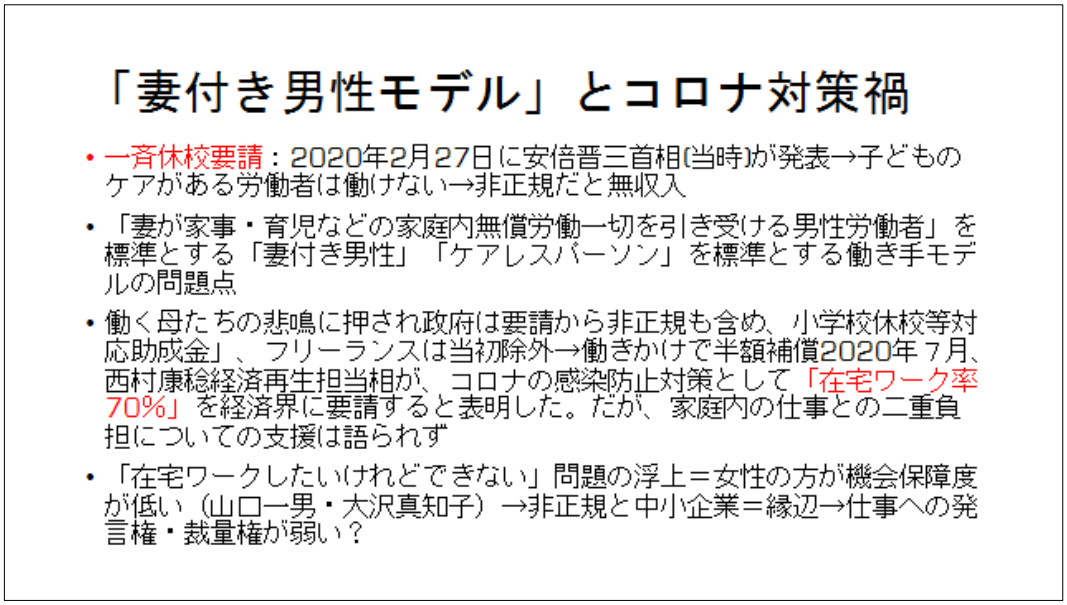



スライド 12

労働時間と月収は 2020 年 5 月を境に「急回復」したという研究があります。実際に、店舗や保育園が再開し、確かによくなったという側面もあります。

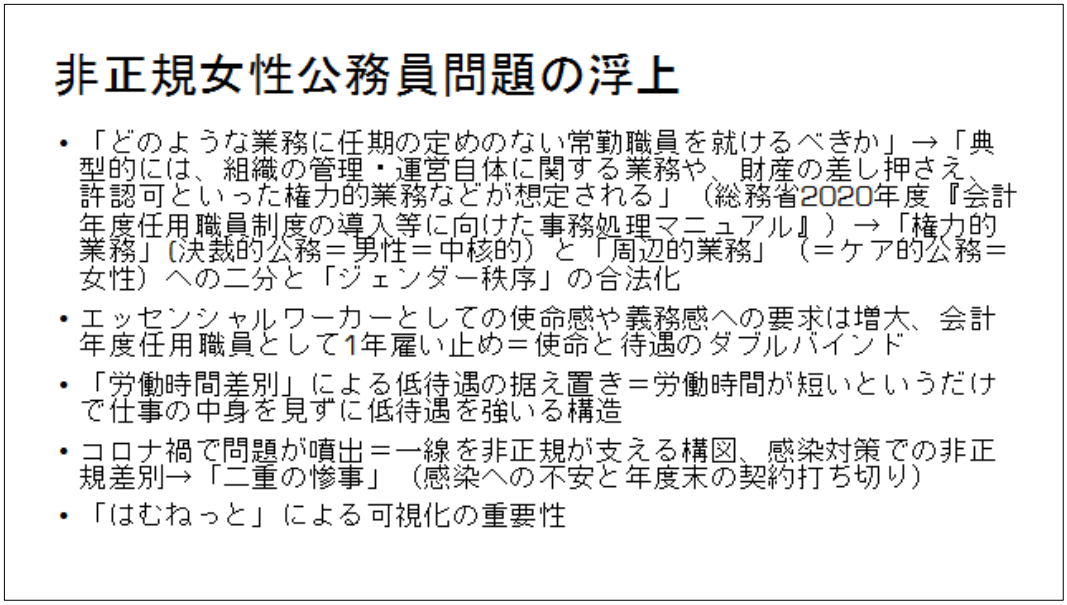
ただその背景に推定できるのが、セーフティネットが悪いので「働き続けないと生きていけない」という問題点があり得たということです。「コロナが怖いからもう少し家にいたい」と思っても、非正規雇用の人を中心に生活が立てられないため、とにかく必死に外で働く、という構造です。それが「窮迫的労働」です。「夫セーフティネット」があるはずといった仮定はとうに壊れています。窮迫的労働のことを私は「細切れ雇用セーフティネット」とも呼んでいます。この急回復の背景には「繋いで行かないと生きていけない」「休んでいられない」「すぐに（仕事に）出る」などの問題点があった可能性があるのです。

もう一つの問題は　「一斉休校要請」（2020 年 2 月）でした。対策によって禍（わざわい）が起きる典型例といって良いと思います。コロナ対策禍が女性を中心に起こっていました。それが「一斉休校」と「在宅ワーク率 70%」要請です。「一斉休校」要請により、家に子供がいて働きにいけない、無収入になったという悲鳴がまた上がり、そこにも給付金、助成金がつけられました。しかし、フリーランスは当初除外です。自営業だからという理由です。




スライド 13

「一斉休校」と「在宅ワーク率 70%」はフリーランスが最も激しい影響を受け、懸命の働きかけでなんとか半額だけ補償をするという政策がとられました。在宅ワークと家事との二重負担です。要は「妻つき男性モデル」を前提にどんどん政策を進めてしまったため、コロナ対策禍が起きてしまったのです。



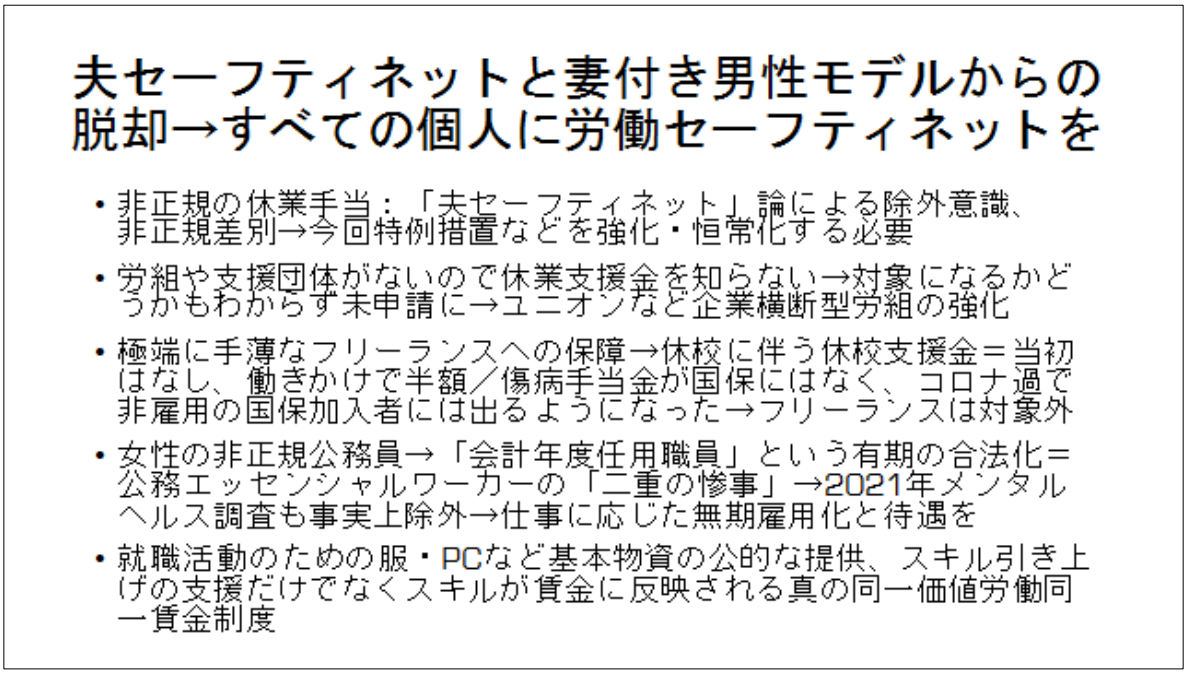

スライド 14

### すべての個人にあった制度を求めて

さらに、住民を支えなくてはならない非正規女性公務員に対して、先程のように再生産

のできる女性を中心とした労働を度外視して設計してしまったため、非常に不安定な雇用が生まれてしまいました。こちらは「はむねっと」というネットワークができ、何とかしようと動き出しているところです。

今後の課題は、「夫セーフティネット」「妻つき男性モデル」はないのだという前提にしっかりと立ち、全ての個人に見合った「労働セーフティネット」をつけていくということになります。




**スライド 15**

**コメント （三浦まり）**

たくさんの情報が詰まっておりました。「夫セーフティネット」があるという前提の今の仕組みを抜本的に改善しなければならない。「見えない失業」ということで女性たちの困った状況が、政府統計にも表れていない。すると、やはり、現場から声をあげていくということが改めて必要だと思います。同時に、「制度を知らない」とか「知っていても自分は受け取れないのではないか」と思っている方が多いということですので、この辺りは私たちが「権利」というものをしっかり認識し、社会で共有する必要性を感じさせられました。

フリーランス

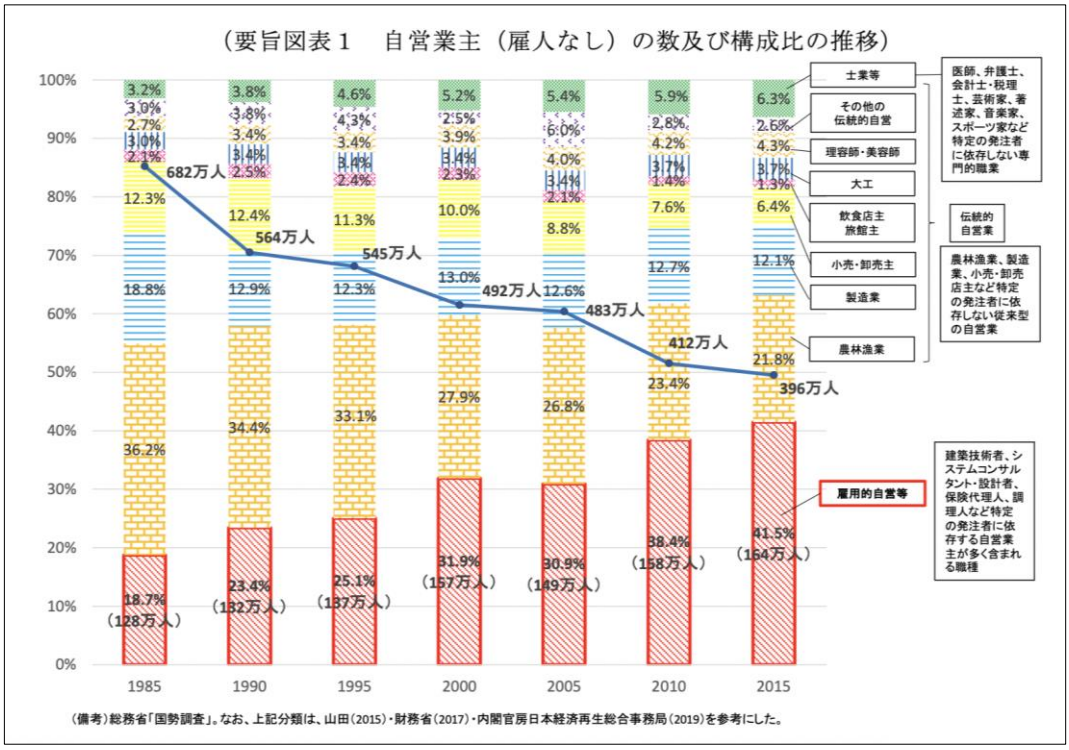
# フリーランスの現場から
# ～アーツワーカーズの悲鳴～

森崎めぐみ
俳優、全国芸能従事者労災保険センター理事長

フリーランスには多種多様な業種がありますが、今回は 4 月の労災補償保険法施行規則改正で定義された芸能従事者（欧米で「アーツワーカーズ」と呼ばれている、俳優や音楽家など芸能実演家と全てのスタッフ）について、以下にご報告します。

## アーツワーカーズの特殊性

従来フリーランスのデータはほとんどありませんでしたが、2019 年内閣府のデータ[1]が最新になりますのでお示しします。



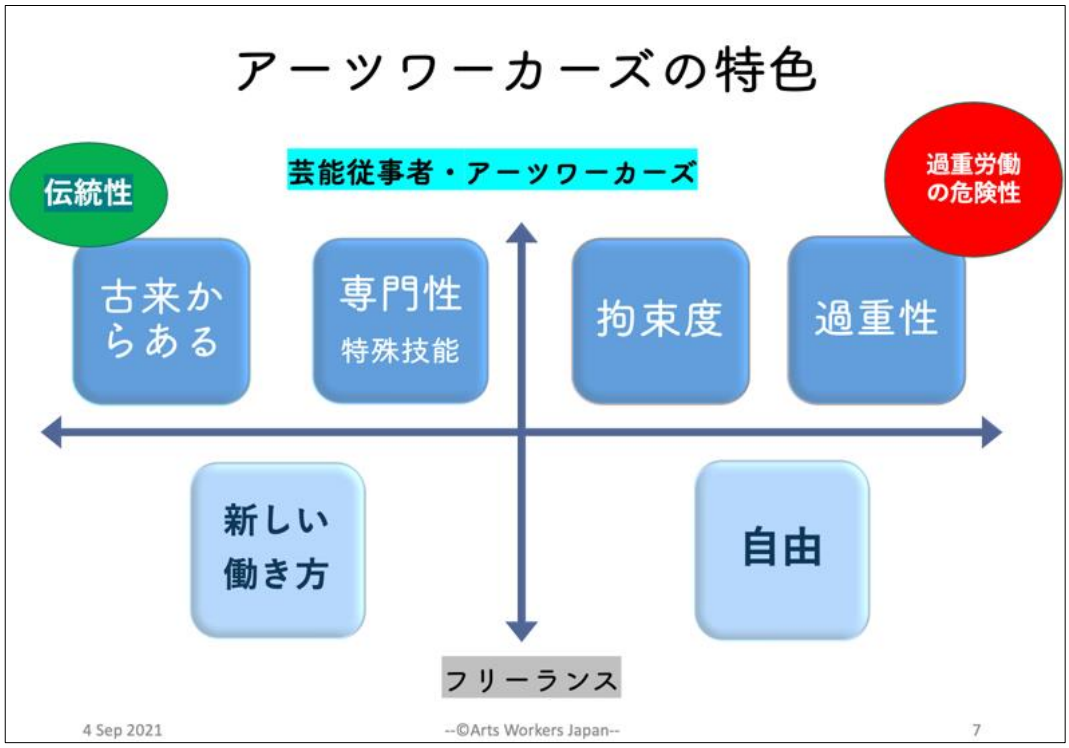

スライド 1

アーツワーカーズは 6.3%の士業の中に、医師、弁護士などに続き、芸術家、小説家、音楽家、スポーツ家など「特定の発注者に依存しない専門的職業」とまとめられています。

[1] 「フリーランス実態調査 2019 」(内閣府)

男女比についてはデータがないため、私たちが実施したコロナ禍でのアンケートでお示ししますが、女性が 5 割強と、男性がやや少なくなっています。

### ① アーツワーカーズの特色

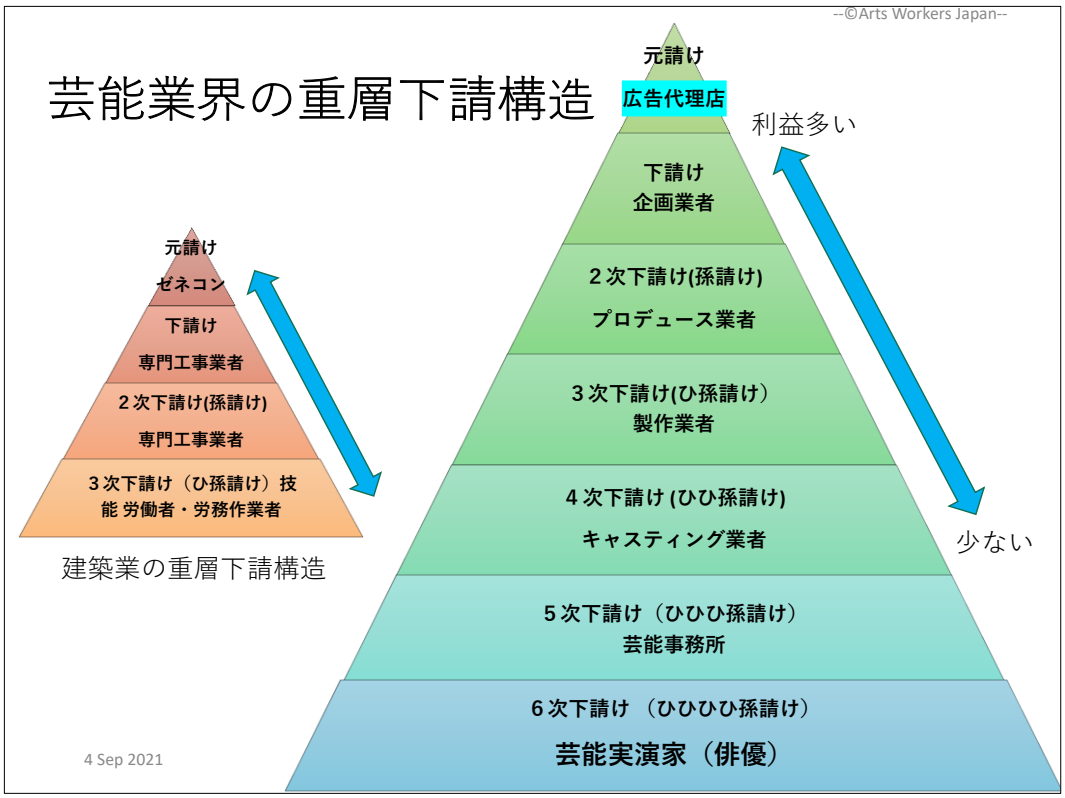



スライド 2

アーツワーカーズは、一般的にフリーランスとされている新しい働き方から甚だ乖離しています。私たちは伝統性を持つ専門業種の職人であり、古来からある職業に従事しています。フリーランスは「自由な働き方」であり、「自分の裁量で仕事をしている」とされていますが、アーツワーカーズは相当数の指揮命令をされて働いており、拘束度も高いです。さらにスポンサー企業の広告費で成り立つエンターテインメント産業でもあるので、不況に応じて制作費が少なくなり、報酬が下げられることが常です。 特に不景気では、労働量は変わらずに制作日数は短くなるので、過重性が非常に高くなります。

### ② 重層下請構造（スライド３）

建築業界に「重層下請構造」がありますが、芸能業界はさらに重層化しており、大元請けに対して 6 次にあたる「ひひひひ孫請け」まであります。しかも中間層の下請にもフリーランスがおり、フリーランスだらけの重層構造になっています。俳優や音楽家、歌手、ダンサーなどの芸能実演家や各種技能スタッフは一番下の階層になり、利益も一番少ないです。




スライド 3

### ③ 低収入

調査結果でも収入が非常に少ないのは明らかで、300 万円未満の方が 1/2 以上います。これはコロナ禍に限ったことではなく、5 年前の同じ調査でもほとんど変わっていません。「芸能実演家の契約に関する実態調査アンケート」では二次利用（再放送）の契約とその著作権にともなう収入について、契約をしているという方は 15.3%のみ、二次使用料を貰っているという方は 3 割以下です。

### ④ 労災

労働災害も非常に多く、アスベストによる胸膜中皮腫を発症して亡くなられた舞台俳優や、スタントマンが実演中に車に轢かれて亡くなられた事故、世界中からインターネットで誹謗中傷されて自殺をされた女性プロレスラーの例など死傷事例も多く、調査では仕事の現場で事故や怪我の経験がある、または見聞きしたことがある方は 6 割以上います。[2]

### ⑤ 安全衛生

安全衛生の状況もよくありません。「仕事の現場にトイレがない」および「ないこ

[2] 厚生労働省 労働条件分科会労災保険部会第８８回労働政策審議会資料 1

とがあった」と答えた方が約 6 割、「仕事の現場にトイレがない時どうしましたか」という質問に「公共のトイレに行った」が 94.6%、「我慢した」「屋外でした」という方も一定数おり、膀胱炎になった方も 3 割ほどいらっしゃいました。

### ⑥ ハラスメント

従来データがなかったフリーランスのハラスメント調査を、2019 年に初めて実施しました。パワハラ約 6 割、セクハラ約 3 割のほか「レイプされた」も 4.4%、53 名もいらっしゃいました。ハラスメントを受けた 4 人に 1 人が仕事をやめています。ハラスメント防止法措置の改正に「フリーランスも対象にしてほしい」という方が 98.9%もいました。

2019 年の女性の職業生活における活躍の推進に関する法律等の一部を改正する法律案に対しては「フリーランスと就活中の学生に対するセクハラの被害を防止するため、男女雇用機会均等法に基づく指針等などで必要な対策を講ずること」という附帯決議のみがつけられました。翌 2020 年 6 月、企業の事業主には「パワハラ防止措置」が義務になり、2022 年からは中小事業主にも義務となりますが、フリーランスは対象外です。2021 年の調査[3]では、セクハラ及びパワハラに遭った方が全く減らず、この 1 年のフリーランスへの被害はほぼ同じ結果が出ています。

### コロナのダメージ

2020 年 2 月 26 日、内閣府からコロナ感染拡大防止措置のため、イベントや公演などの自粛が突然要請されました。フリーランスは発注主から一方的に契約変更されることが常で、中止の連絡すらないことが厚生労働省の検討会で議論されていました[4]。

もともとフリーランス・個人事業主は交渉力が弱く、事業基盤が脆弱なのでコロナで追い討ちをかけないよう「契約の変更によって応じた費用や報酬の上乗せ」など、適切な配慮をするよう発注主に要請する通達[5]が 経済産業省・厚生労働省・公正取引委員会から連名で発出しましたが、図 4 にあるように、これを知っていて「発注主に要請した」というフリーランスはたった 1%しかいませんでした[6]。

---

[3] 「表現の現場ハラスメント白書 2021」調査主体：表現の現場調査団

[4] 厚生労働省雇用類似の働き方に係る論点整理等に関する検討会

[5] 令和 2 年 3 月 10 日経済産業大臣・厚生労働大臣・公正取引委員会連名発出通達「新型コロナウィルス感染症により影響を受ける個人事業主・フリーランスとの取引に関する配慮について」20200309 経第 1 号,厚生労働省雇均局 0310 第 4 号公取企第 25 号

[6] 「文化芸術に携わるすべての人の(自粛 10 ヶ月経過)実態調査アンケート」調査主体:演劇緊急支援プロジェクト

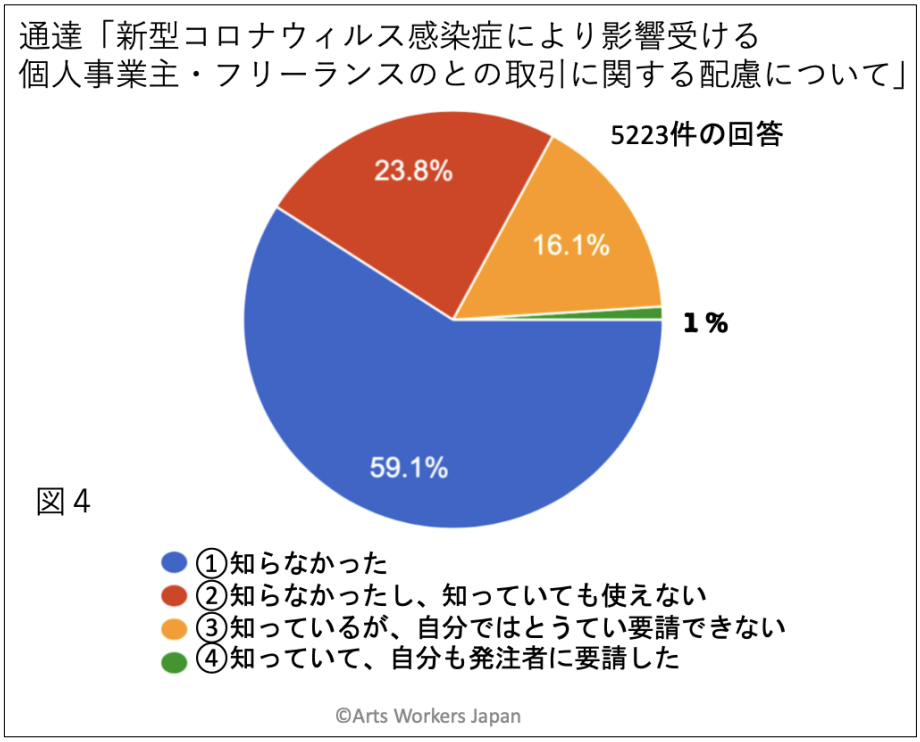
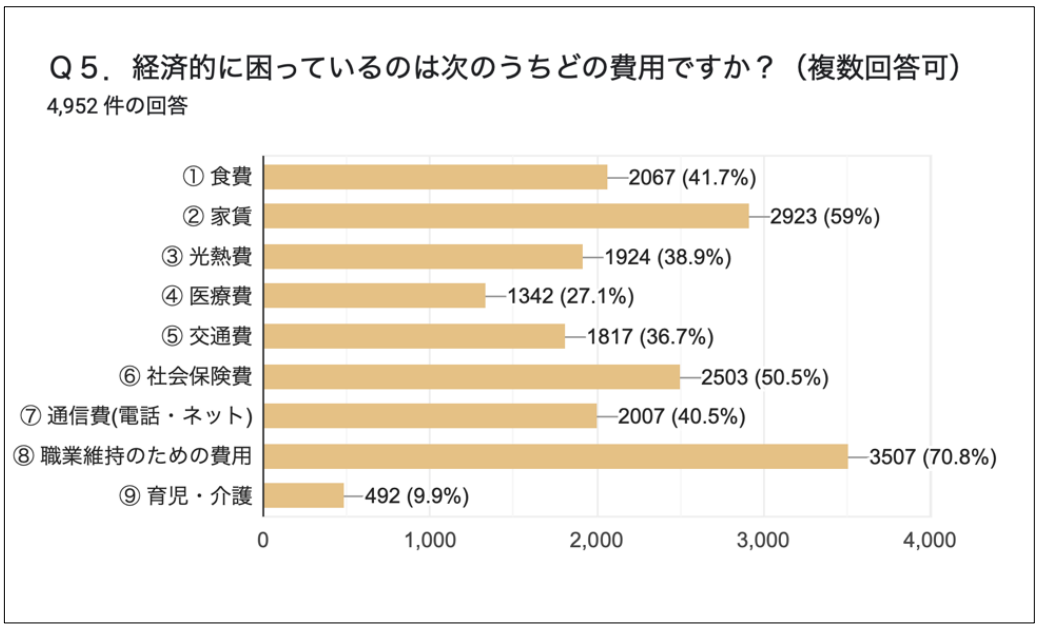



図４

スライド 4

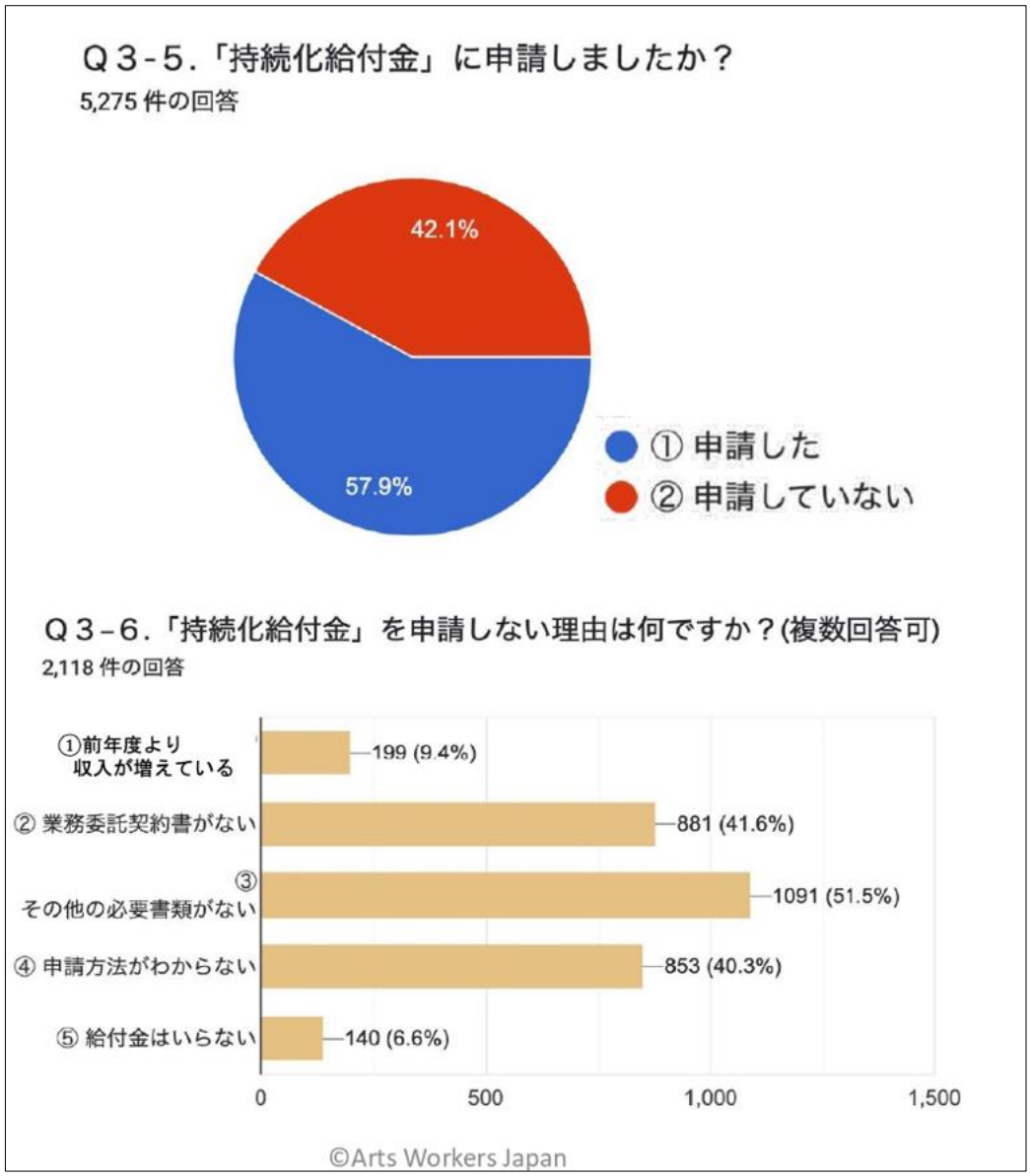
このような結果、ほとんどの方がキャンセル補償もなく仕事も失い、生活に影響を受けました。家賃、社会保障費、食費、光熱費、医療費すら困るという方が半数近くいる状況です[7]。




スライド 5

[7] 注 6 に同じ。

フリーランスにも「持続化給付金」という助成給付金がつけられましたが、申請できた人は 6 割以下でした（スライド 6）[8]。原因は業務委託契約書が必要なのに「書類がない」という方が半数近くです。また「コロナ禍の借入」は 1 千万円以上と 500 万円以上が合わせて 6.1%、100 万円以上が 19.4%です。




**スライド 6**

このようにコロナ禍で顕在化したフリーランスの問題点は、「社会保障」「安全衛生」「過重労働・過労自死」「契約書の不存在」「著作隣接権の不備」など、多くあります。フリーランスをどう保護するのか、政府は独禁法や下請法による保護を「フリーランスと

[8] 注 6 に同じ。

して安心して働ける環境を整備するためのガイドライン」に盛り込んで施行しましたが、それ以前にセーフティネットの整備が世界的に遅れていることが喫緊の課題で、制度設計にズレを感じるフリーランスが多くいました。

**コロナ禍の成果**

コロナ禍で実った私たちの運動の成果がいくつかあります。

**① セーフティーネット**

2020 年 6 月、内閣府の全世代型社会保障検討会議でフリーランス（芸能従事者）に労災保険を対象拡大すると発表されました。約 30 年前から声を上げていた私たち俳優を含めた芸能従事者に、未だかつてなかった社会保障である特別加入労災保険が、2021 年 4 月の労災補償保険法施行規則の改正により、適用対象になりました。

**② 政府労災保険の運用センター設立**

フリーランスの芸能従事者をまとめて、政府に保険料を納める保険加入団体「全国芸能労災保険センター」[9]も設立しました。この特別加入労災保険は雇用労働者同等に、業務上のセクハラやパワハラが原因の精神障害発症なども保険の適用対象になります。 業務によってコロナに感染した場合も労災給付金の対象となります。

**③ 事故防止対策通達の発出**

フリーランスの芸能従事者には労働法令が適用されず、安全管理が義務ではないため、これまで発出されていなかった「就業中の事故防止対策の徹底について」の通達が出ました[10]。通達にはトイレや更衣室を含めた環境整備、ハラスメント、メンタルケア、相談窓口についても盛り込まれました。

**④ 過重労働の指摘**

さらに、過労死や過重労働防止を推進する厚労省の協議会[11]で、「今後３年間でこれまでの医療建築業に加えて、芸能芸術分野を調査・研究の対象とする必要がある」と大綱に記載されました[12]。

---

[9] 厚生労働省認可団体。令和 3 年４月 1 日設立。S

[10] 令和 3 年３月２６日 総務省・文化庁・厚生労働省・経済産業省連名通達「芸能従事者の就業中の事故防止対策の徹底について」総情作第 28 号 2 文経際第 49 号 2 文参芸第 242 号 基安安発 0326 第 1 号 基安衛発 0326 第 1 号 雇均在発 0326 第 1 号 20210305 情局第 1 号

[11] 厚生労働省過労死等防止対策推進協議会

[12] 厚生労働省「過労死等の防止のための対策に関する大綱」令和 3 年 7 月 30 日閣議決定

### ⑤ 下請法、独禁法。知的財産法の世界条約

2021 年 3 月「フリーランスが安心して働く環境を整備するためのガイドライン」が策定され、下請法と独禁法が適用の方向づけがされました。また、北京条約で視聴覚的実演の権利が定められました。

## 今後の課題

### ① 相談窓口

フリーランスにとって初めての公的相談窓口である「フリーランス・トラブル 110 番[13]」が開設されましたが、芸能関係者による相談件数は半年間で 5.6%でした[14]。法整備がなく、契約書の整備が行き渡らないアーツワーカーズには、弁護士に相談することができない状況が推察されます。

### ② セルフ相談窓口の弊害

フリーランスの労働環境がハラスメントの温床になっているのにも関わらず、ハラスメント防止措置の対象にならなかったことで、「善良な有志」が資格もなく深刻な相談を受けています。無償でケアを続けることで深刻な被害への共感疲労が蓄積し、疲弊しきっている状況です。

### ③ 自殺願望と自死報道の社会的影響

アンケートで希死願望の調査をしたところ「コロナ禍で死にたいと思った事はありますか」という問いに 2021 年初頭は 32.5%の人が「死にたいと思ったことがある」と答えましたが[15]、5 月の調査では半数を超えてしまいました[16]。

「2020 年の自殺者数・警察原票」を用いて、コロナの感染者数（下段）と自殺者数（上段）を時系列で並列すると、グラフ上は感染と自殺者数が比例するように見えますが、正確には俳優の自殺報道があった時に、予測値と比べて自殺者数が大幅に増えています（スライド 7）[17]。社会的影響が大きい私たち俳優や芸能従事者は、それを自他ともに認識することが重要です。そして、メンタルケア、相談窓口の開設が急務です。

---

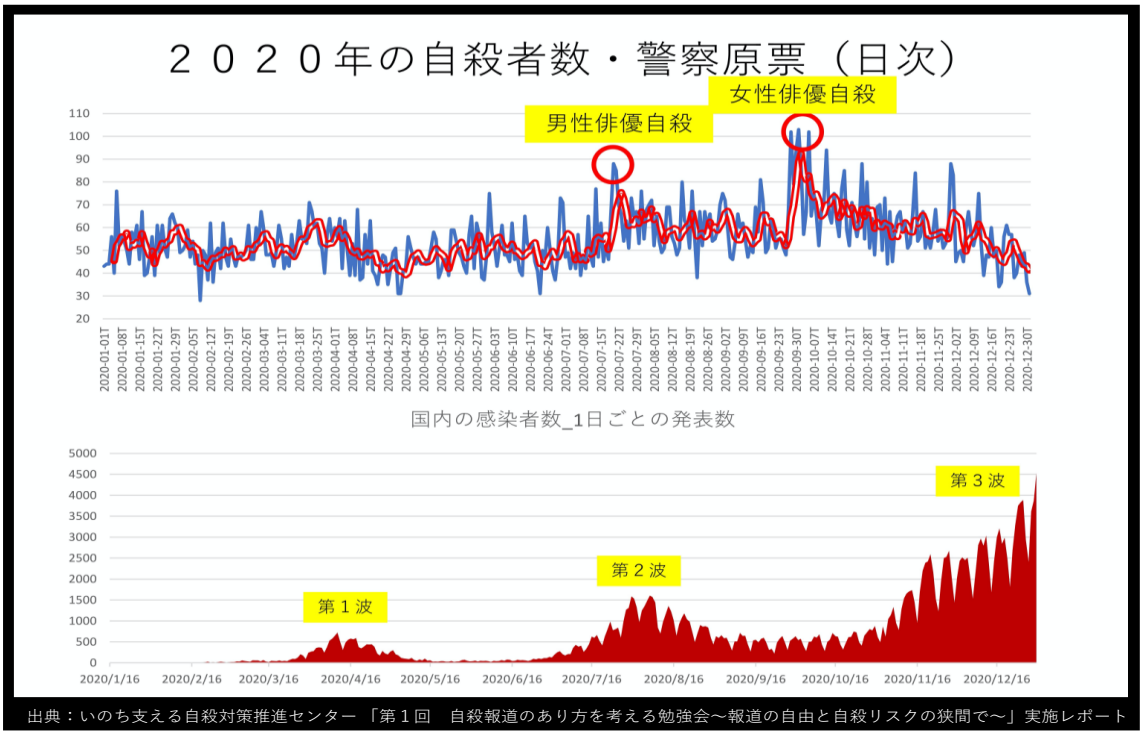
[13] 運営事業者：第二東京弁護士会、連携省庁：内閣官房・公正取引委員会・厚生労働省・中小企業庁

[14] 文化庁第 1 回文化芸術分野の適正な契約関係構築に向けた検討会議 資料 6-2 厚生労働省提出資料

[15] 注 6 に同じ。

[16] 「芸能従事者の実態調査アンケート vol.1」（調査主体：全国芸能従事者労災保険センター

[17] いのち支える自殺対策推進センター「第 1 回自殺報道のあり方を考える勉強会～報道の自由と自殺リスクの狭間で～」実施レポート




**スライド 7**

**最後に**

コロナで顕在化したのは、フリーランスを労働力として増やそうという政策だけが先走り、セーフティネットを整えていないことに、当事者が耐えきれない状況だと考えられます。もっと人間らしい適切な対応が必要なのではないでしょうか。

最後にアンケートに寄せられた切実な声の一部をご紹介します。

・補償もないのに、休業等の要請ばかりしている状態が１年以上続いているのは、なぜなのか。

・補助金申請をもっと簡単にできるようにして欲しい。

・フリーランスだと助成金が使いづらい。

・損害保証金を出して下さい。

・助けてください。本当に困っている人の元へ届く支援が必要。

・心のケアが必要。

・先が見えず苦しさでいっぱいです

**コメント（三浦まり）**

大変わかりやすいご報告をありがとうございます。芸能従事者がいかに大変であるかということを改めて感じました。また、保護が本当に不十分であるということもよくわかりました。イベント一斉自粛の間、芸能従事者の方々が受けた被害はとても大きかったのではないかと思います。他方、労働運動の中で勝ち得たこともあったということは、大変重

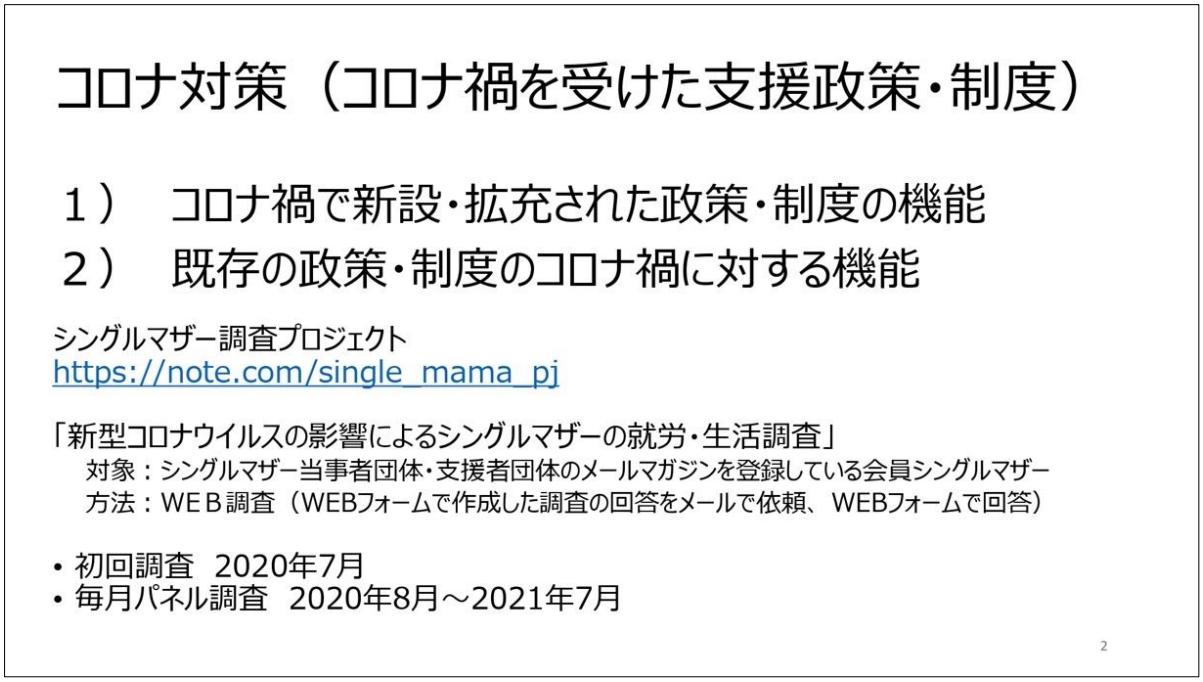
要なことです。労災保険なども勝ち得たということですので、そこから私たちが学べること、次につなげられることも多いのではないでしょうか。また「共感疲労」が広がっているのも、深刻だと思いますので、仲間内でやるのではなく、やはり公的な支援が必要だということも改めて感じさせられました。

ひとり親

# ひとり親にかかわるコロナ対策評価

藤原千沙
法政大学大原社会問題研究所教授

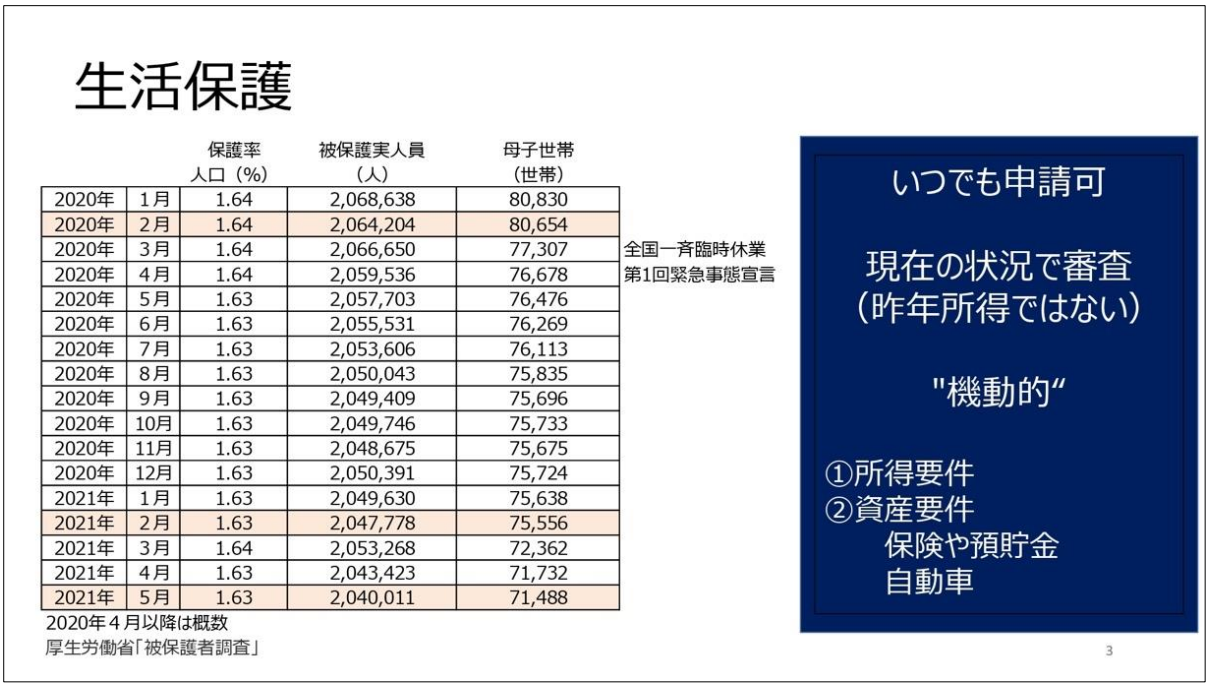
コロナ対策を評価する場合、コロナ禍で新設・拡充された制度がいかに機能したのかということと、既存の制度がコロナ禍に対して機能したのか、しなかったのか、ということを考えなくてはなりません。私はシングルマザー調査プロジェクトとして、昨年（2020 年）7 月から今年（2021 年）7 月までの 1 年間、調査を通して当事者の声を聞いてきた立場から、今日はひとり親の実態というよりも、コロナ対策という政策に焦点をあてて、お話ししたいと思います。




スライド 1

生活保護

まず既存の制度がコロナ禍に対していかに機能したかという点ですが、生活保護は受け皿にはなりませんでした。日本で生活保護を受けているのは約 200 万人で人口の 2%にも満たないわけですが、昨年 2 月から今年の 2 月まで、大沢さんの報告にもありましたように、増えるどころかむしろ減っています。

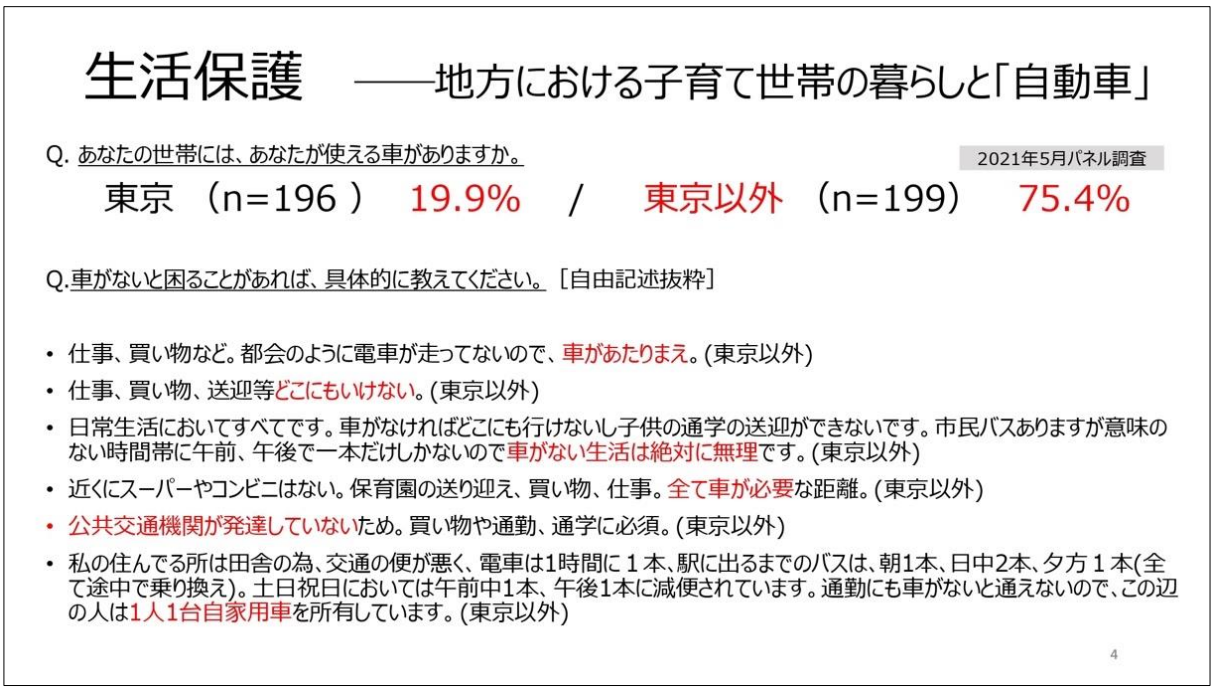



スライド 2

生活保護はいつでも申請できて、しかも現在の状況で審査されますので、本来であれば機動的に動ける制度です。母子世帯の約半数は生活保護基準よりも少ない収入で暮らしていますので、「収入が少ない」という所得要件だけなら保護を受けられる世帯は多いのですが、生活保護は資産要件をクリアしなければなりません。ひとり親は子どもを育てていますので、保険や預貯金は手放せない、また地方では車を手放せない、ということがネックになります。

車については非常に地域差があって、都市部に住んでいたらこの問題がネックになることはないのですが、地方で子育てをする場合には車は不可欠です。私たちの調査でも、車を持っているシングルマザーの割合は東京 19.9%に対して、東京以外は 75.4%と大きな違いが出ました。

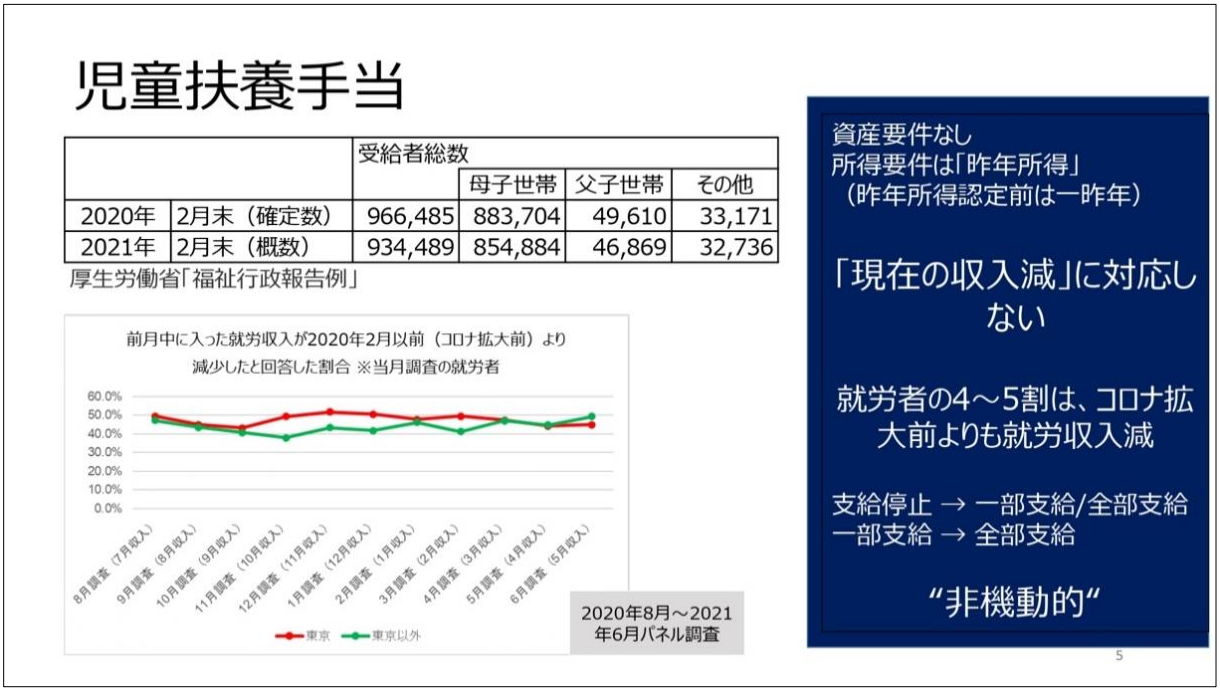
生活保護は全国一律の制度ですが、「車を手放さなければならない」という資産要件が、どれだけ厳しく働くかという点では、まったく公平ではなく、「車がないと困る」という地域の子育て世帯が生活保護を受けることを制約しています。




スライド 3

**児童扶養手当**

児童扶養手当は、収入の少ないひとり親世帯の所得保障となる手当ですが、昨年 2 月の受給者は 96 万 6000 人、今年 2 月では 93 万 4000 人で、こちらも増えていません。児童扶養手当には資産要件はないので、所得要件を満たせば受けられるのですが、「昨年の所得」で審査されますので、「昨年はあったけれども、コロナの影響で収入が減って、いまはお金がない」という状況には対応できませんでした。

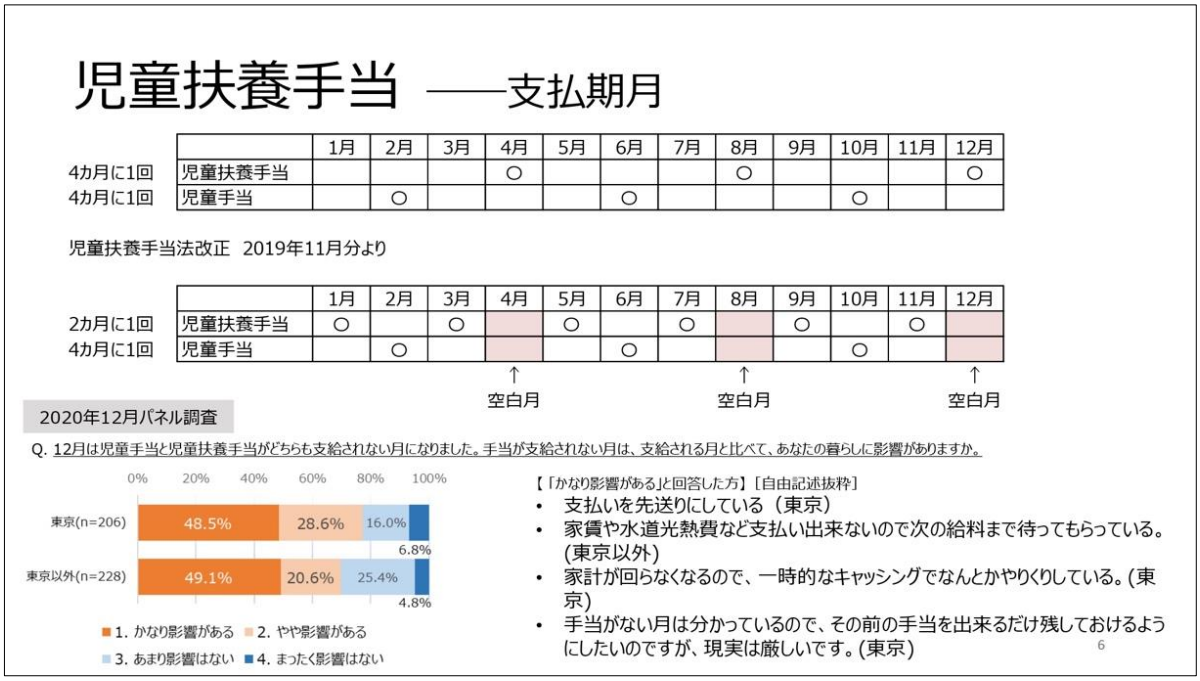



スライド 4

私たちの調査では、前の月に入った就労収入がコロナ拡大前より「増えたか」「減ったか」「同程度か」ということを毎月聞いていたのですが、「減った」という回答が少ない時でも 4 割、多い時には 5 割と続いていました。もし「現在の所得」で審査したら手当がもらえたり増えたりする人たちは相当いたと思いますが、現在の収入減少に対して機動的に動く制度ではありませんでした。

また、児童扶養手当は、毎月支給されるわけではありません。最近まで支給されるのは 4 ヶ月に 1 回、1 年間に 3 回だけでした。2019 年 11 月分から 2 ヶ月に 1 回に支給頻度は増えたのですが、毎月ではありません。児童手当は現在でも 4 ヶ月に 1 回です。それゆえ、児童手当も児童扶養手当もまったくされない「空白月」があって、しかもそれは「子どもの新学期の 4 月」「夏休みの 8 月」「クリスマスと年越しのある 12 月」なのです。

私たちは 12 月の調査で、手当の支給されない月は、支給される月と比べて、暮らしに影響があるか尋ねたのですが、7 割から 8 割の人が「影響がある」と答えました。手当のない月は「支払いを先送りにする」「一時的なキャッシングでやりくりする」など、手当がない月は家計がまわらないという訴えがあります。




スライド 5

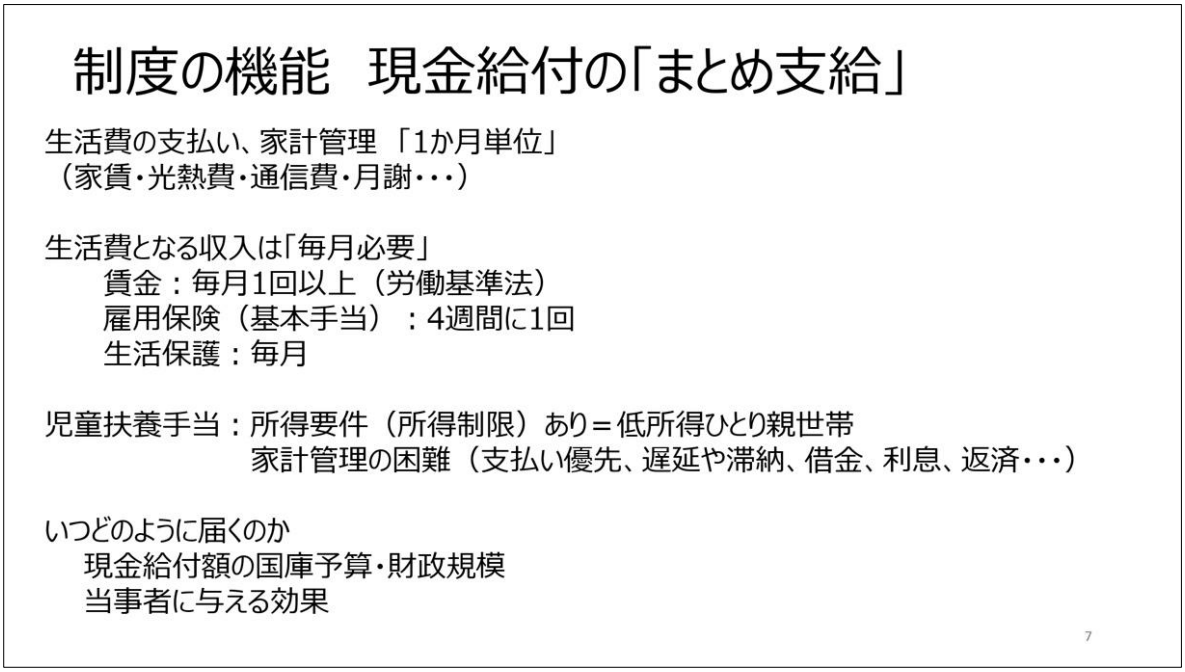
### 現金給付の「まとめ支給」

コロナ禍を受けてあらためて考えたいのは、数ヶ月分の現金給付がまとめて支払われるという日本の制度はこのままでいいのか、という問題です。生活費の支払いは、家賃も光熱費も毎月払う必要があり、だからこそ収入は毎月必要で、賃金も、失業手当も、生活保護も、毎月支給されます。

児童扶養手当は所得要件があり、「低所得」のひとり親が対象であるのにもかかわらず、その所得保障が「まとめ支給」であるために、「この支払いを優先させて」「こっちは待ってもらって」「足りないからお金を借りて」「来月お金が入ってきたら返す」という「綱渡り」のような家計管理を「制度」が当事者に強いているわけです。

毎月払おうと 2 ヶ月分まとめて払おうと、国庫予算や財政規模は同じですが、当事者に与える効果は違うわけで、制度の機能という点では、「いつどのように当事者に届くのか」まで見なくてはなりません。

もし児童扶養手当の支給が 4 ヶ月に 1 回のままだったら、このコロナ禍でひとり親と子どもたちが果たして生きていけたのかどうか、想像すると恐ろしいほど、「まとめ支給」という制度は「低所得世帯の所得保障」としての給付の機能を損ねています。

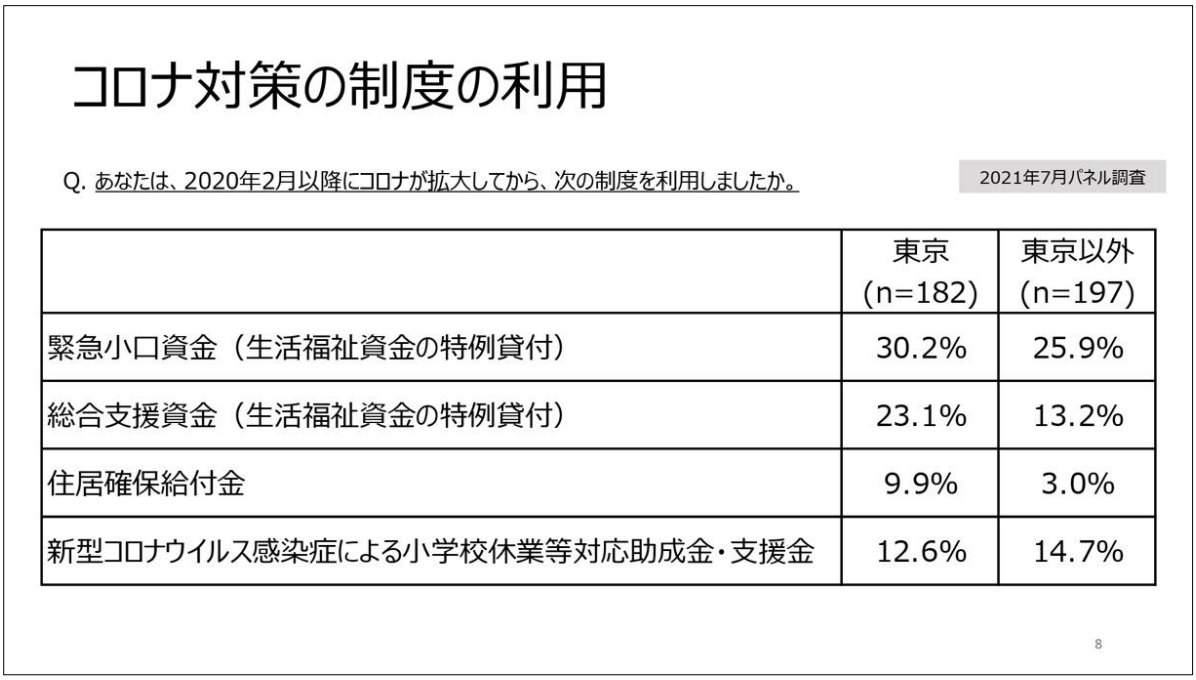



**スライド 6**

**コロナ対応の貸付金・給付金**

次に、コロナ禍で新設または拡充された制度の利用をみてみます。

2021 年 7 月の調査で、2020 年 2 月以降にコロナが拡大してから次の制度を利用しましたかという質問で 4 つの制度をあげて聞いたのですが、利用したという割合は、「緊急小口資金（生活福祉資金の特例貸付）」が 3 割弱、「総合支援資金（生活福祉資金の特例貸付）」が 1 割から 2 割、「住居確保給付金」は東京で 1 割、「小学校休業等対応助成金・支援金」は 1 割ちょっとという結果でした。




| | 東京 (n=182) | 東京以外 (n=197) |
|---|---|---|
| 緊急小口資金（生活福祉資金の特例貸付） | 30.2% | 25.9% |
| 総合支援資金（生活福祉資金の特例貸付） | 23.1% | 13.2% |
| 住居確保給付金 | 9.9% | 3.0% |
| 新型コロナウイルス感染症による小学校休業等対応助成金・支援金 | 12.6% | 14.7% |

**スライド 7**

このなかでも「住居確保給付金」について 2021 年 1 月の調査で詳しく聞いたので紹介します。

まず、「住居確保給付金」はどういう制度かについて説明して、知っているか（聞いたことがあるか）を尋ねたのですが、知っている（聞いたことがある）人は約半数でした。制度があっても――新設されたり拡充されたりしても――すべての人が知っているわけではない、という問題があります。

次に、制度を「知っている（聞いたことがある）」という人に対して、自分が受けられるか相談や申請をしようとしたことがあるか聞いたのですが、東京では「相談や申請をした結果、受けることができた」人が 18 人、「相談や申請をした結果、受けることができなかった」人が 15 人、「相談や申請をしたかったが、できなかった」人が 17 人、「相談や申請をしようとしたことはない」という人が 63 人でした。

# 住居確保給付金

「住居確保給付金」についてお聞きします。

2021年1月パネル調査

政府の新型コロナウイルス感染症対策として「住居確保給付金」があります。離職・廃業・休業などで収入が減少して住居を失うおそれがある人に、家賃相当額が、あなたに代わって自治体から家主（貸主）に支給される制度です。

Q. 住居確保給付金を知っていますか。

| | 東京 (n=208) | 東京以外 (n=231) | 東京 100.0% | 東京以外 100.0% |
|---|---|---|---|---|
| 1. 知っている（聞いたことがある） | 113 | 112 | 54.3% | 48.5% |
| 2. 知らない（聞いたこともない） | 95 | 119 | 45.7% | 51.5% |

「知っている（聞いたことがある）」と答えた方

Q. 自分が受けられるか相談や申請をしようとしたことはありますか

| | 東京 (n=113) | 東京以外 (n=112) | 東京 100.0% | 東京以外 100.0% |
|---|---|---|---|---|
| 1. 相談や申請をした結果、受けることができた | 18 | 10 | 15.9% | 8.9% |
| 2. 相談や申請をした結果、受けることができなかった | 15 | 11 | 13.3% | 9.8% |
| 3. 相談や申請をしたかったが、できなかった | 17 | 16 | 15.0% | 14.3% |
| 4. 相談や申請をしようとしたことはない | 63 | 75 | 55.8% | 67.0% |

9

スライド 8

この 2 番目、相談や申請をしたけれども給付金を「受けることができなかった」理由をみてみます。母数が少ないのでバラけていますが、1 番目「世帯の収入合計額が、基準を超えていたから」がいちばん多く、そのほかでは 2 番目「世帯の預貯金合計額が、基準を超えていたから」など色々な理由があります。

# 住居確保給付金

「相談や申請をした結果、受けることができなかった」と答えた方

2021年1月パネル調査

Q. 相談や申請をしたのに受けることができなかった理由は何でしたか。（複数回答）

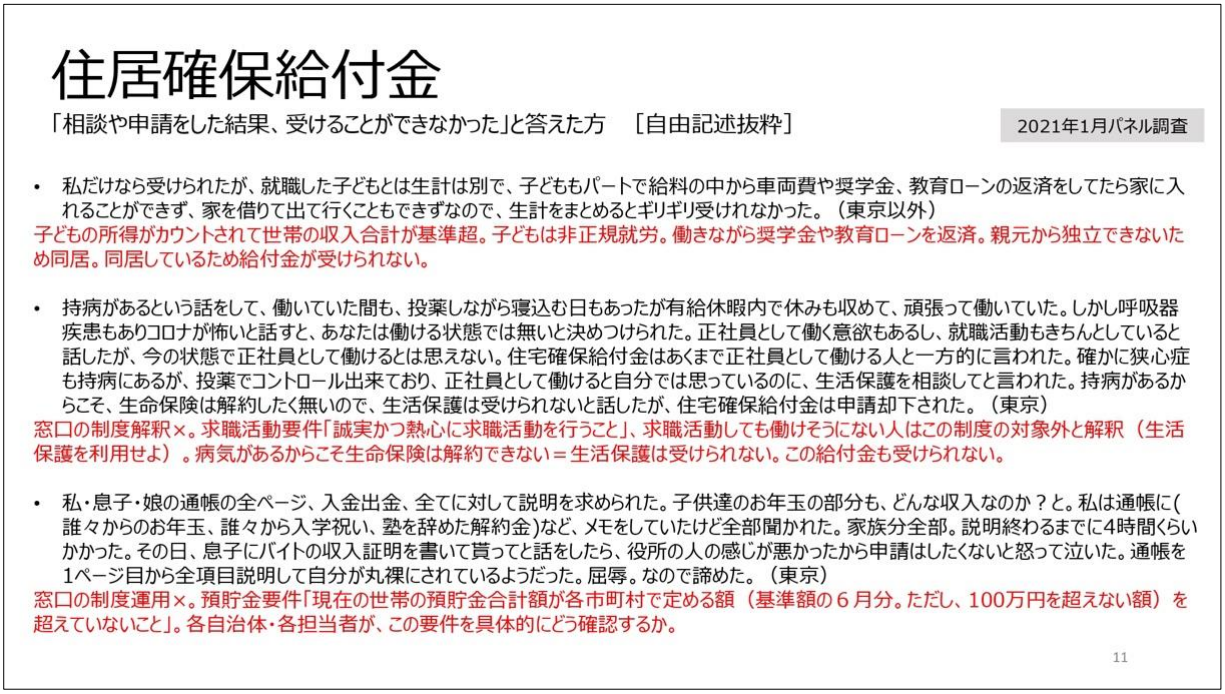
| | 東京 (n=15) | 東京以外 (n=11) |
|---|---|---|
| 1. 世帯の収入合計額が、基準を超えていたから | 4 | 5 |
| 2. 世帯の預貯金合計額が、基準を超えていたから | 4 | 1 |
| 3. 離職・廃業後2年以内ではなかったから | 3 | 4 |
| 4. 離職・廃業と同程度まで収入を得る機会が減少していることを証明できなかったから | 1 | 5 |
| 5. 手続きが面倒だったから | 2 | 1 |
| 6. 手続きがむずかしかったから | 3 | 1 |
| 7. 手続きしても必要な時までに間に合わないから | 1 | 0 |
| 8. 家主（貸主）に知られるのがいやだったから | 0 | 1 |
| 9. 自分が住居の契約者ではなかったから | 0 | 0 |
| 10. 過去に受けたことがあるから | 0 | 0 |

10

スライド 9

**制度の運用――相談・申請窓口の現場**

こういった選択肢では具体的な状況がわからないので、自由記述をみてみます。




**スライド 10**

最初のかたは、世帯の収入合計額が「基準を超えていた」というかたです。黒字の部分を読んでいただけるでしょうか。世帯収入が多いなら受けられなくても問題ないと思われるかもしれませんが、子どもの所得がカウントされて、世帯の収入合計が基準を超えたケースであることがわかります。子どもはパート、非正規です。自分の給料から奨学金や教育ローンの返済もしていて、親元を離れたくても家を借りて出て行くこともできないケースであり、余裕のある暮らしではありません。

2 番目のかた、持病があるというかたの黒字の部分を見てください。このかたの場合は、窓口担当者の制度解釈に問題があると思われますが、この給付金は求職活動をしなくてはならないという要件があります。この窓口担当者は、「求職活動しても働けそうにない方はこの制度の対象外なので、あなたは生活保護を相談して」と言っています。しかしこのかたは持病があるために生命保険は解約したくない、だから生活保護は受けられない、でもこの給付金も受けられない、という状況で、申請は却下されています。

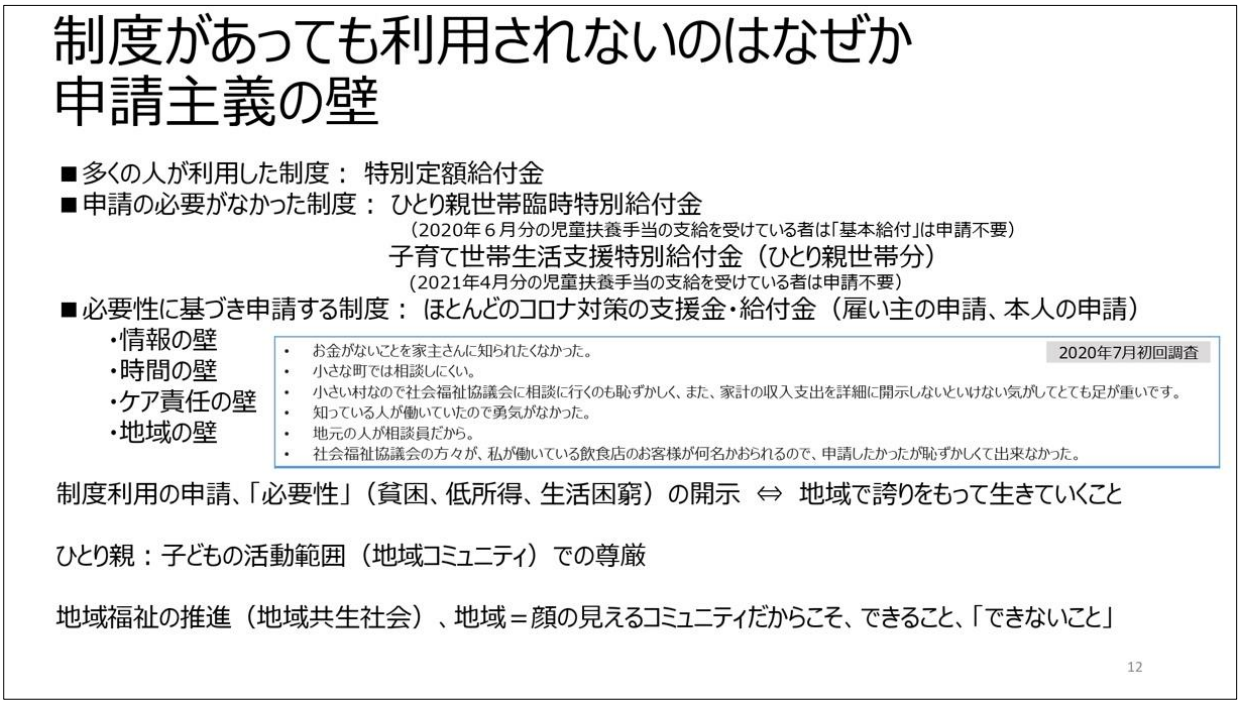
3 番目のかたも、窓口の制度運用の問題ですが、黒字の部分を読んでみます。「私・息子・娘の通帳の全ページ、入金出金、全てに対して説明を求められた。子供達のお年玉の部分も、どんな収入なのか？と。私は通帳に（誰々からのお年玉、誰々から入学祝い、塾を辞めた解約金）など、メモをしていたけど全部聞かれた。家族分全部。説明終わるまでに 4 時間くらいかかった。その日、息子にバイトの収入証明を書いて貰ってと話をしたら、

役所の人の感じが悪かったから申請はしたくないと怒って泣いた。通帳を 1 ページ目から全項目説明して自分が丸裸にされているようだった。屈辱。なので諦めた。」

この給付金を受けるには預貯金の要件があって、国が定めています。問題は、預貯金の要件確認をどう行うかであって、単に残高を確認するだけではなく、通帳の全ページの出入金を確認するといった、こういった運用もあるわけです。息子さんはバイトをしているというので高校生以上と思いますが、高校生の男の子が「申請はしたくないと怒って泣いた」という状況を想像してみてください。「自分が丸裸にされているようだった」「屈辱。なので諦めた」というこのお母さんの言葉は、制度を利用する際の相談や申請の現場で、いったいどんな「運用」が行われているのか、見なければならないことを示しているのではないでしょうか。

**申請主義の壁**

つまり、制度があっても利用できない、利用されないのはなぜか、ということを、考えなくてはならないわけです。




スライド 11

多くの人が利用した制度、住民 1 人 10 万円の「特別定額給付金」は、ひとり親も利用できました。また、申請の必要がなかった制度、児童扶養手当を受けている人に自動的に届く給付金は、少なくとも手当を受けている当事者に届きました。

ですが、多くのコロナ対策の給付金は、「利用したい」という申請が必要です。それゆえ「雇い主が申請してくれないので利用できない」という問題が生じたわけですが、本人が申請する場合も、さまざまな壁があります。

「情報の壁」は、そもそも制度が知られていないという問題で、私たちの調査でも、当事者団体や支援者団体につながっている人たちだったにもかかわらず､「制度を知らない」という回答は少なくありませんでした。

「時間の壁」とは､相談や申請に行く時間がないという問題です｡非正規雇用の場合は、働いた時間がそのまま収入に直結しますので、自分が必ず利用できるかどうかわからない給付金のために、仕事を休んで、収入を失ってまで、窓口なんかに行けないという問題です。

「ケア責任の壁」とは、子どもを自宅にひとりで置いて行けない、窓口に子どもを連れて行くこともできない問題です。ひとり親は、自分が感染したら子どもの面倒を誰がみるのかという強いケア責任を担っていますので、制度利用の相談や申請に行きたくても行けないというケアの壁があります。

「地域の壁」とは、普段暮らしている地域コミュニティのなかで、制度利用の申請をするという問題です。昨年 7 月の調査では、相談や申請をしたくてもできなかった理由として、「お金がないことを家主さんに知られたくなかった」「小さな町では相談しにくい」「地元の人が相談員だから」といった声がありました。

必要性に基づいて申請する制度は、「生活に困っている」ことを地域コミュニティに開示しなくてはなりません。そういった制度利用の申請をして、地域社会で誇りを持って生きていくことができるでしょうか。ひとり親は、大人の一人暮らしとは違って、子どもを育てています。子どもの友達の親御さん、学校の先生、PTA の付き合いといった地域コミュニティの中で暮らしているわけで、堂々と尊厳を持って生きていくということは、子どもとの暮らしに欠かせないわけです。

生活が苦しくて、それを救済する制度があっても、なぜ申請をしないのか、という問題は、制度の周知が足りないということ以上に、地域社会で子どもを育てて生きていくということは、いったいどういうことなのかを想像しなければなりません。「地域共生社会」といわれますが、顔の見えるコミュニティだからこそ、たとえば「子ども食堂」のように「できること」もあります。しかし､顔の見えるコミュニティでは「できないこともある」ということを、生活困窮にかかわる制度利用では考えなくてはならないと思います。

シングルマザー調査プロジェクトの一連の調査結果や課題別レポートは、インターネット上で公開していますので、さらなる声や実態についてぜひご覧になってください。ありがとうございました。

スライド 12

コメント（三浦まり）

藤原さん、現場からの切実な声を丁寧にご紹介くださいましてありがとうございます。機動性がない、まとめ支給である、そしてまた「申請主義の壁」ということがいかに多くの苦しみを生み出しているのか、藤原さんの調査からも問題が見えてきたと思います。 さらには、「ケア責任の壁」や「地域の壁」が制度利用を妨げているわけです。ケア責任をコミュニティで分担するケア・コミュニティを作り出すと同時に、地域コミュニティにおいてどうやって尊厳を保って生きていくことを保障していくか、ここに課題があることを痛感しました。

女性に対する暴力・DV

# 女性に対する暴力
# ～性暴力・DV・ストーカーなど～

北仲千里
広島大学ハラスメント相談室准教授
NPO 法人全国女性シェルターネット

## 1. コロナ禍とＤＶ

今回のコロナは、DV・性暴力も「法制度を変えようとしている途中にちょうど起きた」と言えます。まず DV ですが、そもそも日本の DV や虐待対策はあまりにも不十分なのですが、数年前にいくつか非常に深刻なケースがあり、社会の関心は高まっているところでした。そこにコロナの状況が起きたことによって、たくさん報道され、そこに国連の警告が出たわけです。私たちのところにも「コロナで外出できなくなったからストレスで DV が増えたのでしょう？」といった取材が結構たくさん来て、「え、ちょっと。そういうことだったかな」と首をかしげました。我々DV の被害者支援者が深刻に捉えていたのは例えばコロナの対策が「非常時」として動き出すと DV の被害者のような人たちのことが吹っ飛んでしまい、置いていかれるのではないかということです。感染防止のために相談窓口が閉じてしまったり、特別給付金の支給が始まると「DV の被害者が受け取れなくなるのでは」といったことを心配していました。

つまり、今まで全然 DV 加害がなかった人が、外出自粛により急に DV 加害者になるのではなく、もともと DV や児童虐待の危ない傾向にあった家庭がおそらく、もっと辛く酷くなるというということを懸念しました。例えば加害者が前よりずっと家にいるので、24 時間ダメ出しをされるような状態になったり、加害者の収入が減少し、そのストレスを家族にぶつけるようになったりするということです。24 時間一緒にいるので今まで以上に「相談電話をかける」、「相談に出かける」ができなくなった上、収入源も減っているため、「逃げよう」「引っ越そう」も実行が難しくなっているのではないかということです。児童虐待も同様です。これまで第三者の目が入ることで、なんとか発見したり救い出せたりしていたのが、いっそう危なくなるのではないかと心配していたわけです[1]。

## 2. ＤＶ激増ではなく深刻化

[1] 2020 年 3 月 30 日　全国女性シェルターネット「新型コロナウィルス対策状況下における DV・児童虐待防止に関する要望書」
https://nwsnet.or.jp/images/PDF/2.2.0PDF/20200330.pdf

コロナで DV が激増したという報道・報告が一部出されていますが、それはあまり正確ではなく、例えば 2020 年 12 月に内閣府が実施した実態調査でも被害率は増えていません。特別給付金の時期は相談が殺到しましたが、それ以外の時期は全国の配偶者暴力支援センターへの相談件数は増えていません。ですから「急増」や国全体の「被害率」が変化するほどの「激増」はなかったのです。しかしいくつかのことを通じ、元々あった問題が各家庭で非常に深刻になったことが、私たちに見えるようになってきたと言えるのではないでしょうか。

私たちが特別給付金等について要望したことに応え、国によって DV で家を出た人に対し受け取れるような措置、新たな DV 相談プラスの相談窓口を作るといったことがなされ、結果として「給付金が受け取れるかどうか」といった相談が殺到しました。家を出た人は確かに受け取れたのですが、現在家を出ていない方から「経済的 DV が家の中にあり、給付金は全部夫のところに行ってしまい受け取れない。どうしたら良いのか」という相談も多数、各所に寄せられました。それによりまだまだ相談には来なかった DV のケースがあることがよくわかりました。

また、配偶者間 DV ではない親子間、きょうだい間の成人の家庭内暴力も DV 相談プラスを含めた様々な相談窓口に寄せられました。これまで窓口や法律がないところに被害者がいることも、非常によく見えたと思います。

### 3. DV 相談プラスや現状からみる問題点

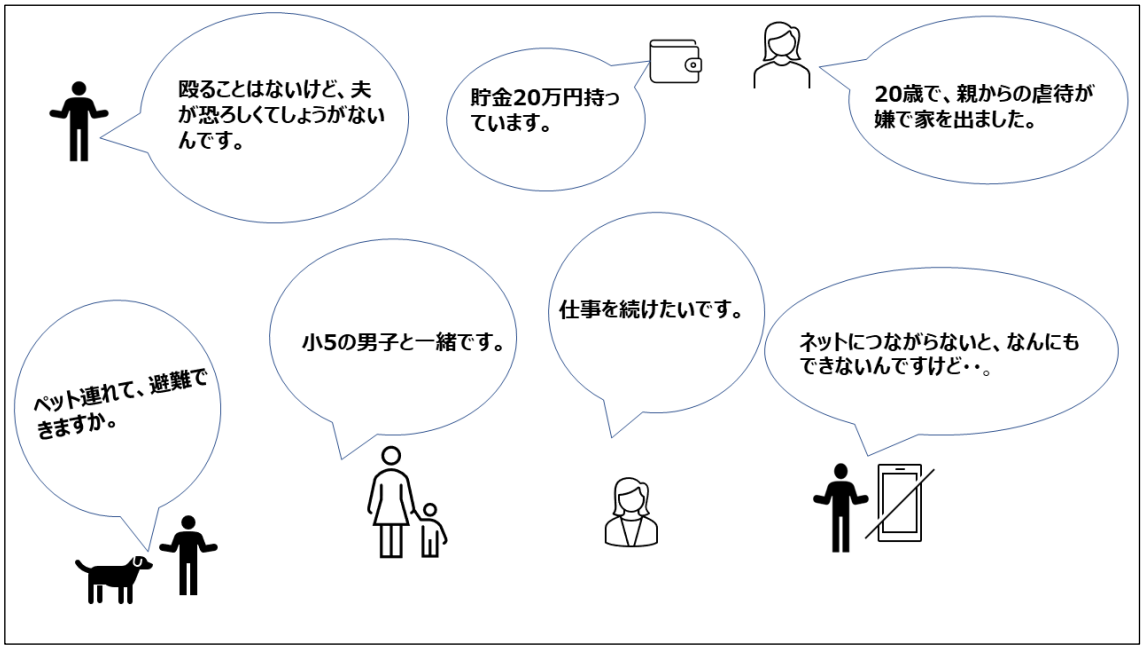
内閣府は、「DV 相談プラス」に寄せられた相談の特徴を報告書にまとめました[2]。報告書ではまず精神的な DV がベースにあり、さらに身体的な DV、性的 DV が合わさった相談内容が多いということが指摘されています。私たちは身体的な暴力の DV に目を向けがちですが、DV というのは「精神的に支配すること」 だということが、改めて明らかになったと思います。ただ、そういった新しい相談窓口に多数相談が来ても、各地域の現場で応えられる担当者や施策が元々足りていないことも、ますますはっきり見えてしまいました。

現状の問題点ですが、例えば DV 防止法「保護命令」は主に身体的暴力にしか出ないので、それ以外の人に対し、裁判所が手伝うことができません。また日本では、公的な相談センターでの相談支援がメインの政策設計になっていますが、どういう人が保護されるのかという一時保護の基準に全国で地域差があり、利用のハードルが高すぎて、今回のようにたくさん DV の被害者がいることがわかっても、そのハードルを超えられる人はごく僅かなのです。

---

[2] 「DV 相談＋（プラス）事業における相談支援の分析に係る調査研究事業」報告書
https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r02_dvplus.pdf

では、「それ以外の人」を支援することはできないのでしょうか。被害者は非常に多様です。例えば身体的暴力としての DV 被害はない方、今後のために貯金を持って逃げ出したい方、ペットを連れて避難したい方、赤ちゃんではない男児を連れて逃げたい方、逃げながら仕事は続けたい方、逃げた先でも携帯やネットにつながりたい方、さらには、夫婦間ではない家族間の暴力を受け家出をしているけれどもう 18 歳を超えている方、なども当然おられます。しかし、これらのケースについて現在の保護の体制では対応できておらず、例えば小学校高学年などの大きな子どもと母が一緒に逃げた場合、公的シェルターでは「子どもは児童相談所に」と分けられてしまいます。また、貯金を持っていたら保護されないこともあるし、ペットを連れて逃げることも相当難しいのです。



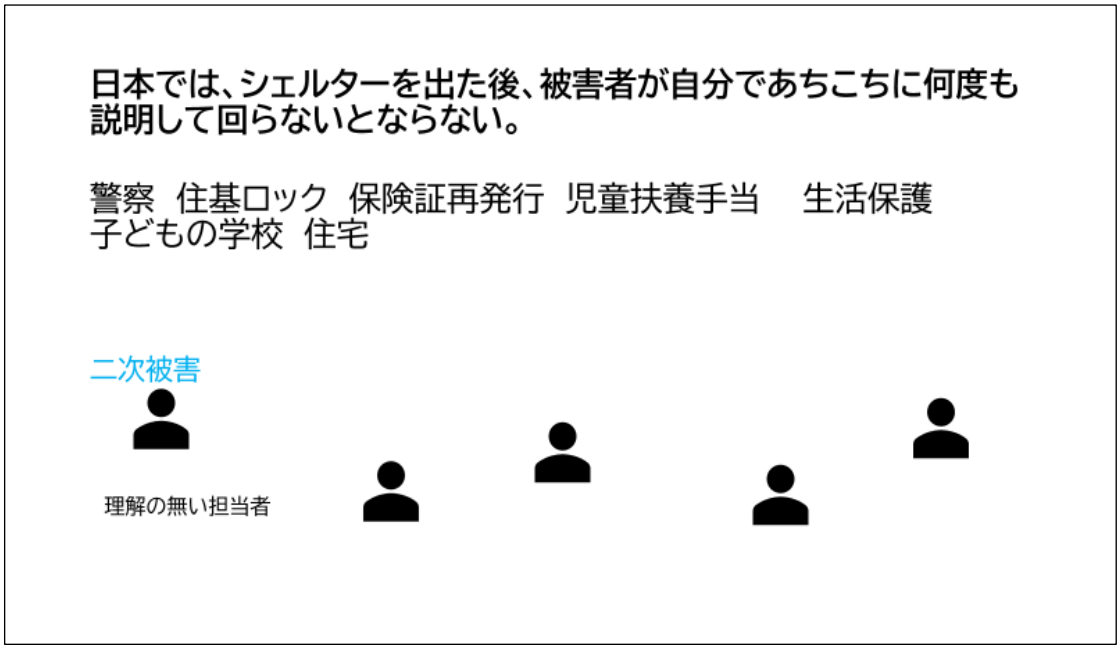

スライド 1

## 4. 問題の背景と私たちの提案

問題の根底には現在の相談支援が、「売春保護法」に基づく婦人保護事業として行われてきたことです。これはもう無理だということで、2019 年 10 月に厚生労働省の検討会（「困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会」）によって、これに変わる専門的かつ包括的な相談システムについての新法を作っていこう、という方向性が出ていました。そんな中での今回のコロナ禍だったのです。

私たち民間シェルターの団体も、日本の現在の相談支援システムを抜本的に変える必要があると考えていて、2020 年 9 月に要望や提案を公表しています。わかりやすく安心できる包括的な専門センターを作り、専門職員を配置してほしい。初期だけではなく、中長期

の生活上の支援も全部一括してやってほしい。一時保護の対象について全国統一の基準を定め、それは今よりもずっと広い対象にしてほしい。そして、私たち民間団体もその支援者の中に居続けたい。また、DV 被害者支援の組織と児童虐待対応とが縦割り、別々の機関による対応のままでは無理ということも申し上げました[3]。




スライド 2

**要望**

◆ わかりやすく、安心して利用できる包括的で専門的な相談センターを。
専門職員がいるワンストップ型（他機関連携）の相談窓口

◆ 全国統一の枠組み、支援基準や内容の設定　理念の明記
保護を求めた人を追い返さない
「措置」ではなく申請利用主義へ
被害当事者が自分で支援を選べる　＆　複数の選択肢
民間団体を対等な支援者に位置づける

◆ 中・長期の回復支援、就労や生活支援

◆ 児童虐待事案と縦割り解消

○ 保護命令の対象拡充
（精神的 DV、性的 DV、経済的 DV など）

---

[3] 2020 年 9 月　全国女性シェルターネット
「私たちが目指す「女性に対する暴力　被害者支援」（特に DV 編）」
https://nwsnet.or.jp/images/PDF/2.2.1higaisyasiendv.pdf

（同居していない交際相手にも）

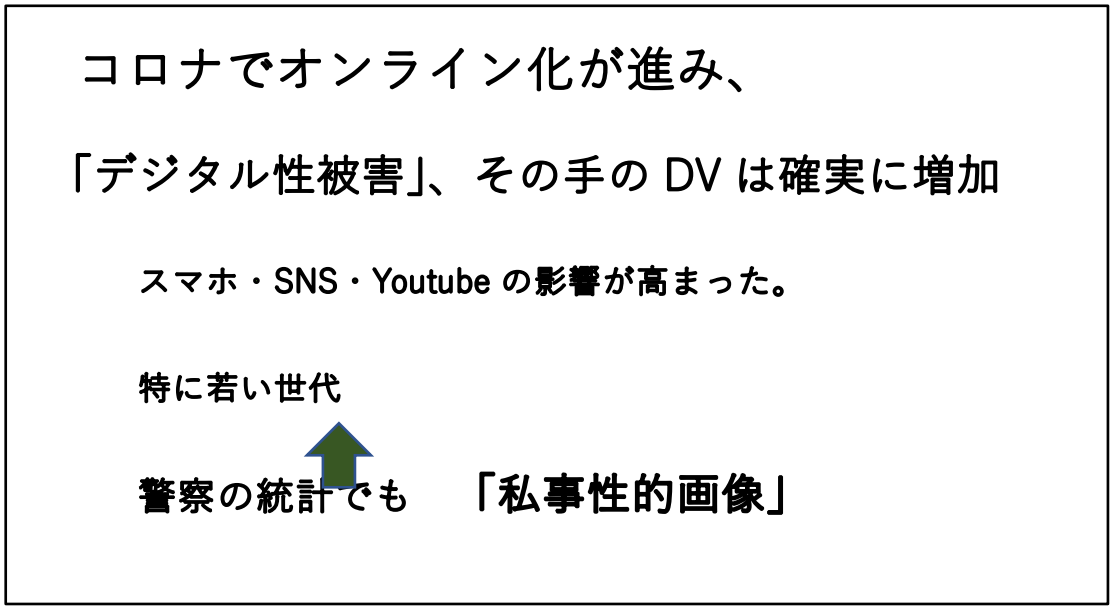
○ 緊急保護命令の導入

○ 加害者処罰の導入 ＆ 加害者教育・更生プログラムの義務化

**5. コロナ禍と性暴力**

次に性暴力関係です。こちらもちょうど、全都道府県に少なくとも一つはワンストップセンターができたところです。相談件数はコロナ禍となり若干減ったということがありました。私も広島の性暴力ワンストップセンターに関係しているのですが、近年注目されるのが、「デジタル性被害」です。若い人にとってはオンラインで誰かと出会うこと、日常の生活を Instagram や Twitter などを通じ、動画や写真をあげて発信したりするのは普通のことです。しかし、一方で動画の隠し撮りや騙し撮りがされてしまい、それが拡散され自分では制御できなくなるといった問題や被害も起きています。これは世界では Digital & Image-based Gender & Sexual Violence といったり、これを使った DV を Tech Abuse と呼んだりし、世界中で問題になっています。

スライド 3




スライド 4

この問題に関しては、警察の現場での相談が確実に増えていると言われています。これについては従来の刑法の性犯罪とは別の「削除させる」など様々な新しい知識・支援方法、ノウハウの獲得が必要です。

また、性暴力ワンストップセンターも、現在、法的根拠がなく、サービス内容も一定化されていません。人件費もかなりばらつきがあり脆弱ですので、ここをきちんと強化し、制度に位置づける必要があります。

| （１）相談等件数 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 平成 28 年 | 平成 29 年 | 平成 30 年 | 令和元年 | 令和２年 |
| 相談等件数 | 1,063 | 1,243 | 1,347 | 1,479 | 1,570 |

（２）相談等内容

| | 平成 28 年 | 平成 29 年 | 平成 30 年 | 令和元年 | 令和２年 |
|---|---|---|---|---|---|
| 画像を公表された | 196 | 236 | 234 | 272 | 286 |
| 画像を公表すると脅された | 451 | 514 | 498 | 584 | 567 |
| 画像を送りつけられた | 229 | 255 | 231 | 239 | 254 |
| 画像を所持されている、撮影された | 297 | 362 | 512 | 494 | 559 |
| その他 | 20 | 24 | 8 | 24 | 24 |

**表 1　警察の「私事性的画像」相談統計**

### 6. 支援につながる相談窓口を

最終的に、DV も性暴力も、相談窓口、相談窓口と言いますが、ただ情報提供するところや悩みを聞くところに留まらず、きっちりとした支援サービスを提供できることが重要です。それができる人材育成も大切で、またその方々がまともな雇用をされる必要があります。私たち全国女性シェルターネットも今、次世代の支援者の育成プログラムを作ろうとしているところです。

いま必要な施策

- 刑法改正による性犯罪の加害者処罰の拡大
- 性暴力被害者支援も法的根拠・全国統一水準化・予算措置
- DV も性暴力も支援者の育成（とまともな雇用）

：私たちも育成への本格着手を始めている

### コメント（三浦まり）

北仲さんありがとうございました。日本のコロナ対策は色々と後手後手ですけれども、DV に関しては比較的素早く政府も動いたのかなと思います。「激増した訳ではないけれど、深刻化し、見える化した」というのは非常に重要な点です。竹信さんのお話では「失業は見えなくなっている」けれど、DV に関しては給付金をきっかけとし「潜在化していたもの

が見えるようになった、そのような副次的効果もあった」ということでした。それにしても国が定義する「被害者」が狭く、これを突破しなければならないことを痛感します。

また、売春防止法を改正し、ちゃんとした女性支援法が必要であるというご指摘、すでに検討会で一定の方針が示されているので、実現に至って欲しいと思います。他方でデジタル性被害については、これから法的枠組みをどうしていくのか、そして、きちんと機能する相談窓口の運用を含め、どういうふうに設計をしていくのか、この辺りはまだまだ社会的議論が必要な分野ですので、皆様と一緒に考えていきたいと思います。

妊娠・リプロ

# 「セクシュアルリプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR）」が保障されない私たちの社会 ～妊娠葛藤相談窓口、「にんしん SOS 東京」の現場から～

中島かおり
特定非営利活動法人ピッコラーレ代表理事

私たち、特定非営利活動法人ピッコラーレは、「妊娠をきっかけに、誰もが孤立することなく、自由に幸せに生きていける社会」を目指して「妊娠にまつわる全ての困った、どうしように寄り添います」をミッションとして掲げ、妊娠で葛藤する方のための相談窓口、「にんしん SOS 東京」の運営をしています。 ひとりきりで誰にもいえないまま妊娠を抱えている人が、その妊娠をどうするのか、気持ちを聞きながら、自己決定していくプロセスを支えたい、そう願って取り組みを始めました。

## 乳児・新生児遺棄・虐待死のニュースから

新生児遺棄のニュースを聞いたとき、妊娠は相手があることにも関わらず、女性だけが罪を問われてしまう状況に大きな課題を感じています。厚生労働省が毎年発表する、「子ども虐待による死亡事例等の検証について」を報告当初から経時的に確認すると、私たちの社会は子どもの虐待死を何年もの間全く減らすことが出来ていないことがわかります。亡くなる子どもを年齢別に見ると、0 歳 0 ヶ月 0 日児が最も多い傾向もずっと変わらず続いています。この状況に至った妊婦が母子健康手帳未公布であり、妊婦健康診査未受診、医療機関での出産が 0%である傾向も変わっていません。彼らが妊娠をたったひとりきりで抱え、孤立の中で出産に至ってしまう、その結果の助けられなかった新生児死亡は虐待死とされ、妊婦自身が殺人罪や死体損壊・遺棄罪に問われます。しかし、その背景に目を凝らすと、妊娠・出産を女性だけに押しつけ、「自己責任として自助の中でどうにかしなさい」と社会がネグレクトした結果であることは明瞭です。

「妊娠、出産、子育てまでの切れ目ない支援」が児童虐待の発生予防のために重要である」という視点から、妊娠の届出の際に面談やアンケートによる「特定妊婦」のスクリーニングを実施し、困難を抱える妊婦に対し、地域の保健師などによる妊娠期からの伴走支援が始まっています。しかし先程申し上げた 0 日・0 か月児の虐待死に至ってしまう彼女たちは、ほとんどの場合、支援のスタートラインとなる、妊娠の届出をしていません。この「特定妊婦向け」というスティグマをうむこの仕組みは本当に必要な人には届いていません。全ての女性が社会的に疎外される要因を持っており、その要因全てが妊娠によって悪化します。よって、もっとその手前のところから全ての女性がケアに繋がりやすい状態と、支援が必要な女性がより早めにそれに繋がれる体制の必要があります。

**ピッコラーレの妊娠葛藤相談の運営**

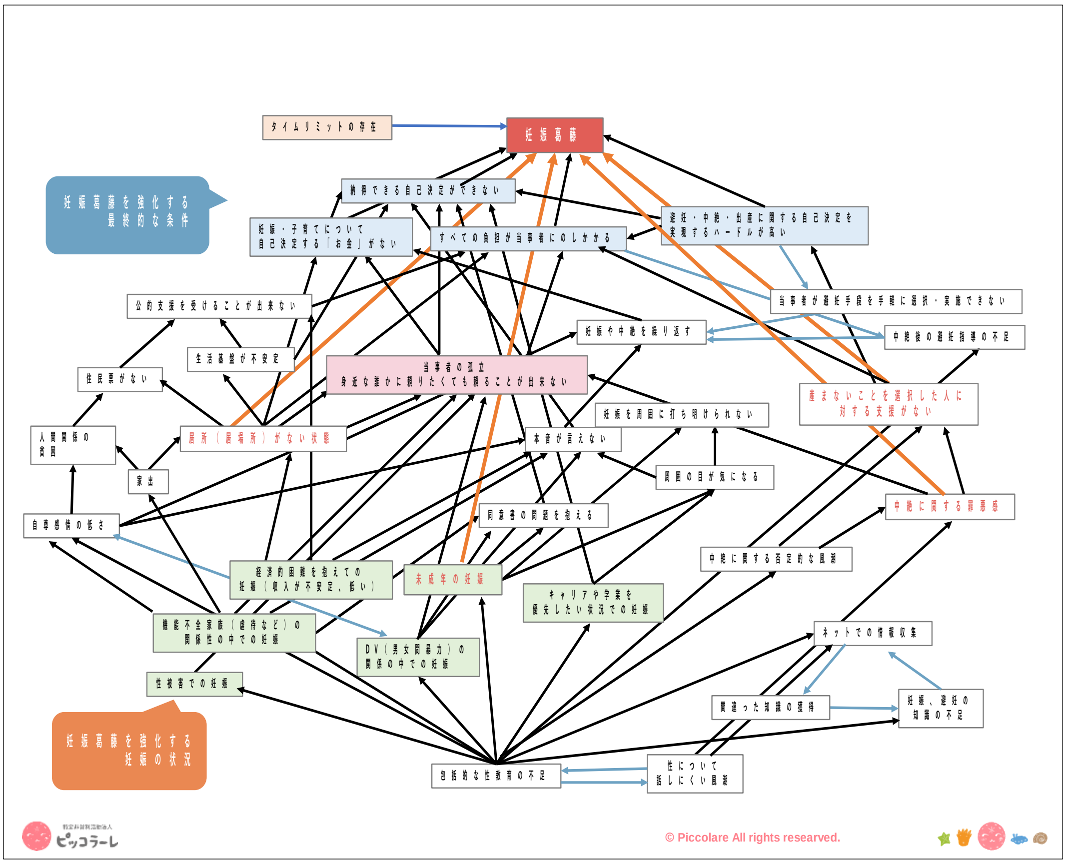
ピッコラーレは「誰にもいえない」と孤立する妊婦からの相談に対し、電話やメールでの相談だけでなく、相談者がいる場所までアウトリーチします。一緒に病院や行政窓口など必要な連携先に同行する場合もあります。妊娠出産産後のケアは医療的な視点だけでなく、福祉的な視点や司法などの複合的な視点が必要になるため、多職種の仲間とチームで動くことを大事にしています。連携先は様々です。公的な･フォーマルな場所だけでその女性･少女の必要を満たすことは不可能で、私的な･インフォーマルな場所に繋いでいくこともあります。

妊娠葛藤相談窓口は、匿名で、秘密が守られて、安心を感じられる、そして気持ちを受け止められ繋がりを作り、役に立つと思ってもらえることが必要だと思っています。

妊娠というのは「期限のある困りごと」なので、それまでどことも繋がることなく自分でなんとかやってきていた人がいよいよ SOS を出すきっかけになっています。相談がレバレッジポイントとなり、本人のニーズに添った、様々な支援に繋げていくハブになるそういうチャンスととらえています。しかし、これまでの人生で背負ってきた様々な困難に立ち向かうきっかけにするには、繋ぎ先にある支援があまりにも脆弱なため、困難が困難のままにされるしかない、そんな情けない現状もあります。

**妊娠葛藤を強化する要因**

スライド 1




スライド 2

今年の一月に 2015～2019 年の相談をまとめた、「妊娠葛藤白書」を発行しました。これは「私って、透明人間みたいだよね」といったある少女の声をきっかけに、妊娠は自己責任と言われてしまう中、彼らが背負わされている「妊娠葛藤」の背景にある社会課題を可視化することを目指しています。

白書の中にある、「妊娠葛藤を強化する要因」の図では、様々な要因が蜘蛛の巣のような状態になっていることがわかります。一つひとつに目を凝らしてみていくと、個人に由来する困難だけでなく、社会に由来する困難の多さに驚きます。そもそも、今の日本には「セクシュアルリプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR）」を守るための法律や制度が見当たりません。

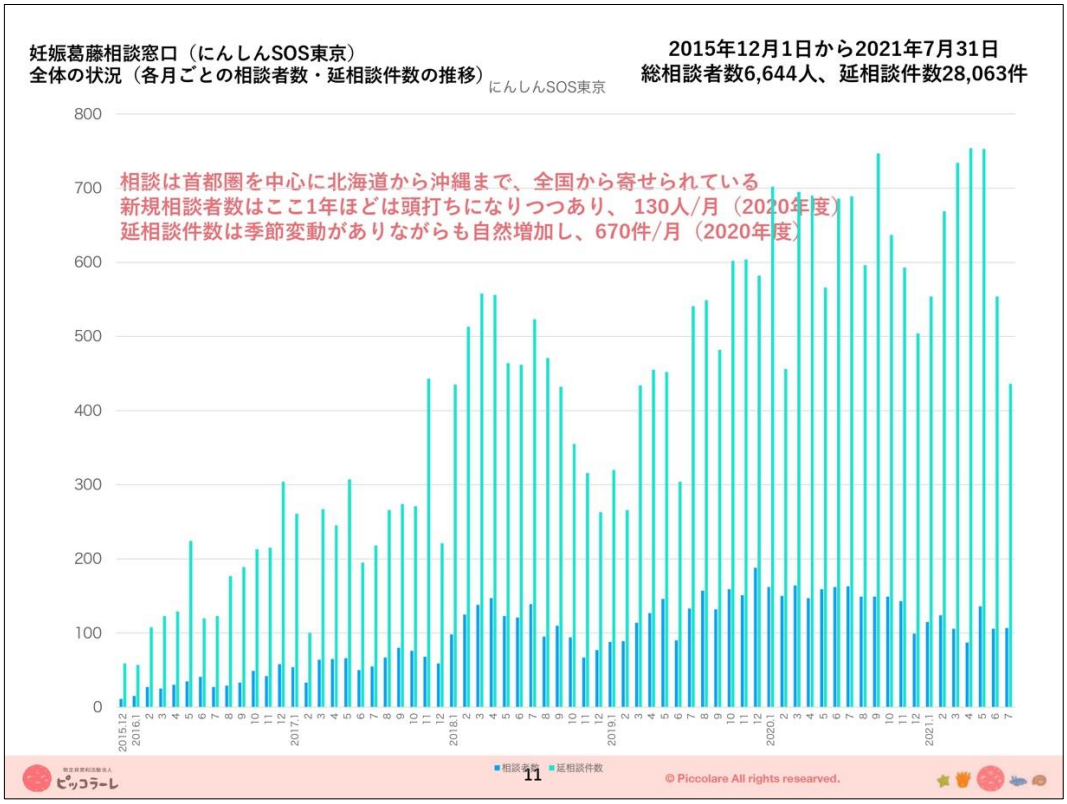
一人ひとりが自助の中で対応するしかない状況では、個人が持っている社会資本の量の違いが、選択肢の数を決定し、その妊娠をどうするのかを自分で決めることができるかどうかを左右します。身体も心も、周りの環境も大きな変化を余儀なくされるので、それに対処できない、そんな場合もあります。

性と生殖に関する経験や考え方、感じ方も一人ひとりが違います。相手のあることなのでどんなに努力や準備をしても、例えば妊娠を望んでいても叶わないなど、思い通りにな

らないという側面も持っています。だからこそ、全てのジェンダーに関わる問題として、SRHR を社会全体で保障しよう、という考え方が必要です。

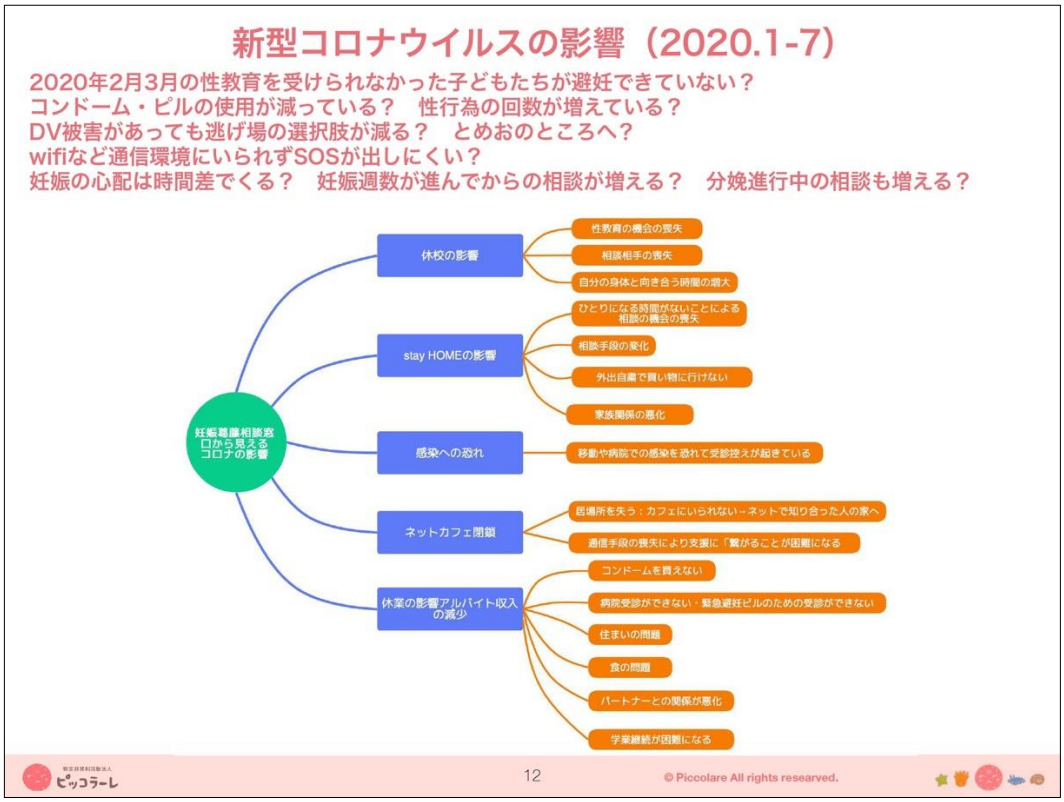
### 「にんしん SOS 東京」の相談から

「にんしん SOS 東京」には全国から相談が寄せられます。スライド 3 の緑の部分の延相談件数は 2015 年から 2021 年にかけてずっと増えてきています。




スライド 3

コロナについて、2020 年 1 月から 21 年 7 月に寄せられた相談の中から、コロナによって生じた要因をあげてみます。休校、ステイホーム、感染への恐れ、ネットカフェの閉鎖、休業の影響でのアルバイト収入の減少などを受け、様々な性と生殖に関する健康や権利が今まで以上に脅かされる状況が生まれています。



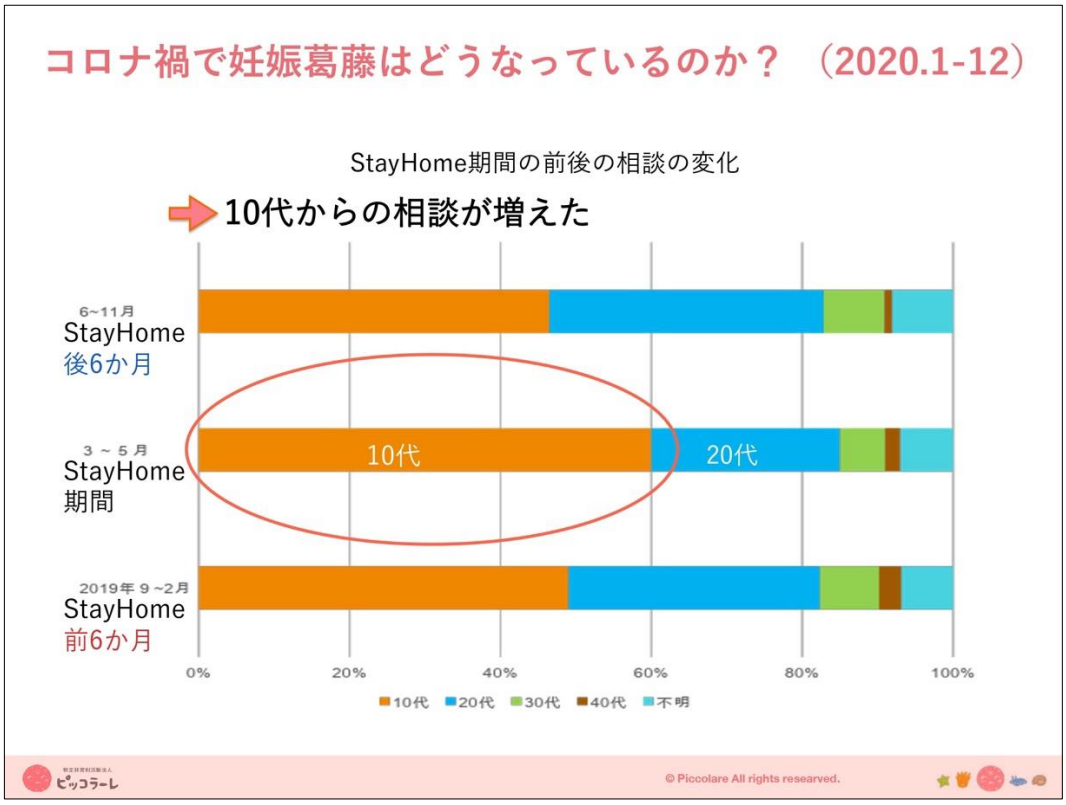

スライド 4

「相談を誰かにしていますか」という問いに対して、「誰にも相談していない」が 6 割にのぼるのは実はコロナ以前から変わりがありません。年齢の内訳を見ると 10 代が 48%、コロナ禍以前は 38%でしたので、10 代の相談が増えたことは明白です。従来から妊娠・避妊に関する相談が 82%を占めており、こちらは変わりありません。

中学生などの相談では、腰痛で整形外科にかかったところ「赤ちゃんがいるよ」と言われ、「どうしたらいいのかわからない」と Twitter から連絡が来たこともありました。包括的な性教育が教育現場の中で実施されていない状況の中、リスクに晒されている子どもたちを今すぐ救う必要があります。

### 10 代の不安

もう少し期間を絞りますとステイホームの期間、学校がお休みだった数ヶ月の間の 10 代の相談数が跳ね上がるということがありました。2020 年 3 月以降件数は増えており、その中でも全体の割合として跳ね上がったのがこの期間です。この理由は複雑に絡み合っていますが、学校に行っていれば友達や教師に相談できていたはずなのに、コロナ禍で孤立した結果も大きいでしょう。




スライド 5

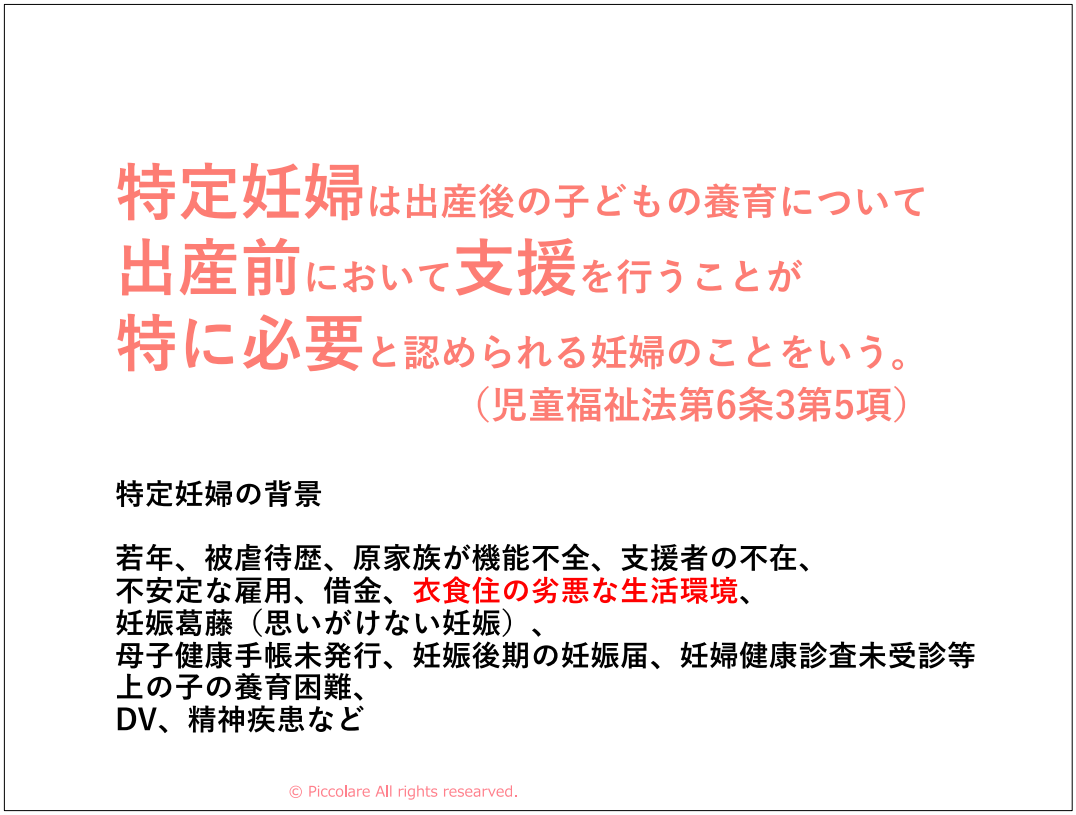
10 代の相談を見てみますと、コンドームを買うことができなかったり、性被害に巻き込まれたりして実際避妊ができていないという相談があります。対照的に避妊はできている、あるいは妊娠の可能性がない性的な触れ合いだったとしても、大きな妊娠不安を抱え死を考えるほど悩んでいる少女たちもいます。

**生活困窮の不安**

次にコロナ禍での中長期的な影響を見ます。2020 年 3 月以降同行や面談などアウトリーチの件数が増えました。生活保護申請の同行も非常に増えており、また、司法、行政、病院など、連携件数も増えています。他の相談機関や行政からの連携相談も増えてきています。私たちが「居場所」を始めたということで、既存の枠組みがフィットしない女性や少女に対しての利用の問い合わせが相次いでいます。

「特定妊婦」は児童福祉法の中に書かれていますが、妊娠が大きな困難になっている彼らが使える支援・制度がそのなかに十分あるわけではありません。児童福祉法以外を見渡しても、彼らのための制度は驚くほど少ないです。児童が妊娠することは想定されていないのです。たとえば一時保護中に病院に行く場合、精神科や皮膚科、内科、歯科など疾患や病気のために病院を受診するための医療券はあっても、妊娠に関する診察費は医療券が使えません。児童である若年妊婦が居場所を持たない場合も、彼らが利用可能な住まいは

児童相談所の一時保護所ではなく、民間の子どもシェルターなどになることがあります。成人であれば現状では売春防止法や DV 防止法を根拠法とする制度を使うことが多いのですが、これらの法律にも妊娠している女性への「眼差し」がありません。また、本人の求めに応じて利用できるわけではなく、一つひとつの制度に枠組みがあり、「この妊婦は使える」、「この妊婦は使えない」と措置決定する現場が固定化しており、空きがあっても使えない、そんな矛盾が現場では起きています。また、支援を「与える」側の選別方法が尊厳に欠け、支援対象者である女性に否定的な影響を与え続けています。「どれくらい困っているか」を細かく聴取され、批判を受けるような状況の中、そのやり取りに女性が傷つき、相談する力も周りに対する信頼も失ってしまう現場を何度も見てきました。




スライド 6

居所のない妊婦が利用できるのは、シェルターなどの婦人保護施設ですが、北仲さんも仰っていましたけれど、「そこじゃない！」とフィットしない若年の妊婦さんがいます。そんな中、去年の夏より、若年妊婦を対象とした居場所、「ぴさら」を地域に開きながら運営しています。ここは、妊娠何週からでも、まだその妊娠をどうするか迷っている状態でも利用できます。そしてどのような選択かにかかわらず（中絶でも出産でも、自分で育てる場合も養子縁組に出す場合でも）、本人がここにいたい、そう思えば上の子と一緒でも泊まることもできます。

**「さまざまな妊娠」に対応できる支援を**

最も大きな問題は、「女性が自分で自分の妊娠をどうするか決められない」ことです。産まない場合の選択肢には「人工妊娠中絶」がありますが、日本の刑法第 29 章堕胎罪には、「妊娠中の女子が薬物を用い、又はその他の方法により、堕胎したときは、一年以下の懲役に処する。」とあり、自己堕胎罪が存在します。堕胎罪は女性の罪の意識を持たせます。海外から買える安価で安全な中絶薬で自分で中絶する選択肢へのアクセスを妨げ、高価で危険なそうは法の手術にもアクセスできない女性がたくさんいます。妊娠にはもうひとり関係者がいるにも関わらず、女性のみを処罰の対象とする堕胎罪と母体保護法の条文は、女性を不当に扱っており女性差別撤廃委員会からも撤廃するよう勧告を受けています。妊娠するのは女性だから女性の責任である、という考えを否定することなくそのままにしておいているこの法律は、ジェンダーの非対称性を許しており、日本が国際社会の中で女性の人権の観点からは非常に遅れた地点にいることの象徴です。

現在の日本で人工妊娠中絶手術を受けた女性が罰せられないのは、母体保護法が定める中絶の適応条項があるからですが、この母体保護法には問題がたくさんあります。配偶者の同意書を求められるなど、妊婦が産むか産まないかを自分で選択することを保障する法律ではありません。中絶は医師の許可のもとに行われており、この法律が守っているものは女性ではなく、医師です。

また、多くの国で中絶は若年は無料で、少なくとも全ての人にとって保険適用になっています。避妊や中絶、出産にかかる費用を全額自費のままにしている限り、経済的困窮など様々な困難を抱える人はアクセスできないものになっています。先ほども話が少しでましたけれど、制度があっても償還払いになっているなど、まずは現金を持っていることが前提とされる制度ばかりです。出産育児一時金などの交付金は、女性の医療を慈善の対象であるかのような印象を与えます。健康医療へのアクセスは人権です。

居所のない妊婦は様々な地域を転々としています。母子健康手帳や妊婦健康診査受診券の発行には住民基本台帳を確認されます。臨月の女性さんを行政の窓口に連れて行ったとしても、住民票がなければ母子健康手帳も妊婦健康診査受診券も公布してもらえない、といったことが現場では起きています。平成 28 年 10 月の厚生労働省・事務連絡では、住民票の記載有無によらず「当該市町村に居住している実態を確認できれば、母子保健に関する事業（母子健康手帳の交付など）の対象となる」、さらに、令和 3 年 1 月の同事務連絡によると、「妊婦健診の実施に係る費用については、地方財政措置がなされており、住民票がない方に対する妊婦健診につき、自治体の判断によって公費負担の対象とすることは差しつかえ」ない、とされています。しかしながら、当事務連絡が現場まで普及しておらず、上記をわかっていたとしても、予算確保含めどのように対応すべきか、各自治体での知見・リソースが不足している状況が続いています。

本来一人ひとり妊娠の状況が異なることを考えると、ハイリスクな妊婦のための支援で

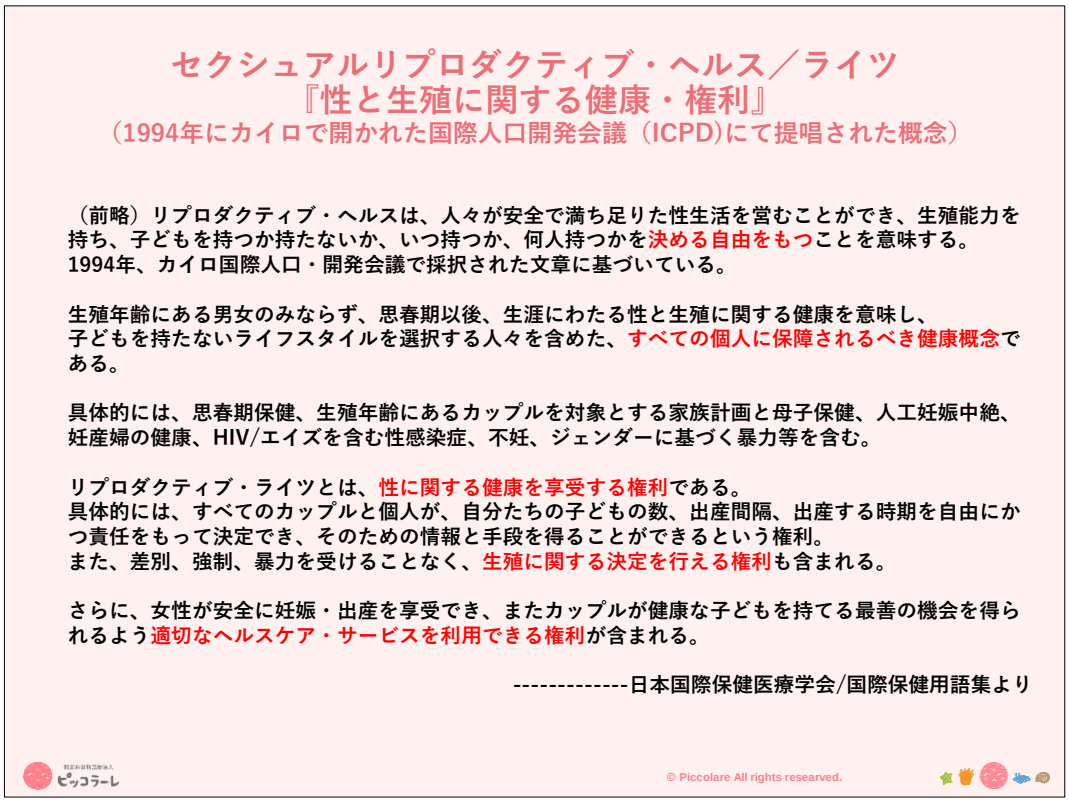
なく、全ての人が妊娠・中絶・出産に関して自分に必要な情報や手段にアクセスできるような、ポピュレーションアプローチが急務です。

今、私たちが政策立案の現場にいる方に訴えているのは、避妊や緊急避妊薬、中絶、性感染症の治療含め、妊娠の確定診断や妊婦健康審査、分娩そして産後のケアの、婦人科や産科に関わる費用の無償化です。ユニバーサルヘルスカバレッジの達成のためには取り残されたこの部分を変えることが必要です。

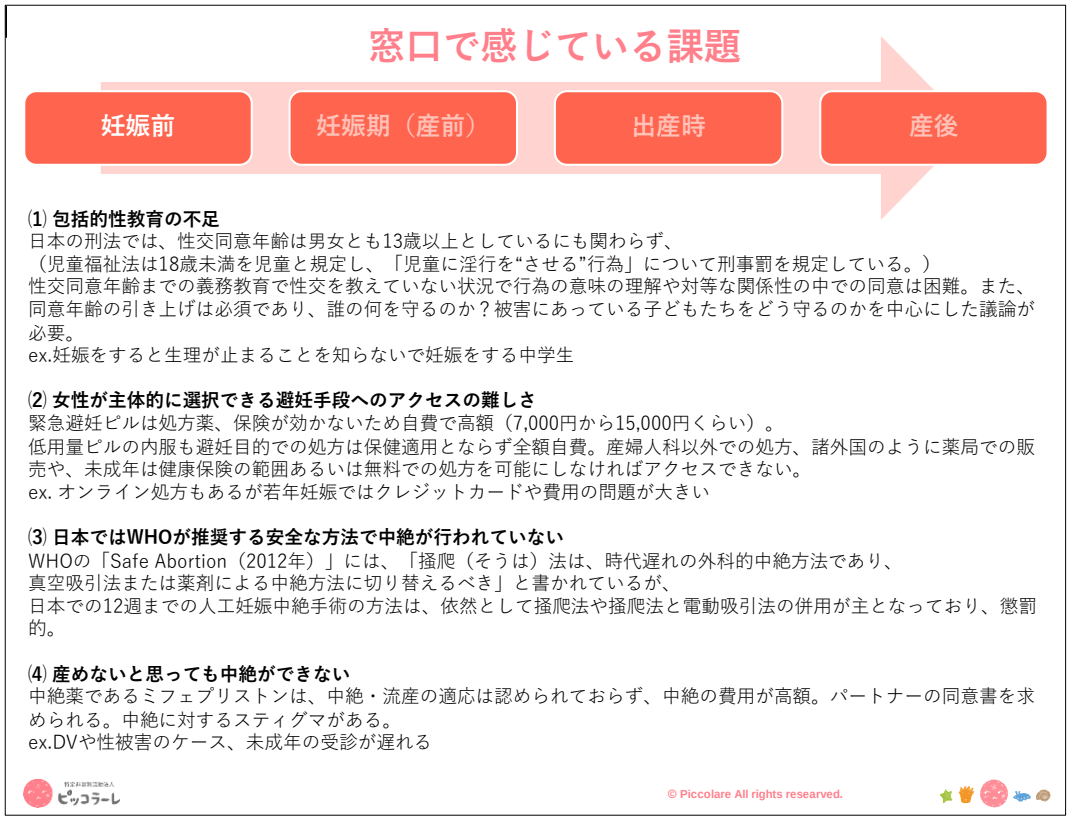
もう一つは、誰もが性に関する情報を得ることができる環境の整備です。

例えば、イギリスの NHS（国民保険サービス）のサイトには pregnancy と言うタグがあり、そこには様々な性に関する情報が置いてあり、自分で必要な情報を得ることができます。情報は簡単な言葉で書いてあり、読み手が体の情報をバイアスなく・肯定的にとらえられるように言葉選びに工夫がされています。日本の厚生労働省のサイトにはそういう発信は見当たりません。そもそも一般の市民向けの情報は見つけにくいです。

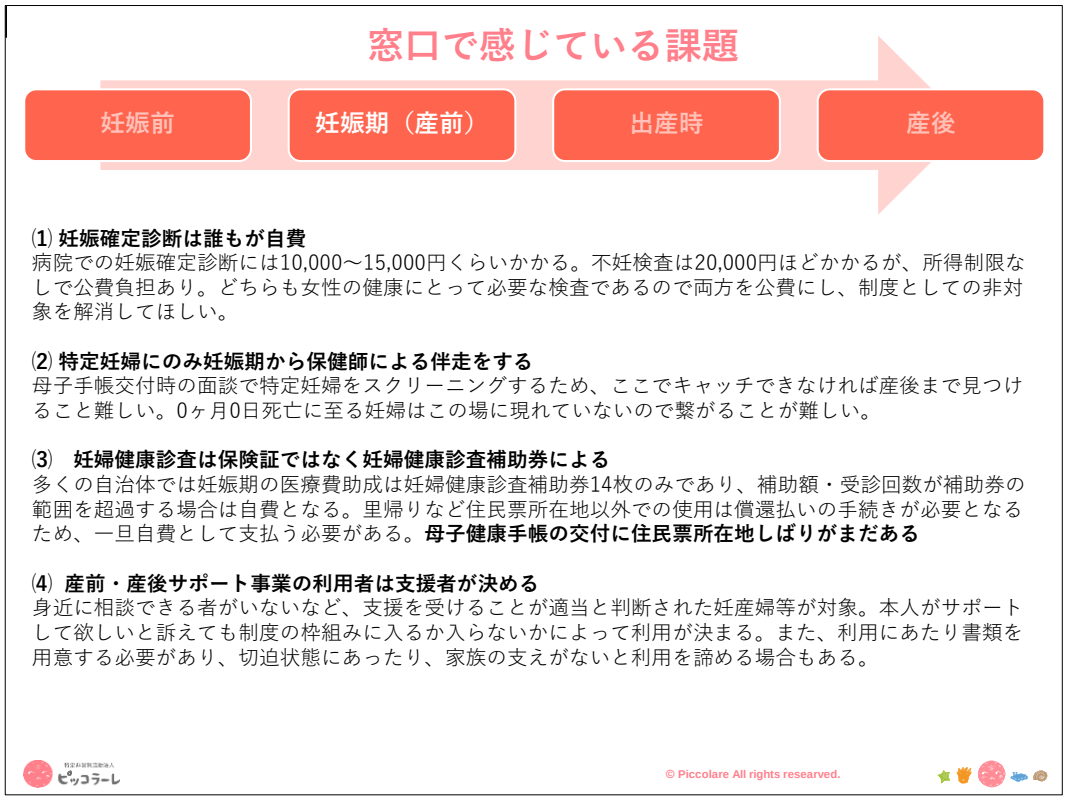
背景に根深いジェンダーバイアスが横たわる中、女性だけでなく全ての人にかかる概念として、SRHR がまず社会に周知されること、そして SRHR に基づく情報や手段を全ての人が利用可能なものとすることが、妊婦を孤立させないことに繋がると感じています。



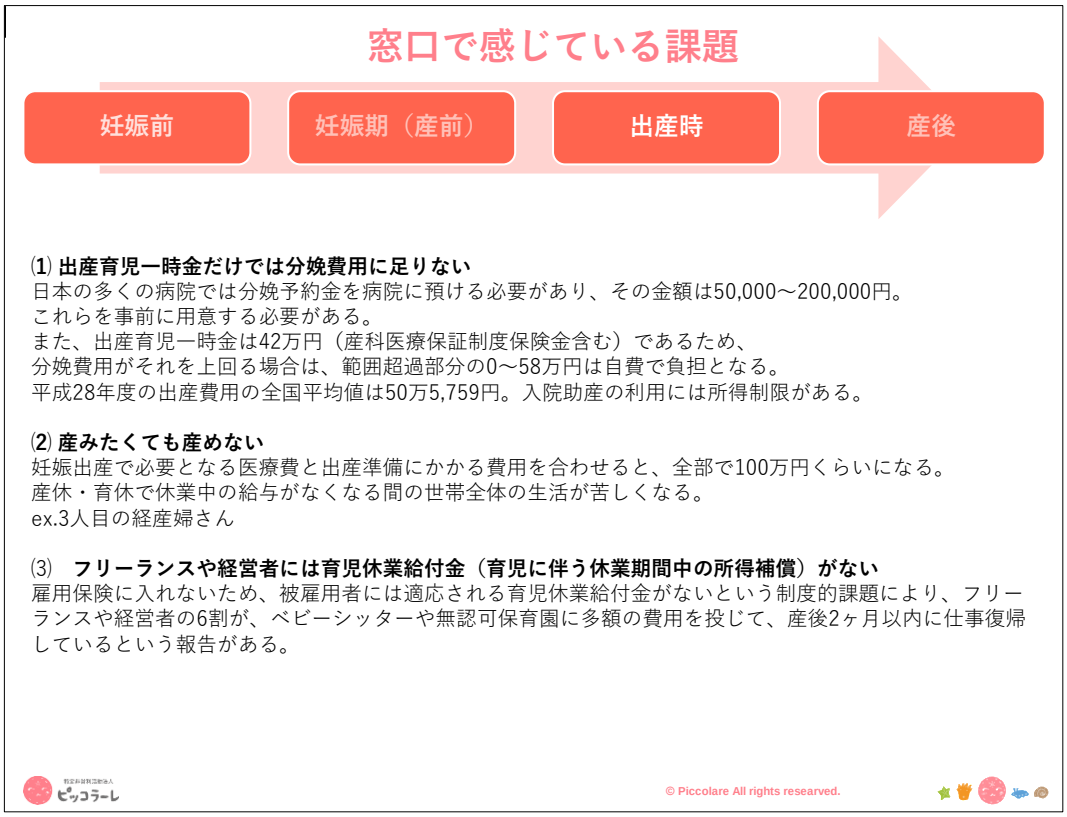

スライド 7


窓口で感じている課題
妊娠前
妊娠期（産前）
出産時
産後
⑴ 包括的性教育の不足
日本の刑法では、性交同意年齢は男女とも13歳以上としているにも関わらず、
（児童福祉法は18歳未満を児童と規定し、「児童に淫行を“させる”行為」について刑事罰を規定している。）
性交同意年齢までの義務教育で性交を教えていない状況で行為の意味の理解や対等な関係性の中での同意は困難。また、同意年齢の引き上げは必須であり、誰の何を守るのか？被害にあっている子どもたちをどう守るのかを中心にした議論が必要。
ex.妊娠をすると生理が止まることを知らないで妊娠をする中学生
⑵ 女性が主体的に選択できる避妊手段へのアクセスの難しさ
緊急避妊ピルは処方薬、保険が効かないため自費で高額（7,000円から15,000円くらい）。
低用量ピルの内服も避妊目的での処方は保健適用とならず全額自費。産婦人科以外での処方、諸外国のように薬局での販売や、未成年は健康保険の範囲あるいは無料での処方を可能にしなければアクセスできない。
ex. オンライン処方もあるが若年妊娠ではクレジットカードや費用の問題が大きい
⑶ 日本ではWHOが推奨する安全な方法で中絶が行われていない
WHOの「Safe Abortion（2012年）」には、「掻爬（そうは）法は、時代遅れの外科的中絶方法であり、
真空吸引法または薬剤による中絶方法に切り替えるべき」と書かれているが、
日本での12週までの人工妊娠中絶手術の方法は、依然として掻爬法や掻爬法と電動吸引法の併用が主となっており、懲罰的。
⑷ 産めないと思っても中絶ができない
中絶薬であるミフェプリストンは、中絶・流産の適応は認められておらず、中絶の費用が高額。パートナーの同意書を求められる。中絶に対するスティグマがある。
ex.DVや性被害のケース、未成年の受診が遅れる
© Piccolare All rights researved.

スライド 8


窓口で感じている課題
妊娠前
妊娠期（産前）
出産時
産後
⑴ 妊娠確定診断は誰もが自費
病院での妊娠確定診断には10,000～15,000円くらいかかる。不妊検査は20,000円ほどかかるが、所得制限なしで公費負担あり。どちらも女性の健康にとって必要な検査であるので両方を公費にし、制度としての非対象を解消してほしい。
⑵ 特定妊婦にのみ妊娠期から保健師による伴走をする
母子手帳交付時の面談で特定妊婦をスクリーニングするため、ここでキャッチできなければ産後まで見つけること難しい。0ヶ月0日死亡に至る妊婦はこの場に現れていないので繋がることが難しい。
⑶ 妊婦健康診査は保険証ではなく妊婦健康診査補助券による
多くの自治体では妊娠期の医療費助成は妊婦健康診査補助券14枚のみであり、補助額・受診回数が補助券の範囲を超過する場合は自費となる。里帰りなど住民票所在地以外での使用は償還払いの手続きが必要となるため、一旦自費として支払う必要がある。母子健康手帳の交付に住民票所在地しばりがまだある
⑷ 産前・産後サポート事業の利用者は支援者が決める
身近に相談できる者がいないなど、支援を受けることが適当と判断された妊産婦等が対象。本人がサポートして欲しいと訴えても制度の枠組みに入るか入らないかによって利用が決まる。また、利用にあたり書類を用意する必要があり、切迫状態にあったり、家族の支えがないと利用を諦める場合もある。
© Piccolare All rights researved.

スライド 9




スライド 10

コメント（三浦まり）

中島さんありがとうございました。「私、透明人間みたいだよね」という言葉は本当に心に迫るものがあります。「妊娠葛藤」というものが非常に複雑なマップになっていましたが、いかに社会システムによってそういった妊娠葛藤が生み出されているのか、全ての妊婦が使える社会資源がないということも理解できました。政府は少子化対策を 30 年間やっていますが、妊婦が置かれた状況がここまで貧弱であるということを改めて感じます。「生理の貧困」対策はコロナ禍で随分進んだわけですが、性と生殖に関する健康と権利という基本がなくては根本的な解決にはならないということを感じます。

医療・看護

# コロナ禍の保健所、医療現場から

小松廉則
大阪府関係職員労働組合執行委員長

## 自己紹介

初めに少し自己紹介をさせていただきます。私は子供の頃から太っていて運動が苦手でしたが、野球の大好きな父親とスポーツ万能の弟がいたので、毎週日曜になると子供会のソフトボールに出かけていました。本当は絵を描いたり、料理したりすることに興味があったのですが、言い出せずに「男の子はスポーツをやるのが普通なのだ」と自分に言い聞かせていました。

中学・高校でも運動部に所属し、高校卒業後、大阪府に就職をし、労働組合に出会いました。社会に出たら上司の言うことを聞くのが普通だと思っていた私にとって、労働組合が堂々と声をあげている姿は驚きでしたし、カッコいいなと思っていました。

少しずつ労働組合の活動にも参加するようになり、沖縄に行く機会がありました。そこで戦争中に野戦病院として使われていたアブチラガマという自然洞窟に入りました。真っ暗でじめっとした空気と土の匂いの中で聞いたガイドさんの話が､胸に突き刺さりました。「どうか忘れないでください。ここで死んだ人たちは、どんなに悔しくても悲しくても、もう声をあげられないのです」という言葉でした。その後も労働組合に積極的に関わりましたが、声をあげるとバッシングをされることもありました。しかし「今、声をあげないと救える命が救えなくなる」、そんな思いで現場にいる仲間と声をあげ続けています。

## コロナ禍の大阪

では本題に入ります。コロナ禍の中、大阪府の保健所や医療現場は大変な状況になっています。その原因はコロナ感染者の爆発的な増加もありますが、大沢先生のお話でも触れられましたように、この数十年、保健所や保健衛生部門が減らされ続けてきた結果です。2020 年 4 月の時点でも月 160 時間以上の時間外勤務や、土日も含めて 1 ヶ月まるまる 1 日の休みも取れないという実態もありました。

そして第 4 波、第 5 波では入院やホテル療養もできず、自宅で療養するしかない人が 1 万 5000 人を超えました。今日この場には来られませんでしたが、2021 年 7 月 3 日に収録をした保健師と看護師の声を動画で紹介しますので、少しご覧ください。

**現場の声（動画書き起こし、7/3/2021 収録）**

**① 保健師 30 歳代**

保健所では陽性者の療養先の決定や、療養期間中の健康観察なども担っています。今回第4波で感じたことは陽性者の方が医療に繋がれないということでした。保健所が「入院が必要」と判断して入院フォローアップセンターに申請しても、「今の状態ならば入院は出来ない」「SPO2 の値が 90 を切る方を優先して入院調整をしている」と言われ、ご本人やご家族は不安なまま自宅で過ごしていただくこともありました。

患者さんが夜中に急変していないかと不安に思いながら翌朝出勤し、朝一番に連絡して安否を確認し、バイタルなどの状態観察を行いました。場合によっては昼や夜にも電話をかけ、急変していないか確認し、入院フォローアップセンターへ何回も状態報告をしました。日に日に悪化していく姿が電話口からも感じ取れ、恐怖のあまり自分の声や受話器を握る手が震えることもありました。

（2021 年）4 月半ば以降は入院申請してから、3~4 日後にやっと入院先が決まることが通常でした。夜中や朝方に急変して救急搬送の連絡が入ることもあります。救急車の中で何時間も待機して、入院先が決まることもありました。入院後はホッとしたのも束の間で、入院先で亡くなられたという連絡も次々と入ってきます。「もう少し早く治療に繋がっていれば」「他にできたことはなかったか」と、無力感や自分を責める気持ちを抱えながら皆働いていました。

80 歳以上の高齢者や介護の必要な障害者は入院先もなく、宿泊先にも受け入れてもらえず、自宅待機で家族に見守ってもらうしか出来ませんでした。この時期は本当に辛く苦しい精神状態でした。その上一人ひとりに寄り添いたくても、その日のうちに新規陽性者に連絡をしなくてはならないため、常に時間との勝負でもありました。同僚のことを思うと、体調不良でも小さな子供が家で待っていようとも、ほとんどの保健師が総動員で毎晩遅くまで働いていました。第 5 波が目前に迫っている中、人員体制の強化も夜間休日の体制も不十分な状態でもう一度乗り越えられるのか、不安でなりません。

**② 看護師 50 歳代**

一時期重症患者が増え、対応困難となった時には「誰を優先するのか」という「命の選別」が始まっていると感じました。この 40 年間、私は看護師として働いてきましたが、かつて経験したことのない光景を目にしてきました。

患者さんは少し体を動かしたり、会話したりするだけでも血中の酸素飽和度が低下するので、ベッド上での安静を強いられほぼ全員がおむつを着用、高流量酸素を投与し、棚には収まりきらない点滴・注射・薬剤が溢れていました。患者さん

のおむつの中が排泄物で汚れていてもすぐに交換できず、着ている服がしわくちゃになっていても整えてあげられません。

患者さんの急変も常にあり、通常配置されている看護師の 2 倍は人員が必要です。処置が優先となり、患者さんのケアが後回しになってしまいます。もっと患者さんの思いを聞いて対応したい。家族にも会えず一人で戦っている方に少しでも力になれるようお手伝いしたい。でもできない現状に胸が痛くなります。

看護師も自分自身が感染しないよう、感染予防のガウンを脱ぎ着する場合はこれで良いかと何度も確認しています。しかし患者さんが急変した時は急いで対応せねばならないので、もしかしたら飛沫を浴びたのではないかと不安がつきまといます。

**ジェンダー視点からの検証① 患者対応**

現場の状況は保健師と看護師の話でわかっていただけたと思います。残りの時間は本日のテーマである、ジェンダー視点に絞って現場の声を報告します。

まず患者対応における問題です。コロナ禍の中、保健所では朝 9 時になると一斉に電話が鳴ります。電話を受けるのは圧倒的に保健師である女性です。苦情や不満の声も多く寄せられますが、その中でも暴言を吐き罵声を浴びせられるケースは 9 割が男性です。コロナ患者の療養相談では「子供がいるから入院や宿泊療養出来ない」と言うのは圧倒的に女性で、中には「夫の食事の支度をしなくてはならない」「ペットの世話まで夫に任せられない」と言うケースも多く報告されています。

**ジェンダー視点からの検証② 労働条件**

次に労働条件の面では保健師の長時間労働による身体的負担が懸念されています。ここにあるグラフは 2121 年 5 月に行った保健師 65 人へのアンケートの回答結果ですが、平均睡眠時間は 5 時間以下が 7 割で数々の体調悪化も訴えられています。生理だから休めると言った環境もなく「忙しくてトイレにいく暇もなく、尿路感染を起こしていた」、「生理の時はナプキンから血が漏れていた」、「子宮内膜症を抱え生理時の痛みに耐えて働いている」、「2 週間も出血が続いていた」などの報告も上がっています。女性が健康に働き続けることや妊娠、出産にも大きく影響する問題でもあり、早急に改善が必要だと考えています。

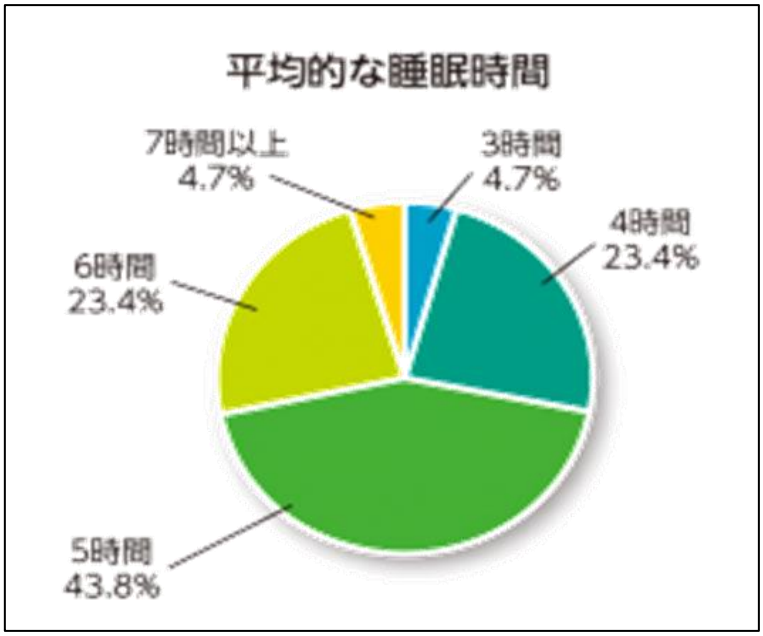



図 1

また精神的な負担、家族・子供への影響も深刻です。学齢期の子供の不登校、行き渋りなどの悩みも保健師から多く寄せられています。子育てとの両立が困難になり、退職を考えざるを得ない、「1 年は頑張ったけれどもう無理かもしれない」という声、夫から仕事を辞めろと言われているケースもあります。コロナ前からも保健所では家庭と仕事の両立が課題の一つでしたが、すでに多くの保健師が退職を余儀なくされています。せっかく経験を積んで培ってきたスキルが全く無駄になってしまうので、これは大阪府だけの問題ではなく、社会全体にとっても大きな損失であるというふうに考えています。

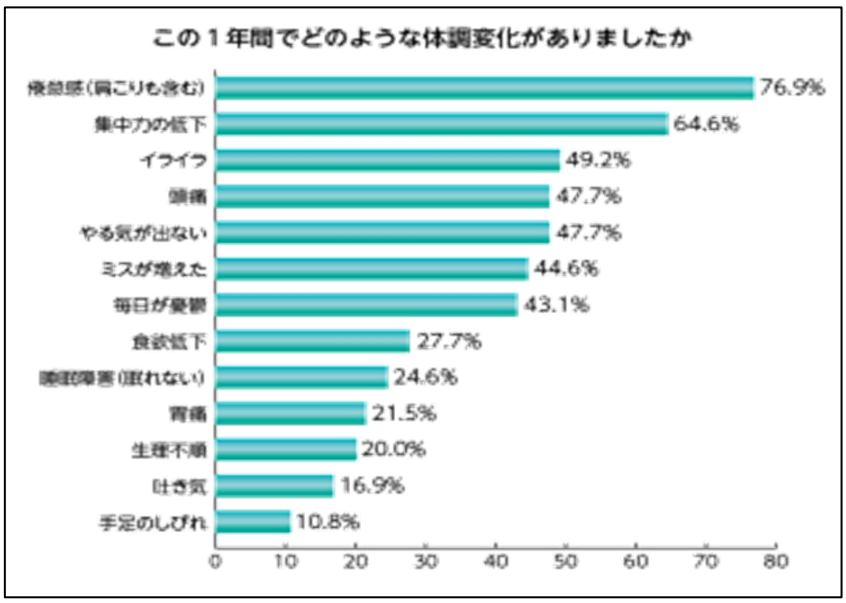



図 2

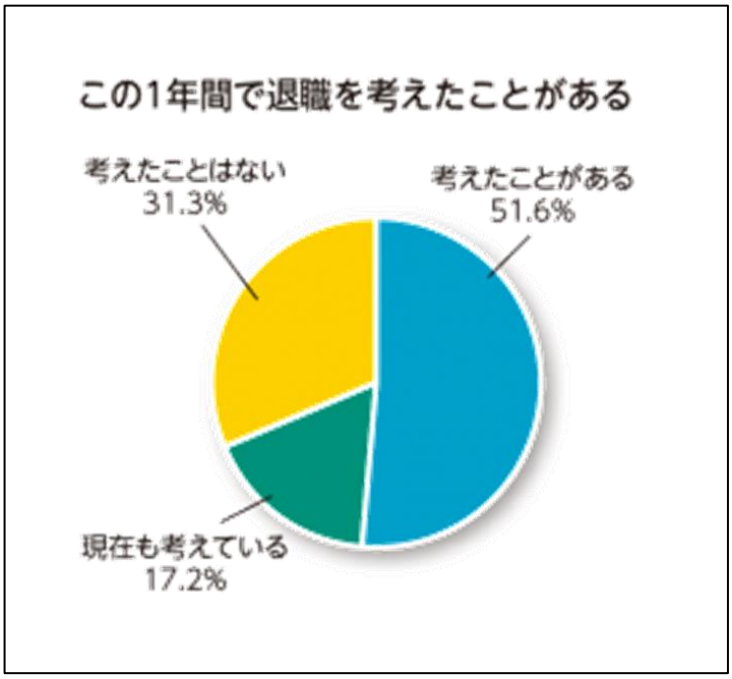



図 3

**組合としての取り組み**

こうした事態を踏まえて、私たちは真に保健師・看護師をはじめ、専門性やスキルを持った女性職員が安心して働き続けられる職場を目指しています。そのために労働組合も変わっていかねばならないと思っています。私たちの組合では 2021 年 10 月に役員が入れ替わるのですが、ようやく女性比率が半数を超えて、6 割になります。また、半数が小・中学生の子育てをしている世代になります。時間的な制約もありますが、誰もが参加できる労働組合へと変革をしていきたいと考えています。

今回、保健師を増やすキャンペーンを展開したように、今後もコミュニティオーガナイジングの手法を用いた、当事者が中心となるキャンペーンを考え、どんどん進めていきたいと思っています。そして憲法 25 条にある「誰もが人間らしく生きる権利」を実現できる社会を目指していきたいと思っています。

**コメント（三浦まり）**

小松さん、ありがとうございます。そして現場の保健師さん、看護師さんからの声もお届けくださり、ありがとうございます。現場の逼迫した状況、助けたいのに助けられないという悲鳴、大変心が痛む証言でした。医療従事者、保健所の方のご苦労、そして小松さんが見せてくださった「睡眠時間がとても短い」というデータ、退職を考えたことのある人の多さなどから、様々なメンタルや健康面での被害が切実に伝わってきました。冒頭でも大沢先生がデータをお示しくださいましたが、命・安全を守るため、もっと医療、保健所へ税金が投入されることが必要なのではないかと思います。

**移住女性**

# 在留資格に運命を左右される女性たち

稲葉奈々子
上智大学教授、グローバル・コンサーン研究所所員

## 移民政策と女性

今までお話しいただいた点について、外国人の女性も同じ問題を抱えています。まずは外国人とはどういう方たちなのかをお話しします。日本政府は「移民政策を取らない」と言っています。「日本は、働きに来る外国人は受け入れているけれど、定住のための外国人は受け入れていないから移民政策は取らない」という意味です。しかし実際は中長期の在留資格で滞在している人は 289 万人を超えていて、その中でも図 1 「在留資格別外国人登録者数」が示すように、永住者の資格を持っている方々が右肩上がりに増えています。いくら政府が「移民政策は取らない。だから、定住している外国人のための政策は必要ない」と言っても、事実上はこんなにたくさんの人が定住しているのです。

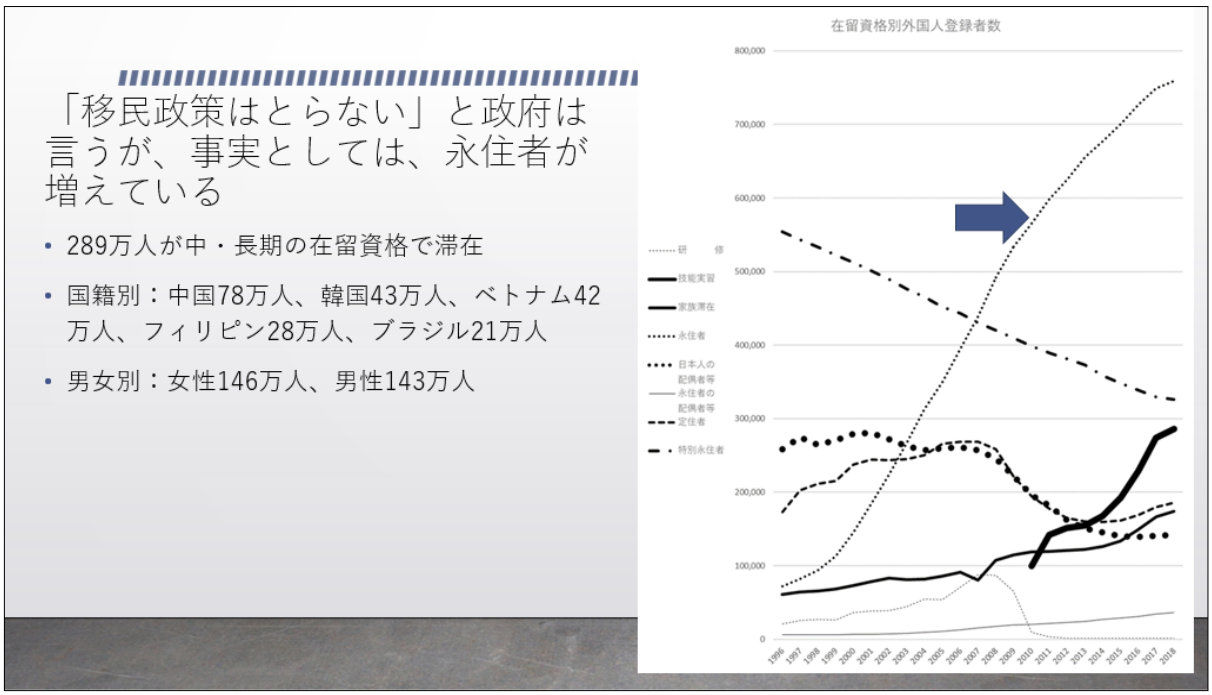



**図 1**

ちなみに右肩下がりになっている、元々一番多かった人たちは特別永住者で在日コリアンの方々です。今や「永住者」は「特別永住者」ではなく、80 年代以降に日本に来て働き始め、その後に永住の資格を取るようになっていった人たちです。図 2 をご覧の通り、男女比でいうと女性が少しだけ多くなっています。在留資格の内訳ですが「身分や地位に基づく資格」は、家族などの身分、あるいは日本人と関係がある日系人といった身分で滞在

する方で、女性が多くなっています。図 3 の「活動に基づく資格」というのは仕事や留学にあたり、男性の方が多くなっています。

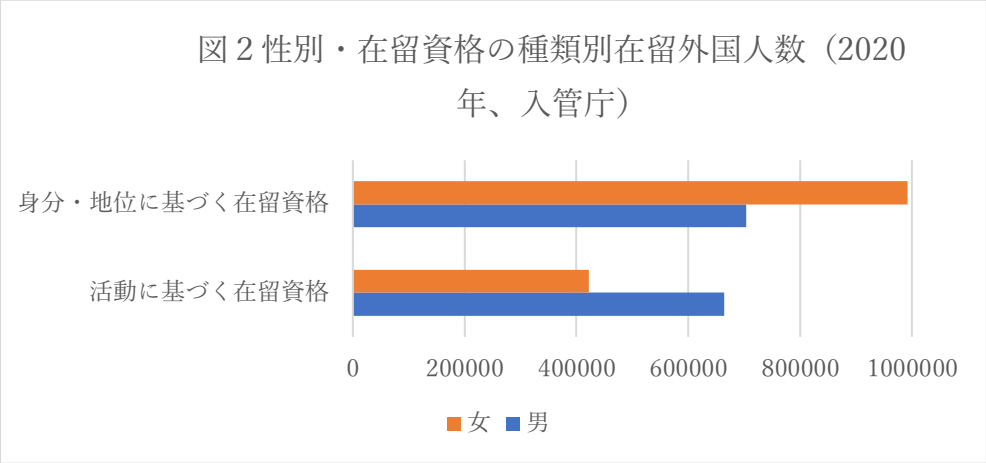



**図 2**

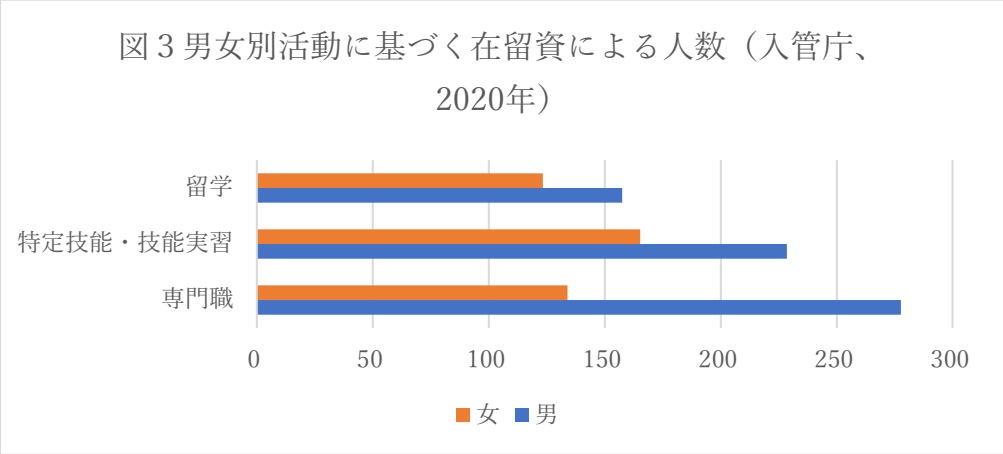



**図 3**

留学も今問題になっている技能実習や特定技能も、仕事をすることで得られるビザですが、どれも男性の方が多くなっています。図 4 の「身分や地位に基づく在留資格」ですが、これはどのカテゴリーをみても女性が多くなっていて、永住者が女性の方が多いというのは、元々、永住者や日本人の配偶者の在留資格を持っている人、あるいは定住者の人が永住者に在留資格を変更していった、ということで、結婚により定住する人に女性が多いということを表しています。

ここまでが「在留資格」ですが、これまでに登壇された方のお話は外国人女性にも共通しています。では外国人と日本人はどう違うのか、外国人は「在留資格」によって運命が変わると言っても過言ではありません。

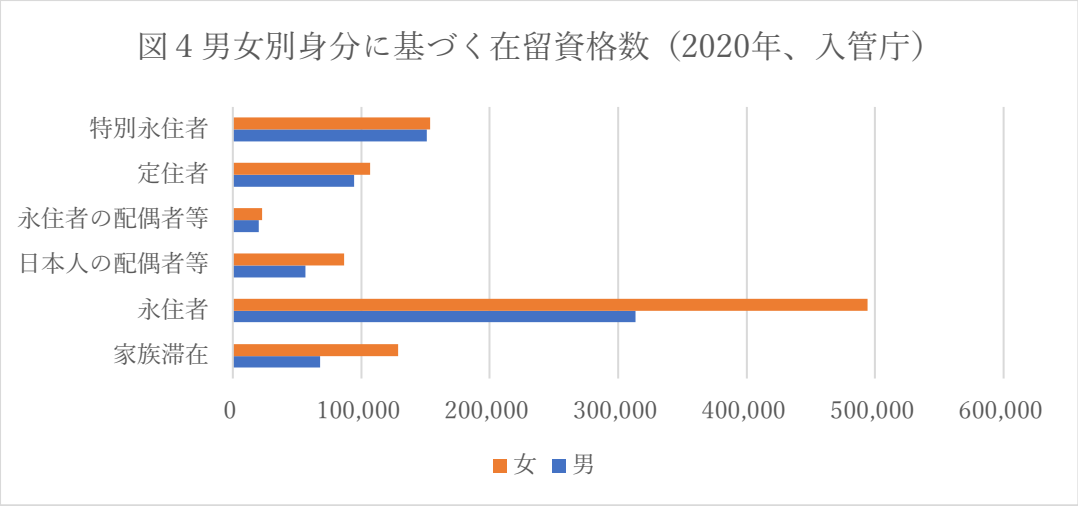



**図 4**

**在留資格ごとの対応① 身分に基づく在留資格**

それでは在留資格ごとにみていきたいと思います。

日系ブラジル・ペルー人などラテンアメリカの出身者や、日本人や永住者の配偶者など、血縁や歴史によって日本とつながりがある人たちは、定住や永住のような安定した在留資格を持っています。これは、失業しても在留資格が更新されるという意味での安定です。ところが彼ら彼女らはずっと派遣の工場労働など非正規雇用で仕事をしてきました。今回コロナ禍で印象的だったのは、日雇いの建設労働、男性が多いのですが、女性もその仕事をするようになった人が現れてきたことです。それに伴い住居を喪失してしまった人もいます。

彼ら彼女らは「安定した在留資格」を持っているので、実は生活保護を受給することができるはずなのです。ただし権利ではなく準用という形での受給になりますが、入国管理庁職員は「生活保護を受給していると在留資格を更新しない」という意味のことをほのめかすため、それが怖くて申請しない人が多いのです。実際には、生活保護を受給したら在留資格が更新されないということはありません。ただ彼ら彼女らが「これでは受給できない」と思うくらいに、実際に入管職員が口にしているのです。私自身も何度もそれを聞きました。

また、定住や日本人の配偶者などの在留資格を持っている人が、永住の資格を取得するためには「公共の負担になっていないこと」が条件となっています。たとえば子供が日本生まれで長く日本にいる方などは早く永住の資格を取りたいわけですが、生活保護を受給したら永住の資格が取れないために、申請を控える人もいます。

事例を簡単にみていきます。あるブラジル人女性はコロナの影響で派遣の仕事がなくなり、建設の仕事をやるようになりました。会社が用意したアパートに入居し、5 人で共同生活をしています。こういう事例が増えてきました。日雇いの建設現場で働くというのは、

かつてで言えば日本人男性が住宅を喪失する直前の仕事だったと、皆さんも記憶されているのではないでしょうか。

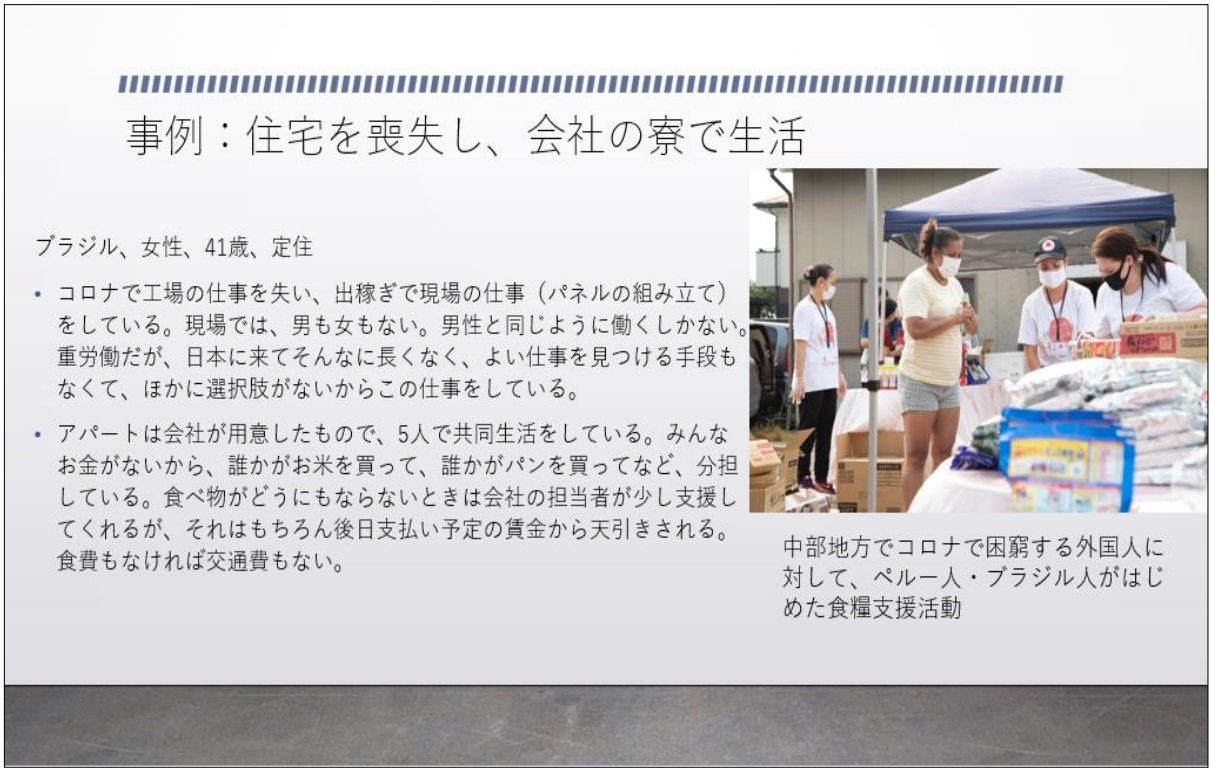



**図 5**

**在留資格ごとの対応② 活動に基づく在留資格（就労ビザ）**

次が「活動に基づく在留資格」ですが、こちらはそもそも在留資格で認められた活動をしていないと資格が取り消しになります。失業することが想定されていません。従って最初から生活保護の対象ではありません。コロナ対策で出された様々な諸制度は使えるのですが、使い切ってしまうと後がありません。

例えば、あるカメルーン人女性は留学で来日して大学院まで卒業し、派遣で小学校の ALT（外国語指導助手）の仕事をしていました。この女性はシングルマザーで、日本生まれの子どもがいます。在留資格は人文知識国際業務ということで働いていました。ところが体調を崩して入院している間に更新ができずに在留資格を喪失、入院している間に家賃が払えずに住居も喪失し、娘が児童養護施設に入ることになってしまいました。その上、退院直後の 2 週間は浅草でホームレス生活をしていたのです。子供は児童養護施設に入ったので、児童福祉法が適用になり、高校までは学費生活費などの支援を受けることができます。しかし母親の方は知人宅を転々としている状態です。このように仕事の在留資格で来日していた方は失業すると突然、ホームレスに転落してしまう可能性があるわけです。

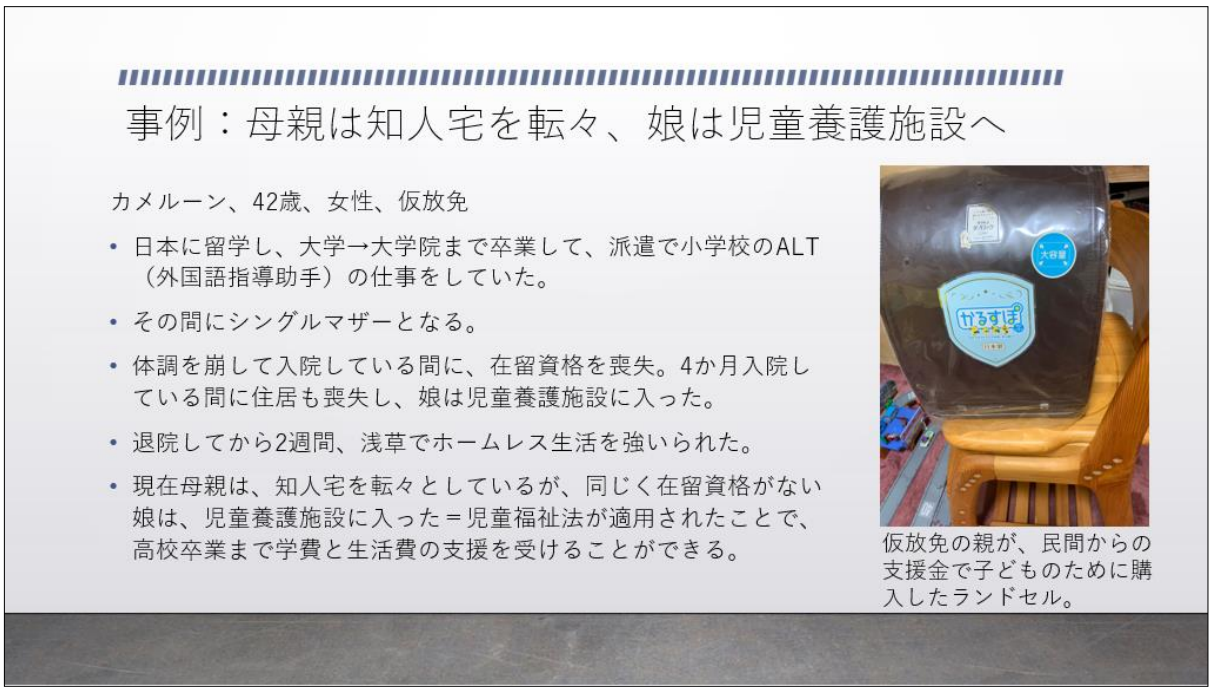



**図 6**

**在留資格のない外国人への対応**

さらに深刻なのが在留資格のない外国人で、現在日本に約 8 万人います。この何の権利も認められない状況については、しばしば「剥き出しの生」という概念が使われるのですが、まさにその状態のままコロナ禍を経験させられています。日本には 30 年近く在留資格がないままに生活している人、子供が日本で生まれ、大学に進学しているような人もいますが、コロナ禍で生活困窮が深刻になっても、あらゆる公共サービスから排除されています。

あるフィリピン人の 5 人家族は、さまざまな支援を受けながら生活していたのですが、コロナでついに支援がなくなり、食べるものにも事欠くようになりました。子供が SNS を使いこなしていたため、Facebook で SOS を発信し、民間の支援が集まりました。運が良ければ、こんな風に日本の支援組織と繋がることができる、ということです。

ここまで見てきたことは、男性移住者ももちろん同じ経験をしていますが、女性で特徴的なのは、出身国のコミュニティにも家父長制があり、問題が複合的に作用する点です。国籍、人種・エスニシティ、障害、階層、性的指向、ジェンダーの要素が複雑に交差して生み出される差別や抑圧の構造を捉えるための枠組みである「インターセクショナリティ」の概念を用いて説明すべき状況が生じています。

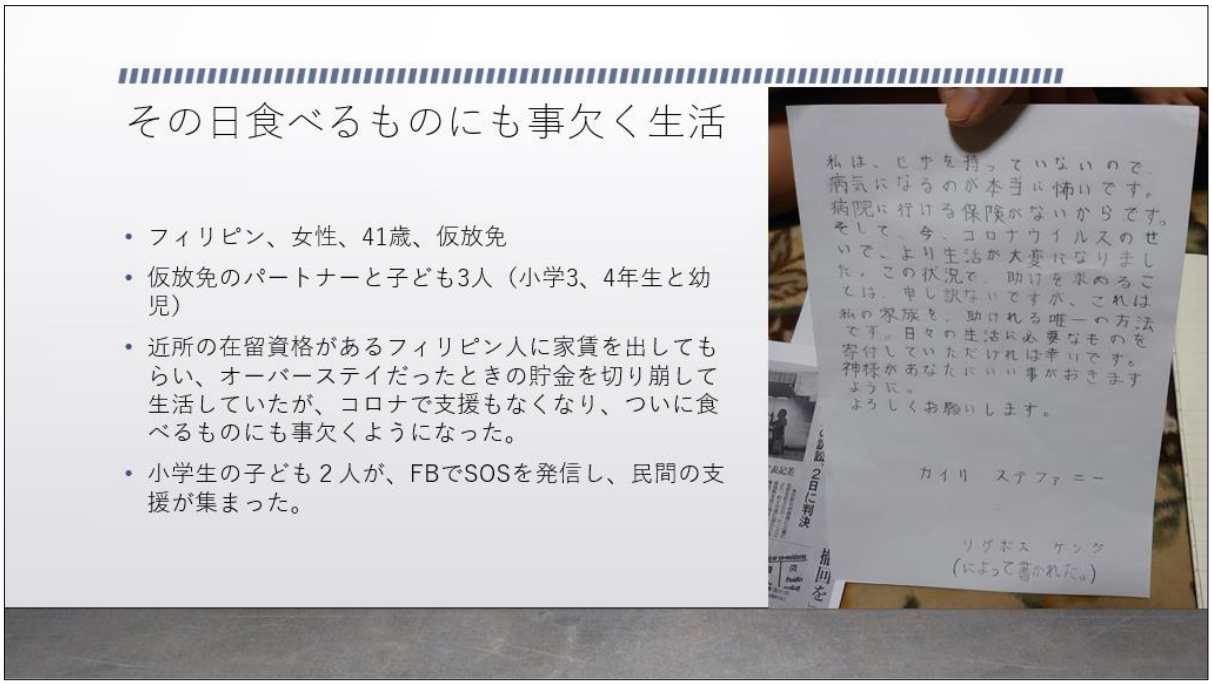



**図 7**

**移住女性の出会う暴力**

「外国人はコミュニティがあるからコロナでも助け合いがあるから大丈夫なのではないか」と思われることが多々あります。実際、公的支援が受けられず、家族や親族の支え合いでなんとかしている人が多いのも事実です。しかし、どの家族も仲睦まじく支え合っているわけではありません。

実際、家族や親族が暴力的であっても逃げることができない人もいます。公的な支援を受けられれば逃げられるのですが、ないからできないのです。「暴力的な家族に留まっていた方がまだ安全」だと思えるくらい「日本社会にシングルマザーとして出ていくほうが、ずっと怖くて冷たくて安心できない」と思っている女性も多いのです。まして DV の被害に遭っても、怖くて警察に被害など訴えられません。事実、名古屋入管で亡くなったスリランカ人の女性ウィシュマさんが入管に収容されたのは、パートナーの DV から逃れるために警察に相談をしたところ「在留資格がない」と逆に捕まってしまったためです。保護されるべき DV の被害者が、そうならなかったのです。このように外国人女性がコミュニティを離れて生きていける状況が、日本社会にはありません。

コミュニティの中につねに相談できる人がいるとは限りません。あるイラン人女性はコロナ禍で住居を失い、イラン人男性に居候をさせてもらったのですが、そこで性的関係を迫られ拒否したため、出ていかねばならない状況に陥りました。

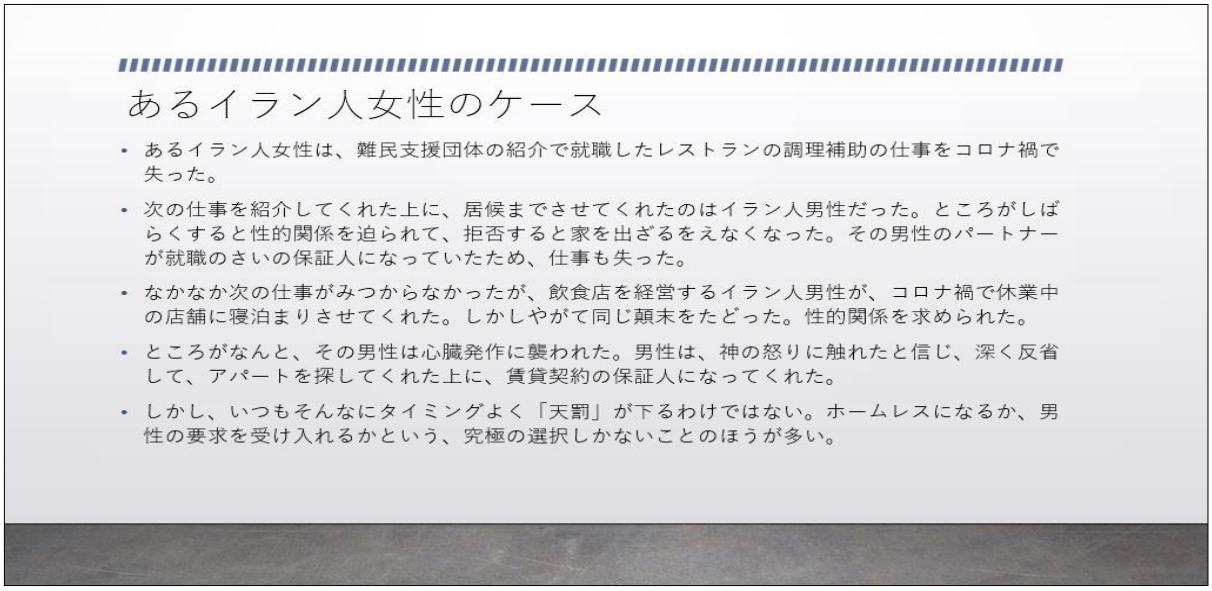



**図** 8

あるクルド人女性は、夫の DV が理由で離婚を決意しました。たまたま子供と自分の分を合わせた特別定額給付金 50 万円が手元にあり、頻繁に連絡をとる日本人支援者がいたので離婚を決意できました。ところがその後、一時保護委託事業を実施するシェルターには入れませんでした。この事業では 2 週間は行政から費用が支給され、その間に自立支援のため生活保護受給に繋げています。従って、生活保護が受給できない在留資格の場合は自立生活に向けた出口がないからと、受け入れてもらえなかったのです。その女性は一ヶ月くらい色々なところを探し回り、結局、他県の民間シェルターに受け入れてもらうことができました。しかしその後、この家族は在留資格がなくなり、シングルマザーで非常に困窮した状態に陥りました。

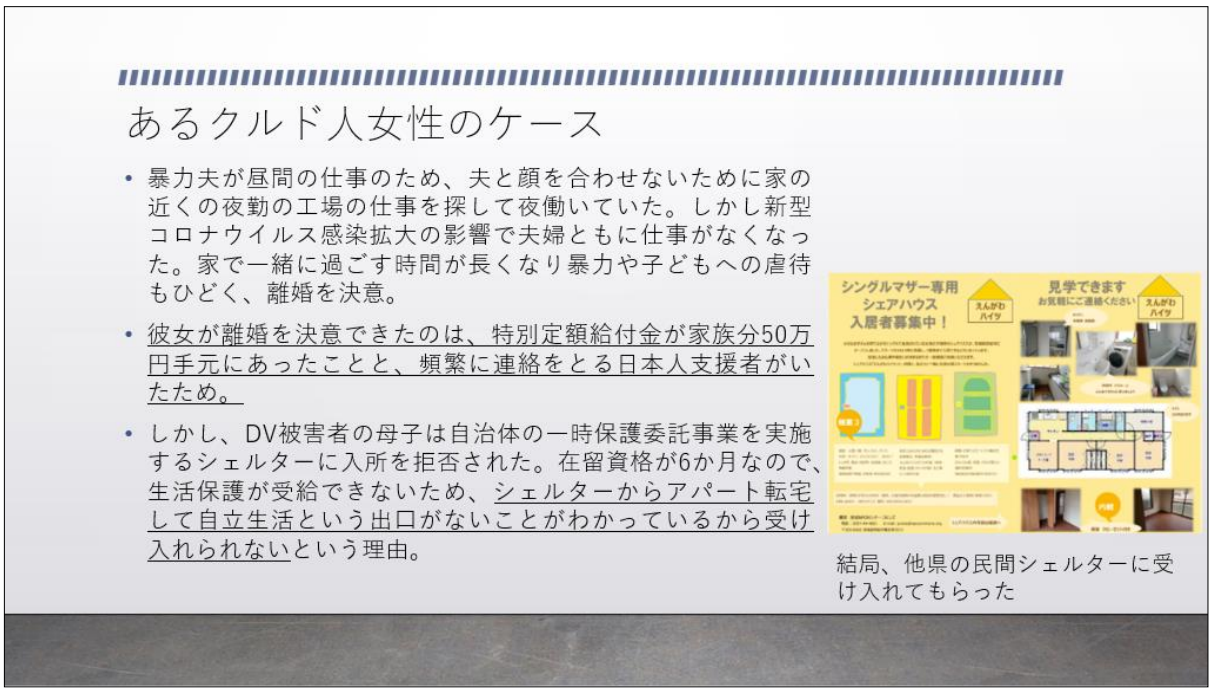



図 9

**移住女性に対する制度的な暴力の解消を！**

外国人女性にとっては、そもそも外国人であることにペナルティが課されているような制度がほとんどです。DV から逃れるためにも、誰かに依存していない在留資格が必要です。また、経済的にも制度的に移民女性をサポートするような仕組みが必要です。そのような仕組みが現状、全くないのが大きな問題です。

**コメント（三浦まり）**

稲葉さん、ありがとうございました。移住女性の問題は在留資格によって運命が分かれるということが、具体例から伝わってきました。公的支援が足りないという話をずっとしてきたわけですが、移民女性の場合はその公的支援にもなかなか繋がれないということがあるわけです。今までの話全てに通じるところですが、政策が不十分というだけではなく、制度自体が分断であるとか、苦痛・不安・生きにくさ、あるいは生存の危機をもたらしていることが、移住女性の置かれた立場からもくっきり見えてきたように思います。

保育

# 命とくらしと社会を支える保育労働（ケア労働）の評価を

町田ひろみ
保育士

皆様は「保育士」と聞いて、どんな印象を受けられるでしょうか。保育士が何を話すのだ？と思われてやしないかと、少し心配と緊張をしています。そんな風に卑下してしまうほど、保育士は社会の中で格の低い職業だと思わされてきました。「子どもを育てる」など誰にでもできる「女の仕事」だと言われ、女性の他の職種よりも 4 万円低く、全職種より 9 万円低い賃金（平均月収）だと蔑まれ、女性の中でも格の低い職業だと二重の差別を受けてきたのが私の認識です。ジェンダー問題を考える時に、保育士・保育園の職員の話も様々なところでできると良いなと今までも思ってきました。

## コロナ発生時の現場と処遇

今回はコロナ禍でのお話をさせていただきます。昨年の 3 月に一斉休校、初めての緊急事態宣言が出されました。保育園については登園自粛のお願いはされましたが、休園することなく、医療・介護やライフラインに従事する人たちを支えてきました。それと同時に保育園は三密を回避できない施設なので、子どもが重症化しなくても、保育士に感染すれば保育士は重症化するリスクがあるということ、子どもだけでなく保護者も出入りする施設だということを訴えてきました。

それでも子どもたちは重症化するリスクが少ないのだからということで、保育園職員は慰労金の対象にはなりませんでした。

遊具の消毒に本当に時間がかかり、業務内でできなかったり、消毒を優先すると事務仕事が終わらなかったり。そのほかにもコロナ対策での仕事量が増えたにも関わらず、コロナのために国から出された予算は、定員 19 人以下で 30 万円、59 人以下で 40 万円、60 人以上で年間 50 万円です。私の勤める保育園の定員は 132 人ですが 50 万円です。

初めての緊急事態宣言が出され子どもの登園人数が減りましたが、厚労省からは人件費に関わる公定価格は全額支給されました。それにも関わらず、出勤日数が少ないからと賃金カットをしたり、短時間職員は解雇する保育園もありました。

休暇は有給休暇を使うように言われ（2020 年）4 月から働いた職員は 10 月からの有給を先取りするように言われた保育園もあります。これは「誰でもできる女の仕事だ」と保育を公的から民間へ委託し、そして規制緩和へと企業の導入を進めた結果とも言えるでしょう。

### 常態化する加重負担と感染リスク

初めての緊急事態宣言の解除以降、再び宣言が出されても、一回目の時のような登園自粛のお願いはしないようにと厚労省からの通達があり、コロナ禍前と変わらない登園状況です。子どもの登園はコロナ禍前とは変わらなくても、コロナ対策で行う業務は増えています。しかし手当は何もありません。あるのは申請すれば保育園に支給される年間 50 万（もしくは 30 万か 40 万）だけです。私たちはいつ自分の保育園で感染者が出てクラスターが起きるかとビクビクしながら働いています。保育園で起きるクラスターが少しずつ増え、デルタ株の登場でますます聞かれるようになりました。

子どもに感染者が出ても子ども達の PCR 検査を進めないため、ダラダラと感染が続き、休園が 1 ヶ月続いている保育園もあると聞いています。厚労省は 2021 年 9 月 3 日、コロナ禍のために全面休園をしている保育園は 2 日の時点で 185 ヶ所､感染者は保育士が 5,229 名、利用乳児幼児者が 5,829 名と発表しています。保育園の休園に伴い、登園できない子どもはもっといることになります。

### 取りこぼされる存在としての「保育園」

東京の人数はわからないのですが、名古屋では 2021 年 8 月 27 日の時点で 42 園が休園し、3,800 名の子どもが登園できない状態です。しかし医療・介護などのエッセンシャルワーカーを守ろうという話が出るなか、保育は入りません。学校が始まる前になって「子どもたちを守ろう」の声は拡がりましたが、そこに入るのは学校教育です。学校が始まるから感染拡大が心配という声の拡がりに「保育園はすでに感染拡大しているのにそこは心配ではないのか」と感じた職員も多いと思います。また保育は置いてきぼりです。すでに感染が拡大している保育園ではなく、学校の感染対策ばかりがニュースに出てきます。医療も介護も学校教育も支えているのは保育なのに。2021 年 8 月 27 日、学校については「先生たちの定期的な PCR 検査ができるように」と、西村経済再生大臣が明らかにしました。校内感染のガイドラインの見直しもされるようです。でもすでに保育園のクラスターは始まっているのに、保育園への対策は何も出てきません。私たちはいつも、そのよう置いてきぼりをされ続けています。自治体によっては登園自粛を強くお願いし始めていますが、保育料日割り返還についての補償があっても、保護者への収入の補償や有給を使わず休める補償がありません。

その結果､「休んで欲しい保育園」対「休めない保護者」という構図が作られたりしています。本当に対決すべきは国です。保育園と保護者が一緒になって、国に要求していくべきです。それを気づきにくくしているのは「女の仕事だ」と保育者を蔑ろにしてきた今までの政治や社会の仕組みに原因があるのではないでしょうか。

私たちはもちろん、コロナに感染するのは怖いです。それでも保育園というのは社会を支える仕事だと誇りを持っています。

**全ての関係者を守るための切実な願い**

保育園は今、共働きの家庭はもちろんですが、様々な支援が必要な家庭を受け入れています。全ての「保育を必要とする家庭の子ども」をどんな状況でも受け入れたいと思っています。ですが、このコロナ感染症が拡大する中で、それを今の保育園の状況の中ですれば、保育園はパンクしてしまいます。今、本当に必要な医療・介護、ライフライン従事者の方々の子どもを受け入れられなくなるのを防ぎたい、そして感染者が出て休園になった時には、保護者の方の生活を守りたいなどと考えています。保護者の皆さんが仕事を休めるよう個人の申告で 100%の賃金が補償され、保育料が日割り返還され、有給を使わずに休める補償の制度化、保育園でコロナ感染症が出た時には保育園の特性を考えた PCR 検査の実施をお願いしたいです。

保育園というのはクラスごとに過ごすわけではありません。朝や夕方は他のクラスと合同でも過ごす生活の場です。ですから感染者となった人と関わった全ての職員と子どもの PCR 検査を実施していただきたいと思っています。もちろん定期的な PCR 検査も職員にしていただきたいです。三密を避けられない施設に働く職員として、コロナ対応特別手当も支給していただきたいと思っています。もちろん、消毒などにかかる人件費や事務費などのコロナ対策費も 50 万円では足りません。組合も保育の研究者グループも保護者団体も、今、声をあげています。

**社会を支える「保育園」**

私はこのコロナ禍ではっきりしたことが一つあると思っています。それは「女の仕事」と言われてきた保育園が全ての職業を支えているということです。つまり、社会を支えているのです。保育を守るということは社会を守るということだと思っています。このまま何の対策も持たずにいけば、保育も崩壊するのではと今とても危惧しています。

**コメント（三浦まり）**

町田さん、力強い発言ありがとうございました。保育園で感染が拡がっているのにも関わらず、ケアが軽視されているという状況、そして必要な政策についても力強く訴えていただき、ありがとうございました。制度が分断しているために、保育士と保護者が対立するような状況が生まれているという点も、「コロナ対策禍」であると言わざるを得ません。ケアを女性に押し付ける政治状況を変えていくことが急務であると実感しました。

障害

# 障害のある女性の立場から

佐々木貞子
DPI 女性障害者ネットワーク
DPI 障害者差別解消ピアサポート相談員

## 1. DPI 女性障害者ネットワークとは

DPI 女性障害者ネットワークは障害のある女性（以下、障害女性）のエンパワメントと優生保護法撤廃を目指し、1986 年にスタートした当事者中心のゆるやかなネットワーク組織です。現在は障害女性の被る複合差別を解消するため、施策提言や啓発活動を行っています。

私は視覚障害を持っています。二人の娘の子育て中、近隣の人々からの「眼が見えないお母さんが子どもを育てている！」「かわいそう。ご飯は誰が作るのだろう」という奇異な視線や態度に苦しみました。

「障害者は何もできない」という偏見と「母親が子どもの世話をするべき」「できない人は価値がない」という、固定的性別役割観への反発が私の活動のスタートとなりました。

## 2. 障害女性の複合差別とは

障害女性は障害者差別と女性差別を重複して受けるため、困難は掛け算のように増えてしまいます。現在の障害者施策にはジェンダーの視点がなく、一般施策は障害者の存在を想定しておらず、障害女性の課題は制度の谷間に零れ落ち可視化されにくいのです。

## 3. 私たちが障害女性の生きにくさを可視化！

2011 年、生きにくさに関するアンケートと聞き取り調査を行い、全国から 87 名の障害女性の経験を集め、並行して都道府県の男女共同参画基本計画と DV 防止基本計画を検証しました。翌年、その成果を『障害のある女性の生活の困難―人生の中で出会う複合的な生きにくさとは―複合差別実態調査報告書』として発行しました。

## 4. 障害女性の課題とは

生きにくさ調査では回答者の 3 割以上が何らかの性的被害を訴えていました。

性犯罪やハラスメントのほか、介助時必要以上の身体接触が不快という声も多く寄せられました。適切な介助方法を知らないか、知らないことをよそおっているのか、判断しにくく、拒否しにくいのです。

また、介助サービスの質と量は不十分で、施設や長期入院病棟、在宅サービスでも、入

浴や排泄時に異性介助が強いられる場合があります。

そして、就労は不安定で経済的自立が難しいのです。

このような状況は障害女性の弱みとなり、上司や家族、介助者からの性的被害を助長し、被害を訴えにくいことにもつながっています。

性と生殖の権利が否定されがちであり、旧優生保護法の下、十代で不妊手術を強制された回答者もいました。

他にも障害女性の妊娠・出産・子育てに周囲の理解がなく、医師や親族から堕胎を勧められたり、「子どもは生まないだろう」という医師の態度に深く傷ついた女性もいました。

本人が希望するか否かに関わらず、日常的に家事や育児、家族の介護を過度に負ってしまう傾向があり、従来の女性イメージに縛られ、自分を肯定しにくい等、様々な障害女性の課題が報告書から明らかになりました。

## 5. 新型コロナウィルス感染拡大の中で

平時の問題は災害時など、社会が危機的状況にある時、さらに増幅して現れることが多いと言われています。そして私たちはパンデミックという世界的な危機に直面してしまいました。

2020 年 4 月はじめ、メンバーや周囲の障害女性から、様々な不安や問題が寄せられました。

そこで私たちは、現在起こっている困難とともに、これから予想される困難、すでに起こっているであろう表面化されない困難をも想定し、4 月 30 日、「新型コロナウイルス感染拡大下における障害女性の権利と生活の維持に関わる要望書」を政府に提出し、下記の項目について適切な施策がはかられるよう訴えました。

要望の要旨をご紹介します。

① DV 被害者支援において、障害のある人への対応を充分考慮すること。

② 介助をはじめとする障害者の日常生活を支えるサービスは不可欠な支援として維持され、感染予防の徹底と介助者への手当を充実させること。

③ 障害・性別・年齢等の患者の属性により、検査や治療が左右されないよう、医療体制を整備・拡充すること。

④ 緊急事態下でもセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツに関わるサービスは不可欠であり、差別されることなく利用できるようにすること。

⑤ 新型コロナウイルスに関する情報はアクセシブルであることに留意し、情報格差をなくすこと。

⑥ 新型コロナウイルスへの対応やそこからの復興に関わる政策討議の場には、各分野の当事者を登用し、とくに複合差別の視点を持つ障害女性を加えること。

私たちはさらにより多くの障害女性の経験を集めようと、6 月 1 日、「コロナ禍／障害女性の声」のメールフォームと専用アドレスを開設しました。

詳しくは団体 HP <https://dwnj.chobi.net/> を参照していただきたいと思います。

## 6. コロナ禍での困難とは

さて、コロナ禍の障害女性の課題の中でとくに重要な点について考えていきたいと思います。

### ① 介助の脆弱性

障害者にとって日常生活を支える介助サービスは非常に大切な社会資源であることは言うまでもありません。日頃受けている介助が得られなければ、生活の質は著しく低下し、生命さえ脅かされることにつながってしまいます。

一方、介助は密を避けられないことも多いのです。

第一波の緊急事態宣言時、事業所から感染防止を理由にケア提供を止められた、利用時間を減らされたという声は、肢体不自由・視覚障害、知的障害の女性から多く寄せられました。しかし同じ状況の中、支援を提供し続けた事業所も少なくありません。この違いは何なのでしょうか？

「利用者の意向を尊重し暮らしを支える」という事業者本来の責務を遂行するか、別の方向を向いているかが分かれ道なのかもしれません。

厚生労働省令和 2 年 3 月 19 日事務連絡では、訪問系サービス利用者の継続的なサービス提供の重要性を訴えています[1]。

しかし、事務連絡に強制力はなく、コロナ禍で制度の不備と利用者の立場の弱さが浮彫となりました。

また、非正規の女性ヘルパーが家庭や本業の職場の事情で介助に入れないことが増えました。女性ヘルパーの不足は、障害女性が同性介助を受けにくいことにつながってしまいます。

さらに、介助の停止や利用制限は第一波の時だけではありません。第三波の中、ある脳性麻痺女性は介助の七割を担う事業所から「濃厚接触者となればＰＣＲ検査陰性であっても支援を停止する」と通告され外出ができなくなってしまいました。

### ② 閉ざされた中の人権侵害

ステイホームが求められ、施設や病棟は面会が禁止されましたが、閉ざされた場が安全とは限りません。これまでも施設や長期入院病棟ではしばしば虐待事件が起こっていま

[1] https://www.mhlw.go.jp/content/000613382.pdf

す。外部からの視線が届かず密室化すれば、さらに深刻な人権侵害が起こってしまいます。精神病院のクラスターの悲惨な現状が報道されていますが、氷山の一角に過ぎません。

また、家庭も密室化するのです。障害女性は収入や介助を家族に依存せざるを得ない場合が多く、家庭内での立場は相対的に低い傾向があります。普段から、障害のある DV 被害者は建物や情報のバリアにより相談へのアクセスがしにくく、シェルターなどにも入りにくいのが現状です。DV 相談へたどり着けたとしても、障害者福祉の窓口にたらいまわしにされ、加害者から逃れられない場合があるのです。障害者福祉には DV に対応する専門性はなく、施設にも被害者を護るセキュリティーはありません。

コロナ禍となり、DV や女性の自殺が増えたという報告がありますが、障害女性の現状を示すデータはまだなく、私たちも実態を把握できてはいません。

### ③ 医療への不安とトリアージの恐怖

第五波が猛威を振るう現在、医療現場は逼迫し、誰もが医療へのアクセスに不安を抱いていると思います。しかし、私たちは第一波時から、混乱する医療現場で診療を拒否されないか、障害を考慮した上での適切な治療が受けられるのか、療養中の介助はどうなるのだろうか等、不安と危惧を感じ続けています。

生きにくさ調査では、医療従事者が障害に無理解で不適切な対応を受けたという経験がいくつも寄せられました。

さらに現在の入院医療の体制では、障害者が入院しても、充分な介助は受けられません。入院中の重度の肢体不自由者が慣れた介助者によって付き添いを受けることは福祉サービスとして認められていますが、コロナ禍で病院の許可が下りません。

コロナでも他の疾患でも外傷でも同様です。病状によるのではなく、必要な介助が得られないために、入院中のベッドで寝たきり状態になっているのです。コロナ対応に追われ、一般病棟の人員配置が減らされていることも、患者へのケア不足に拍車をかけています。

さらに医療の逼迫はトリアージの議論を招き、私たちは恐怖を感じざるを得ません。障害者を劣る存在とみなす優生思想が根付いているこの社会で、治療に優先順位をつけるトリアージが行われれば、障害を理由に選別が進められるのではないかと懸念しています。

DPI 女性障害者ネットワークは 2021 年 2 月 9 日、「行政主導によるトリアージのガイドライン化推進の撤回を求める要望書」を杉並区長に提出し、東京都がトリアージのガイドラインを作成すべきという区長の発言の撤回と医療体制の充実を訴えました。

## 7. まとめに換えて

私たちは庇護を求めているわけではありません。本来持っている力を削がれ、社会の周

辺に置かれ、人として尊重されないことが問題なのです。

求めるものは、当事者の意志を尊重し、障害による社会的障壁を除き、一人の人間として当たり前に暮らすことのできる体制を充実させること。そしてそれは障害の有無にかかわらず、誰もが自分らしく生きられる社会へとつながっていくのではないでしょうか。

**コメント（三浦まり）**

コロナ禍において障がい者が多くの困難に直面したことを想像していましたが、今回佐々木さんより具体的な状況をお伺いすることができ、認識を深めることができました。生きにくさのみならず、トリアージの恐怖がいかにリアルなものであるのか、不安を超えた恐怖が伝わってきました。誰もが自分らしく生きられる社会をつくるには、障害による社会的障壁を取り除く意思を社会の側が示す必要があることを、改めて突きつけられた思いです。ありがとうございました。

**コロナ禍障害女性の生きにくさの経験**

※これは､2020 年 3 月から 2021 年 2 月にかけて DPI 女性障害者ネットワークが集めた、コロナ禍での障害女性の生きにくさの経験の一部です。

【1】 外出を自粛。自分のことよりも、介助者への感染が心配。自粛することは仕方がないが、期間がわからないことが辛い。（肢体不自由）

【2】 お米がなくなって以前から利用しているネットスーパーで頼もうとしたが、買占めのあおりで店舗に回しているためかお米とロールペーパーは注文できず、職場の友人にガイドしてもらい 昼休みに買いに行ってやっと手に入れた状況。（視覚障害）

【3】 コロナの感染拡大の中、ヘルパーの家事援助の時間数が少し減らされた。調理をヘルパーに手伝ってもらい自分で作るのだが､時間数が減り､麺類が多くなった。（知的障害）

【4】 副職で介助をしている介助者から「本職の会社から、副職でもしコロナ感染したら、即退職！」と言われたということで介助ができなくなったと告げられた。「コロナが落ち着いたら、また介助に入りたい」と言われたことは、救われた。（肢体不自由）

【5】 治療において障害による心身の特性が理解されるか不安。障害によって、薬の効き方などが平均と異なる場合もある。医療を提供する側も体制が整わなくなったときに、そこまでの考慮がなされるか不安。（肢体不自由）

【6】 今回のような病や､それに対する留意事項､診療機関の情報を入手するにも､情報アクセス面で困難が生じている。また､ようやく､緊急通報にも使える電話リレー

サービスを公共インフラとする準備が進められているところだが、現状では、非常事態で緊急通報することにも制約が大きい。自治体によっては、新型コロナウイルスに関する相談窓口として電話のみ､または電話と FAX のみで実施している。聴覚障害者も自宅に FAX を持たない人も多く、電話と FAX のみでは連絡することさえできない状況におかれる。すでに SNS による窓口を設けている自治体もあり非常に重要な取組である。（聴覚障害）

【7】 国による支援制度の情報がコロコロ変わってしまい、どれを信じてよいのかわからず、不安がとても大きい。（知的障害）

【8】 女性ヘルパーは家族の事情に左右されやすい。学校休校時にこどもの世話のためキャンセルが増えた。（肢体不自由）

【9】 持病に伴う月経過多、月経困難症がある。トイレットペーパーと生理用品が入手困難になった二ヶ月間は、不安と衛生維持が出来なくなるかもしれない恐怖が続いた。2 倍の出血量があるため購入制限をされると足りないが、障害を理由に優先手配されるわけでもない。トイレットペーパー、ボックスティッシュ、ポケットティッシュが尽き、しまいにはキッチンペーパーで代用したが、血液が十分に取れず、肌がかぶれ、買いだめしている人たちのことを憎む気持ちが沸いた。毎日感染リスクを抑えるため除菌に励んでいるが、ノーマスクの人が近づいてくれば避けなければならないのはこちらの方。ヘルプマークを押し退けて近づいてくる人も相変わらず多い。（難病）

【10】 感染リスクを口実に、2 週間にわたってケア提供を止められた。居住地の自治体はそのようなことは認めていない。障害者はいつなんどき、介護事業者様のお気持ちしだいで何をされるかわからない存在だと思い知らされた。（肢体不自由）

【11】 介助者の感染リスクが心配。知人の介助者が濃厚接触者となり、知人もその濃厚接触者として対応され、極力接触を防ぐため必要な支援も減らされたが、自分だったらと思うと本当に恐ろしい。（肢体不自由）

【12】 ヘルパー派遣が最低限に限られる、公共施設の閉鎖、コミニュニティバスの運行停止等で、外出の機会が減った。一人での外出は三密を避けることも困難。（視覚障害）

【13】 外に出なかったため鬱になり、ピア活動に出られなくなり、買物や入浴ができなくなった。（精神障害）

【14】 買った物を代わりにショッピングバックに入れてもらえない店が増えた。（肢体不自由）

【15】 雨の日、レインコートを着て電動車いすで歩いていたら、「障害者だから防護服を着ている」「コロナにかかってしまえ」と言われた。（肢体不自由）

【16】 元から使える社会資源、通院先、福祉サービスがないので大きくは変わらなかっ

た。（高次脳機能障害）

【17】濃厚接触を伴う介助を受けなければ生きていけないことで、介助者に負担を与えていることが切ない。三密の徹底が必須であれば介助してもらう自分は汚れたものであるかのように感じてしまう。感染流行が始まって一年になるが、この気持は変わってはいない。（肢体不自由）

【18】 子ども二人が保育園に通っている。自粛要請により、二か月弱家で見ていた。子どもを連れての外出が困難。以前からヘルパーを頼んでいたが、感染の可能性が高くなると思い利用しなかった。家族の協力はあったが、毎日本当に大変だった。現在登園しているが、少し咳や鼻水が出るだけで自粛を促され、子供を休ませることが多くなった。出産を控えているが、病院は家族であっても面会禁止。お産の立ち合いも一瞬しか認められていない。家事援助と同行支援サービスはコロナ以降、約一年利用していない。出産後は利用したいが、感染状況により利用できないことがあると、事業所から言われている。 移動支援も場所や時間によっては利用できないなど、コロナ以前より、さらに不便になったと感じている。母親学級や赤ちゃんの健診なども縮小、中止が多く、相談できる場も減っている。産後どのような生活になるのか、不安に思っている。 「じゃあ、なんでもう一人産むの」と思うこともあるが、「全ての大変さに勝る子どものかわいさだなあ」と感じている。（肢体不自由）

# おわりに

三浦まり
上智大学教授、グローバル・コンサーン研究所副所長

本稿は 2021 年 9 月 4 日にオンラインで開催したシンポジウムの記録である。10 人の登壇者には、当日のご発言をもとに、頂戴した質問への回答も可能な限り折り込み加筆修正を行っていただいた。改めて感謝を申し上げたい。

当時はコロナ感染の第 5 波の真っ只中にあり、東京などでは医療崩壊に直面し、「コロナ対策禍」を実感するなかでの開催となった。この間に女性たちが経験してきたことのすべてを網羅することはもとより不可能であるが、可能な限り多様な声を聞く場にしたいと願い企画をした。

10 人の報告から見えてきたことは、制度そのものの不備であり、公的支援が手を差し伸べる人の範囲のあまりの狭さである。そして制度があったとしてもその制度が周知されておらず、あるいは助けを求めてはいけないと思わされ、そこに申請主義の壁、ケア責任の壁、地域の壁などが何重にも重なり、当事者を追い詰めている。これらが「制度的フェミサイド」の背景を成している。さらには、ケアの軽視と女性への押し付け、セクシュアルリプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR）の未確立が相互に絡み合い、女性固有の問題を生じさせている点も浮き彫りになった。

ケアの軽視と女性への押し付けという点はコロナ禍によってこれ以上ないぐらいにその問題が明らかになったと思われるが、しかしながら、「夫セーフティネット」の幻想を政策決定者は今もなお保持している。フリーランスにも給付金が出るといった改善点もあったものの、十分な休業補償がないために子どもを保育園に預けざるを得ない女性たちがおり、しかし預かる側の保育園は介護施設と比べて慰労金は出ず、ＰＣＲ検査やワクチン摂取で優遇されることもなかった（一部自治体では独自の取り組みを行なった）。つまりは、女性たちがケアをただで（あるいは廉価で）引き受けることが自明のものとされ、さらには夫というセーフティネットがある存在だから更なる支援はいらないと言わんばかりの状況に置かれている。その夫がセーフティネットどころかＤＶ加害者だったらどうなるのか。身体的暴力以上に精神的な支配のＤＶが多いという事実は、多くのＤＶが潜在化していること、そして「夫セーフティネット」論を基軸に制度を設計することの暴力性を浮かび上がらせたのではないだろうか。

セクシュアルリプロダクティブ・ヘルス／ライツの欠落も女性たちに残酷な選択を迫ることになる。日本では自己堕胎罪がまだ刑法に残り、避妊、中絶、出産の費用が高いため、経済的困窮者などにはアクセスしにくいものとなっている。障害を抱えた女性には優生思想が残るなか、権利そのものが否定されることさえ起きる。（移住）女性の乳児遺棄事件が何度か報道されたが、このような悲劇が繰り返されるのは、妊娠させた男性の責任

を不問にし、経済的・社会的資源の有無によってセクシュアルリプロダクティブ・ヘルス／ライツの行使が大きく異なることによる。つまりは、制度的支援の「資格性」を欠いたり、支援につながるだけの社会的資源に欠いたりする場合に、「剥き出しの生」として生きざるを得ない過酷な現状がある。わたしたちの社会にそのような生を生きる女性たちがどれだけいるのか、社会はその存在にいつ気付くのか、どうしたら現場からの悲鳴を政治に届けることができるのかを考えさせられたシンポジウムであった。

2021-22 年の年末年始にはさまざまな支援団体が生活困難者に向けた生活用品の配布や相談会の実施などを行なった。「女性による女性のための相談会」も 12 月 25 日、26 日、2022 年 1 月 8 日、9 日に開催され、のべ 382 件の相談が寄せられた（実行委員会発表）。この相談会が実施された背景にはコロナ禍においては女性の相談が急増していること、しかし通常の相談会では女性が相談しづらい雰囲気があることから、「女性による女性のための相談会」が誕生した。2021 年 3 月、7 月に続く開催であった。私自身も 1 月 9 日にはボランティア参加をしたが、女性にとって安心して相談できる、ほっと息をつける場となっており、また図らずも女性運動や労働運動に関わる多くの方と旧交を温める機会にもなった。

安全な場というのはあらゆる人にとって必要だ。越年期間における野宿者支援を行なってきた「のじれん」などを含む渋谷越年越冬闘争実行委員会は「女性／トランスの方、寝場所あります」と掲げたが、この方針に対して Twitter 上で炎上する事態となった。もっとも、同委員会は数年前からトランスジェンダーの方に寝場所を提供しており、トランス包摂ポリシーは今回が初めてではなかった。近年広がるトランスフォビア運動に目をつけられてしまったが故に、悪意あるメッセージが拡散することとなった。この経緯は「trans101.jp はじめてのトランスジェンダー」サイトにてホームレス女性たちのグループ「ノラ」のいちむらみさこさんがインタビューで振り返っている[1]。

公的支援があまりに貧弱なために、それを補うかのように市民社会がさまざまな支援を広げてきたことには希望が見出せる。しかし、まだまだ足らないというのが実情である。現場から上がってきた要求を制度改善へとつなげ、何層にもわたる支援や厚みのある社会的資源を創って行くことが急務だ。そこで、グローバル・コンサーン研究所の新しいプロジェクトとして「コロナ禍における『現場からの声』アーカイブ」を立ち上げることにした。コロナ禍においてさまざまな団体が政府や自治体に送った要望書を集め、わたしたちの社会は何を求めているのかを可視化し、記録したいと思う。そのうちのどれが実現し、どれが放置されたのか。このことを問い直していくことで、ポスト・コロナの社会が多少なりともその以前よりも良くなることを期待したい。本プロジェクトは 2022 年より開始し、コロナ禍が収束するまで続ける予定である。（2022 年 1 月 25 日脱稿）

[1] https://trans101.jp/2022/01/13/1-12/

# 特集 2
# 連続セミナー
# 地域発：脱グローバル経済の未来

## はじめに

2020 年ににわかに広まった新型コロナ感染拡大によって、私たちの暮らしは大きく変わった。「With コロナ」、「新しい日常」と言われるようになってから、はや三年目を迎えている。コロナ禍にあって改めてグローバル経済に取り込まれた生産、物流、消費体系など、私たちの生活を囲んでいた状況が極めて脆弱であり、大都市圏の生活の難しさが再認識されただけでなく、地方と都市部との分断と格差が一層進んだということを私たちは改めて確認している。さらに、リモートの生活様式になりつつある中で、生身の人と人との関係が一層希薄なものになり、これまでとは異なる孤立感、閉塞感、生きづらさの中で生活しているという感覚が強くなってきた。

その一方、こうした状況が起こる前から日本では多くの地域発の試みが新しい社会と経済の在り方を模索してきた。グローバル・コンサーン研究所では、こうした問題意識のもとに 2020 年 11 月に「脱グローバル経済の未来を描く―新しい社会創生の可能性」というオンラインシンポジウムを開催した（報告書は当研究所のホームページに掲載中）。その時焦点を当てた脱成長論や地球の健康という視点にたち、引き続き地域発の実践に目を向けて、議論を続けたいという思いから、2021 年度は本連続セミナーを開催した。

地域主体で育まれてきた主体性に目を向けて新しい社会の創生のヒントを得たいというのが趣旨であった。一回目は、海でつながる地域づくりということで山口県の室積半島で始まったコミュニティ経済づくりについて現地女性たちの活動を中心に紹介した。二回目は都会と田舎の壁を超える里山コモンズというテーマで千葉県鴨川市にある釜沼集落の経験を伺いながら、都市に住む人々が農村に住む人々と交流を重ねることで、都会と地元の人々が地域の豊かさを共有、共感していくという「共感経済」をキー概念としてそのプロセスを学んだ。そして、三回目は、長年、自然と人間の関係性について独自の思想を展開されてこられた哲学者、内山節先生をお迎えし、そのお話を改めてじっくりと伺いながら崩壊しつつある社会関係性を見直して、私たちは今、どのような共同体を再生しようとしているのか、そしてそれは創造しうるのかを展望した。

以下は、各回のまとめである。

幡谷則子（はたや のりこ）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学外国語学部）

## 第 1 回
## 海でつながる地域づくり
## ～山口県室積半島のコミュニティ経済～

開催日：2021 年 7 月 6 日

登壇者：中野佳裕（早稲田大学 地域・地域間研究機構 次席研究員、
グローバル・コンサーン研究所客員所員）
木村明美（室積市場ん代表）
磯部登志恵（同副代表）

室積半島は山口県東部に位置する小さな半島である。『平家物語』の舞台となったこの場所は、古代より周防灘を船で往来する歌人たちに詠まれてきた。中世には近隣の上関と共に海上交通の要衝となり、江戸時代に入ると北前船の交易によって商業的にも繁栄した。歴史家・網野善彦はかつて、この地域の漁村が都市的機能を備えた港町であったことを指摘している[1]。1943 年の市町村合併で光市の一部になるまで、室積は複合的な自治機能を持った集落として発展してきた。

**写真 1 室積半島全景（中野佳裕提供）**

[1] 網野善彦『日本社会再考 ── 海から見る列島文化』ちくま学芸文庫、2017 年。

このセミナーではまず、室積出身である筆者が、同地域の歴史と環境について説明した。今日、地域づくりに関わる人には「土の人」「風の人」「水の人」の３つのタイプが存在すると言われている。「土の人」とはその土地に数世代暮らす土着の人であり、「風の人」は他所から移住をしてきた人である。地域づくりには両者の協力が不可欠だが、しばしば風の人は新しいアイデアを吹き込みすぎて、地元の慣習に馴れ親しんだ土の人との良質な関係の構築が困難になる。両者を橋渡しするのが「水の人」である。「水の人」は、他所から移住してきたがその土地に一定期間住み、ちょうど水が土にじわじわと浸透するように「土の人」と信頼を醸成する。「土の人」「風の人」「水の人」の三者がうまく繋がることで、内発的な地域づくりは芽生えてくる。

筆者の実家は江戸時代末創業の和菓子屋で、室積には家族七世代にわたり暮らしてきた。私にとって故郷の歴史とは、文献資料を通じて学ぶだけに留まらず、「土の人」として先祖代々語り継がれてきたものであり、自身の生活経験を通じて獲得したものである。筆者の報告では、室積や上関を含む周防灘沿岸島嶼部は、中世から近世にかけて海上交通によって発展したため、このエリアを理解するには「海から地域を見る」という視点が必要であると述べた。そして明治以降の近代化の歴史は陸中心の開発の歴史であり、その結果として海から地域を見る視点が相対的に後退していったことを指摘した。特に第二次世界大戦後に室積半島周辺地域が経験した開発問題として、近隣地区への工場立地の結果起こった公害（瀬戸内海の汚染)、上関原発建設計画によるコミュニティの分断、後継者不足と景気後退による地元経済衰退、高齢化・人口減少による地元の活力の衰退などがあることを、統計データを示しながら説明した。そしてこれらの複合的な地域開発問題と向き合いながら、内発的な地域づくりを模索してきた過去十年の様々な取り組みについて説明した。

続いて「室積市場ん」代表の木村明美さん、副代表の磯部登志恵さんからコミュニティ経済活動についての説明があった。木村さんは 20 年前に近隣の平生町から室積に移住した。2011 年からは漁港の近くで元漁師さんの家をリノベーションしたカフェ・レストランを経営している。地元に定住して時間をかけて溶け込んでいったという意味で、「水の人」である。磯部さんは室積出身の「土の人」で、長年光市議会議員を務めてきた経験から、地域再生について高い関心をもっている。

「室積市場ん」は 2020 年 3 月に地元の女性たち有志が始めたプロジェクトである。筆者の実家だった旧中野昌晃堂（2015 年末閉業）の店舗スペースをリノベーションし、毎週火曜日に地元の生産者が食料品や雑貨を販売する「火曜マルシェ」を運営している。木村さんは、このプロジェクトのきっかけとなったのは、2020 年 1 月 25 日に筆者が室積で企画したイベント「未来のまちづくり ── 人とつながる、自然とつながる、まちが変わる」であるという。このイベントでは、イタリアの経済学者ステファノ・バルトリーニを室積に招いて「関係の豊かなコミュニティづくり」について議論した。会場に偶然居合わせた

参加者の女性たちが集まり、「大好きな室積のために、何かを始めよう」とグループを結成したのが始まりである。

活動は新型コロナウイルス感染症の流行第一波の最中に始まった。木村さんは、この拘束条件のおかげで活動の方向性が明確になったと振り返る。というのも、数年前より旧中野昌晃堂を活用した地域再生プロジェクトについて地元の仲間たちと話し合っていたが、当初は地元の社会課題（買い物難民、空き家問題 etc.）の解決を優先しつつも、同時に国内外からの旅行者をターゲットにした「長期滞在型・体験型ツーリズム」の育成も構想していた。しかし感染症流行で人の移動が制約を受ける中、「地元の生活のニーズに応える顔の見えるコミュニティ経済づくり」に特化することが決まった。

既に数年前より、室積半島沖の牛島（うしま）では、地元企業によって海底湧水を利用する塩造り、塩と地元食材（海産物、農産物）を使ったレストラン経営（＊網元の旧店舗をリノベーションして利用）などが始まっていた。「室積市場ん」はこれらの動きと連携しながら、買い物難民問題と空き家問題という室積の二大課題の解決に取り組んでいる。

**買い物難民の解決。**毎週火曜日午前 9 時～12 時の 3 時間、旧中野昌晃堂の店舗スペースを利用して「火曜マルシェ」を開催。近郊の農家、漁師、カフェ＆レストラン経営者などが出店し、農産物、海産物、お弁当、総菜、その他生活雑貨を販売する。2020 年 9 月からは半島の別の場所で毎週金曜日に「金曜マルシェ」も開催している。半島は南北に長細いので、いくつかのエリアに分け、各エリアの高齢者が歩いていける距離で買い物ができるようにする工夫の一つである。

**空き家問題の解決。**副代表の磯部さんが担当しているこの事業は、室積半島の空き家物件を「室積市場ん」ウェブサイトで紹介し、移住希望者や長期滞在希望者に貸し出すマッチング事業である。「室積市場ん」は家賃の一部を手数料として受け取る仕組みである。

以上 2 つの活動を軸としながら、「室積市場ん」はその活動とネットワークを拡大している。2020 年 9 月には、旧中野昌晃堂の斜向かいにある旧金物屋店舗が、火曜マルシェ出店参加者の一人によって「ヒュッテ」という名前のお店にリノベーションされた。「ヒュッテ」では金物屋に残った多くの古在庫品を販売し、火曜日にはマルシェの会場としても使用している。2021 年 2 月には旧中野昌晃堂の向かい側にある元七福百貨店のスペースを利用して、光市島田地区の障がい者福祉サービス事業所「ものゆにば（monouniver）」が制作する様々な雑貨を販売している。また 2021 年 4 月からは、火曜マルシェとは別に「つづみ」という常設店舗も開設され、近郊地域や北陸の職人が制作した漆器、木彫り製品、藍染め製品、衣料品などが販売されている。

現在、室積には少しずつ変化が生じている。最大の変化は、毎週火曜・金曜のマルシェを通じて近郊生産者や地元住民たちが出会い、顔の見える関係で交流する機会が増えたことだ。さらに「室積市場ん」の活動に触発されて地元の漁港が魚市場でイベントを始めたり、別の場所でも古民家をリノベーションしたカフェが開店したりするなど、自発的に

様々な活動が立ち上がってきている。行政の補助金に頼ると「お金ありき」の地域づくりになってしまい、身動きがとれなくなる。「室積市場ん」の活動では、地元を愛する人たちが自分たちの創意工夫と社会関係資本を活用して事業を起こし、その活動がさらに新たな社会関係資本を生み出す好循環が生まれつつある。

この好循環の発生に重要な役割を果たしているのが、「室積市場ん」のメンバーたちである。室積は歴史があり、それが地元住民の結束力の強さとなって現れる一方、移住者を受け入れるには時間がかかる土地柄でもあると言われる。その中にあって、磯部さんのような「土の人」、木村さんのような「水の人」が、移住者と地元住民との間のネットワーキングを行う役割を果たしている。

オーディエンスとの質疑応答では、成功の秘訣として磯部さんは、「7 人のメンバーは全員女性ですが、日常生活が得意分野なのは女性なのかなと思います。男性、女性ではないのですが。でも、細かいところのちょっとした幸せを喜びと感じとれるのは、女性の方が得意なのかなと思います」と答えた。

室積には、江戸時代の頃から住民たちの共同作業で生活基盤を作ってきた「自治の文化」がある。「室積市場ん」の活動もまた、現代におけるコモンズ作りの一つであると言えるだろう。伝統職人業の家に生まれ育った筆者は、これまで常に手仕事の世界から現代社会における人間の生き方やコミュニティについて考えてきた。消費社会が過剰に発展した現代、世の中を見回せば、地域の風土に根差した生活やものづくりの文化を原体験として持っている人は著しく減ってきていると思う。室積の強みは、伝統的な生業を通じて手仕事の世界を知っている人がまだ一定数いて、その良さをわかる人たちが移住してきている点だと言えるだろう。ゆっくりでいいので、地元に暮らす人たちが楽しいと感じられる地域づくりが着実に進み、近隣の町と共に「海でつながる地域」を新たに描いていきたいと思っている。

中野佳裕（なかの よしひろ）
（早稲田大学地域・地域間研究機構／グローバル・コンサーン研究所）

# 第 2 回
# 都会と田舎の壁を超える里山コモンズ
# ～房総半島・釜沼集落の共感経済～

開催日：2021 年 11 月 6 日

登壇者：林良樹（NPO 法人うず代表理事、一般社団法人小さな地球代表理事）
　　下郷さとみ（ジャーナリスト）

## はじめに

第 2 回は、千葉県鴨川市にある釜沼集落の経験を引きながら、都市に住む人々が農村に住む人々と交流を重ねることで、都会と地元の人々が地域の豊かさを共有・共感していくというプロセスを学んだ。以下は NPO 法人「うず」代表で一般社団法人「小さな地球」の代表理事である林良樹さんとジャーナリストの下郷さとみさんとの対話形式での発言内容である。下郷さんはブラジルの民衆運動や、アマゾンの先住民保護区の取材を通して人と自然のつながりについて発信を続けている。鴨川市への移住歴も 17 年になる。

……

## 釜沼集落発の農村都市交流

**下郷**　釜沼集落は房総半島南部の鴨川市の西のはずれの中山間地にあります。このあたり一帯は、かつては大山村だったことから大山地区と呼ばれており、近年は移住者が増えています。移住者たちが釜沼集落を舞台に地域のお年寄りたちからさまざまなことを学びながら、農村と都市住民の間をつなぐ存在として、どのような活動を行って来たのか。まずそのあたりを林良樹さんに話していただきます。

**林**　僕は 1999 年に釜沼集落に移住して、子どもを 2 人産んで、育てて、暮らしてきました。鴨川は首都圏から 90 分で海も山もある。市の内陸部のここ大山地区は、棚田百選に選ばれた大山千枚田のある中山間地です。釜沼も、国内では珍しい天水棚田、つまり雨水だけで耕作する棚田の景観が広がる集落です。

でもここは課題だらけです。高齢化、耕作放棄地、後継者不足、動物の被害、空き家だらけ…。釜沼は 25 世帯あるのですが、住民の 90%は 70 歳以上です。日本全国を見ても、中山間地域が国土の 73%、農地の 40%、農家の 44%、集落の 52%を占めています。

そんな中山間地のひとつである、ここ釜沼集落の美しい風景は、千年をかけて作られた「いのちの彫刻」だと僕は思うようになりました。このような美しい風景を生み出す暮らしの文化を、里山暮らしの知恵を、僕は集落の長老たちから学んできました。

まず、この長老たちと始めたのが棚田オーナー制度です。地元住民、僕のような移住者、通ってくれる都市住民の 3 つの力をつなげて、お米を売る農業ではなくて体験をシェアす

る農業を始めました。1999 年に鴨川市が構造特区制度によって農地を都市住民に貸し出すことができる仕組みを作り、まず大山千枚田が棚田オーナー制度を開始しました。それに倣って長老たちと一緒に釜沼北棚田オーナー制度を始めたわけです。

みんながみんな移住しなくてもいい、遊びでもいいからとにかく農村に通ってもらおう。長老たちと一緒に日本の原風景をみんなで共有していこう。首都圏 3600 万人の地縁血縁を越えた「ふるさと」を作っていこう。そう考えて交流を続けていくうちに、この無名の集落に年間 1000 人の人が訪れるようになりました。そうすると 100 人に 1 人ぐらいは 2 地域居住や移住の希望者が現れてきて、空き家が出たタイミングで移住が進んでいきました。外国人の移住者も増えていて、今はアメリカ、イギリス、フランス、カナダ、オーストラリアの人が住んでいます。

企業との連携も始まりました。無印良品鴨川里山トラストという活動を 2014 年から始めています。環境保全を前面に謳うというよりは、楽しいことやおいしいこと、美しいことをみんなで共有していく。僕はそれでいいと思っているんです。この里山に都市住民が通うことによって、皆が日本の足元にある宝物を発見していきます。

2016 年に無印良品はこの棚田の一番上に棚田オフィスを建てました。設計はアトリエ・ワンの建築家の塚本由晴さんで、東京工業大学教授でもあります。新型コロナ禍の前でしたが、ここで無印良品が提案したのは、人が東京に集中するのではない働きかたとしての未来のオフィスです。つまり、「半農半 X（エックス）」のビジネスバージョンですね。1 階は農作業の休憩所となるあずまやで 2 階がオフィスです（写真 1 と 2 を参照）。

**写真 1　棚田オフィス（林良樹提供）**

**写真２　棚田オフィスの２階から美しい日本の原風景、棚田を見渡す（林良樹提供）**

無印良品とは「日本酒」という商品名の日本酒も開発しました。棚田の村にはお米しかないのです。しかも平地が乏しいので生産量は少ない。このお米に価値を付けてビジネスを作りたいということで、地元の酒蔵と連携しておいしい日本酒を生み出しました。これは無印良品の店舗で販売され、銀座店のレストランでも提供されています。

また、無印良品が鴨川市とまちづくりの提携を結び、年間１千万円の赤字だった直売所の指定管理者として経営を引き受けてくれました。非常に明るく洗練された直売所になりました。

大学との連携も始まりました。今は千葉大学の和田研究室、東京工業大学の塚本研究室、明治大学の川島研究室が釜沼集落に通っています。千葉大の和田先生は民俗学の専門家で、学生たちは社会学の研究に毎年通ってくれています。東京工業大学と明治大学は建築学科です。生きた学びの実践の場として学生たちが、毎週のように通ってきています。今、東工大は共同購入した古民家の改修を、明治大学は僕の家の隣の古民家の改修を一緒にやっています。学生たちは、村のすごく大きな力になっています。ただ古民家改修や研究をするだけでなく、村の共同作業の手伝いを通して、暮らしそのものが生きた学びとなっています。

## アマゾンの里山から学ぶこと

**下郷**　里山は自然と人とが出会う場所です。人間にとって自然は過酷で、人の力ではどうに

もならないことがある。ここは特に天水棚田の地域ですから、雨が降らなければ田んぼは耕せません。そんな人間の無力さを思い知らされる場所で知恵を働かせ、道具を作ったり、土と向き合ったりして暮らしを調えていく。里山とは、そういう知恵を受け継いできた場所です。でも、知恵って生きたものだから、一旦途絶えてしまうともう二度と学べません。だから、自身の身で受け継いできた最後の世代である長老たちから学ぼうということで、やってきたんですよね。

私は、NPO 法人熱帯森林保安団体（略称 RFJ）という NGO に協力して、2015 年から毎年、支援プロジェクトフォローアップのためにアマゾン先住民族の村を訪問しているんですけど、現地ですごく強く抱くのは「ここも里山だ」という感覚です。集落があって、その周りに焼き畑が、さらに外側には原生林がある。人の暮らしのある場所とジャングルの間には人の手の入った畑と回復した二次林が広がっていて、その姿がまさに「里山」だなと感じます。そして主要な村には今は衛星インターネットがつながっていて、彼らはテクノロジーを活用しつつ、社会に向けて発信しています。

私は両方の里山を行き来しながら、私たちと同様にアマゾン先住民族もまた、この同じ地球で現代という同じ時代に生きる同時代人なんだ、同じことを模索しているんだな、と実感するのです。人間である私たちは自然とどのようなつながりを持っていけばいいのか、持続可能なあり方をどう作り出していくのか、という共通する課題を生きている。

アマゾンでは、グローバル経済のもとで、大規模農業開発などのために森林破壊が急速に進行しています。そんな中で先住民族は、自給自足をベースにしつつ、どう外とつながっていきながら、持続可能な自立経済をどう作っていけばいいのかを模索しています。単純な「昔に戻れ」ではなくて、伝わってきた知恵を活かし、アイデンティティを守りながら、今の時代にどのような姿を創造していくのか。その重要性は、日本の私たちにとってもアマゾン先住民族にとっても全く同じだと思っています。

**林**　僕たちの暮らしがグローバルに地球全体とつながっている時代です。気づかないうちに僕たちの暮らしが地球の環境破壊に加担しているのに、地球の裏側のことまでは見えないようになっている。けれど、こういう農村に暮らしていると、それがすごく見えるんです。そのことをみんなが意識したら、消費行動や暮らしが変わってくるのではないか。この農村に都市住民が来ることによって、社会のマイナスの面を発見するきっかけになるんじゃないのかなと思っています。そして実際にそれが起きているんです。年間を通してお米作りに参加して、雨が降らないから田んぼに水がたまらないとか、人間の力ではどうにもならないんだっていうことを現代人が体験することは非常に大きな気づきになると僕は思います。

### 古民家再生プロジェクトと里山コモンズ

**下郷**　次に「都市農村交流の発展型としての里山コモンズへ」ということで、今現在動いて

いるプロジェクトについて林さんからお話を頂きます。農村における活動は土地と密接に結びついていますので、土地を所有していない私たち移住者には限界がどうしてもあります。林さんのさらなる活動発展のきっかけとなった、とても大きな出来事がありましたね。

**林**　2 年前の 2019 年 9 月 8 日に房総半島を襲った大型台風 15 号です。風速 50m が釜沼集落を直撃しました。僕の家も被災しました。僕の家は借家の古民家で、屋根のトタンは吹き飛び、窓ガラスは割れて家じゅうがめちゃくちゃになりました。こんな大きな台風が房総半島を襲うのは長老たちも初めてだと言っています。気候変動の影響は、農業をやっているとひしひしと感じます。でも次の日、裏山に登ったら、この里山とこの茅葺風景が本当に美しくて、感動してしまいました。

以前は茅葺の上にすっぽりトタンが被さっていたんですね。台風でトタンがベロンと剥がれて、その下に隠れていた茅葺が現れた。茅葺の古民家だというのは知っていたんですが、トタンでカバーされていたのであまり意識して暮らしていなかったんです。でもこの台風がきっかけで、中世が現れたんです。茅葺職人は、このトタンのことを缶詰と呼ぶそうです。まさに中世が缶詰のように保管されていた。これはある種、チャンスだなと思いました。循環型のシンボルである茅、そして茅葺作業におけるコミュニティの結（ゆい）、こういったものをもう一度復活させることができるんではないかなって。衝動的にこれを復活させたいって思ったんですよね。

でも、集落に 2 ヘクタールあった茅場はすでに失われ、コミュニティも高齢化し、房総半島にいた最後の茅葺職人はすでに引退し、全てが失われた地域です。でも僕はできない理由を探すのではなくて、できる理由を探していこうと思った。そして茅葺の再生計画をきっかけに、「小さな地球」というプロジェクトを始めました。今まで棚田の活動に年間 1000 人の人が通ってきてくれた、この関係人口の人たちの中から、茅葺の復興を手伝う人たちが現れたのです。

**写真 3 現れた茅葺き（林良樹提供）**

**写真 4　「現代の結」茅葺屋根を再生するために行われた（林良樹提供）**

### クラウドファンディングと茅葺き合宿

それから、台風と同時期に集落内に出た 3 軒の空き家をすべて引き継ぐことにしました。うち 2 軒には棚田に通ってきていた友人たちが移住してくれました。そしてもう 1 軒の古民家 ── これは元村長の立派な古民家ですが ── は、裏山に棚田、畑とあり、その農地ごと全部売りに出されましたが、1 年かけて寄付金を集めて去年の夏に購入しました。それをさらに 1 年かけて、地域の資源を使ったゴミの出ない建築というコンセプトの「土に還る家」として、東京工業大学の塚本研究室と一緒に丁寧にリノベーションしました。竹林で竹を切り竹小舞を組んだ骨組みを作り、そこに田んぼの土と藁を混ぜて練り発酵させた土藁を入れて壁を塗りました。解体して出た廃材でカウンターを作り、裏山の竹でランプシェードを作り、里山にある資源を使う暮らしをもう一度みんなで作っていきました。今年の春に飲食営業の許可を取りカフェを、夏に宿泊営業の許可を取り宿泊ができるようになりました。

ここでは awanova というオーガニックマーケットを新月の日に開催しています。地域の仲間たちが生産者として、つまり農家であったり、お菓子を作る人だったり、コーヒーの焙煎家だったり、いろんな仲間が月に 1 度のマーケットを開いています。あわ焼と言って、田んぼの土で陶芸をしている西山光太さんの作品もあります。彼とも連携して、棚田オーナー

制度や無印良品鴨川里山トラストのイベントでは自分たちでマイぐい呑みやマイ茶碗を田んぼの土で作っています。今年の春には棚田ファッションショーも開催しました。これは、エシカルファッションデザイナーの鈴木ひろみさんという方がこの活動に賛同してくれて実現しました。地元のおばあちゃんたちも来て楽しんでくれました。服も文化も、生きる力、喜びを与えてくれる。僕たちは棚田の村で新しい文化を作りたいと思っています。宮沢賢治の農民芸術のように、これはつらい労働ではなくて、美しいことなんだ、楽しいことなんだって、そういう新しい文化を作りたいです。

**写真５　「古民家したさん」で毎月開かれるオーガニックマーケット** awanova（**林良樹提供**）

この「土に還る家」として再生された古民家には「古民家したさん」という名前がつけられましたが、僕個人の所有ではなくてコモンズとして、コミュニティの所有にしようと考えました。そのため、「小さな地球」という一般社団法人を作り、その法人の所有にしたんです。先程、アマゾンの先住民族のお話がありましたが、僕は若い頃アメリカの先住民スー族の村に滞在したことがあって、非常に影響を受けました。スー族の人たちは国家や所有という概念がなかったんです。君のものはみんなのもので、皆のものは君のものだよと教わりました。僕は、もう一度この大地を、家や山をコモンズにして、地球に返そうと思っています。僕が死んでも、この広大な日本の原風景や共同購入した土地は、これに価値があると考える

コミュニティが引き継いでいく。これは一つの大きな社会実験でもあると思っています。

本当に多様な人たちが基金を拠出してくれました。僕たちは、この「古民家したさん」というコモンズを一つの舟に見立てたんです。今の社会は持続不可能なので、持続可能な社会という未来に向かうこの日本の原風景を一つの舟に見立てようと。このビジョンに賛同するいろんな人たちが協力者としてこの舟に乗って漕いでくれました。

茅葺再生も始まりました。つい先日、茅葺合宿が終わったばかりです。2 年前の台風で被災した時に、僕は茅の声を聞いたような気がしたんです。「循環のシンボル、茅葺が残っているというのは、僕たちの社会はまだ間に合うんだよ」って。昔は村の結（ゆい）によって行われていた茅の葺き替えを日本中に呼び掛けて現代の結を作ろうと思いました。そのためクラウドファンディングを立ち上げました。日本中から茅葺合宿に集まってくれました。2 週間の合宿で、延べ 200 人以上です。デンマーク人やドイツ人、韓国人もきてくれました。グローバルな現代の結によって人が集まり、資源はローカルで循環させるという、新しい社会の小さな芽を見るようでした。これは、ただ屋根の再生だけではないと思っています。人と人とのつながりの再生であり、社会の再生であり、人間の再生であると思っています。しかも参加者の半分以上は若い女性でした。女性がどんどん活躍する時代だとすごく感じています。合宿には、神戸で株式会社「くさかんむり」を営む人が協力してくれました。日本のトップクラスの茅葺職人ですがまだ 40 代なんです。海外の茅葺職人とも交流する非常に視野の広い人で、この活動に賛同してくれました。

今後どぶろく特区も取ろうと思っています。敷地全体は森の幼稚園として子どもたちに開放しています。また、コロナ禍で移住希望者がすごく増えているので、移住者のための住宅として里山長屋も計画しています。空き家になった「古民家けいじ」には、活動に賛同した赤ちゃん連れの若いご家族が横浜から越してきて、循環型の農園と 2 地域居住の拠点としてタイニーハウスビレッジを作っていこうと一緒に計画しています。もう 1 軒の「古民家じいだ」には和太鼓グループ TAWOO（タヲ）のメンバーが移住してくれて、ここで太鼓の里を作っていこうと計画中です。こうして多岐に渡る活動が始まりました。

今、日本中の地方が疲弊しています。地方を再生していくには、都市の力を借りていくことが僕は非常に重要だなと思っています。そしてみんなで成長から成熟社会へ、という時代を迎えたいと思っています。他の国々から収奪するのではなくて、足元にあるものを活かしながら、人と人、人と自然、都会と田舎、暮らしと社会、わたしと地球、そういったものをもう一度つなげたいと思っています。近代社会が分断させてしまったものをもう一度つなげたい。昔に戻るのではなくて、新しい未来を作りたい。そして暮らしと社会に「小さな地球」を表現したいと思っています。それは循環です。人の循環であり、資源の循環であり、経済の循環であり、都市と地方の循環。そういう循環を僕らは暮らしと社会に表したいと思って一般社団法人の名前を「小さな地球」と付けました。

これは誰か特別なリーダーがやるのではなくて、皆一人一人に役割がある。一人一人が当

事者であり、主役であり、リーダーであると思っています。僕は一応この会の代表ですが、リーダーではない。みんながそれぞれ自分のやりたいことを自分らしくやる。そういった視点で生きれば、すべての人がアーティストだと僕は思います。自分の人生を通して、生活を通して、生命を通して、より良い人生とよりよい社会を創造することができると思います。僕はそれを棚田の村でやろうと思っていますが、東京にいる人は東京でもできるし、ブラジルにいる人はブラジルでもできるし、どこでもそれはできる。そういう一人一人の暮らしからはじまると思っています。

**人間と自然との関係を見つめ直す**

**下郷**　近代になって村の景色がめまぐるしく変わっていったわけですね。里山に暮らしていると、人間社会の価値観が移り変わっていく速度と自然が時間を刻む速度がいかに食い違っているかをすごく実感ます。例えば、木が芽吹いて育つには 100 年、200 年、樹種によっては 1000 年とかの時間の流れ方があるわけですよね。

長老たちの話を聞くと、昔は村があり、その裏手に里山が広がり、茅や薪を取ったり、炭を焼いたり、落ち葉を集めて堆肥にしたりして山に人の手が常に入り続けていた。それが燃料革命の到来で薪や炭の需要がなくなってしまった。高度成長期には製紙会社がパルプ原料を買い付けに来て、里山の広葉樹を皆伐した。戦後の杉の拡大造林政策でも広葉樹の森を杉の植林地に変えた。また、この地域一帯では柑橘類の栽培が奨励されて、やはり山の斜面の広葉樹林を切って柑橘栽培に切り替えた。でも、そうこうするうちに国は政策転換して、木材の輸入自由化、オレンジの輸入自由化に踏み切った。安い物が外から入ってくるようになって、ミカンも国産材も売れなくなってしまったと。

いま山を歩くと、杉植林地の中にまで竹が侵入して荒れ果てていたり、真っ暗な藪みたいな森の中に古いミカンの木が立っていたりするのを見ますが、現代の人間社会の価値観の変化って、すごいスピードじゃないですか。でも自然って、そういう人間の時間のリズムと全く違う次元で時間を刻んで生きているわけですよね。

人類の目まぐるしい価値観の変遷の中で、自然に手を入れて傷つけて、はい次の価値観がやってきた、で、また傷つけることを繰り返してしまい、自然が回復する速度に全然追いついていない。人間の価値観で使い捨てしてはいけないものまでを使い捨てし続けてきた。その矛盾は溜まるいっぽうです。こうしたやり方はすでに破綻しているということはみんなわかっているわけです。まさに今イギリスのグラスゴーで COP26、気候変動の国際会議が開かれていますけれども、見直さなければいけないということが、ようやく言われている。私たちもまた生物として、自然がなければ生きていけない。私たちが刻む時間のあり方を考え直さなければ、私たち自身がそれこそ生き延びていけないのではないかということをすごく感じています。

さらに、一極集中の問題があります。例えば東京という大都市に富も情報も人もすべてが

集中していく、お金がつぎ込まれていく。地方は衰退していく。地方の文化も衰退していく。でも人も文化も多様な存在であるはずで、主流の一極だけに集中すればいいということではない。そうではなくて、色んなまぜこぜな世界を見つめ直さなければいけないんじゃないかと思っています。

アマゾンの森林火災の問題が日本でも盛んに報道されましたが、アマゾン熱帯林の破壊の要因は穀物栽培をはじめとする大規模農業開発や地下資源開発です。日本もブラジルから大豆やトウモロコシ、アルミや鉄をたくさん輸入しています。アマゾン先住民族の大長老、ラオニが私に言った言葉が忘れられません。「日本はあんなに小さな島国だから耕す畑もないのだろう。だから遠いアマゾンの森を壊してまで作る大豆が欲しいんだね」とラオニ長老は言いました。でも毎回アマゾンを訪問して日本に帰国して、鴨川の村に戻るたびに、見回せば耕作放棄地がたくさん広がっている風景が、荒れた里山の風景が待っているんです。

そして同時に思うのは、日本の里山の大地の豊かさです。アマゾンと言えば世界で最も生態系の豊かな場所というイメージあると思うのですが、土壌はひどく痩せていて、森を壊せばどんどん砂漠化してしまう。いまアマゾンは乾期には気温が 50 度、湿度が 10%台になるほど乾燥化が進んでいます。そういうところから帰ってきて鴨川の里山に立つと、穏やかな気候、豊かな土壌と水があり、大地に何を蒔いても実りがある、こんなに豊かな土地に耕作放棄地が広がり、輸入した方が安いという理由で海外から食料を輸入する、その限界が来ていることをひしと感じます。

では、私たちはどんな社会が欲しいんだろうか。林良樹さんの話にあったように、自分の人生をどんなふうにデザインしていくのか、どんな生き方がしたいのかということを考えたい。安さや効率を第一にするならば、日本の農村は見捨てて、すべてを都市に集約させて、必要なものは海外から全部輸入すればいい。でも、それでいいのか。私たちは腹が膨れさえすればいいのか。そうじゃないですよね。それで私たちは幸せなのか。生きることは文化であるし、効率や経済の指標ではかれるものではない。そういうことをすごく感じています。

**林**　人生の豊かさとか、暮らしの中にある美しさだとか、人間らしい喜びだとか、そういったものが、この村にはあるんです。この村はすごく美しいんですよ。この美しい景観は原生の自然ではなくて人間が手を入れた自然です。そこに美しさを感じているし、その美意識は、たぶん世界共通だと思う。この地域は外国人の移住者も多いのですが、「この村は歩いているだけで物語を感じる」と言われます。そういう美意識は、僕らは長老から教わったんですよね。長老たちが行ってきた田畑の管理や道具の管理は、僕にはアート作品のように思えるんです。無名のお百姓さんたちが培ってきた美意識、それこそが僕は文化だと思っています。

僕はそういったものを引き継いで、現代の人に翻訳しながらお伝えしていきたい。循環型の暮らしが進んでいけば、日本の風景が美しくなり、その風景を見た人は気持ちが豊かになって、さらにそういう場所が広がっていく。そうすることで社会は持続可能へと、収奪型か

ら循環型の社会へと変わっていって、そして地球全体が平和になっていく。そういうビジョンを僕は持っています。ここは棚田の小さな村ですけど、ここでの活動が広く社会や世界にまでもつながって影響を与えることができると僕は思っています。

市長や知事と対話する機会を持つこともありますが、ここの課題を共有して一緒に解決していきたいです。特区制度を活用し、法律を変えていくこともできると思っています。法律は僕らが豊かに生活するための一つの道具なので、皆で知恵を絞ってやっていきたい。行政や大学や企業、それぞれ得意分野が違う人たちとつながることで、新しい化学反応が起きると思っています。大きな課題を小さな暮らしの現場から一つ一つ小さな答えを見つけていき、そして実現して、それを広げていきたいし、それができる時代だと思います。

**以下、Q&A より**

**昔に戻るのではなく、新しい共同体を作るという意味**

**林**　古い村社会は窮屈なところもあって、たとえば村の寄り合いでは女性に発言権がないというか、女性はほぼ発言しない。相変わらず男性社会でタテ社会。これからは女性がどんどん発言して、地域づくりに参加できるような、オープンなコミュニティになっていけばいいと思っています。僕のやっていることは開かれた場作りの活動ですが、保守的な村にはなかなか他者が入れないところはあります。でも僕のような都会と田舎をつなぐパイプ役がいれば入ることが可能になります。村の共同作業も今は大学や都市住民と一緒にやっていて、村の草刈りにも大学生たちがしょっちゅう手伝いに来てくれます。そういう意味では、ここはコモンズとして守られる、共有されることによって村も守られるし、都会の人にとっても救われる場所になっている。今回の茅葺合宿もそうですけど、新たな共同体の意識、価値観、豊かさを共有するという点で、新たな共同体が生まれているという側面があります。

なお、伝統的な生業の根本にある生活文化を引き継ぐ基盤の大切さという点では、ここは棚田の村なので基本は稲作で、それは変わらないです。四季折々の営みとして 1000 年来続く営みがベースです。それを引き継ぎながら、中身や関係性は変わっていくという感じでしょうか。

**外部から学者や専門家が関わることに対する現場の期待**

**林**　僕は現場のど真ん中にいる立場の人なので、外から色んな専門家が来て、僕の伝えられない表現を学者の人が専門的な表現で社会に提案してくれることで、一緒にここの価値を社会で認めてもらえるようになる。そんなことをしてもらえると助かります。

**下郷**　この場で何をするか、何を学問するのかというのが、ここに通って来られる方々の目的だと思いますが、通うプロセスそのものにもすごく意味があると思っています。それは私たちのような移住者が感じて学び取ってきたこととも重なります。観光客として遊びに来

るのと暮らすのとでは、まったく違いますよね。その中間に位置する、つながりを持った場所に通うという、そういう立場もあるわけで、そこから見えてくるものもすごくあると思います。

例えば関東大都市圏から房総半島南部の方に来るにはアクアラインで東京湾を渡ってくるわけですけれども、高層ビルが湾岸沿いにワーッと建ち並ぶところを抜けて、アクアラインを通って房総半島に着いたとたん、丘陵が広がり、里山の風景が広がり、荒れ果てた竹藪なんかも広がっている。そして、山がごそっと半分削り取られた山砂採取場が車窓の両側に次から次と見えてきます。

都市を建設するには砂や土が必ず必要で、羽田空港の拡張工事や東京湾の埋め立てにも大量に使われている。ではそれはどこからきているのか。東京という町は房総半島の山を削って作られているんだということの実感は、暮らしてみて初めてわかる。じゃあその山を売り渡した人は、どんな事情で、どんな思いで山を提供したのか。そういう苦しい事情や思いは、つながりを持った場所に通い続けることでわかるんです。

単に頭で理解するのではない、肌感覚で分かる。頭だけで勉強していると、物事をズバッと裁いてみせるみたいな思考に陥ってしまいがちだと思います。例えば、開発か保護か、さあどっち、みたいな単純な二項対立的な考えに陥ってしまいがちです。そうではなくて、まずとにかく見る、肌で感じる、矛盾だらけのさまざまな事情をまず自分の中に落とし込んでいく。そこから新しいものが生まれてくるのではないでしょうか。だから都市農村交流や大学の学問を通して農村に通ってきてくれる人たちが、「通う」というプロセスの中から何を学ぶかということも、すごく大事ではないかと思います。

**林**　大学の先生がここに通うことで、先生自身が変わっていっている。先生が少年のように子どもにかえって、学生たちも 1 年通って、僕人生変わりましたって言います。自分たち自身が解放されて、みるみる変わっていく。

このほか、エネルギーのこともやりたいと思っています。今は薪とか炭ぐらいしか作ってないですけど、小さなエネルギーに取り組みたい。一つはソーラーシェアリングです。畑に太陽光パネルを設置して木漏れ日の下で作物を作り上で電気を作るという仕組みですが、休耕地への設置を可能性として考えていて、ソーラーシェアリングの会社の人と今、意見交換をしています。さらに、高齢者の分野。今、東工大と一緒に里山住宅を計画していますが、将来は高齢者のためのデザインも取り入れていきたいと考えていて、将来は僕もそこでお世話になろうかと思っています。暮らしの中で人生の最期を全うする、そういう場所を作っていきたい。福祉と教育、そしてエネルギーを、たとえ全部ではなくても、この小さなコミュニティでできるような仕組みを将来に向けて考えています。

**茅の再生の課題と伝統的職人の育成**

**林**　この茅葺プロジェクトはとりあえず 3 年計画ですが、10 年くらいかけて、かつてあった茅葺きの結の形を復活したいです。昔、ここの村では 25 世帯が協力して毎年 1 軒の葺き替えをしていたと長老から聞きました。関東エリアでそういう 25 世帯ぐらいのネットワークができれば、そこで現代の結を作ってお金がかからずに茅葺屋根を維持することができる。やってみたい、茅葺を学びたいと言っている 20 代の若者が何人もいて、女性も何人もいます。茅場も残っているところがあり、やりたいという結のネットワークもある。だから、これは夢物語ではないと僕は思います。今回の茅葺合宿は、本当に学びたい人は来てくださいというスクールにしたんです。一緒に職人も育て、ネットワークも育て、茅も育て、こういう文化を育てていこうと僕は思っています。

茅葺合宿では、こんなことを言ってくれた女性がいました。「茅葺の再生だけではなくて、人と人とのつながりにすごく救われた、だから人間の再生だったんだ。近代は全てが効率性で、お金で解決して、産業界にすべてを任せてすればいい、それで成長させて経済を回してきたけれど、捨てちゃいけない物まで捨てちゃった。それをもう一度この茅葺合宿で思い出しました。」

……

**おわりに**

景観は素晴らしいが里山には課題が山積している。それを一つずつ解決しながら新しい未来を展望する。台風一過、「缶詰」にされていた茅葺が林さんに示したのは、効率性を優先させずに、共同体での時間や自然との関係にある価値の大切さであった。こうした価値を理解する様々な人々との関係を育てることが里山の保全にもつながる。農村都市交流についても、「都市の消費者の顔を農村に見せに行く」（下郷）という動きも必要で、そうした顔の見える関係性を作る場として里山コモンズとしての古民家再生プロジェクトがあった。

林良樹（はやし よしき）（NPO 法人うず代表理事、一般社団法人小さな地球代表理事）
下郷さとみ（しもごう さとみ）（ジャーナリスト）

# 第 3 回
# 内山節 講演会
# 「現代的共同体のデザイン」
# 講演録[2]

開催日：2022 年 1 月 19 日
講演者：内山節（哲学者・NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

## 1. はじめに

群馬県の上野村という山村にも家がありまして、上野村と東京を往復するようになって、もう 50 年くらいになります。今日は共同体とは何か、これからどうあったらいいかという角度で話をさせていただきます。

この 2、30 年の間に共同体への関心はずいぶん高まってきました。以前は農山村などではいかに共同体を解体して、市民社会を作るかというような議論が中心だったのですが、いつの間にか共同体をどう守るかという議論に変わってきています。都市部でも、新しい共同体が作れないかという問題意識をもちながら、地域活動などをやっている方が大変多くなったという気がします。それがなぜ起きてきたかというと、今日は結構格差社会ですから、生活が大変な方も結構たくさんいらっしゃるんですけど、一応生活のほうはそれほど苦労してないという人間の場合でもですね、何となく自分が生きているという存在感が薄くなってきたというか、日本というシステムの中で振り回されているような感じから生まれてきたように思います。経済というシステムの中で、あるいは世界というシステムの中で振り回されているような感じでもある中で、もう一度存在感のある生き方を回復したいという気持ちが広がってきているのではないか。どんな関係を作っていったら存在感のある生き方ができるのかという思いが広がってきているのだろうという気がしています。関係の中には、精神的な関係も、身体的な関係も、霊的な関係もある。霊的関係というのは、精神的でも身体的でもないが、何かつながっている世界、そういうものを司るような捉えどころのないもの、という意味でここでは話をしてみようと思います。

## 2. 共同体とは何か――過去の共同体論の誤り

最初に共同体とは何かということを振り返っておこうと思います。19 世紀にヨーロッパで出て来た共同体論、それを代表するのがテンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』という本だったと思います。ゲマインシャフトを共同体、ゲゼルシャフトを市民社会と

[2] 2021 年 1 月 19 日の内山節先生の講演内容をもとに幡谷則子が編集した講演録。最後の項には、講演後のディスカッション内容の一部を反映させている。

いう風に大雑把に訳してしまえなくもないのですが、テンニエス自身はもう少し複雑な意味合いでこの言葉を使っています。ゲマインシャフト的なものが解体されて、ゲゼルシャフト的なものに歴史は移行するという。ただし、テンニエスは、ゲゼルシャフト的なもので社会が完成すると思っているわけではなくて、ゲゼルシャフト的な社会もまた問題点があり、次の段階としては、両者を融合させたような新しい社会ができていくべきだという視点です。といっても共同体とか市民社会とかを歴史の発展論の中で語ったというのが 19 世紀的だと思います。

20 世紀になると、共同体論でもこの 19 世紀的な理論を引きずってきたものがたくさんあって、日本では代表的なものとして大塚久雄の『共同体の基礎理論』という本が戦後すぐに出ています。大塚さんの共同体論というのは、共同体というのは封建的で自由がなく、さらには自然と人間が強く結ばれているというのも人間が自然から自立していないからだ、人間が自然に支配されている、という捉え方をしている。まだ文明が成立してないというような雰囲気でもあって、それをいかに解体して近代的な市民社会にするのかという 19 世紀的問題意識をそのまま引きずったような共同体論であったということになります。

ところが 20 世紀に、画期的なものとしてはマッキーヴァーという、イギリス生まれでアメリカの大学で教えていた社会学者が、『コミュニティ』という本を出しました。おそらく「共同体」という言葉自体が「コミュニティ(community)」の訳語なのだろうと僕は考えています。というのも、江戸期の文献に「共同体」という言葉がない。むしろ「コミュニティ」をどう訳すか。そこで「共同体」という訳し方をしたのだろうという気がします。ちなみに江戸期までの「共同体」を意味するような言葉としては、単に「わが町」とか、「わが村」とか、あるいは「わが集落」などはありましたが、そういうようなものを総称して「共同体」と言う使い方はなかったと思います。

マッキーヴァーの『コミュニティ』という本は、どんな時代になっても、コミュニティは必要だという立場で書かれている本です。古代から遠い未来に至るまで、常に共同体は必要になるという視点でした。ここらあたりから現代コミュニティ論に移ってきます。私たち自身が今、「共同体」とか「コミュニティ」を語る場合は、やっぱりマッキーヴァー流で、どの時代でもこういうものは必要なんだという視点で語っているように思います。

**・共同体に型を求めることからくる問題**

僕も実は大塚久雄さんと全く同じ題名の『共同体の基礎理論』という本を書いているのですが、共同体とは何かと言われると、非常に困るんですね。というのも、共同体というのは、一貫してある形があるわけじゃなくて、歴史的に変化した。だから多分縄文時代や弥生時代それぞれの、古代以前的な共同体もあったでしょうし、中世的なものもあったでしょう。ただ私たちが今史料的にみて、これが共同体の原型だろうとみているのは、江戸時代の、近世の共同体です。ひとつには、江戸時代の共同体の時代になると、いろんな文献が残されてい

ること、もう一つは、江戸時代にできたいろんな習慣とか考え方は案外今日まで受け継がれている面もあるため、現在の村の在り方を見ていくと、江戸時代の共同体はこういうものであったのではないかなと、ある程度推測がつくからです。しかし歴史的には変わってきますから、何をもって共同体というかというのは、形を見ようとすると、いろいろ変化してきたとしか言いようがないし、さらに言うと共同体というものは地域共同体だけではないわけです。農山村社会の共同体もありますが、一言で農山村社会と言っても、農村社会と山村社会ではかなり違っていますし、さらには農村社会も稲作が中心の農村と、非稲作的なものが中心の農村では、いろんなものが大きく違う。それ以外にも漁村の共同体、さらには商人が作っていく共同体とか職人が作っていく共同体とか、いろいろなものがあるので、そのどれをもって共同体の原型というか、などという議論をしてしまうと、変なことになってしまいます。

### 3. 共同体は自然と人間の社会として作られる

日本の共同体を軸に考えていきますと、共同体というのは、決して人間が作っている社会のことではないわけで、あくまで自然と人間が作る社会というものとして共同体がある。共同体のメンバーには、自然が含まれているというのは一つの特徴です。さらに、人間というのは、生きている人間だけを指すだけではなく、亡くなった人、その地域の先輩たち、あるいはその職業の先輩という人たちも共同体のメンバーなんです。そこに日本の場合には、神仏が共同体のメンバーとしてかかわってきました。ですから、日本の共同体というのは、自然と生者と死者と神仏によって構成されている共同体として形成されてきたのです。

僕は生まれが東京なので、家系図的に言えば上野村では僕が一代目という感じです。僕が今住んでいる家は、ある時譲ってもらったものですが、その譲り渡しが終わるとその日から暮らせるんです。家まで電気も道も、水道もきていますし、その日から暮らそうと思えば暮らせる。ただそれができたのは、長い歴史があってこそなんですね。今は家があると家の軒下までは電力会社が電気線引っ張ってくれるという仕組みになっていますが、以前はそうではなかった。今ある電気ケーブルのある場所から自分たちの集落まで、自分たちでお金を出して引っ張ってこなければいけなかったんです。小さな集落でしたから、今的に言うと一家あたりの負担金は、300 万とか 400 万とかになったりするんです。それぐらいの負担金をみんなで出しあって電気を引っ張ってきた。村には集落に共有の神社があり、そこに立派なヒノキの木がありました。天然のヒノキですから、当時一本何百万円みたいな木なんですけども、そういうものをみんなで共有財産としてもっていて、その木を切り、その代金で電線を引っ張ってきたらしいです。昔はそうやって電気を引っ張たり、水道も自分たちで作ることもあった。僕の家の水道は、伝承によると、弘法大師が発見した湧き水が水源だということになっている。その水源は山もかなり奥からずっと引っ張ってきているんです。最後は、各家に水道として送るという仕組みになっているわけですけど、それを作ってきたのも、昔

の人たち。もちろん道もその人が作っていったわけです。さらに、僕の家もわずかですけど畑もあるのですが、その畑もそれが使えるようになる過程では、昔の人たちが、ずっと畑として使いながら、だんだん良くしていったという歴史があるわけです。今ここで自分たちの暮らしが成立するというのは、過去の人たちの営々たる努力の上に成り立っている。だから、今でも過去の人たちが消えてしまうというよりも、一緒にこの村を守っていると強く感じられるという。田舎にいると、そういうところが感じられます。

自然と生者と死者と神仏が共同体を作っているという時は、その 4 者が話し合って作っているわけではなく、自然との関係が村を作っている。そして生きている人間同士の関係が村を作っている。さらに、もうなくなっているけれども、村の基盤を作ってくれた先輩たちとの関係が、今でもこの村を作っている。そして村には、宗教とはちょっと違うような形で、神仏が祀られていて、そういうものと関係を結びながら村をつくっているのです。

だから、山の神と関係を結んでいたり、水の神と関係を結んでいたり。そんなことをしながら村ができているという、そういう世界です。ですから、共同体というのは、決して伝統的には人間だけの社会ではなかった。

これは職人とか商人とかの共同体になっても似ているところがある。ある時、地域で昔から続いている農村の鍛冶屋さんに話を聞きにいったことがありましたが、そこでも少し広範囲な地域で鍛冶屋の共同体を作っていて、そこには鍛冶屋の親方がいて、そのもとに、独立した職人さんたちがいる。そうすると、その人たちは、毎年お正月には親方の家に集まり、まず神仏に、お祈りをする。だけどその神仏とは、金山姫を祀っていましたから山の神なんです。つまり、山の神の世界から鉄ができてきたのです。そしてそれが自分たちの工房に運ばれて、さらに加工されて、農具になったり、刃物になったりしていくという。だから、農村で農業をやっている人たちのように、日々自然と結んでいるわけではないけれども、やはり自分たちの世界は自然とのつながりの中に成立しているという思いはあるし、鍛冶屋であれば、鍛冶屋の技を作り上げていった先輩たちと自分たちの関係というのもやはり存在する。そこに、自分たちの神仏を祀って、という世界でもある。こうした人間と自然、先輩たちと神仏との関係のもとに職人の共同体が成立していたということがわかってきます。

**・江戸期の共同体について――多層的共同体**

江戸時代の共同体を見ていくと実に色んなものが積みあがっている。都市の一般庶民の生活では、長屋というのが一つの共同体です。長屋の住人がお互いに助け合って生きている一面がある。ただそれだけが全てではなく、職業別の共同体というのも非常に強いものがありました。火消しの共同体は本当に強かったですし、大工の共同体とかいろんなものがありました。

江戸の街の特徴としては、全国から人が集まってきた町であったこともあり、出身地別の共同体というのも非常に強固にできていて、仕事の斡旋などは結構ここがやっていました。

さらにお寺の檀家さんの共同体があったり、神社の氏子さんの共同体があったりする。

このほか江戸期の特徴としては、山岳信仰（修験道と言い換えてもよい）が広がっていて、それを信仰する人たちが講組織を作り、共同体的に助け合いをやっていました。この修験道的な講組織というのは明治 5 年に修験道禁止令によって潰されたのですが、江戸時代には非常に広く広がっていました。江戸の街を見ていくと一番多かったのは富士山信仰。修験道系のものというのは、自分たちで信仰する人たちが講というだいたい 30 人ぐらいの組織を作り、講として、山に行ったり、お参りをしたり、日々の様々なことをしていました。

ですから、共同体というのは一つだけにまとまっているわけではなくて、実に多層的に形成されていた。例えば、長屋の共同体にも加わっているし、職業別共同体にも加わっているし、出身地別の共同体にも加わっているし、檀家や氏子の共同体にも加わっているし、山岳信仰の共同体にも加わっているというように、いくつもの共同体にひとりの人間が加わっていたのです。

### 4. 小さな共同体の集積が共同体的社会となる

僕は須郷という名の、小さい集落に暮らしていますが、ここは本当に数軒しか家がありませんので、数軒で大きな家族をつくっていると言いたくなるぐらい密接な関係が出来ている。だからこれも一つの共同体です。しかし、江戸時代の上野村というのは、いくつかの自然村がありました。自然村とは、だいたい歩いてコミュニケーションが取れるぐらいの広さで自然にできた村です。僕のところは楢原村という自然村だったんですが、そうすると楢原村的な共同体もあるし、さらに上野村としても一つの共同体を形成する。このほかには檀家さんの共同体、氏子さんの共同体、職業別の共同体があったり、というようにいろんなものがある。そういうものが集積して行くと、そのことによって、社会全体が共同体的社会になっていく感じです。だから、共同体というのはある一つのものがあれば、それが共同体という性格という訳ではなく、小さな共同体がいっぱいあり、その小さな共同体が積み上がっていく関係によって生きている世界、あるいは助け合いながら生きている世界みたいなものができてゆく。すなわち共同体というのは、その意味では二重概念なわけです。小さな共同体が共同体。だけども、それが積み上がっている状態はまた共同体。そういう性格を持っていると考えなければいけないと思います。

その点では古い共同体理論は共同体というものを一つの組織であるというように考察をしているのが普通なんですが、僕自身はそれは間違いだろうと思っています。そうではなくて、いろんな小さな共同体が存在し、それらが積み上がってこそ、本当の共同体がまた存在する。そういう構造になっているのだと思っています。実はマッキーヴァーの『コミュニティ』という本はその辺のことに別の形で触れているのです。マッキーヴァーはコミュニティというものとアソシエーションというのを分けていて、アソシエーションというのは、ある目的を実現するための結合組織のことだと言っています。だから、今日的に言えば、場合に

よったら「〇〇の環境を守る会」でも良いし、あるいは宗教的な団体でも良いのですが、ある目的を実現しようとして作っている組織のことを、マッキーヴァーはアソシエーションと呼んでいます。それに対してコミュニティというのは、ここは自分たちの共有された世界だということをみんなが感じるようになった時に生まれてくるものだと彼は言っている。だから、コミュニティとは作ることができない、生まれてくるもの。ここは我々の共有している世界だという感覚が出てきた時に生まれてくるんだという、そんな言い方をマッキーヴァー自身はしています。では生まれてくるのをじっと待っているのかというとそうでもなくて、アソシエーションを、たくさん作り出すことによって、コミュニティが生まれてくるのが早まるという、そんな位置づけをしているんですね。僕自身は、このマッキーヴァーのアソシエーションとコミュニティを分けて捉えるという必要性はないのではないかと思っていて、むしろアソシエーション的なコミュニティもあっていいし、生まれてくるコミュニティがあっていいし、むしろ、その小さなコミュニティが積み上がって、その時に全体的にコミュニティの社会が出来上がっていくという、そういうことではないかなと思っています。

僕は専門が哲学ですから、共同体というのは、二重概念なんだという言い方をしています。小さな一つずつの共同体があって、大きな全体としての共同体があるという、そういう二重概念でいいのではと思っているのですが、これは今の学問の中心である〇〇科学という世界では通用しない論法です。だいたい今のコミュニティ論というのは、社会科学系の人たちがやります。そうすると科学の手法を使っていこうとすると二重概念なんていうことはありえないわけです。だからマッキーヴァーはアソシエーションとコミュニティをしっかり分ける必要性があったのだろうと思いますが、僕の方から見ると何も分けなくてもよい。

マッキーヴァーのいうアソシエーションというのはだんだん活動して行くうちに大きくなっていくものもあるし、逆に、小さくなっていくものもあるし、更には消えてしまうものもあるし、あるいは二つに分裂してしまうという可能性もある。つまり、いろんな動きがあるんです。僕が言うところの小さなコミュニティ、小さな共同体も同じで、だんだん大きなものになっていく場合もあるし、逆に小さくなったり消えていくこともある。それから組織のあり方としては、非常にしっかりした組織を作っている場合もあるし、緩やかな組織を作っている場合もあるし、あるいはしっかりした組織だったのが、だんだん緩やかになっていくという場合もあるし、その逆の場合もあります。そういう変容を絶えず行ないながら、それらが積み上がっていくと、一つの共同体、社会が出来上がっていく。

今、共同体を作らなければいけないとか思っている人たちも、古い共同体概念にとらわれている場合があって、共同体の形を一生懸命探すんですね。ですが探す必要なんか全然なくて、本当に緩やかなものでも良いし、目的によっては非常にしっかりしたものを作らざるを得ない場合もある。だけど、一つの組織をなんか作ったら共同体ができる訳ではなくて、そういういろんなものを積み上げてこそだという、そういう視点が必要だと思います。さら

に、そういう色んな物が出来上がっていく過程の中でそこに加わるメンバーも絶えず変容している。だから、しっかりしたひとつの組織っていうと、しっかりした町内会みたいなものになってしまうわけで、かえって窮屈であると言っても良い。もっと自由度の高いものの中で自分自身もまた絶えず変容していくような、そういうものこそ本当の共同体であるという気がします。

**・共同体での意思決定**

ところで、日本の伝統的な共同体では、実は意思決定は満場一致しかないんですね。多数決はとらないのが特徴です。なぜ多数決を取らないかと言いますと、共同体のメンバーというのは永遠にメンバーであり続けるという、そういう気持ちが強い。従って、共同体と単なる組織の一番の違いは何かというと、共同体はメンバーに何らかの事情で困難を抱えた人が発生した場合に、その人を無条件で助けるという共同体の特徴にある。ですから、病人が出ればみんなで応援するし、生活に困窮してもなんとかやっていけるように、みんなで応援するしと。常にそういうふうに、何らかの応援をしながら、自分たちのメンバーは無条件で助ける、それが共同体なのです。単なる組織になりますとそういうことが起きても、どうもあの人は大変らしいなんて話をして終わってしまう。共同体的組織は、みんなが絶えず助け合って生きていく姿勢を持っていなければいけない。多数決をとるということは、少数派が出ることになってしまいます。少数派の人たちを出してしまうことによって、禍根が残ることを嫌がるということです。つまり、自分が問題提起したんだけど否決されたとなると、自分が間違っていたから否決されたとは思わず、わだかまりが出てくる。そういうことが出ることを防ぐために、常に満場一致で物事が決められる。それが共同体のルールです。

上野村で寄合に出ていたとき、あるお年寄りから、お寺の扱いについての問題提起がありました。そこの集落の人たちは、みんな一つのお寺の檀家さんなので、自分たちの寺という位置づけで、みんなして支えてきたのです。昔はいろんな採れたものを出したりして支えてきたんですけど、今はみんなでお金を出し合って支えている。そして、それを辞めようという提案があった。そのお年寄りの方がいうのは、今の住職さんはもう村からいなくなっていて、村のお寺としての役割を果たしてない。だから、そのお寺を個人が支えるのはいいけれども、集落のお寺として支える必要性はないという。それに対してほかの人たちは、この爺さんの言い分はもっともだなと思いながらも、何も事を荒立てなくてもいいんじゃないか、今までどおりでもいいじゃないかという感じだったんです。ところが爺さんがこの問題については折り合いはつけられないという発言をしました。折り合いがつけられないということは、まとめることは無理という意味です。そうしたらその年の集落の代表が、「ただいま折り合いがつけられないという発言がございましたので、これについては今後一切議論をいたしません」と言う。よって、今までどおりお金を集めてお寺を支えるやり方は今後一切行いませんと言う。つまり何の多数決も取らずにあの爺さんの言い分が通ったわけです。

それはみんなが爺さんの言い分もっともだなと思っていたということもありますが、それだけではなく、折り合いを付けられないことについて決定はできない、決定ができない以上、すべての今までの取り決めはチャラにするということなんです。だから結果的には爺さんの言う通りになった。決して多数決で多数派と少数派を作ったりはしない。それが共同体の意思決定のルールでもあるんです。

### 5. 「高齢者問題」と「A さん、B さん問題」

今、農山村はどこでも高齢化しているんですけども、上野村も 40%強ぐらいの高齢化率です。それなのに、上野村に居ると高齢者問題がないという感じがするんですね。高齢者はもちろん多いし、その中にも、体を悪くしている人も当然いますから、そういう意味では高齢者問題はあるはずなんですけれど。ただなぜないと言ってしまうかと言いますと、上野村の社会では、高齢者問題ではなくて、「あの A さんが今大変」とか、「B さんが大変」とかそういう問題なのです。それは A さんが高齢者じゃなくてもいいわけなのです。例えば、高齢者の A さんが腰を悪くしてちょっと生活が大変になっているというケースがあった場合でも、今度は若い人が仕事中にけがをして今生活が大変になっているという場合も、同じことなんです。つまり、A さんの問題が発生したり、B さんの問題が発生したりする。それをどうやってみんなして支えていくかということなのですね。

それに対して高齢者問題というのは、高齢者を数で把握するから発生する問題という意味になります。そうすると東京にあるのは高齢者問題なわけです。今、東京の高齢化率は厳密にはわかりませんが、おそらく 2 割台ぐらいになっていると思います。2 割だとしても、200 万人とか 300 万人とか、そういう数の高齢者になってくるわけで、そのうちの例えば 10%が体の調子が悪いとか、あるいは認知症になってきているとかという場合、そのために、その人たちが入れる施設の数がどれだけ足りないなどという問題になってくる。だから全部これは数の問題なんです。上野村にくるとこの高齢者を数で把握する必要性は全くなくて、A さんがちょっと大変とか、B さんがちょっと大変とか、絶えずそういうことでしかないのです。だから、上野村では、A さん問題、B さん問題という話なのですが、東京に来ると高齢者問題になる、そういう違いがあるといつも感じます。

なぜその違いが起きるかというと、上野村では、A さんも B さんも関係の中で生きている A さん、B さんである。つまり集落という関係の中にいたり、村という関係の中にいたりするのです。さらには村の中の、小さい共同体がいっぱいありますから、そういう関係の中にいる。だから、今度はその関係を使って応援をしていくと、そこに役場も登場してくるので、役場のほうができることは、では役場でやっていこうかという、こういう話になっていく。ですから、関係の中で生きている社会においては高齢者問題が発生しないし、今度関係が切れてしまったような社会になってくると、そこでは人間が数になって、まさに高齢者問題になっていく。

**・関係によって結ばれた存在**

人間の存在を作っているのは関係だと僕は思っています。例えば僕の場合で言えば、上野村にいる時には、上野村のいろんな関係が僕を作っている。上野村の場合には、窓の外を見れば山ばかりな地域ですから、まず自然との関係がある。その自然との関係と言っても、眺めているような自然との関係もあれば、山菜とりに行ったり、キノコを取りに行ったりするような関係もある。僕もわずかですけど、山をもっているので、そうするとその山の手入れもあるし、その山の木を切ったり、その一部を薪にしたりとかをすることになり、そういう関係の中にも自分がある。さらには村人同士の関係の中で自分が存在している。そういう村の中にあるいろんな関係が僕の存在を作り出しているという感じがします。

それは東京に来ても実は変わらないわけです。東京に来ると関係のあり方が変わってくる。まず、直接的に結んでいる自然との関係は、当然ながらずっと弱くなる。それに対して東京では、東京的関係の中で僕が存在する。僕にとっての東京的な関係っていうのは、例えば買い物の仕方だって、村にいるときとは全然変わりますし、東京に居るときには僕の場合、仕事をするという関係が中心になってきます。ですから、東京的仕事の関係が僕を作っているという感じになってくる。僕自身がいつの間にか持っているいろんな関係が私自身を作っているという感じ。だから、私とは何者ですか？ともし聞かれたらば、それは私が、所有している関係の総和ですと、僕の場合は答える。関係の総和だから、素晴らしい関係だけで生きているわけではなく、やっぱり現実世界の中で生きていますから、本当だったらこういう関係がいいと思っていても、そうばかりもやっていられない。そうするとやはり資本主義的な関係や色んな関係が入ってくる。だから、まあまあいいと言う風に人に説明できるような関係もあるかもしれないけれども、ちょっとまずいなと思っている関係もあるわけです。そういうことを含めて、僕は作り出されているという気がします。

**6. 規模の拡大と関係の希薄化、システムの中での人間の記号化**

ところが、大きな世界、東京的な世界でも良いし、規模の大きい世界で、そういう世界になってくると、その関係が弱まるに従って、その関係がむしろシステムに変わってくる。だから、あるシステムの中で僕が作られているっていう、感じになってくる。関係がいかにしてシステムに転じて行くか、というふうに言ってもいい。このシステムが軸になって、そこに僕が従属するという感じになってくると、僕はそのシステムのもとの一つの記号的存在になってしまうという感じがしてきます。今の現代社会というのは、それをいろんな形で作っている。例えば、僕は国民としては国家というシステムの中の一要素、一つの因子にすぎない。だから国家においては、僕は別にいてもいなくてもどうでもいいわけです。つまり、もし僕が死んでも、誰かが生まれてきたり、あるいは外国から誰かが移住してきて、日本国民として承認されれば、それでいいということになる。そういうことでしかない。今の場合

は企業の中もそうで、自分がいなくなったとしても誰かが入ってきて、その仕事をすれば、システムは円滑に動いているということになりかねないわけで、そうするとそこでもシステムの一員でしかない。今のコロナ禍の社会の持っているなんとなく感じる気分の悪さというのも、一つの理由はそこにあるような気がします。なぜかというと、例えばテレビをつけると盛んに感染が拡大してきたとか、それを止めるためには、こういうことをしなければいけないとか、言っているわけです。 しかし、あそこで語られている人間というのは、僕でもないし、あなたでもないし、誰かでもない。単に感染者という数字の人でしかないわけです。で、その感染者という数字を増やさないために、だからこうしなさいという話になるわけで、つまり僕という一人の人間が感染しないで、どういう暮らしをしていくかというのはどうでもよくなっていて、全部感染者という記号に過ぎない。だから今のコロナ禍のいろんな語られ方を見ていると、自分の話ではなくて、すでに記号化された自分を誰かが管理しようとしている感じがしてくるわけで、そこに気持ちの良くない何かがうごめいているような、そんな気がしてきます。

今日のテーマとは直接関係ありませんが、僕自身は医学的なものについてはデータは無いと考えたほうがいいと思っています。本来、人間はひとりひとり違うわけだから、体質も違うし、健康状態も違うし、性格も違います。だから、一人一人の人間が全部違うものというふうに判断した場合に、データは取りようが無いということなんです。

それは今のコロナ禍でも同じことで、ワクチンを打った私がいて、ワクチンを打たなかった私がいて、どちらの方が最終的に効果があったのかなんていう話になると、データの取りようが無い。しかし、その人間を全部同じという位置づけにして、すべての人間をいわば数量化して捉えていくというその世界においては、盛んにワクチンの有効性が働いているということです。だから、所詮、私は単に感染するかもしれない一つの記号的人間であり、何千万人の一人にすぎないという扱いを受け続けることに対して気分の悪さというか、本当にこれでいいのかなという感じがしています。

### 7. 小さな単位を基盤にし、システムを補助的な役割に下げる

冒頭の問題意識に戻るのですが、そういう社会の在り様に対して、居心地の悪さっていうのを感じている人たちが今かなりたくさん出てきているんだろうという気がします。だから、なんらかのしっかりした関係を作って生きていきたい。そのしっかりした関係ができてくれば、そこに共同体というものが感じられ始めていくという。そういう世界への渇望みたいなものが、現代世界の一面を作っているという感じはしています。

しかし、人間達が関係を作っていこうとすると、その単位は決して大きいものではなく、ある程度の小ささを保障しなければいけない。日本の伝統的な共同体という話になると、例えば、江戸の街にできていたような、長屋の共同体から、講の共同体とか、いろんなもの。それは、せいぜい単位としては 30 人ぐらいの集団というケースが多いんです。例えば檀家

さんの共同体で、もっと大きくなっていく場合はあるんだけど、むしろいくつか分裂する形で、最小単位は 30 人ぐらいになってゆく。そういうケースが多い。なぜかというと 30 人ぐらいが本当にみんなでわかり合って助け合うことができる単位だからです。それぐらい、小さい共同体を形成しているケースが多かった。さらにその上に共同体同士が連携をするということも成立していた。例えば富士山信仰の共同体などというものも、一つ一つを見ると 30 人ぐらいだけれども、富士山信仰の人たちが、ある種の連携をとりながら、時にはもう少し大きな規模で動くというようなことも成立するという、そんな感じです。

だから、共同体という、仲間を決して見捨てないという組織を作って行動すると、その大きさはそれほど大きいものではない。しかし、そういうものがたくさん多様に積み上がりながら、一つの社会をつくっている。そういう共同体社会の在り様としては、もう少し大きなものになっていくということなんだろうという気がします。

こういうものに対して、今、関心が高まってくるというのは、結局、人間たちは大きなシステムのもとで生きていくことが本当に幸せ感があるのかということに今、気づき始めているからということでもあるのだろうと思うのです。

ずっと日本の歴史を見ていきますと、まさに戦前・戦中というのは日本国という、その大きなシステムの中にみんなが巻き込まれながら生きた時代でもあった。戦後になると、そういう国家主義的なシステムは、一辺崩壊はしたんだけれども、その後経済というシステムが肥大化していき、そこにみんなが盛り込まれていくような形で生きていくようになってきた。常に、巨大システムみたいなものがどこかで形成されながら、そこに組み込まれて人間達が存在する。その結果として、人間が単に数字で表されるようになっていたり、あるいは単なる記号のような存在になってきてしまう気がします。そういうものを今でも追求している人もいるのだけれども、なんか違うなと思っている人たちが今、新しい動きを見せ始めてきている。そこに「共同体」という言葉が、新しい光を浴びるようになってきたということのように感じます。

**・上野村に見る共同体の規模**

例えば上野村は今、人口で言うと 1100 人ほどの村です。一番人口が多かった時期と比べますと、1/4 ぐらいになっています。ただ、一番人口が多かった時というのは、実はちょっと多すぎたのです。というのも、山奥では、昔、炭焼きが盛んで、炭を焼く専業の人たちは、村外から炭を焼くために村に入ってくる人が多かった。実に炭焼きの人だけで 2000 人ぐらいの人達が外から入ってきていたのです。さらに戦後になりますと東京が焼け野原になりましたので、親戚を頼って疎開してくる人たちがたくさんいて、農山村がいわば過剰人口を抱えました。その時期に、今の四倍ぐらいの人たちがいたという感じです。それに対して上野村が明治になってできた頃はだいたい千人ぐらいの村なんです。ですから多分、千人ぐらいが上野村の自然をうまく使いながら、持続的に暮らしていくには、丁度いい人数ではない

かなと思います。

ところが今はその千人ぐらいの村、1100 人のうちの 25%ぐらいが移住してきた人なんです。村の中には、色んな地域から引っ越して来た人がたくさんいて、その人たちが村を支えているという感じです。で、さらに上野村は村外の協力者は結構多い村でもあります。村に引っ越してくることはできないけれども、何かあったらば言ってくれれば協力するからと言う、そんな感じで対応している人たちです。実際一年の間に何べんも村にくるというタイプの人達が結構たくさんいます。そういうことを考えていきますと、上野村というのは、伝統的な地域共同体みたいなものが、今でも比較的しっかりしている村なんですけど、その伝統的な地域共同体の構成メンバーの中にたくさんの移住者がいたりします。実際、うちの村にも、伝統芸能といえるようなものがいくつかあって、例えば神社で奉納するものとしては、御神楽を奉納するものと獅子舞を奉納するものとに二分されるんですが、今、そういう神社のお祭りに行ってみると、そこで獅子舞を踊っていたり、御神楽を踊ったりするのは移住してきた人がすごく多い。

つまり、伝統的な共同体が守られていくのだが、そのためにも、村外の協力者が必要だという時代でもあるんですね。そこに新しい形が入ってくるけれど、それは伝統的な関係を守っていくために、新しい人たちがそこに加わってくるということでもある。ですから、農山村の社会でも、共同体を守っていこうというのは、昔の型を守るのではなくて、そこには新しいいろんな要素が入ってきながらも、昔からあったような――上野村で言えば自然と人間の共同体であり、さらには自然と生者と死者と神仏の共同体でもあるし――という共同体をいろんな新しい要素が加わりながら守っていくという、今はそういう形になってきているのです。

## 8. 未来のヒントを過去からもらう時代を迎えて

これから私たちが新しい社会をどう作るかという時に、共同体的な繋がりを持った社会をもし考えていこうとすると、それは何か形を探すことでもないし、何かこういう組織を作ればいいんだっていう話でもない。むしろ、人間たちがその時の状況、条件を見ながら、いろいろな形で多様に結びつきを作っていく社会、それこそが共同体社会だというように考えていかなければいけないんだろうと思います。

うちの村のある集落は、江戸時代ずっと隠れキリシタンの里でもあったんです。結構大きい集落ですので、お墓がいっぱいあるのですが、墓石の見にくいところに十字架が切ってあるお墓が結構あったりします。隠れキリシタンがなぜ江戸時代ずっと暮せたのかということ、その隠れキリシタンの人たちが上野村の共同体社会の中に溶け込んでいたから。そうすると自分たちの仲間な訳で、キリシタンじゃない人たちも、その人達を密告して、その人たちに危害が加えられることを誰もやろうとしなかったのです。実際、隠れキリシタンの人たちは、クリスチャンなんですが、村のいろんな神仏の世界にも全部出て行っているし、更に

亡くなると、お寺さんから戒名をもらって、その戒名の中にクリスチャンであることを暗示させるような単語が使われていたりという感じでした。仏教の大日如来とキリスト教の神は一緒だというような考え方です。だから、日本の神仏の世界と融合したクリスチャンでもあり、共同体と融合したクリスチャンでもあった。そのために、江戸時代、誰にも非難されることなく平穏に暮らしたのですね。

明治になりますと、キリスト教は解禁になりますから、新しくキリスト教が布教できるようになるわけです。そうすると、うちの村の隠れキリシタンは、聖書にあるような正当派のキリスト教と遭遇するのですが、今度はこれは自分たちの信仰とは違うということになってしまいました。自分たちの信仰は、村の神仏とも習合しているし、共同体とも融合しているし、そこに神への信仰があるというようなものだったわけです。だから、正当なキリスト教に接して結局、誰もクリスチャンにならないということが起きた。江戸期はクリスチャンだったのに、明治になってちゃんと表立って信仰できるようになったら、一人もクリスチャンにならない。いつの間にかキリスト教が共同体と融合した信仰になっていた、そういう世界こそ共同体というふうに言ってもいいのではと思います。

このように、あらゆる関係性を持ちながら、しかもそれが重層的に積み上がっていきながら、そして自分たちの生きる世界を確信できるようなもの。共同体というのはそういうものなんだと、僕はいつも村にいて思っています。

**・グローバル社会における現代的共同体**

現代社会がグローバルな仕組みをつくっていくことは間違いないんですけど、個々の人間が生きている世界というのは極めてローカルなんです。新型コロナウイルス自体は非常にグローバルな存在で、あっという間に国境を越えて世界中で広がる。ところが、それに感染をした人は、極めてローカルな世界で生きているわけです。だから、人によっては特に初期の頃あったように、感染したらまるで犯罪でも犯したような扱いを受けてしまう、そしてそれは非常にローカルな地域社会がもたらしているものであったりするわけです。あるいは感染したときにはローカル世界の中で治療するし、さらには感染した時に家族にうつさないようにどうしたらいいかとか、いろんなことがある。全部極めてローカルな世界なわけです。だから、ある種のグローバルな展開があっても、それぞれがそこで生きて行く以上は、その生きる世界はローカル世界になるということなんです。

どんなにグローバルなものが展開していっても、その人間の生き方自体がグローバルにはならない。ある種の移動をしたり、いろんな経済的な関係を作ったり、政治的な関係を作ったりというところではグローバルになりうるけど、その人が本当に自分の足場を置いて生きる世界はローカルだという。そうすると、ローカル世界が、自分にとって存在感のある世界になっていかない限り、結局、振り回されているだけで終わってしまう。

片方ではグローバルに国境を越えていきながら、そのそれぞれの生きる世界は、ローカル

な基盤の中で展開している。ウイルスだってそうです。ましてや人間は、そのローカル世界の中でいろんなものを受け止めるしかない。ここのバランスをどう考えていくのか。ローカル世界に足場を置きながら、グローバルなものともある種の関係を結んでいるということに過ぎないのではないか。だから決して、グローバルが軸になって、私たちを動かして行くことはない。やっぱりローカルを元にしながら、グローバルな世界とも関係を結ぶ。それを越えることはないんだろうという気がしています。

**・2022 年における世界、日本の課題**

多分、2022 年は現代社会の持っているいろんな問題点がますます顕在化していくんだろうという気がしています。格差社会みたいな問題点も顕在化していくし、一人一人の人間の存在感が薄くなって、人間が記号になったり、数字になったりしていくような、そういう虚しさみたいなものも、もっと顕在化していくでしょう。それから実は現代世界は絶えずいろんな覇権争いをしてきたわけです。その覇権争いがますます顕在化して行く。いきなり戦争のような状況になっていくかどうかの問題はともかくとしましても、なにか嫌な対立がますます激化していくようなことも起きていくだろうという感じがします。

新しく何かが起きるというよりも、今までなんとなく隠れていた問題点みたいなものがますます表に出てくる中で、この社会を抜本的に直さないとうまくないよねという、そういう気持ちを持つ人たちも増えていくように思います。そういう中で、では何から変えていこうかという話になってくると、キーワードになっていくのは、「ローカル」だったり「共同体」だったり、「コミュニティ」や「関係性」だったりする。そして、その関係性の中にあったはずの仕事をどういうふうに、もう一度取り戻していくのか、ということなんだろうという気がしています。本当にいろんなものを見直していくべき時なんでしょう。

現代社会というのは、実は軍隊の仕組みを民間で応用するような形でできたものがいっぱいあるんです。軍隊のピラミッド構造を民間にもってくると企業の構造になるわけで、総司令官にあたる人が社長みたいな形でいて、ピラミッド構造をつくっていって、上の命令に下が従うみたいな、そういう構造。もちろん、例外的な人たちがいますけど、多くの企業は、この構造を持っている。それから、かつての製造業になると、一斉に同じことをしてものづくりをするという工場がいっぱいできた。みんなが一斉に同じことをするというのも軍隊の仕組みなんです。つまり突撃ラッパが鳴ったらば、みんなが突撃する。そういうふうにみんなが一斉で同じことをするのが、あたかもいいことだというのは、本当に軍隊の構造なんで、これが教育にも持ち込まれたんです。だから、学校なんて本当にみんな同じことをする。大学ぐらいにいくとちょっと変わってきますが、高校までは本当に先生が笛吹いて、みんな同じことをするみたいな、そんな感じがするような授業をしている。いろんな形で軍隊の形が民間に取り込まれて、現代社会をつくっていった。その軍のシステムは絶対的に正しいかの如く支配するという形になっていったわけで、そうすると、企業のピラミッド構造が正し

いかの如く支配し、あるいは市場経済のシステムが正しいかの如く支配しています。全てがそういう感じになっている。軍隊の延長線上でいいのかという辺りも、もう一度問い直されていくのだろうという気がします。軍隊の延長線上で来ているので、どの分野でも勝ち負けにこだわる訳です。企業も勝ち負けにこだわるし、教育の現場でさえ勝たねばならぬ、みたいな教育が行われてしまう。しかし、実際には勝つ必要もないし、負ける必要もないし、そんなものどうでもいいんだよねという世界こそが本当は幸せな世界であるはずなんです。こういう点も含めて、だんだん現代社会が持っている問題点が表面化しながら、それを根本から変えようよという動きがいろんなとこに出ていく。今そういう時期を迎えてきたのではないかと僕は思っています。

内山節（うちやま たかし）（哲学者・NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

# パネルディスカッション開催報告
# 社会的養護出身の若者の困窮リスクと支援制度
# ～住まい・仕事・支援者とのつながり～

小田川華子、濵田江里子

## 1. 背景

家庭で適切な養育を受けることができず、施設等での社会的養護を経験した若者は、社会に出るときに多くの困難に直面する。こうした若者の困窮リスクと支援制度について、住まい、仕事、支援者とのつながりの観点から考えるオンライン・パネルディスカッションを 2021 年 10 月 30 日に首都圏若者サポートネットワークとの共催で実施した。

虐待などにより家庭で適切な養育を受けることができず、児童養護施設で育った子どもたちは、多くの場合、18 歳で施設を出て独り立ちすることになる。現行制度では 20 歳まで（通学している場合は 22 歳まで）施設等で社会的養護を受ける措置を延長することが可能だが、18 歳での退所が多い。現代日本社会では、22 歳くらいまで学費、住居費を親に負担してもらうのが一般的で、親が若者にとってのセーフティネットになっている。ところが、社会的養護出身の若者には親というセーフティネットがない。虐待やネグレクトを受けたなど困難な生育環境が自己肯定感や他者との関係のもち方に影響することもあり、彼らは就労のステージにおいても困難に向き合いがちである。また、収入が安定しない非正規雇用であっても親に頼ることはできない。

そもそも日本の社会保障、社会福祉制度は家族による経済的支援やケアを前提とする家族主義と、安定した仕事が存在することを前提とするため、家族に頼ることができない若者たちの独り立ちは困難なものにならざるをえない。住まいに関する保障は、男性稼ぎ主の企業福祉の一環として住宅手当を支給することが中心であり、国が主導して低所得者向けの公営住宅を整備するという動きは鈍かった。日本では働くことができる年代に対するセーフティネットが脆弱なため、安定した仕事と家族が揺らぐと、生活が困窮するリスクが一気に高まる。若年層で非正規雇用をはじめとする不安定雇用に従事する者が増えていること、加えて社会的養護出身の若者には、いざという時に頼ることができる家族がいないことは、そうした困窮リスクをさらに高める。安定的な仕事に就くことが難しい若者たちは困窮しやすく、住まいも不安定なものになりがちである。

したがって、生活がうまくいかなくなったり、体調を崩したりしたときに相談できる支援者とのつながりは、若者にとって命綱ともいえる。住まいや食といった生きるために必要な支援につなぎ、生きるエネルギーを支える支援者とのつながりは大変重要である。こうした若者たちの自立支援を担っているのは、児童養護施設の他、自立準備をする若者のための入所施設である自立援助ホーム、地域で生活する若者たちに居住、就労、生活相談

等様々な支援をおこなうアフターケア事業所などである。だが、若者たちが必ずしも支援者や制度にうまくつながれているわけではない。特に法律上「児童」でなくなり、社会的養護制度の保護対象から外れる 18 歳以降の若者の支援については、明確な規定がなく、責任の所在も曖昧である。社会的養護制度の下で育った若者たちへの自立支援事業は徐々に拡充されてきてはいるものの、十分ではなく、自治体によって地域間格差も大きい。

## 2. パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、自立援助ホーム湘南つばさの家の前川礼彦氏とアフターケア事業を行うおおいた子ども支援ネットの矢野茂生氏より、支援現場からみえる若者たちの困難と伴走支援者によるソーシャルワークの重要性、そして支援制度の課題についてお話しいただいた。また、自立生活の基盤となる住まいの確保はなぜ難しいのか、日本の住宅保障制度、社会的養護自立支援における住宅支援制度の問題点を踏まえ、若者に必要な居住支援の在り方について小田川より課題提起し、濵田からは、国際比較の観点から日本の社会保障、若者支援について課題提起した。それらを踏まえ、社会的養護の若者の自立支援において、どのような制度改善や地域づくりが求められているのか、低所得不安定就労の若者に対する社会保障制度の充実をも視野に入れ、ディスカッションを行った。

前川氏は、彼らが「人生を共に歩んでいく人」は誰か、を問うことが社会的養護の若者支援において重要なことだという。制度は対象者年齢や支援機関などが設定され、限定的なものにならざるを得ず、ともすれば自立支援は施設を出る際の支援ととらえられがちだが、長く険しい道のりである人生を、若者が孤立せず、支え手とともに生きていけるようにするにはどうすればよいか、ということを考えねばならない。暗闇に立たされている時、「こんな生き方があるよ」と導いてくれる存在はだれか。人との縁によって若者の人生は大きく変わってくる。前川氏は自立援助ホームから独り立ちしていった若者たちと細く長くつながっていくことを大切に、つばさの家が若者にとっていつも灯がともる場所、心の港のような場所であるように、日々の支援にあたっている。

矢野氏も、若者を地域の支え手と何本の糸でつなぐことができるか、支援にあたる大人がいかに若者とつながるか、が大事だという。社会的養護関係の支援者だけでなく、若者たちのことを理解し、職場で受け入れ、育ててくれる、職親のような地域社会のなかの支え手をどのようにして増やしていくかが課題だという。これまで特別な場所として認識されてきた相談所を商店街にもってくることで、商店街の中の様々な担い手がもつ小さな資源が若者支援につながってくる。そういった地域づくりを矢野氏は試みている。一方、若者が地域で生活し続けるために必要な住まい支援に壁がある。アパート契約をする際に連帯保証人が必要だが、未成年の場合は親権者の同意書が必要だが、社会的養護出身の若者たちは親の同意書を用意することができないのである。地域の企業や賃貸住宅オーナーの協力が得られればどのような仕組みが作れるだろうか？

社会的養護の若者支援における専門的なソーシャルワーク人材の配置の必要性に加え、大分における矢野氏の地域アプローチのような地域づくりの専門的なスキルをもつ人材の配置も同時に課題であることが、パネルディスカッションから明らかになったといえよう。福祉の側が様々な制度を地域に開き、まちづくりのデザインの中に支援を組み込んでいくことも重要となる。若者たちと関わる中で見えてくる課題は、安定した住まい、安心できる生活といった全ての人にとっての普遍的な課題であると言えるのではないか。

小田川華子（おだがわ はなこ）
（グローバル・コンサーン研究所、公益社団法人ユニバーサル志縁センター）
濵田江里子（はまだ えりこ）
（グローバル・コンサーン研究所、立教大学）

# 報告
# 第 41 回 IGC-SSRI 国際シンポジウム
# 差別と心理学
# ～マイクロアグレッションを理解し、日本社会の変革につなげる～

出口真紀子

2021 年 12 月 4 日・12 月 5 日の二日間にわたり、第 41 回 IGC-SSRI 国際シンポジウム「差別と心理学 : マイクロアグレッションを理解し、日本社会の変革につなげる」を上智大学グローバル・コンサーン研究所および国際基督教大学社会科学研究所の共同主催のもと開催した。コロナ禍のためオンライン開催となったが、国内外から 1200 人近くが後日視聴を含め事前登録し、当日参加者も 200 人台と盛況であった。

本シンポジウムを企画した大きな理由は、「マイクロアグレッション」という概念を日本に紹介する総括的なシンポジウムが未だなかったことである。「マイクロアグレッション」の概念を広めた研究者、カウンセリング・臨床心理学者のデラルド・ウィン・スーが、*Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender and Sexual Orientation* と *Microaggressions and Marginality: Manifestation, Dynamics, and Impact* の 2 冊を 2010 年に出版して以来、北米では、「マイクロアグレッション」という言葉が少しずつ心理学や社会的公正教育の文脈で聞かれるようになったが、日本ではまだまだ聞きなれない概念だった。そして、スー氏の出版からちょうど 10 年目の 2020 年 12 月にマイクロアグレッション研究会によって待望の *Microaggressions in Everyday Life* の邦訳『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』が出版された。

この翻訳が出たことで、ようやく私たちはこの概念の背景にある理論と研究を深く知ることができた。出版を祝す意味でも、グローバル・コンサーン研究所の所員としてぜひこの概念を日本社会に広め、どう日本社会の変革につなげるかのヒントを得たいと思い、本シンポジウムを企画した。北米から研究者・臨床家として見識の深い二人に基調講演者として登壇いただき、また、日本からはすでにマイクロアグレッションについて造詣の深い「マイクロアグレッション研究会」のメンバーや活動家、教育者、研究者に登壇いただいた。詳細は後掲のプログラムをご覧いただきたい。

初日の基調講演では、*Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender and Sexual Orientation* の第二版の共著者でもある、アリゾナ州立大学のカウンセリング心理学教授のリサ・スパニエルマン氏に「チェスター・ピアス (1970 年代) から現代に至る理論と研究」という演題で、マイクロアグレッション研究の歴史、最新の定義、マイクロアグレッションの健康面（身体・精神）への影響などについて発表いただいた。二日目の基調講演には、カナダのオタワ大学の社会科学部准教授であるモニカ・ウィリアムズ氏に「マイクロアグレッションの削減 : 介

入についての研究と多人種の調和の促進」という演題で、マイクロアグレッションを理解した上で、どう削減できるか、どう介入できるか、また、マジョリティ側とマイノリティ側でどのような対話ができるのかといった研究から見えてきた知見を発表いただいた。ウィリアムズ氏は、*Managing Microaggressions: Addressing Everyday Racism in Therapeutic Spaces* (2020）を出版されている。

シンポジウムの両日は、午前中は基調講演と日本側の登壇者、午後はさらに日本社会におけるさまざまなマイクロアグレッションについて研究者や活動家に登壇いただき、女性、部落出身者、在日コリアン、X ジェンダー、ミックスルーツなどの人々が受けるマイクロアグレッションについて発表いただき、マイクロアグレッションの概念への理解を深めることができた。外国の概念が日本に輸入されたと思われがちだが、それは違う。日本社会における様々なマイノリティ性を有した人であれば、言葉はなかったけれど、日常の中で受けてきた被害がやっと命名された、という感覚があるように、概念は文化を超えて普遍性が高いものだと感じている。

本シンポジウムは、マイクロアグレッションに関しては日本でこの規模の初めての記念すべき国際シンポジウムであるため、シンポジウムだけで終わらせるのはもったいないとの声もあり、明石書店より 2022 年度中に書籍化される予定である。すべての講演が収録され、基調講演者の講演も邦訳として読めるので、楽しみにしていただければと思う。また、ご登壇くださった方々、企画運営に携わってくださった IGC 教職員、NHK 通訳サービスのみなさまに深く感謝を申し上げたい。

なお、本ジャーナルには、書籍には収録されない英語原文の基調講演を掲載する。

出口真紀子（でぐち まきこ）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学外国語学部）

資料 1　第 41 回 IGC-SSRI 国際シンポジウム チラシ (表面)

# 第41回 IGC-SSRI 国際シンポジウム

## The 41st IGC-SSRI Joint International Symposium

### 12月4日（初日）

［司会］三浦まり 上智大学グローバル・コンサーン研究所副所長

09:30 開会の挨拶
下川雅嗣 上智大学グローバル・コンサーン研究所所長

09:45 趣旨説明
出口真紀子 上智大学グローバル・コンサーン研究所 所員

［基調講演］

10:00 **マイクロアグレッション：チェスター・ピアス（1970年代）から現代に至る理論と研究**
リサ・スパニエルマン アリゾナ州立大学カウンセリング・カウンセリング心理学学部長、統合科学芸術学部副学部長

Lisa Spanierman

［講演］

11:00 **『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』が日本社会に与えたインパクトとその意義**
金 友子（キムウヂャ） 立命館大学国際関係学部 准教授

13:15 **在日コリアンに対するマイクロアグレッション：個人の経験とインタビュー調査から**
朴 希沙（パクキサ） 立命館大学大学院人間科学研究科
朴 利明（パクリミョン） 在日本朝鮮人人権協会
※『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』翻訳メンバー

13:45 **被差別部落出身者が受けるマイクロアグレッション**
上川多実 BURAKU HERITAGEメンバー

14:15 **ジェンダー・ステレオタイプとマイクロアグレッション：社会心理学的考察**
森永康子 広島大学大学院人間社会科学研究科 教授

15:50 **閉会あいさつ**
リベイロ・ディルトン 国際基督教大学社会科学研究所、教養学部特任助教

### Day 1: December 4th (Opening Day)

[Master of Ceremonies]
Dr. Mari Miura, Deputy Director of the Institute of Global Concern, Sophia University

Opening Remarks
Dr. Masatsugu Shimokawa Director of the Institute of Global Concern, Sophia University

Explanation from the organizer on why this symposium was organized
Dr. Makiko Deguchi Institute of Global Concern, Sophia University

[Keynote Presentation]

**Microaggressions from Chester Pierce to Contemporary Theory and Research**
Dr. Lisa Spanierman Head of the Faculty of Counseling and Counseling Psychology and Associate Dean in the College of Integrative Sciences and Arts at Arizona State University

[Presentations]

**Implications for Translating *Microaggression in Everyday Life* for Japanese society**
Wooja Kim Associate professor in the College of International Relations, Ritsumeikan University

**Types of Microaggressions Experienced by Zainichi Koreans: A Qualitative Study**
Park Ki-sa Human Science-Graduate School, Ritsumeikan University
Park Ri-myon Human Rights Association for Korean Residents in Japan
*Members of the translation team for "Microaggressions in everyday life"

**Microaggressions Experienced by Buraku Ancestry**
Tami Kamikawa Buraku Heritage

**Gender Stereotypes and Microaggressions from a Social Psychological Perspective**
Dr. Yasuko Morinaga
Professor of Psychology, Hiroshima University

**Closing Remarks**
Dr. Ribeiro Dilton ICU SSRI, Assistant Professor by Special Appointment

### 12月5日（2日目）

［司会］稲葉奈々子 上智大学グローバル・コンサーン研究所 所員

09:30 開会の挨拶
徐載晶（ソジェジョン） 国際基督教大学社会科学研究所所長

［基調講演］

09:45 **マイクロアグレッションの削減：介入についての研究と多人種の調和の促進**
モニカ・ウィリアムズ オタワ大学社会科学部 准教授

Monnica Williams

［講演］

10:45 **マジョリティ側にとってマイクロアグレッションについて学ぶ意味**
中村 正 立命館大学 産業社会学部／人間科学研究科 教授

13:00 **マイクロアグレッション翻訳に至る物語とマイクロアグレッションを乗り越える対話への模索：在日コリアンカウンセリング&コミュニティセンターの歩みから**
朴 希沙（パクキサ） 立命館大学大学院人間科学研究科
丸一俊介 ZAC:在日コリアンカウンセリング&コミュニティセンター所長

13:30 **Xジェンダー／ノンバイナリーの人々が受けるマイクロアグレッション**
中島 潤 NPO LGBT 家族をつなぐ会、レインボーすみだ

14:00 **ミックス・ルーツの人たちが受けるマイクロアグレッション**
ケイン樹里安 昭和女子大学 特命講師

15:30 **共同の祈り**
ポール・ジョンソン 国際基督教大学牧師
ホアン・アイダル 上智大学神学部教授
**閉会あいさつ**
クリストファー・ボンディ 国際基督教大学社会科学研究所、教養学部 上級准教授

### Day 2: December 5th (Second Day)

[Master of Ceremonies]
Dr. Nanako Inaba, Institute of Global Concern, Sophia University

Opening Remarks
Dr. Suh Jae-Jung Director, Social Science Research Institute, International Chrsitian University

[Keynote Presentation]

**Reducing Microaggressions**
**Research on Interventions and Promoting Interracial Harmony**
Dr. Monnica Williams Associate Professor, Faculty of Social Sciences, University of Ottawa

[Presentations]

**Why People in Dominant Groups Need to Understand Microaggressions**
Dr. Tadashi Nakamura Professor of Clinical Sociology, Ritsumeikan University

**Translation Backstory: Effort to Engage in Respectful Dialogue between Japanese and Zainichi Koreans**
Park Ki-sa Human Science-Graduate School, Ritsumeikan University
Shunsuke Maruichi Head of Zainichi Korean Counselling & Community Center

**Microaggressions Experienced by X-gender (Non-binary) People**
Jun Nakajima NPO LGBT families & friends, Rainbow Sumida

**Microaggressions Experienced by People of Mixed-Roots**
Julian Keane Specially Appointed Lecturer, Showa Women's University

**Joint Prayer**
Pastor Paul Johnson International Christian University Church
Father Juan Carlos Haidar Prof. of Ecclesiastical Faculty of Theology, Sophia Univ.

**Closing Remarks**
Dr. Christopher Bondy ICU SSRI, Senior Associate Professor of Sociology

資料 2　第 41 回 IGC-SSRI 国際シンポジウム チラシ (裏面)

# Keynote Presentation 1
# Microaggressions from Chester Pierce to Contemporary Theory and Research

Dr. Lisa Spanierman
Arizona State University

Good morning. First, I would like to say thank you to director Shimokawa, the Institute of Global Concern, SSRI, the conference organizers, the translators who I realized have a heavy-lift today translating all of the talks, and especially to professor Deguchi, who I learnt is the Peggy McIntosh of Japan. I was delighted to learn this, and thank you, professor Deguchi, for your kindness and for inviting me to present today at the conference. The conference program looks outstanding with the diverse range of innovative presentations, and it is my sincere honor to be with you all today.

I was asked to speak very slowly, which I hope is not too difficult for me as I am from New York, and we tend to speak very quickly in New York City. I will do my best.

My interest in racial microaggressions, similar to professor Deguchi, was inspired by Dr. Derald Wing Sue when I first heard him deliver a talk on the topic at a conference much like this. His theory was sharp, clear, and meaningful. When he completed his talk, I ran out of the conference hall to call my colleagues and tell them the news. I knew at that moment that I must conduct research on this topic. At that time, I was a part of an interdisciplinary research team at the University of Illinois in Urbana-Champaign, where I was an assistant professor. The university had just discontinued its racist athletic mascot, an American Indian caricature named Chief Illiniwek, and many people across the state of Illinois, mostly white people, were furious about its discontinuation. So, my research lab partnered with a scholar of American Indian studies, who is an expert on these athletic mascots, and together we analyzed 1000 pages of weblog data using professor Sue's microaggressions framework.

We published this piece in 2011 and to date it is one of the very few studies that focuses on the perpetrators of microaggressions rather on the targets. Around the same time in 2010, I moved to McGill University in Canada and formed the McGill Diversity and Equity Research Lab. I attended a town hall meeting with the principal of the university, and I noticed that students had much to say about subtle forms of racism on campus, but they did not yet have the language of microaggressions. Professor Sue’s theory had not yet crossed the border into Canada. My team was fortunate to obtain grant funding from the Office of Student Life and Learning to examine microaggressions on campus. We partnered with the First Peoples' House and the Social Equity and Diversity Education Office and together we had a robust team of faculty, staff, and graduate and undergraduate students. We conducted 15 focus groups and examined students’ experiences with racial, religious, gender, and sexual orientation microaggressions across campus.

In addition to publishing a number of studies from these data, we presented our findings to campus leaders in administration, in athletics, in Residence Life (student housing), and other offices across the campus. And our work really had an impact on day-to-day operations. For example, Residence Life created a new position to focus on anti-oppression in the residence halls, where the first-year students were living. And even today, while I'm teaching doctoral students and master of counseling students at Arizona State University, students are always struggling to see how research is a form of social justice activism. I was so proud of my team of students and staff at McGill that effectively translated this empirical work into social action on the campus.

In this talk, I draw primarily from two key sources: one, you've already heard about this morning and it is the second edition of *Microaggressions in Everyday Life*, that I co-authored with Dr. Derald Wing Sue. It was just such a joy and an honor and a pleasure to work with him and learn from him on the project. I also draw from a recent article co-authored with Dr. Tony Clark, the scholar of American Indian studies, whom I mentioned earlier, and my doctoral advisee at ASU, Yeeun Kim. In this article, we review the racial microaggressions literature from 2007 to 2020. This literature review builds upon Dr. Gloria Wong and colleagues' earlier work in 2013, in which they reviewed 73 articles. And in our review, we review over 130 empirical articles on racial and ethnic microaggressions. I was so delighted to learn that there is a Japanese translation of the first edition of the microaggressions text. Dr. Sue provided such an important foundation, on which to start a program of research, especially in a new national context, which is exactly what we did at McGill University in Quebec, Canada. We introduced the theory to a new national context, relying on that first edition of the text and the analytic framework.

**Slide 1: Overview**

And so, looking now at this overview slide, here are the key areas that I plan to cover today. I will speak a little bit about definitions and trace the theory of microaggressions from Chester Pierce to this contemporary moment. I'll describe the taxonomy of targets' experiences that is deeply grounded in the qualitative research that Professor Deguchi mentioned for the first wave of research that features targets and participants' voices. I also will focus on the impact on health and wellbeing, briefly, just to give you a sense of the research on the psychological and physiological effects that have emerged in the last decade. I will cover the latest on coping and resistance strategies, namely collective self-protective and resistant forms of coping. I will offer a very brief comment on microinterventions, but I know that we are saving that for tomorrow's keynote address. Finally, I want to share with you my team's ideas on future research directions and where we think the field needs to go.

The term microaggression emerged and originated in the work of Harvard University professor Chester Middlebrook Pierce. He was a professor of psychiatry and education. Through a series of studies during the 1970s, Pierce introduced the term "offensive mechanisms" to explain the conscious or unconscious subtle blows that are delivered incessantly by white offenders during interpersonal interactions with Black individuals. He called these subtle blows "microaggressions." He was observing these in the medical or hospital context and noted that these microaggressions were associated with greater disease and higher mortality rates in Black communities than in white communities.  So, in many ways, his work in the 1970s was groundbreaking and set the stage for much of the work that we've been doing in the new millennium.

Next, it was in 2000 that Daniel Solórzano and his colleagues extended this work. They worked in the higher education context and defined the racial microaggressions as "subtle insults, verbal or non-verbal, directed toward people of color, often automatically or unconsciously." And, for those of you who are familiar with more contemporary notions of microaggressions, this probably sounds very familiar. It is easy to see the direct line tracing through these scholars' work. Many of you likely are aware that Derald Wing Sue and his lab reintroduced microaggressions in a widely-cited *American Psychologist* article in 2007. Their framework in that article formed the basis for his 2010 text, *Microaggressions in Everyday Life*, and set the stage for hundreds of subsequent research investigations. Their initial framework included microinsults, microinvalidations and microassaults. And I'm going to say a bit about each here.

Microinsults refer to verbal and nonverbal communications that subtly convey rudeness or insensitivity and demean a person's racial heritage or identity. They are insulting, they are demeaning. Microinvalidations are also subtle, and they communicate subtle messages that exclude, negate, or nullify the thoughts, feelings, or experiential reality of a person of color. And microassaults are a little bit different. They are conscious, deliberate, and intentional actions or slurs such as using racial

epithets. Because they are conscious and deliberate, the perpetrator may intend to cause harm when delivering microassaults. There is a key distinction such that microinsults and microinvalidations are subtle and sometimes invisible, especially to the perpetrator, whereas assaults are not. And, as you might imagine, much of the microaggressions research has focused on the more subtle types: the insults and the invalidations, because they are differentiated from commonplace, blatant, and overt racism.

Sue and colleagues defined microaggressions in 2007 as “brief and commonplace verbal or non-verbal indignities targeting people of color.” Most often, they are subtle and unintentional and invisible especially to the perpetrator. While one of these microaggressions occasionally may not be considered to have major effects, unfortunately, and the research documents this, microaggressions are experienced frequently and consistently resulting in harmful and lasting effects on targets. Research has identified cumulative, negative effects. As I will describe in the next slide, drawing primarily from the United States and Canadian contexts, white people cannot be targets of racial microaggressions. However, white people in those contexts can be targets of gender, sexual orientation, and other forms of microaggressions. So just to be clear, members of a dominant group can be perpetrators but not targets.

After the publication of Professor Sue's initial work and also Professor Wong’s literature review in 2013, university campuses in the United States began to implement programs to mitigate microaggressions on campus. And a host of criticism ensued, most often from white male faculty who did not want to be held accountable for things that they said or did (e.g., delivering microaggressions to students of color). While I am not going to detail all of the criticism in the literature here, I will tell you that both Professor Sue and Professor Monnica Williams, who you will hear from tomorrow, published incisive pieces in response to the critics. And I recommend that you find and read those, as they are outstanding. But here, I discuss just two areas that warranted further articulations that my colleagues and I addressed in our review article.

First, some have wondered if “micro” refers to a *small* measure of harm. When I delivered presentations on the topic 8, 9, 10 years ago, students of color in the audience would raise their hand and say “Why is that micro? It sounds pretty macro to me.” And what they were saying was, these microaggressions were a big deal. These weren’t small little cuts, and some of them had significant impact. To address this concern, in the second edition of the book, Dr. Sue and I clarify that micro in no way refers to a measure of harm. Instead, the term micro highlights how microaggressions arise during interpersonal moments in microsystems between a perpetrator and a target.

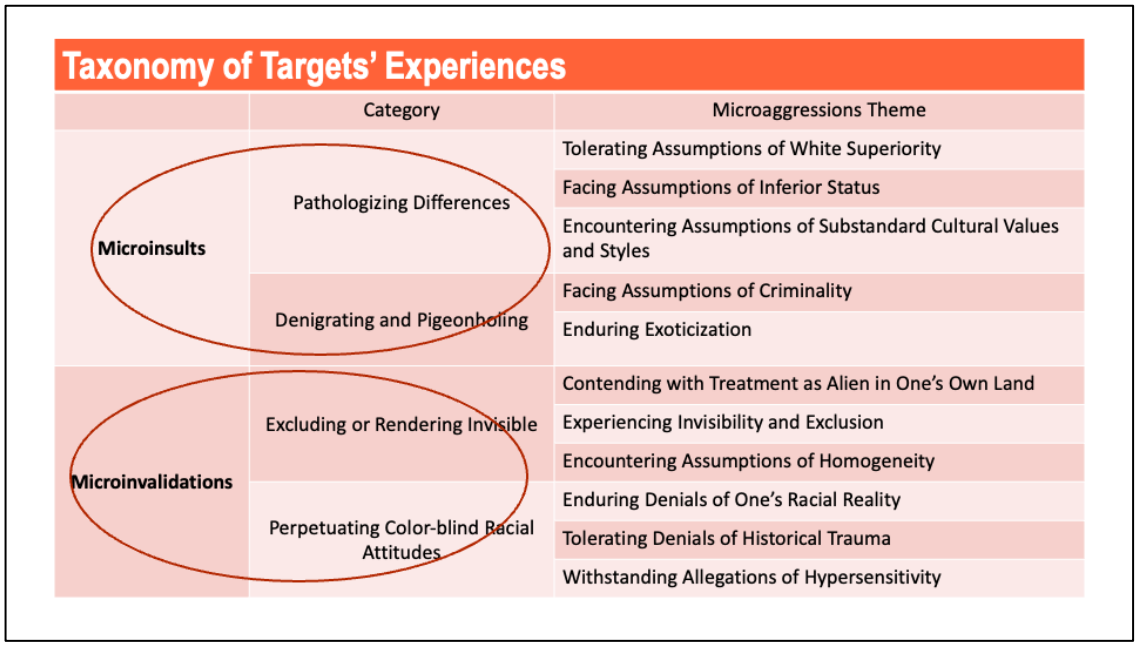
Drawing from Bronfenbrenner’s ecological model, “micro” refers to the micro-level context, the microsystem in which interpersonal interactions take place. Importantly, and perhaps not as well articulated in earlier writings, these interpersonal moments exist in a larger macro-system of

white supremacy. And to clarify this point, my colleagues and I draw from social anthropologist, Professor Philomena Essed's work on everyday racism. She has explained that racism is never a singular individual or a singular institutional problem but rather it is a multidimensional experience that comprises both. So, we are urging future researchers to think critically about the interpersonal interaction in the microsystem within the larger context of oppression in the macrosystem. This helps us understand why a white person cannot be the target of a racial microaggression.

Second, another criticism that has emerged in the literature has to do with the term "aggression." Critics have argued that microaggressions are not really a form of aggression, because the person delivering the microaggression oftentimes did not intend to cause harm. And I know you will have the pleasure of hearing from my colleague Dr. Monnica Williams tomorrow when she discusses microinterventions. I also want to let you know that she has conducted important empirical research that shows that racial microaggressions are aggressive even when intent cannot be established. I refer you to her 2021 article in *Behavior Therapy* where she shows positive and significant correlations between microaggressions and various measures of aggression, with *r's* ranging from 0.36 to 0.46, so, moderate to large correlations.

Additionally, psychologists Archer and Coyne, in 2005, published a review of literature on manipulative aggression. In this review, they demonstrated that indirect relational and social aggression all have the capacity to exclude others, harm others' reputations, and cause distress whether or not there was any intention on the part of the perpetrator to do so. So, now, drawing from more than a decade of targets' reports, my colleagues and I clearly view microaggressions as one form of manipulative aggression. Racial microaggressions therefore are a form of aggression that reproduce white supremacy in interpersonal moments between a white perpetrator and a target of color. White people may not intend to insult or invalidate targets but nevertheless they often do so.

Now I'm going to shift to the taxonomy of racial microaggressions that was gathered from qualitative research.



**Taxonomy of Targets' Experiences**

| | Category | Microaggressions Theme |
|---|---|---|
| Microinsults | Pathologizing Differences | Tolerating Assumptions of White Superiority |
| | | Facing Assumptions of Inferior Status |
| | | Encountering Assumptions of Substandard Cultural Values and Styles |
| | Denigrating and Pigeonholing | Facing Assumptions of Criminality |
| | | Enduring Exoticization |
| Microinvalidations | Excluding or Rendering Invisible | Contending with Treatment as Alien in One's Own Land |
| | | Experiencing Invisibility and Exclusion |
| | | Encountering Assumptions of Homogeneity |
| | Perpetuating Color-blind Racial Attitudes | Enduring Denials of One's Racial Reality |
| | | Tolerating Denials of Historical Trauma |
| | | Withstanding Allegations of Hypersensitivity |

**Slide 2: Taxonomy of Targets' Expressions**

While this table (referring to slide) is rather detailed, I do not want us to get stuck in the details. Rather, I am sharing this table with you to give you a sense of what we wrote about in our 2021 literature review. One of our primary goals was to review all of the qualitative research published from 2007 to 2020 to categorize the themes that have emerged and to further develop Professor Sue's taxonomy of microaggressions. In the third or the right-hand column, I provide a small sampling of some of the themes that have emerged in qualitative research.

In our review article, one of our goals was to change the wording in the themes, which differed across all of the investigations. We wanted to feature targets' perspectives and focus on what they must routinely encounter, tolerate, and endure on a daily basis. We sought to privilege targets' perspectives in the way we titled the themes.

We also sought to identify whether particular racial and ethnic groups experienced particular racial microaggression themes more often than others. And we did find some group differences and those are all detailed in the article. I can provide an example from the United States' context. We found that across studies Black participants more frequently reported facing assumptions of criminality than other racial groups. And when you think about the way Black people are portrayed in stereotypes as criminals or thugs in the United States' media, it makes sense that in that macro-context of white supremacy, these are the kind of things that are being expressed in interpersonal moments and interactions. Again, this emphasizes the interplay between the micro-system and the macro-system that Philomena Essed so brilliantly articulated in the early 80s.

Additionally, we sought to chunk these themes into four superordinate categories. And from our reading of the literature, we identified these four categories that seem to capture most, if not all of the themes in the literature. These four categories are listed in the middle column of the table.

Then finally, we placed these four categories in a conversation with Sue's microinsults and microinvalidations. So, you can see how *pathologizing differences* and *denigrating and pigeonholing* (or forcing somebody into a rigid category) reflect microinsults, whereas *excluding or rendering invisible* and *perpetuating color-blind racial attitudes* reflect microinvalidations.

I'm going now to focus briefly on the microinvalidations to elaborate a little bit. I won't go through the entire table but will highlight select themes. I also want to point out that the perpetuating color-blind racial attitudes draws heavily on the work of my colleague Dr. Helen Neville. She has had such a large influence on my professional development, and I'm just so thankful for her work. If you're not familiar with her scholarship, I encourage you to review Dr. Helen Neville's work on color-blind racial attitudes or color-blind racial ideology.

The superordinate category *excluding or rendering invisible* refers to microinvalidations that negate or nullify targets' experiences. Targets may feel ignored, dismissed or invisible. "I don't see you." This might be a person of color being ignored at a restaurant or a shop or, as the picture suggests, excluded from social groups at work or school. In one of our focus groups at the university, a young woman, who asked to be called by the name of Sara in our research, was a student in a small undergraduate seminar on comparative religion. Sara explained that on the first day of class the professor went around the room asking everybody to introduce themselves, and he skipped over her and completely ignored her. Here is a quote of something that she said to us. Sara said, "Did the professor intentionally miss me? I am the most different one in the room. I am the one wearing a hijab. I am the one who visibly catches your eye. I'm sorry but you have to try hard to miss me." And these kinds of incidents, we heard about them over and over from Muslim Canadian university students. This feeling of being excluded or treated as invisible really took a toll on the participants.

Another theme in this category that emerged across many studies is contending with treatment as alien in one's own land. And this came from Professor Sue's early research around 2005 to 2007. The hidden message is "You don't belong here." And this is regardless of how many generations your family has lived in a country. So, in the United States, we often see this among Latinx families or Asian American families, even if they are third generation. And I suspect that, in the Japanese context, there is a group or groups who also may have been in Japan for generations but are still viewed as alien, foreigners, or outsiders.

Another example of excluding or rendering invisible pertains to encountering assumptions of homogeneity or the assumption that you are all same, which is a form of denying one personhood.

Then the other superordinate category, the second microinvalidation category, is *perpetuating color-blind racial attitudes*: denial, distortion, and minimization of race and racism. This picture, if you can read it, it's from a project #ITooAmHarvard where in Harvard students documented their experiences with microaggressions on their campus. This young woman highlights a typical microaggression that fits in the color-blind racial attitudes category. She writes “I don't see color.” In the United States very often white people think is a positive thing to not see color. But then she highlights underneath that how her own experiential reality is denied. She writes, “Does that mean you don't see me?”

We also see several themes pertaining to the denial of the existence of racism. “There is no racism anymore,” “racism as a thing of the past,” or perpetrators locate racism in individual extremists like a white supremacist rather than acknowledging how it is embedded in the societal structures and institutions and something that people of color have to contend with on a daily basis. A related theme pertains to withstanding allegations of hypersensitivity where somebody makes a racist slur or comment, the target says “Hey, that wasn't cool” or “Ouch” or “Don't say that.” and the reaction from the perpetrator is “Don't be so sensitive.” Or a bystander might say “Don't be so sensitive, he was just making a joke.” This is very common in our research on both U.S. and Canadian university campuses.

I’ll pause there. There is a lot more we could say about the taxonomy but for now I think I’ll leave you with just a little bit so that I can move on briefly to discuss the impacts on health because there's been quite a bit of empirical research that has begun to show a link between microaggressions and various health outcomes. This work is very important because critics also argue that there was no research to document the harm of microaggressions. Much of the empirical research shows the psychological impact, and I will provide some examples of mental health effects from several studies. There are dozens of publications in the literature now that document these sorts of negative mental health outcomes.

One is decreased self-esteem. We see a direct link from microaggressions to decreases in both individual, global and collective self-esteem. Another is stress and anxiety. We also see post-traumatic stress and trauma as a negative outcome from racial microaggressions. There are even books that talk about the effects of trauma. Ample research has documented depressive symptoms and even suicidal ideation. There have been direct links in the literature from research conducted by Hollingsworth and colleagues.

My colleague, Professor Anthony Ong at Cornell University and his team have been investigating some of the physiological or physical impacts of racial microaggressions. They've used really innovative methods doing daily diary studies so they could make causal links between the

experience of a microaggression and then some sort of a symptom. In their initial study in 2013, which I believe Professor Sue was a co-author with Professor Ong, they found the link between microaggressions and a variety of somatic symptoms such as headaches, backaches, and nausea. If any of you in the audience have a marginalized or minority identity with regard to ethnicity, gender, sexual orientation, religion, you may be thinking of some of these somatic symptoms that you have experienced when you encountered such microaggressions.

Ong and colleagues also did some work examining sleep duration and quality, and in 2017 found that indeed racial microaggressions had a negative impact on sleep duration and quality.

I encourage you to look at our literature review article if you're interested in the health outcomes literature because we provide all of the citations in the article, and you can do some further research to understand the influence of microaggressions on one's health. Another promising area of study investigates mediators and moderators of the link between microaggressions and health outcomes. As good counseling psychologists like to do, we try to identify protective mechanisms that help to disrupt that link. Thus, some of the quantitative research has employed these coping and resistance strategies as moderating variables to show how to protect oneself from the negative effects of racial microaggressions.

For this talk, I will focus on some of the really powerful qualitative research by two scholars, Dr. Jioni Lewis and Dr. Sara Houshmand, in the area of coping and resistance. Sara was my student when I was a professor at McGill University. So, it's so great to see her publishing her work now in this area. This came out of her dissertation research. Dr. Lewis is working in the United States and has focused primarily on Black women. She has been exceedingly innovative using an intersectional lens to explore gendered racial microaggressions. She examines the intersection of gender and race and how interlocking forms of oppression look different and may have different effects than just looking at one or the other alone. Dr. Houshmand has focused on participants in the Canadian context from diverse racial backgrounds both in higher education and also among community samples. Their findings were similar, such that collective coping was a powerful way to deal with experiences with racial microaggressions. Specifically, their participants sought connection and support from family, from friends, from their own racial community. Targets coped by establishing personal and professional networks for support. So, on campus this looked like campus cultural houses like the First Peoples' House at McGill University and other student organizations that were designed to provide support and a safe haven for students from certain racialized backgrounds on the campus.

In some of Dr. Houshmand's interview data from community participants, we have someone named Amanda, a pseudonym, who is a woman from the Caribbean, a Black Canadian woman. She discussed seeking support from a local community center. She said "Coming here to this

community center for racialized woman like me, I try to let out as much as I can. I've heard other people complaining they help me to come out and not think about it alone." So, there was really something in this togetherness for Amanda that provided a strong source of support and helped mitigate the effects of racial microaggressions.

Research participants also identified self-protective forms of coping which were nuanced. Participants reported engaging in self-care activities, such as taking a bath or going for a hike or whatever activity had a self-soothing effect for the participant. Several participants across studies invoked culturally relevant practices, such as creating Indigenous artwork, relearning native languages, writing and performing songs about human rights for one's group, or reading books written by members of their racial and ethnic group. Others reported engaging in spiritual practices or organized religion as a form of self-protective coping with microaggressions that gave them strength. Others found ways to avoid, disengage, or desensitize themselves from the perpetrators' onslaught of racial microaggressions. Some scholars have criticized this as a pathological or an unhealthy form of coping but counselors and therapists long have known that setting boundaries, picking and choosing one's battles, and disengaging oftentimes can represent healthy forms of coping.

Then, the last form of coping that they described and provided evidence for is the practice of resistant coping, which involves targets who engage in active strategies to combat racial microaggressions. In response to feeling invisible, which I described earlier, some targets have made conscious choices to challenge white Eurocentric normative behaviors. In Dr. Lewis's research, for example, she found that some of her Black women participants chose deliberately to wear their hair natural as a way to push back on white norms. Participants also used humor as a non-threatening way to confront racial microaggressions and to confront perpetrators especially in school and the workplace. For some people that was an extremely effective strategy.

In our research in Canada, we found that targets anticipate stereotypes before they happen and they counter them with preemptive behaviors. Because there were stereotypes on campus that Asian Canadian women were not social and were under strict parental control, participants reported that they made extra efforts to attend parties and social events and to go out to bars to challenge these stereotypes. In another example, African Canadian students worked twice as hard as their white counterparts in their course work to score at the top of their class and defy stereotypes of Black people having low intelligence.

Across several studies, targets called out perpetrators. They named microaggressive behaviors, and they educated perpetrators on their inappropriate behaviors. In one of Dr. Houshmand's focus groups, she learned that African Canadian community members routinely called out police officers and security guards for racial profiling. And you may hear more about this from Professor Williams tomorrow, but in the book *Managing Microaggressions* that was featured earlier, she warns

us that challenging perpetrators directly can be fraught with risk and danger. So this is very important to keep in mind there's a time and place to confront directly and there are other times to withdraw and disengage. And that's very consistent with Dr. Lewis's findings and Dr. Houshmand's findings on picking and choosing one's battles.

Because my colleague will deliver what I am sure will be an excellent talk tomorrow on microinterventions, I won't discuss it now but I just wanted to bring forth both Professor Sue's and Professor Williams' work in this area and recommend their excellent books that I'm featuring here: *Microintervention Strategies: What You Can Do to Disarm and Dismantle Individual and Systemic Racism and Bias* from Professor Sue and colleagues and Professor Williams' book on *Managing Microaggressions*.

You will learn that they discuss these strategies for targets but also for allies and bystanders which is a really important addition to the literature.

Now I'm going to move on to how my colleagues are thinking about future research directions based on what we learnt from our review of literature.

While the first wave of research clearly was qualitative, and some critics have discounted qualitative accounts from targets of color, we believe accepting targets' experiential reality as real is paramount to racial microaggressions theory. Thus, my colleagues and I would argue that *more* qualitative research, not less, is needed to refine the themes further. There is also a need to expand research populations and racial and microaggressions research, as important racial and ethnic groups have not yet been addressed in the literature. Additionally, we urge researchers to consider disaggregating ethnic groups. For example, in the United States, instead of putting all the Latinxs together in one group, it might be important to understand specific groups such as Mexican Americans or Puerto Ricans. We think there's a value in both aggregating and disaggregating the data.

Because much of the research to date has been conducted in the United States and Canada, future research should explore the phenomenon of microaggressions in different national and cultural contexts.

Following Dr. Jioni Lewis's research on experiences with gendered racial microaggressions among black women, there also is a need to explore other intersectional forms of microaggressions. I am aware that Dr. Brian Keum at UCLA and colleagues have developed a gendered racial microaggressions scale for Asian American women. Researchers might also consider other intersecting social identity groups such as sexual orientation and gender identity.

Additional qualitative research could help refine measures that operationalize microaggressions themes. And better measures, ultimately, will create more robust quantitative research. Perhaps instrument development might be guided by our revised taxonomy that features the four superordinate categories that my colleagues and I identified in the literature.

Additionally, we certainly think that researchers should continue the excellent research that explores the link between microaggressions and health outcomes and continue examining mediators and moderators on this link to identify protective mechanisms. My colleagues and I recommend, for example, a greater focus on moderating effects of collective forms of coping which has been crucial in qualitative reports.

Another crucial area involves research for prevention and intervention. I think that Dr. Sue's recent work on microinterventions offers a wonderful theoretical starting point for studies that examine facilitating and hindering factors for targets, bystanders, and allies to disarm microaggressions. Developmental scientists might seek to understand waves that parents and schools, for example, as a preventive approach could socialize white children or dominant group members to be aware of microaggressions and prevent targeting children of color with demeaning insults and invalidations. And finally, we need to conduct *in vivo* intervention research that examines institutional programs, practices, and policies. We need to test the interventions that are already in existence on university campuses that have been criticized in the literature and popular media.

The last thing I'm going to discuss today, just very briefly, are microaggressions across the globe. I've been very fortunate to be part of an international and interdisciplinary research group that is linked to the Center for Interdisciplinary Research (ZiF) at Bielefeld University in Germany. I was a research fellow at the university at the ZiF, and I've partnered with the famous European social psychologist and prejudice researcher, Professor Andreas Zick.

Together we're working with colleagues across the globe to understand manifestations and expressions of microaggressions in different national contexts. And many of the people that I featured today, Professor Sue, Professor Williams, Professor Lewis, Professor Ong, Professor Houshmand, are all members of our team. We also have a growing membership of European researchers who are investigating microaggressions in the UK in the context of sport and recreation and in Germany, in Australia, in Turkey, and I am delighted to say that professor Deguchi is going to join our team and share her ideas and scholarship on microaggressions in the Japanese context.  I suspect that this weekend's conference will play a central role in establishing that. We hope that our group will meet together in person this June, but of course it depends on what the pandemic decides to do. I think we will have exciting discoveries as an interdisciplinary and international research team in the coming years to share with you, as we consider microaggressions and microinterventions globally.

I want to thank you all for your time and attention. And I wish you a wonderful conference this weekend.

The 41st IGC-SSRI Joint International Symposium

December 4th, 2021

# Keynote Presentation 2
# Reducing Microaggressions:
# Research on Interventions and Promoting Interracial Harmony

Dr. Monnica Williams
University of Ottawa

Thank you very much for that lovely introduction. I'm going to go ahead and share my screen so that you can see my slides.

Hopefully that's all coming through properly for everyone. It's really wonderful to be here. I wish I could be with you in person. I understand, of course, that that wasn't possible, so it's the next best thing. Hopefully, next year, I can actually come to Tokyo.

My presentation today is reducing microaggressions, research on interventions and promoting interracial harmony. I want to just briefly touch on my major research areas. Most of the work that I do is in these areas of microaggressions, for sure. That's a big part of my work as well as the related area of racial trauma, which just means trauma symptoms people get from experiences of racism. Cultural competence including helping to train therapists so that they can provide culturally informed therapy to their clients. I also do research in psychedelic therapies; this is an emerging approach to mental health which is a combination of biomedical and psychotherapeutic approaches which I want to make sure are available to people of color as the research is being finished on those. What you'll see is that all of my research areas are under this umbrella of mental health disparities with the emphasis on racialized populations.

Now, before we can talk about microaggressions, it's really important to define racism because many people think they understand racism but, in fact, it's a complicated topic and there are many types of racism and there are many layers to racism. And so, I'd like to just explain that certainly we do have old-fashioned racism which I think everybody understands. This is a kind of racism where people would just say that they hate you just because, just because you look different. In the United States we have White nationalist groups that are racist, and you might have heard of the Ku Klux Klan and other terrorist-like organizations that dedicate their energies to harassing and harming people of color. And certainly, that is a form of racism, but that's not the only form of racism, and some would argue that that's not even the most serious type of racism because racism is more subtle in most cases, it's more hidden, and it's covert.

Some of the types of racism that we struggle with today include what's been termed symbolic or modern racism and this is where people may embrace stereotypes about people of color. For example, they may believe that Black people are morally inferior to White people and we have aversive racism where people may not say that they have these beliefs but they may actually say that

they think everyone is equal and they love everyone the same, but they still act in ways that are racist.　And this may be conscious or unconscious.

And then, we have microaggressions which are often the expression of this racism, of these more covert types of racism. And I don't need to define microaggressions, I hope, but I will anyway, but I know we've been talking about that all weekend. Microaggressions can include patronizing statements and backhanded compliments.

And then finally we have structural racism which is the racism that's baked in everything, it's baked into our policies and into our procedures. And so, you can have racist outcomes without anybody having racist conscious intent. Racism doesn't have to be intentional, people can enact racism without meaning to or just doing the things that they learnt growing up that they think are proper ways of treating people from other cultural groups but that are racist. And so, if we focus on intention, then we miss racism because intent is not necessary to perpetrate racism. And most people would say that they're not racist even when they do racist things.

I didn't mention on my list systemic racism because racism is by definition systemic. What I mean by that is that it is structural, so again it's baked into our rules, policies, and procedures, it's in our institutions, in the procedural ways that things are done, it's environmental as well. For example, perhaps disproportionate placement of hazardous materials near minoritized communities while protecting White communities will be an example of environmental racism. Or we have a problem in Canada right now where many indigenous communities have unsafe drinking water and believe me if that was a problem in a wealthy neighborhood in Ottawa, well, that would have been fixed yesterday. But we have the problem in indigenous communities because they are disempowered groups. So this is how it works.

Now, when it comes to understanding racism, White people in U.S. society and it's also true in Canada and many Western nations, too, we have a divided prospective where people tend to believe that racialized groups are doing well in life, that racism is no longer an issue, and discrimination is declining. They personally believe that they are not capable of racist behaviors.

And they believe that they are not personally capable of racist behaviors. Now, people in racialized groups, on the other hand, are confronted with daily acts of racism. Often from these very people who don't think that they're capable of racism, and so they have a very different reality. White people tend to limit their definitions of racism to blatant intentional overt acts, as I pointed out, few people who commit racism will say that it was intentional. They will never admit they wanted to harm anyone.

Even good people can enact racism. Even people who don't like the idea of racism can occasionally do racist things without realizing it. And so, acts of racism are often overlooked by those who don't experience it.

Now, sometimes I hear people say, “Oh, well, you know, White people are experiencing so much racism now” or “White men are suffering due to ‘reverse racism’”, which I put in air quotes because it's not really a thing. It doesn't really exist.

The reason I can say that is because I'm a scientist so I’m looking at data. And, if we compare, for example, Black and White Americans as far as we can tell by every economic and social indicator, White Americans are doing much better, Black Americans are doing much worse. As far as we can tell, there's no evidence that White people are suffering individually from racism. Even though certainly anybody can experience an act of discrimination, unkindness, or hate from another person, that’s very different from racism which is systemic.

Now, microaggressions as a form of racism are important. One of the questions that I put out there is why should clinicians care about microaggressions? I'm a psychologist. I want to speak for a minute about why I decided to study microaggressions.

When I graduated from the University of Virginia, I went on to the University of Pennsylvania, working in a research lab doing important scientific studies. I studied OCD and PTSD and we did randomized controlled trials to figure out the best treatments so that we can come up with these protocols and manuals so that therapists would know the best way to help clients who had these problems. But one thing that became evident to me is that we have clients with minoritized identities coming in for therapy, if the therapists are committing microaggressions, then those clients don’t want to come back for help. So, they may end up suffering for the rest of their lives with a very treatable condition. I thought to myself, “What good is it if we have these wonderful treatments but people aren’t getting them because the therapists don't have the right training and they're not able to treat the people in a way that they feel is respectful?” So, I realized, this is something that is on us as clinicians that we have to fix. This is our fault, this is our problem. This is what we need to do to make sure that people are getting the care that they need.

There are some serious, actually, mental health consequences of microaggressions even beyond the fact that they can be a barrier to care. Research continues to show, the mountain of data is growing, that mental health disorders can be worsened or even caused by the experience of microaggressions (or *everyday racial discrimination* which is almost a completely overlapping concept). You can see from this list, I won’t read everything here, that there are many problems there that we as clinicians are concerned about, that are linked to microaggressions.

Now, as I alluded to, microaggressions do impact care. So, even though racial categories are socially constructed, in other words, the racial groups are just made up. You know, the census bureau decides them. They don’t predict anything important biologically but they still have real consequences for those who are racialized. This may be doubly true for those with multiple marginalized identities. They result in compromised patient care and mental health disparities and

they’re a major barrier to establishing a strong therapeutic alliance with patients of color who, again, may not return for follow-up visits or not follow treatment recommendations if they feel disrespected by their clinicians. When these things happen in clinical encounters, people of color may not know how to respond due to the self-doubt in the medical power differential. If they already have trauma due to the racism, this would be compounded by experiencing microaggressions from therapists who they may be seeking for help with that very problem.

So, here’s a diagram adapted from Penner and colleagues that shows how microaggressions can lead to ethnic disparities in mental health. So, we already know that persistent discrimination, in and of itself, can cause physiological and psychological stress leading to mental health problems. But we also have this other factor at the bottom here: clinician biases, stereotypes, implicit biases. These are enacted as microaggressions which cause disparities in clinicians’ decision-making, so clinicians may have false ideas about people of color because of the wrong stereotypes they hold. So, they make mistakes and they prescribe wrong things leading to ethnic mental health care disparities. And, we also have disparities in clinical communication which means that when they talk to the patients, they're not speaking to them in a way that makes them feel understood or cared for. That causes negative reactions which, as I pointed out, makes them not want to come back, leading to ethnic mental health care disparities, leading to ethnic disparities in mental health.

Additionally, microaggressions can cause trauma. Racist incidents are traumatic and they affect survivors in ways that are analogous to the effect that rape and domestic violence have on victims. These acts are a violation of an individual's personhood. The person feels disempowered or powerless to do anything about it. The events are unpredictable and uncontrollable and may be challenged, ridiculed, or dismissed by others when people try to bring attention to it. Particularly, microaggressions which many people feel are small and harmless, but they're not. The reoccurring violence of microaggressions is similar to bullying or sexual harassment and that these are humiliating things that are happening over and over, you don't know when they're happening, and they start to accumulate and take a toll. Some people have even speculated that subtle acts are worse than overt acts because at least with the overt act, if you tell somebody they're going to give you sympathy and they may offer to help you, but with the small acts, people might say, “Oh, don't think about it.”

But research shows, including our own research, that all types of racism contribute to traumatization, including everyday discrimination, including major discrimination over the lifetime, including general ethnic discrimination over the lifetime, and including microaggressions. Our most recent study on this shows that all of these were similar in their contribution towards traumatization. So, bottom line, even microaggressions can be traumatizing. Let me show you where they fit in when we talk about trauma.

One thing that we know about trauma is that it is cumulative. Most people think about post-traumatic stress disorder as a problem that somebody gets after one very shocking, upsetting experience but research shows that usually one experience does not result in PTSD. It’s usually multiple experiences. So, people in racialized groups already usually have cultural and historical trauma as a layer of stress. Then, on top of this, you have microaggressions or everyday racial discrimination, which is another daily stressor. And then, there may be a traumatic event. It may be a large event like somebody losing their job due to racism or could be a small event like being questioned by police when you're out jogging.

But at some point, the stress becomes so great that it passes the threshold of stress and tips over into trauma and the person is traumatized. When they try to talk to others about it, other people don't understand if they're not minoritized themselves. The person may be met with invalidation which compounds their stress even more. And then, when they try to get help for it, what they may end up finding is they run into structural racism in terms of barriers to care. They cannot find a clinician who understands their problem or maybe they want a therapist of their own ethnic group and that person isn't in their community, that person does not exist because those folks can't even get into universities, or the person, because of their marginalized identity is low income and doesn't have money for treatment. And so, this, again, compounds the trauma.

Now, we did some focus groups of Black students at predominantly White universities to better understand their experiences of microaggressions. We did focus groups in Kentucky, at a large undergraduate University and then we did two focus groups in Seattle, one at the University of Washington and one at Bastyr Medical School. And I want to share a little bit of what the students told us about their experiences of microaggressions. This helped us to develop new measures to better understand microaggressions.

One of them describes the following event:

> We are alternating group leaders to lead discussions about a paper we read for the week. And it was kind of like this random thing, so I was excited when it was my turn to be the group leader because I was interested in the subject. I had spent hours thinking of, you know, thoughtful questions to talk about, and then nobody showed up to my group… There was like five different group leaders, and so everyone kind of dispersed to the other four groups and no one showed up to my group, and I was just in tears because this has happened my whole life. Like no one has ever wanted to hear what I had to say.

This was from a young African-American female who's an undergraduate student.

Based on the focus groups we conducted, we put together some categories of microaggressions and we compared these to the categories proposed by Sue in 2007. And, we found a lot of evidence that the categories that Sue came up with were correct. We had some minor

adjustments that we made to the categories based on our study and a review of the literature of other studies but they were pretty much the same. And I won't read all of these to you, but you can see the type of microaggression on the left and then an example of what that might look like on the right. Although I should point out that microaggressions are context-dependent and so, someone could say something that might be a microaggression in one case, might not be in another, although I tried my best to come up with examples that were almost always microaggressions.

I'd like to also point out that microaggressions are not always direct actions, they can be environmental. We have two categories of environmental microaggressions. These are things that maybe were set up in the environment a long time ago but they're still there and they're painful reminders of racism or of colonialism, and that certain groups find these decorations or exclusionary behaviors objectionable or offensive.

Now, from the focus group study, as I pointed out, we were able to confirm the categories that Sue had proposed and we wrote a paper just about the focus groups. And then, we wrote another paper about our exhaustive literature review. Those are available now in the literature describing the categories of microaggressions. What we wanted to do with this research was to expand as much as possible to help people understand it better. I know that there's also been research looking at how we can have fewer groups which I think is useful in some cases. But when I think about my work with clinicians and educating them about microaggressions, it's more useful for that purpose to have more categories because that helps people better understand and learn about microaggressions.

And as good behaviorists and scientists, we have to ask ourselves what is the function of a microaggression. Given that microaggressions have been around for a long time, at least since 1970 when Dr. Chester Pierce, a Black Harvard psychiatrist first defined them. They've been going on for a long time and nobody who receives microaggressions has been saying, "Oh yeah, we love these." So, why are they still happening? These are common, ambiguous, subtle, innocent, and unintentional behaviors that are racially motivated that go on to cause stress and anxiety and sometimes even trauma.

But what we cannot forget is also that these are socially learnt, unspoken means of establishing or re-establishing dominance. That's what racism is about at the end of the day and that's how you can identify microaggressions. Microaggressions communicate dominance or exclusion and with the negative stereotype as its basis. And we're going to talk more about that, too.

You saw in that example a White student asking a Black student with curly hair, "Can I touch your hair? Is it real?" and I should point out that this happens often to people of African heritage, who have their hair in natural styles. My hair is straight because I flat-ironed it today but it's not naturally straight. It will curl up with a little bit of water and sometimes people will say, "Can I touch your hair?"

We asked Black people, “Do you think this is racist if someone says ‘Can I touch your hair?’” and often they’re actually coming to touch your hair as they’re asking so it’s not even really a question. 43% said “No, that’s not racist.” but then, 30% said, “Well it’s possibly racist”, and 27%, over a quarter said it's racist: “Very or Somewhat Racist.” Even though not everybody thought it was racist, there was still a lot of people that had a problem with this. If you think about it, it's a very intimate act, touching somebody's head. You can touch a child's head or your partner, your boyfriend, your girlfriend, your husband but you don’t normally touch a stranger’s head.

And yet, this happens often to people of color with these curly hairstyles. We asked White students if this was something they might do. 12% said yeah, they might. They might say or do this, and you might think, “Well, 12% maybe that's a minority of people” but imagine you are at a party, that means if there's 10 people there, one of them might do this. So, this is going to happen maybe even frequently and if you don't like it if you're one of these quarter to two-thirds of people who do not want their hair touched or who think that’s racist or may be racist, that's going to make a disharmonious interaction out there.

And I should also point out that these racial microaggressions are not confined to any one area in the world. Just this week, the *Afrozensus* was released in Germany. This is the first national survey of Black Germans and their racial experience done by Black Germans, for Black Germans. Very very exciting. This report just came out. It’s 100 pages. Unfortunately, I cannot read it because it is in German, but my sister lives in Germany and she speaks German. She told me that it’s a very good report, so I hope they translate it into English soon. But there was this one little tidbit that she showed me where Black Germans were asked if anybody had touched their hair before, and 90% said, “Yeah, that's happened to me,” so they don't like it in Germany either.

But anyway, we are actually planning our own survey of Black Germans and the microaggressions they experience to build on the limited work that currently exists.

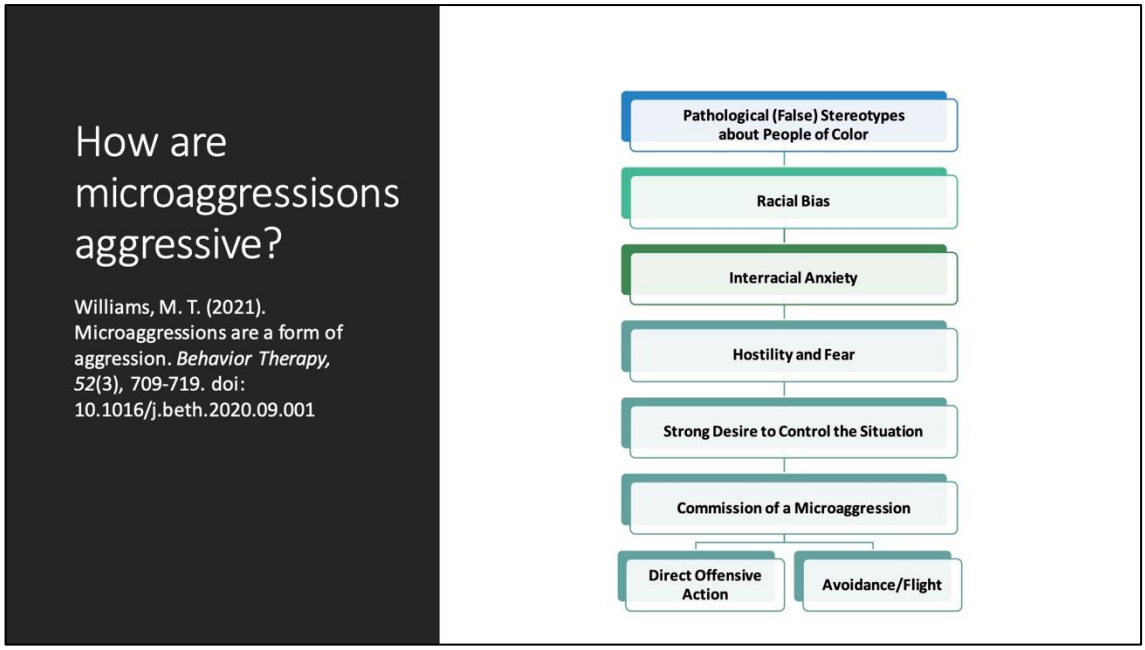
Now, when we talk about microaggressions, I have called them racism. You might be wondering “How do we know it's racism?" and some critics of the microaggressions research agenda have said, “Oh, we don’t really know that’s racism. How do you know it’s just not a cultural *faux pas*?” So, I said, “Well, I never really felt the need to prove that microaggressions were racism before” but I thought, “I could see why some people might think that this is not racism.”

So, we did a study and we looked at almost a thousand people. We gave them a measure of microaggressiveness, that’s this CCAS measure. We call it the *kick-ass* for short. It’s got four subscales on the right there: negative attitudes, colorblindness, objectifying, and avoidance. Those are the four subscales, but you can just look at the total score to get the point. We have all these measures of racism: the Colorblind Racial Attitudes Scale, the Symbolic Racism Scale 2000, the Modern Racism

Scale, we also have the Allophilia Scale -- you may not be familiar with the term, it means basically just the opposite of prejudice, it means you really really like the out-group -- and then, the Racial Feeling Thermometer which is a very pure measure of racism, just basically, “How much do you like Black people on a scale of one to ten?” where 10 is like you like them a lot so, that’s why this is negative. What you see here is every single measure that we looked at we found a very highly significant correlation between the propensity to commit microaggressions using this CCAS scale and these different measures of racism.

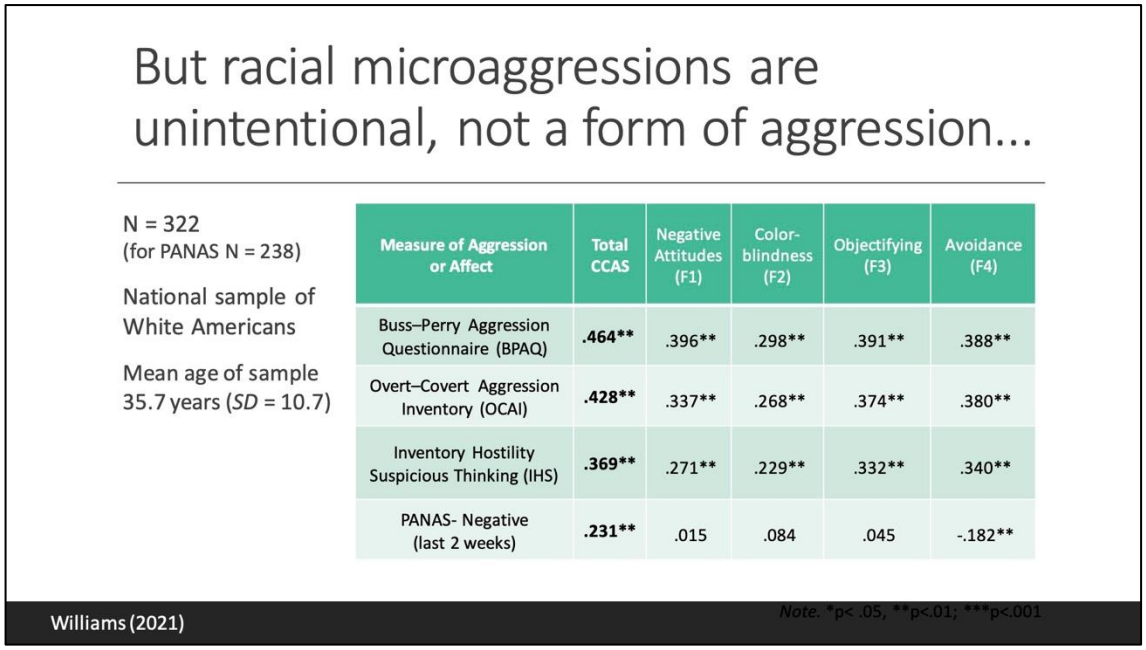
You’re probably wondering, “What's on that scale?” and that's whole another story because we had to invent this scale to measure how microaggressive people were. There's already a bunch of measures on how microaggressed you are. I could fill out a measure, I could pick half a dozen measures of microaggressions that happened to me as a person of color, but how do you measure microaggressions that other people do? So, we had to invent this measure, and these are the items that are on the different scales, although this isn’t the whole measure because each question has a scenario that goes with it. But for those of you who want to geek out on it, you can take a look at the items, and we ran them by Black people and we added diversity experts also who actually decided which items we would use. You can see that there’s a lot of agreement there. Basically, we define microaggressions, racial microaggressions specifically, as deniable acts of racism that reinforce pathological or false stereotypes about out-groups that reinforce inequitable social norms and power differentials and communicate exclusion.

Now, some people have said, “We should not call these microaggressions because they are not aggressive” and, again, I think that some people said, “Well, this is really splitting hairs.” They feel aggressive when they land on me, so that's good enough, right? But then, some psychologists, social psychologists, or people who study aggressions say, “No, we have very specific definitions of aggression and it means you intend to harm people and this doesn’t fall into that category so you shouldn’t call it aggression.” So, I said, “Okay, well, you know what? We can study this, too.” And, I went back, we did a big survey of people using that same CCAS scale, which is “How microaggressive are you?” and we gave them a bunch of measures of aggression too.




Slide 1: How are microaggressions aggressive?

This is my model of how microaggressions are aggressive. And then, I will show you the data. So basically, people have these false stereotypes about people of color or whoever the out-group happens to be and there are different types of out-groups in Japan as compared to what we see in the States. But there's these false ideas about these folks which results in bias. These biases are based on these false stereotypes. If somebody is in contact with one of these people who are in the out-group, they have this interracial anxiety because they have all these negative thoughts in their head about them which then bring about hostility and fear. Then, in the midst of this, what do people do when they feel hostility, fear, and threat? They want to control the situation. And that's what aggression comes from, a desire to control other people. In this case, through the commission of microaggressions which can be a directed offensive action, avoidance, or flight. This is my model for how it works. Let's see if it's true…




Slide 2: But racial microaggressions are unintentional, not a form of aggression…

Now, what we found was that when we correlated the CCAS to these measures of aggression, you can see we've got a gold standard measure of aggression called the Buss-Perry Aggression Questionnaire. We also included the Overt-Covert Aggression Inventory, which is actually a Japanese measure of aggression with the idea that perhaps aggression may be expressed differently in different cultures. We used the Inventory of Hostility and Suspicion of Thinking, which is a kind of measure of paranoia. It's sometimes used for people with thought disorder also. And then, the PANAS which is a Positive and Negative Affectivity Schedule for how people are feeling over the last 2 weeks which is just a kind of measure of bad mood more or less. We found, again, clear correlations. They were very robust and very highly significant. This whole affectivity piece, this PANAS, when we put it into a regression with the Buss-Perry Aggression Questionnaire, actually dropped out. And, aggression ended up predicting the microaggressions.

So, I feel very comfortable saying that microaggressions are a form of aggression. Now, does this mean that everyone who commits a microaggression is an aggressive person? No, but it's safe to say, the more microaggressions people commit, the more aggressive they are. That seems to be the case, so I'm going to say this is official now. Microaggressions are aggression.

Now we have all these bad things about microaggressions, we know they're racist, we know they're aggressive and we know they cause psychological problems, so clearly something has to be done. What are we going to do about it? What are we going to do to stop microaggressions? That's the next question that we have to answer. I don't think we need any more research to prove that they're bad.

That's where the Racial Harmony Workshop comes in which is what I'm really excited to tell you about today. We designed an intervention to reduce microaggressions. How do we do that? We reduced the racial biases that lead to the microaggressions and to promote interracial connection between college students. We did this experiment with college students and it was designed to increase connectedness across groups. We used principles from different validated types of psychotherapy approaches which I'll talk a little bit more about as we get into the protocol. It was conducted with Black and White undergraduate students for a total of 44, who were randomly assigned to an active control group or the racial harmony workshop. Both workshops started and ended at the same time, they occurred in the same facility -- in adjacent rooms almost, and involved an hour-long lunch break. Both conditions were six hours, which included pre and post testing and lunch. Participants were given the pretest, posttest, and follow batteries to assess their intergroup feelings and racial attitudes.

Now, again, these participants were undergraduates at a large public university in New England. We were really just looking for people who are either Black or White for the purpose of the study but the idea is that this workshop would hopefully be good for people from all ethnic and racial groups. We balanced the randomization of the groups by race and sex. So, we tried to have the same number in each. Again, this was the racial harmony workshop.

The procedure was that there was a control group where people watched the documentary film *The Color of Fear* and then discussed it with some very knowledgeable diversity educators, actually my graduate students, who were very good, in fact they were so good that we were a little worried that we would not find a difference because they did such a good job, and the racial harmony workshop group, which was moderated by myself and a colleague. Everybody gave consent and, again, with the pretest, posttest, one-month follow-up.

It was designed to be both educational and experiential, using the experiences and the diversity of the participants in the room to promote sharing and social connection. So, the intervention used Contextual Behavioral Science Principles. It uses connections from techniques from what's called FAP, Functional Analytic Psychotherapy, to promote closeness and it uses techniques from ACT, Acceptance and Commitment Therapy, to facilitate acceptance of challenging emotions. When we say accepting challenging emotions, we do not mean accepting racism. We mean that people will accept the fact that they act in biased ways and that they feel uncomfortable in these situations. But they're going to challenge themselves to stay in them nevertheless.

The protocol of the workshop was there was first introduction, expectations, there was a mindfulness exercise to get people in the space to encourage self-reflection and setting intentions to our connection with others. We delivered instructional material teaching about microaggressions, much like the information that I presented today. We defined race, we talked about false or pathological stereotypes, the impact of racism with examples, what we mean when we talk about race

and ethnicity, microaggressions, and implicit bias. We also taught the participants how people tend to respond to these things. We defined “away moves”, feelings and behaviors that push others away and “towards moves”, behaviors that facilitate social connection.

The second half of the workshop was designed to promote connectedness through small group interactions. So, people broke into groups of two or three. These were integrated groups, so there would be like a Black and a White participant in the group. And participants shared vulnerable details of their lives and responded empathetically to each person's disclosures. We went around and coached to encourage people in the process. We went from group to group as facilitators but after we gave the instructions, we really didn’t need to do much. People seemed to understand that this was a time to be sensitive to the other person and to really listen and show you care. So, that was how that happened.

Then, the workshop ended with participants developing a plan for the future including behaviors they wanted to reduce as well as behaviors that they wanted to increase in the service of racial harmony and connection.

There were four experiential exercises in that second half protocol, and we have a facilitator manual actually you can access, if you want more details, but the exercises included:
The first one was just sitting and making eye contact with another person and spending several minutes just looking into the other person's eyes.

The second exercise was focused on exploring discomfort through personal narratives, so each person shared something painful that had happened to them with the other person and the other person responded with caring and empathy. And then, they switched.

Another exercise was a racial identity exploration exercise where people talked about when they first started to understand that they were racialized and that they might be treated differently than others, when they first came to understand what race was.

And then, the last part was an ending exercise, it was a large group exercise, where people expressed appreciation to everybody that they had learnt from that plan that I talked about for new behaviors.

Now, I mentioned there were batteries of measures that were given. All participants were asked to complete a satisfaction rating. They all also completed the PANAS, Positive and Negative Affectivity Schedule, to assess their mood around the workshop. They all completed the Allophilia Scale. Remember, this is a measure of anti-prejudice: how much you like that out-group. And then, there was a measure of Intergroup Anxiety and Avoidance because one of our theories was that social anxiety is contributing to the problem.

And then, there were some measures that were really only given either to one group or the other. So, the Black participants all completed the Multigroup Ethnic Identity Measure which is a

measure of the strength of the person's ethnic identity. The White participants completed the Colorblind Racial Attitude Scale, the Symbolic Racism Scale 2000, and the Cultural Cognitions and Action Scale that I mentioned before. And I want to give you an example of what questions might look like on that scale because I mentioned before that they were all contextual.

For example, they might be given a story: You're with a mixed Black and White group of friends and you are talking about various current events and political issues including police brutality, affirmative action, employment, and education. "How likely would you be to SAY or DO something like this?" and the number 12 might be: How likely are you to say "All lives matter not just Black lives", or how likely are you to say "I don't think of Black people as Black" or stay quiet so you don't offend anyone, or say "Black people should work harder to fit into our society." And so, that's how the items were scored. Now, not all of the items, only the bold ones, were scored. The other ones were anti-microaggressions, so to speak, and we'll get to that. But for the sake of this study, we just scored the microaggressions. And, we had several different scenarios.

Now, in terms of statistical procedures, each of our dependent measures was subjected to a two-way mixed ANOVA with two or three within subject levels of time. So, time was pre-test, post-test, and follow-up, and two between subject levels of condition, the racial harmony workshop and the control group, for relevant measures. And for each measure of primary interest was the condition by time interaction. We looked at significant main effects. Significant main effects were reported when there was no interaction and partial eta-squared was used to measure the effect sizes for the ANOVAS. And, when significant interactions occurred, post hoc tests of simple main effects were conducted to determine where the differences were present.

Some of the research questions we had for this stemmed from critiques of microaggressions research from other researchers, for example, Scott Lilienfeld who's now deceased was a big critic of this work. One thing that he said was that microaggression education makes just about everyone feel threatened and could amp up already simmering racial tensions. Is this true? Now we have a chance to answer this question, actually, because we just gave this microaggression workshop and we gave measures of affectivity. How do they feel when they come out of the workshop? And, did they like it? Did they like learning about microaggressions? Let's find out.

We asked on a scale of one to ten: "How satisfied were you with the workshop that you attended?" Oh, look at that! They all liked it. And Black people were very happy with it and White people were even happier. How often does that happen? And then, we asked the students how they felt before and after learning about the microaggressions. So, we looked at the PANAS scale. The higher scores reflect higher positive emotions. And look at this, before and after the workshop, they actually felt a lot better afterwards. Now, in all fairness, maybe they just felt better because they were

done but either way, they weren't feeling worse. So, it seems that Scott Lilienfeld's assertions were not true, or at least not supported.

Another critique of this work is the notion that heightened attention to microaggressions may sensitize minority individuals leading them to become hyper-vigilant and emotionally fragile. In other words, it might harm people if they know how badly they're being mistreated. And so, here we have the chance to look at this, too. We looked at the Black students. How did they respond in that measure of ethnic identity realizing that higher, stronger ethnic identity for people of color is correlated to resilience against microaggressions? And we see that from pre to post-workshop there was an increase in both groups, actually. That increase kept increasing a month later to the point where actually the racial harmony workshop outperformed the control condition. But both conditions improved ethnic identity. So, that assertion was also not supported.

Finally, the big question: Can we make people less microaggressive? So here, we're looking at the Cultural Cognitions and Action Scale (CCAS) in White students from pre-test to post-test to after. And that blue line is the racial harmony workshop and this is the control, in the red line and you can see pre to post the microaggressions went down. But post workshop, the control group got worse again actually and the pre-test and four-week follow-up there was no significant difference for the control group but for the racial harmony workshop, actually people continued to get less microaggressive. So, we consider that a success that the White students were less likely to commit microaggressions.

Now, another thing that I thought was interesting when we looked at the data, remember that I said that there were some supportive statements in those batteries as well as microaggressions. What we found was that some of the items　that diversity experts and the Black people alike agreed were supportive, we found that a lot of White people were very unlikely to endorse that they would do, which I thought was interesting. You know, and I think that a lot of it is that so many White people are worried about being offensive that they just completely avoid talking about race, ethnicity, and culture. But supportive and positive statements about a person's culture can be an important means of helping them feel understood. And many people miss opportunities to be supported out of fear of offending. In fact, the research shows that the most common racial microaggressions by clinicians is avoidance of cultural material -- when clients want to talk about it, clinicians don't. So, this brings me to my next area of research which is racial justice allyship, which is connected to all of this.

Now, let me define allyship: allies are people who recognize the honor and privileges they receive from society's patterns of injustice and take responsibility for changing these patterns. So allies include White people who work to end racism, men who work to end sexism, heterosexual people who work to end heterosexism or homophobia, and cisgender people who work to end ciscentrism or transphobia. Those are some examples.

But allyship is behavioral. It's not just about how you feel in your heart, it's about what you do. So, simply deciding to treat all people fairly is not anti-racist. A racial justice allyship requires anti-racist behavior such as identifying and decentering Whiteness, empowering people of color, disrupting racism, confronting uncomfortable or shameful race-based topics through ongoing education, reciprocal vulnerability with people of color, accountability to people of color and unfortunately, it includes disapproval and punishment from people in the in-group. Who wants that, right? Nobody wants to deal with disapproval and punishment which is why this is actually not more popular. But it's something that we want to do because it aligns with our values. I thought to myself: we need allies, we need allyship, and we need allies to help combat racism to help stop microaggressions.

There was a study that was done by Mekawi and Todd called "*Okay to say?*" This was actually very similar to the study we did with the Cultural Cognitions and Action Scale, the CCAS. They were developing a scale, too. As part of the study, the university students were presented with these different microaggressive situations and they were also asked, "Would you do something if this was presented, if this happened?" 93% said that they would openly disagree if met with this microaggressive situation in the real world, which I thought was a little interesting and honestly I was skeptical of this because it's very incongruent with the reports of the lived experiences of people of color who often feel abandoned by their would-be allies.

We created a measure of allyship using those supportive items from the CCAS and we called it the Interpersonal Racial Allyship Scale which we validated. I won't go into excruciating details about that process but you can read the paper.

As part of the study that we did where we validated the CCAS is, we did a behavioral study, we wanted to determine the extent to which self-reported allyship behavior would correspond with real-life allyship behavior. We had a laboratory behavioral task that we wanted to use to measure the allyship. A subset of participants who completed the self-report measures for the CCAS study, they came into the lab and we had them do a conversation with a confederate, a lab assistant that they thought was another participant in the study. We brought in White students and we had them do a conversation with another White "student" about three different topics, racially charged news stories. Each participant was greeted by a Black RA who got the informed consent and introduced the participant, the confederate ,and then said I'm going to be in the other room recording this, watching, so they knew that there was a Black person there watching. We wanted to see what they said.

In the first scenario, the first subject was a fraternity party that involved members using Black stereotypes and doing blackface for Martin Luther King Day and then they got suspended on campus, then there was a campus-wide debate about this and free speech. So, supporting the fraternity party-goers using the Black stereotypes and against their suspension would be microaggressive

whereas denouncing both would be an indication of supportive or allyship behaviors. This is meant to be a depiction of that although that isn't actually a fraternity party, that's actually our Prime Minister Justin Trudeau sadly, in blackface.

The next story, we called this "Monument", was about a fight between activists and the city government concerned with removing a confederate monument in Kentucky which is a painful reminder of slavery and an example of environmental microaggression. So, support for keeping the monument in place would be microaggressive whereas denouncing it would be supportive allyship behavior.

Lastly, there was a story of the killing of an unarmed Black male college student by police after a car accident, the type of problem that has sparked the Black Lives Matter movement, and so support for killing of the Black student would be more microaggressive whereas denouncing that and denouncing the police officer's action would be supportive allyship behavior.

This discussion generated ample opportunity for people to express microaggression or allyship behaviors. There were 31 participants. What did we find as a result of this? What percentage of individuals demonstrate allied behaviors in a real-life setting. Sadly, very very sadly, it was very very few.

If you look at the table, we have this broken down by low allyship, moderate allyship, and high allyship, broken down by scenario. What you can see is basically if it was a zero for example a person got a zero if they said nothing supportive. And they got a one if it was a little supportive, two if it was somewhat supportive, and three, it was very supportive. I'll just say off the bat there was not one person that had three across the board. So, we had to lower the bar and we said you're an ally if you got a two or higher on all the scenarios. You know how many allies we had? One. Out of 31 people, we have one ally. Only one, 3% of the participants were allies in all three scenarios, 10% were allies in two scenarios, and 16% were allies in one scenario, which is this column here for high allyship.

That was a bit depressing honestly but telling, I think, because it shows that this isn't easy. And the next question is "Well, what's getting in the way?" In case you missed it, racial justice allyship can be hard, it can be painful. We conceptualize it as avoidance of thoughts and feelings about race, anxiety, and fear of punishment, and the pain of in-group disapproval and rejection, which led us to write this paper "*Unicorns, leprechauns, and White allies*." I never thought I would use the word unicorn in a journal article before, but I did, and in the title. Yeah, that's all I have to say about that. Anyway.

Also, I wanted to revisit our findings from the racial harmony workshop looking at the supportive items that had exemplified these interpersonal behaviors. What I found when I looked at these IRAS scores was that both workshops increased allyship and tensions immediately post-

workshop but this was followed by a drop at follow-up with the levels of allyship -- in the control group actually even lower than their original pre-workshop scores. For the racial harmony workshop, the allophilia gains were maintained, which are not displayed here, whereas the allyship gains were not maintained. So, people backslid baseline for that, indicating that just having a positive regard for people of color is not enough to create lasting allies.

I want to talk a little bit about addressing microaggressions. What do you do when it happens in real-time? This is the next step for our research. Sue in 2019 wrote a really fantastic paper called "*Disarming Racial Microaggressions*" and some of the techniques that were advanced included making the invisible visible, calling attention to the microaggression in some way, disarming the microaggression, educating the person who commits the microaggression like why that's a microaggression, why you shouldn't do it, and then rejecting microaggression, which is actually my thing that I put in there.

Microaggressions may appear in clinical care in a number of ways. For example, you can have a situation as a therapist where the client of color wants to discuss microaggressions experienced at work or in daily life or a client commits a microaggression in therapy, that happens, or the therapist commits a microaggression in therapy, and we talked about that.

Now, in clinical care, this is what you should do. Don't question if it was really a microaggression, respond with empathy validation and support, and then problem solve around the issue. And, the clinician should begin discussing valued action that the client can take to start combating the racist behavior that they encounter when it's safe rather than being a passive victim.
Now, sometimes clients commit microaggression in therapy. In these cases, this is a great opportunity to teach clients that microaggressions are hurtful acts of racism and because if they're doing the microaggressions to you as a therapist they're doing it to other people. So, they need to be taught that this is hurtful and it's damaging their relationship.

Lastly, the therapist commits a microaggression in therapy. These are steps therapists should take. Don't get defensive, show you care about the person's feelings, ask why what you did was racist and listen, validate their perspective, acknowledge your biases, clarify misinterpreted remarks -- don't start there though or you look defensive -- and then make it right in other words you want to own it and repair it. That's a whole process if you need details on that, get my book *Managing Microaggressions,* I explain all of that.

And then, in your real life, when and how do we address microaggressions? What's the nuts and bolts of it? There are different ways you can respond. How do you know how to respond in what situation?

The type of response should vary based on the relationship between the target or observer and the perpetrator, as that's going to dictate the level of vulnerability appropriate for the situation. If

it's a close friend or a caring family member, share how it makes you feel and why. Here you're appealing to the quality of the relationship to help bring about mutual understanding and positive change. If it's a co-worker or acquaintance, gently educate them about stereotypes and racism. If it's a stranger, be assertive and correct the person; you want to reject any controlling aspects of the encounter because ultimately racism is a powerplay and racialized people shouldn't allow themselves to be treated that way. Finally, if it is　with a powerful person in a dangerous situation, you want to remove yourself from the situation as quickly as possible. Maybe you make a report after the fact once you're safe.

Now, my newest line of work is in the area of civil courage because we need courage to be good allies. I don't have a lot of time to talk about it but I'll just say in the big picture we can't hope to change our broken system without allyship. We need allies, and allyship as you can see is hard so this is a paper about how to build courage to do that.

In terms of future directions in research, first of all, I'm going to be continuing to do research on anti-Black microaggressions globally, like I mentioned in Germany. We need a new application for the racial harmony workshop. We already did a study looking at using this workshop for medical students. Did it reduce microaggressions with their patients? Sneak preview: It did.

How to cultivate racial justice allies who will stand up to microaggressions. We're still trying to figure that out.

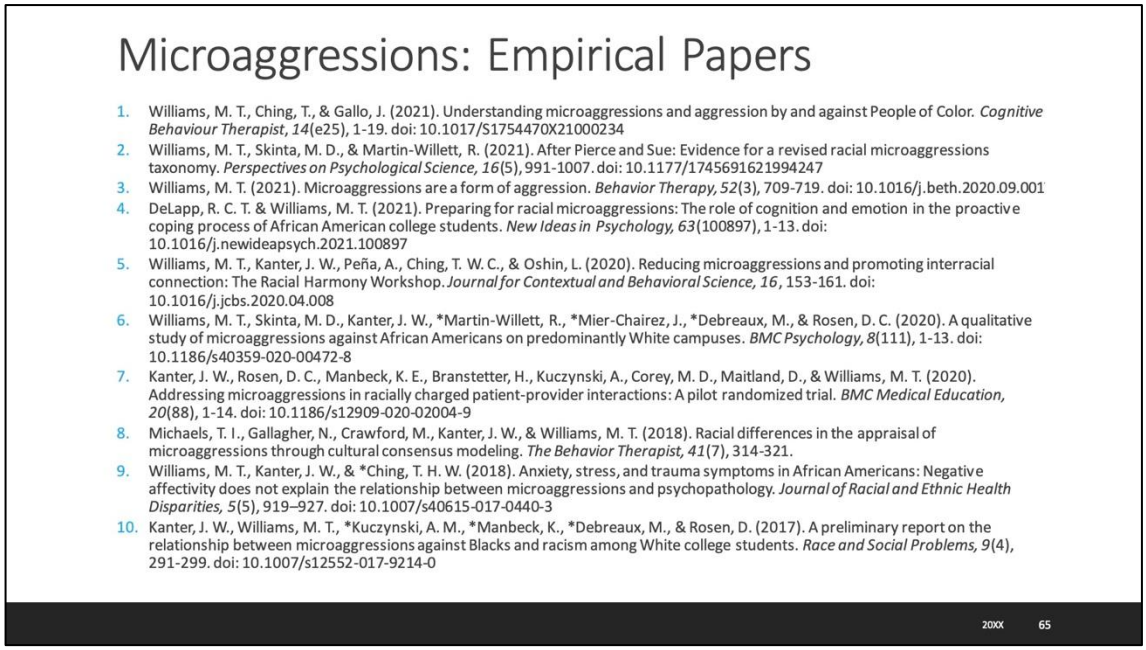
How targets should respond to microaggression in order to maximize their mental health and reduce incidence of future racism. I gave you my guidelines but those aren't empirically supported. That's just my idea.

So, that's all for today. Here are some resources you can take with you. *Eliminating Race-Based Mental Health Disparities* and my book on *Managing Microaggressions* if you're a therapist. Thank you very much. It's been a pleasure to share this with you. Here's my contact information, if you want to reach out to me anytime, feel free to call or email. And I'll also include information on my papers. I have educational papers, empirical papers, and allyship papers. And you can get a copy of that.

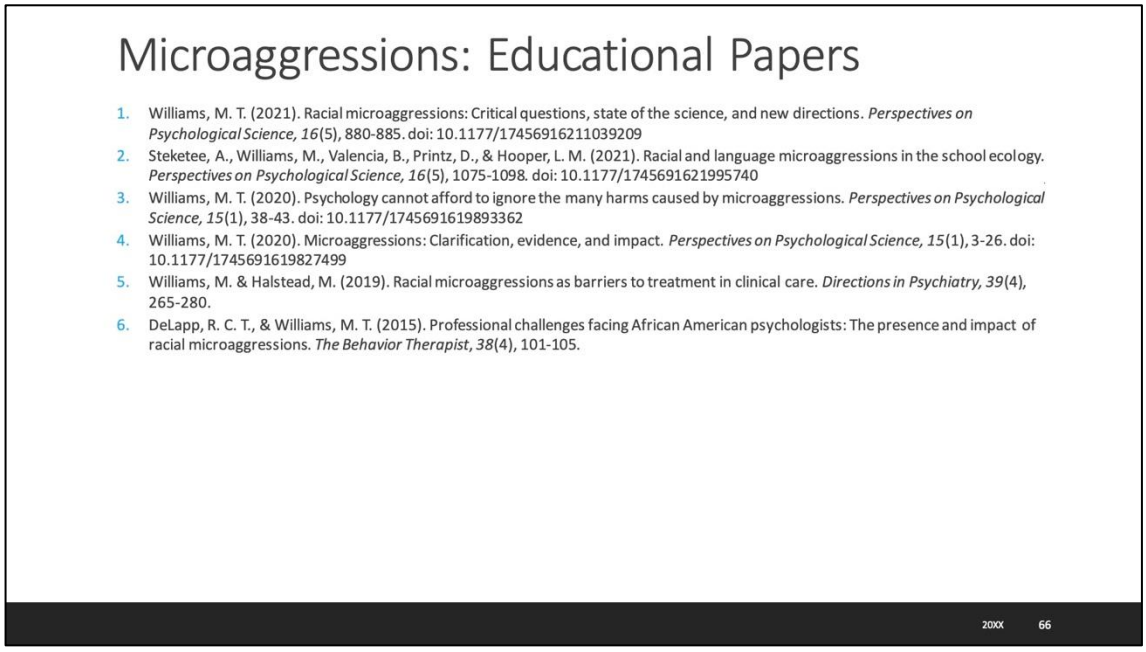
That's all for today. Thank you very much.

The 41st IGC-SSRI Joint International Symposium

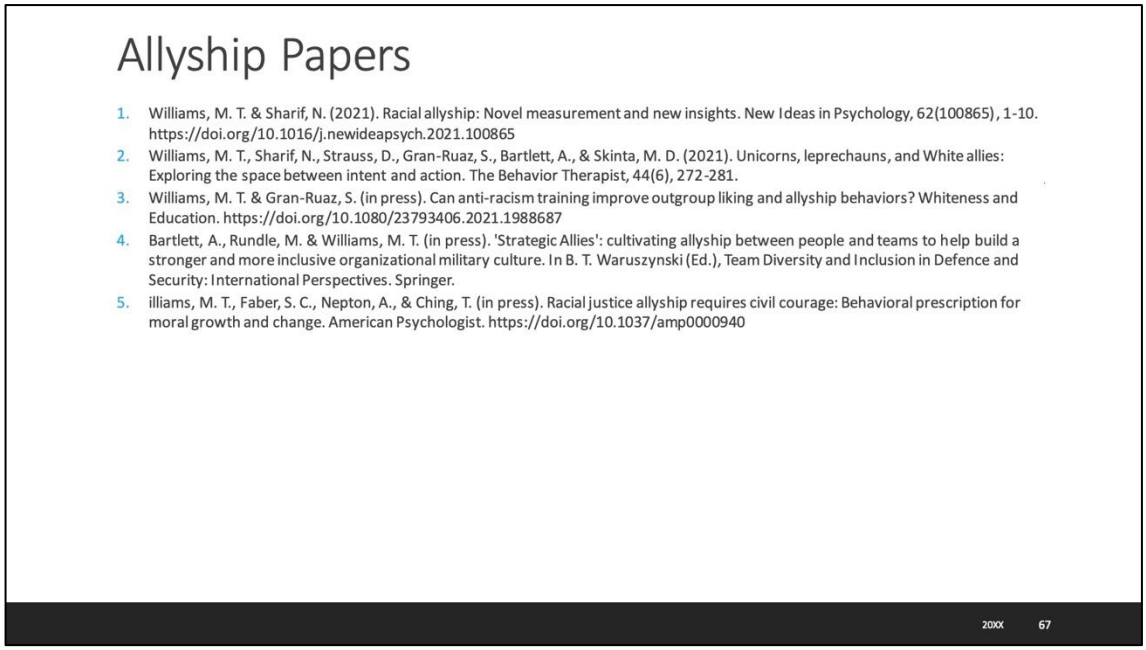
December 5th, 2021




**Slide 3: Microaggressions: Empirical Papers**




**Slide 4: Microaggressions: Educational Papers**




**Slide 5: Allyship Papers**

# 報告
# ブックフェア 2021
# マイクロアグレッション
# ～差別と心理学～

2021 年度 ICU-SSRI 共催国際シンポジウム「差別と心理学 : マイクロアグレッションを理解し、日本社会の変革につなげる」の連動企画として、ブックフェア「マイクロアグレッション : 差別と心理学」を 2021 年 11 月 2 日～12 月 17 日まで図書館 1 階の展示スペースで開催した。この期間に重なる 11 月 5 日～11 月 23 日はソフィア・オープン・リサーチ・ウイークの参加企画として、ウェブサイト掲載や 2 号館 1 階にポスター掲示がなされた。

**写真 1 図書館 1 階の展示スペースの様子**

選書にあたっては、「マイクロアグレッション」という言葉が日本に紹介されて日が浅いため、その背景にある差別構造や偏見を学ぶのに有用な書籍も含め、研究者や文筆家、社会人教育に携わる方、学生、所員・職員から推薦してもらい、紹介文とともに展示した。展示スペースのパーティションには「気にしすぎだよ」「いいお嫁さんになれるね」「日本語お上

手ですね」「ゲイの人って芸術的センスがあるよね」「障害は個性だね」などなど、よく発せられるマイクロアグレッションとなる言葉を吹き出しにして貼り出した。図書館の利用者たちの目を引いたようで、本を手に取ったり、展示を写真に撮ったりする人の姿が頻繁に見られた。展示した書籍がのべ 27 冊、期間中に貸し出され、図書館の担当者によれば、ブックフェア中の貸出冊数としては多いということだった。

展示した書籍・紹介文を中心に小冊子を制作し、2022 年 3 月に刊行することができた。また、掲載できなかった紹介文を含め全リストをブックフェアのウェブサイトに 4 月中にアップする予定である。

佐藤和子（グローバル・コンサーン研究所）

# 報告
# 『映画 太陽の子』上映会

徳田悠希、中村涼香

**概要**

12 月 19 日、グローバル・コンサーン研究所の主催で『映画 太陽の子』の上映会とトークイベントを開催しました。この映画は、かつて日本に存在した「原爆研究」を取り上げた作品で、俳優の柳楽優弥さん、有村架純さん、三浦春馬さんらが出演していることでも話題となり、全国で上映されています。

この上映会のテーマは「映画のレンズを通して今を見る」。同世代の大学生と核兵器問題を考えるために、総合グローバル学部の中村涼香（大学 3 年）と徳田悠希（大学 2 年）が中心となって実行委員会を立ち上げ、企画したものです。トークイベントには、黒崎博さん（監督）、浜野高宏さん（プロデューサー）、中村涼香（上映会実行委員・司会）、徳田悠希（上映会実行委員）が登壇しました。

映画の主人公は原爆開発に携わった若い科学者です。黒崎監督は、科学者と核兵器を私たちの社会に照らして、こんな発言をされました。「ある科学者と対話した時、彼が『一本の木で表すと、自分たち（科学者）は幹なんだ。伸びた先にある枝葉を社会は利用している。それが遺伝子組み換え食品であり、放射線の医療における利用であり、核兵器でもある。科学者は、それら全てに責任を持つことはできない』と言った。その是非はともかく、一度できたものは止められない。そして断罪できない。それが脈々と続き、未来も続いていくのだろう。」

その枝葉の善悪を判断していくのが、これからを生きる私たちの役割であると感じるトークセッションとなりました。

日曜にもかかわらず学内約 30 名の参加があり、芸術作品をアカデミズムと社会変革のムーブメントにつなげて捉える視点がユニークな会となりました。

**感想**

普段の日常生活の中で、硬派とみなされがちな核兵器や安全保障のトピックについて友人らと話しをする機会はほとんどありません。しかし、1 万 3000 発の核兵器が存在する世界に生きている私たちは、核兵器が使われたら何が起きるのか、ということに、より注視すべきなのではないかと常々考えていました。言葉だけでは伝えることのできないこの危機感を映画というエンタメ作品は観客に伝えることができます。本作品はさらに踏み込んで核兵器を作る、持つということが何を意味するのかを提起し、映画を視聴した参加者は様々なことを感じ取りつつ、核兵器への危機感を会場が一体となって共有していたように

思います。エンタメ作品の力を実感し、学校でこのような場を設けることができたことを大変嬉しく思います。ご協力いただいたグローバル・コンサーン研究所の皆さんには心より感謝すると共に、ぜひ今後ともこのような時間を一緒に作っていけたらと思います。ありがとうございました。（中村涼香）

核兵器の問題に向き合う中で、その関心の持ち方は「広島、長崎との出会い」か「安全保障」の二通りで、それぞれの温度感の差を縮める突破口を探る日々でした。今回、映画を切り口に、核兵器の問題はもちろん、私たちの未来をどう選択していくかという視点が加わったことに大きな意義があると感じています。善と悪には明確な区別がなく、私たちは問題に出会う度に迷いながら選択していくのだと思います。それでもその判断軸は、「自分と、誰かの未来を傷つけない」ことに置いて、行動をしていきたい。そんな気持ちを新たにすることができました。最後になりましたが、映画上映の機会を下さった映画関係者のみなさま、そしてグローバル・コンサーン研究所のみなさまに深くお礼申し上げます。（徳田悠希）

徳田悠希（上映会実行委員・総合グローバル学部）
中村涼香（上映会実行委員・総合グローバル学部）

# 報告
# オンラインセミナー
# みんなでつくる「被災者とコミュニティ」を中心にした支援入門！
# スフィア・スタンダード
# ～人道支援の国際基準を知る～

2022 年 1 月 15 日（土）13:30-16:00 開催

ファシリテーター：勝井裕美（シャプラニール・ネパール事務所長）

福田紀子（グローバル・コンサーン研究所、スフィア・トレーナー）

担当所員：岡本菜穂子（グローバル・コンサーン研究所、上智大学総合人間科学部）

スフィア基準は、人道支援の関係者の中では、国際的な共通理解の基盤として普及している。スフィア基準では、人権／権利に基づく考え方を基本に、支援活動の「質と説明責任」を果たすために何を考え、目指すべきかについての理念や倫理が具体的な行動の示唆とともに示されている。

災害大国日本では、人道支援が必要になる場面は自然災害を思い起こすことが多いが、原子力災害や世界的に大流行しているコロナ禍でも人道支援は必要である。誰もが被災者として、また支援者として知っておきたいスフィア基準についてのオンラインセミナーを、今回は学生、一般向けにトライアル企画として実施した。

ファシリテーターのひとり、現在ネパールで国際協力活動中の勝井裕美は、日本でも 2016 年の熊本地震の際に支援活動を行なった人物である。もうひとり、当研究所の職員、福田紀子は、スフィア基準の生まれた 90 年代に人道支援に関わり、参加型学習のファシリテーターとして人権教育等を行なってきた人物である。

当日は、まず、「人道支援とは」で「人道 4 原則」や「災害とは何か」について学び、「スフィアの背景」として人類が「尊厳を持つ人間」の姿をどう獲得してきたのかの歴史を概観した。「スフィア基準」の直接の引き金となったルワンダ虐殺時の様子を知る等、「質と説明責任」が求められる前提について学んだ。

次に、スフィア・ハンドブックに示される「2 つの信念」「脆弱性の理解と対応力」などライツベース・アプローチ（人権に基づく考え方）のエッセンスの学習を通して、スフィア基準には、技術的分野と言われる「給水と衛生、衛生促進」「食糧安全保障と栄養」「避難所及び避難先の居住地」「保健医療」という人間が生きるために必要な分野の最低基準と指標や目安としての数値が示されているのだが、基本は「考え方」であることを学んだ。

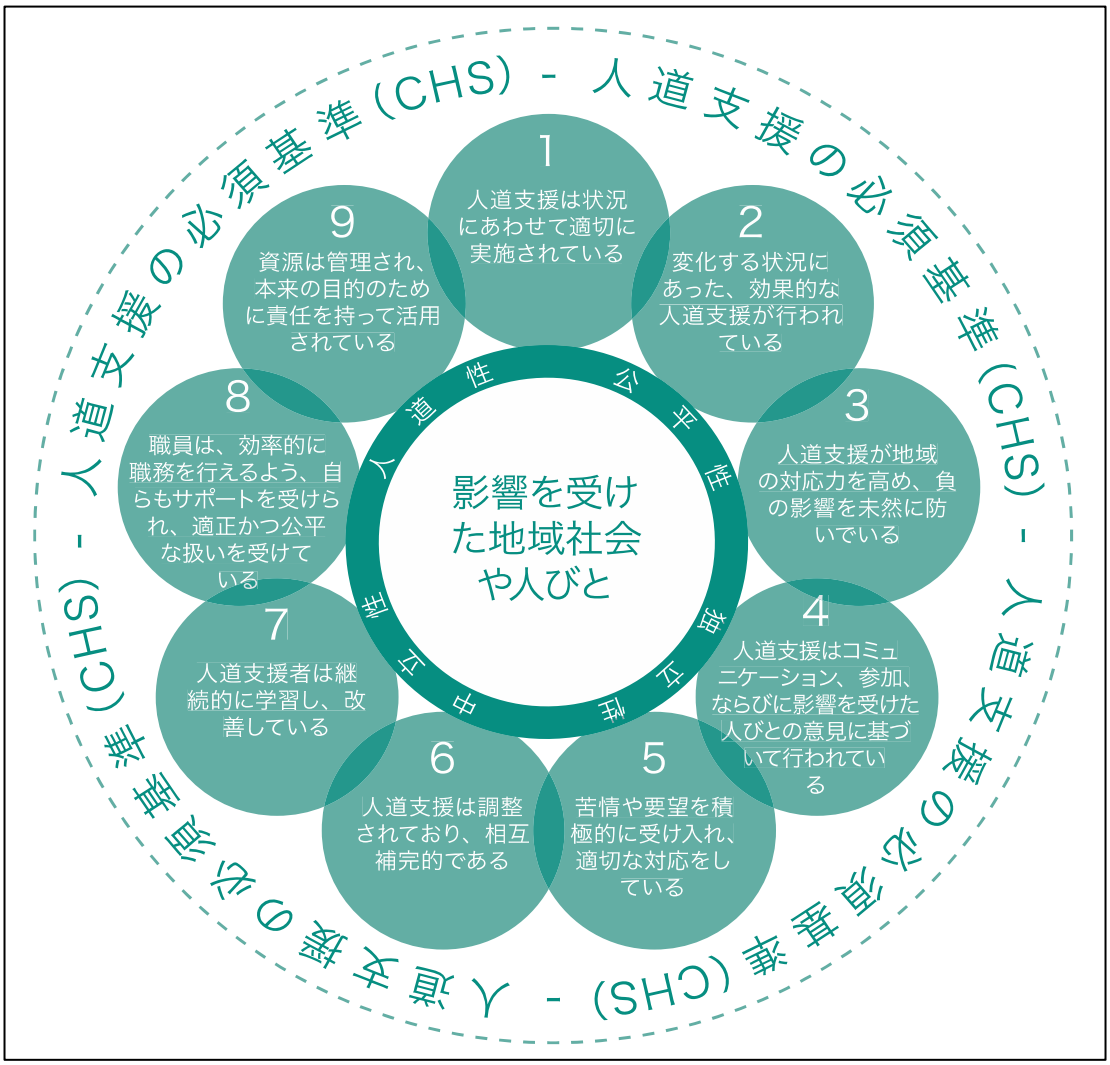
後半は、震災避難所の仮想の事例を用いて、具体的な「支援の問題点」を手がかりに、スフィアの「必須基準（Core Humanitarian Standard/CHS）」9 つの柱の読み解きと、講師の経験を交えた解説を行なった。必須基準は、どんな支援活動であっても、適切、公正であ

ろうとすれば、必ず必要とされるもので、支援の現場だけでなく、組織としての支援団体の責任を明示し、ドナー（寄付者）やボランティア他あらゆる関係者も知るべき指針である。

オンライン上の限られた時間ではあったが、参加型のグループワークを交えながらのセミナーであった。参加者からは「具体的なケースとともに学べたので良かった」「グループワークで様々なお話が聞けて楽しかった」「国がもっと知らせるべき」「シリーズ化したらまた参加したい」「次回を楽しみにしている」などの感想があった。

参加者から投げられた「尊厳とは何か」の問いはこれからも続くものだと思う。スフィアのいろいろな部分を読み解き、いろいろな場面で実践する中で「人間の尊厳」を実現していくことを考えるきっかけにもなった。

福田紀子（ふくだ のりこ）（グローバル・コンサーン研究所）




資料１　人道支援の必須基準（CHS）

資料２ スフィアハンドブック（表紙）

s

# 報告
# オンライン哲学対話は続く
# ～「ソフィア哲学カフェ」「シネマ哲学カフェ」報告～

寺田俊郎

## はじめに

2020 年はオンライン哲学カフェ元年だった。本年度も、引き続き新型コロナ感染状況を考慮して、「ソフィア哲学カフェ」「シネマ哲学カフェ」は全てオンラインで実施した。その実施方法の変更に伴う長所、短所は、昨年の経験とほぼ同じである。オンライン哲学カフェには、同じ空間に身を置き、生の声を聞きあい、表情や身振りも交える通常の哲学カフェと比べると、臨場感に欠けるためか、理解不足や誤解が起こりやすいという短所がある。他方、オンラインゆえに逆に話しやすくなることがある、声が聞こえやすい、遠くからでも参加できるなどの長所もある。これから対面の哲学カフェが戻ってきても、オンラインの哲学カフェも存続していくだろう、という見通しに変わりはない。幸い、進行役自身もオンラインの対話に慣れてきて、昨年度経験したような大失敗は経験せずに済んだ。そこで、本報告では、本年度の内容を簡単に紹介した後で、哲学対話の意義について考察してみたい。

## 本年度の内容

本年度実施した行事は以下のとおりである。進行役は所員の寺田俊郎と客員所員の堀越耀介が務めた。

2021 年 6 月 4 日　ソフィア哲学カフェ：テーマ「姓（名前）」
2021 年 10 月 22 日　ソフィア哲学カフェ：テーマ「多様性」
2022 年 1 月 17 日　ソフィア哲学カフェ：テーマ「映画『太陽の子』をめぐって」
2022 年 2 月 24 日　シネマ哲学カフェ：『Hafu ハーフ』

「姓（名前）」の回と「多様性」の回は通常の哲学対話、「太陽の子」の回は 12 月に実施された IGC 主催の『太陽の子』上映会を受けての哲学カフェ、シネマ哲学カフェは恒例の映像作品を鑑賞しての哲学対話であった。

映画『太陽の子』は、アジア太平洋戦争末期に京都帝国大学で原子爆弾の研究に携わっていた学生、その弟、幼馴染の女性を中心に描かれる青春群像である。総合グローバル学部の学生二人が中心になって企画したものだが、考えさせられることの多い作品だったため、急遽ソフィア哲学カフェで取り上げることにした。そのため広報の期間が短く、参加

者が少なかったのが残念だったが、意義深い対話になった。

まずは、各自の感想を語り合うことから始め、核兵器が非人道的な兵器であり、その悲惨な被害を二度と繰り返してはならないのはもちろんだが、核兵器を考える視点には、たとえば科学の進歩という視点など、さまざまあり、それらの視点からもよく考えないと核兵器廃絶の意義を人々に納得してもらうことはできないのではないか、などの論点について考えた。ぼくが最も考えさせられた問いは、科学の研究の発展の結果非人道的な結果が出てくることが予想される、または実際出てきた場合、科学者はどうするべきなのか、あるいは、その研究の結果にどのような責任を負わなければならないのか、というものである。この問いは原子エネルギーの研究に顕著に見られるが、他のあらゆる科学研究に付きまとう問いでもある。

シネマ哲学カフェで取り上げた作品は、昨年度と同じ映画上映会サイトが提供するものの中から選んだ。このサイトでは、ドキュメンタリー映画を中心に、たいへん心惹かれる映像作品が提供されている。今回の「Hafu ハーフ」は、日本人と外国人を両親にもつ四人のミックス・ルーツの若者たちの生き方を描くドキュメンタリーである。数年前、哲学対話実践の仲間がこの作品をもとに哲学対話を実施したことがあり、記憶に残っていた。

シネマ哲学カフェに固有の短所である「対話の時間が限られていること」は今回も痛切に感じられたが、それでも、自身ミックス・ルーツをもつ参加者の発言も多数あり、興味深い対話をすることができた。その中で、あなたはあなたであり、わたしはわたしであり、どのようなルーツをもとうと一人の人として遇しあえばいいはずなのに、人はなぜルーツにこだわってしまうのだろうかといった問いが浮上してきた。ぼくが考えさせられたのは「見かけ」というものが非常に大きな意味をもつということだ。ミックス・ルーツの人の中でも、見かけが日本人らしい人には生じない問題が、見かけが日本人らしくない人には生じる。そう言えば、同じことを「差別」の回で言っていた参加者がいた。人間はなんと「見かけ」に左右される動物だろう。

最後に、「姓（名前）」の回について、進行役の堀越さんによる、対話の様子をわかりやすく伝える報告があるので、それに基づいて対話の内容を紹介しよう。昨今の「選択的夫婦別姓」の議論を背景にテーマ設定したもので、15 名ほどが参加した。「姓」だけでなく、名前そのものの意義にも話題が及ぶとも想定されたが、やはり社会的・政治的な意味で「姓」が存在し、婚姻によってそれが変えられること、同姓であることを強制されることについて、主に議論された。

対話は、参加者が「姓の変更を迫られることによって、これまでの自分を否定され、それとは違う者であるように強制されていると感じた」という経験や、「姓が同じというだけで全く自分とかかわりのない親族と墓を同一にするかどうかなどの問題に引きずり込まれるが、逆に言えば、その程度の問題としか思わない」といった具体的な経験を語るところから始まった。

こうした経験を分析していくと、道具的・先天的に決定されたはずの「姓」には、一見、単に呼称としての役割しかないように思われても、何らかの意味での「アイデンティティ」が付随していることも明らかになった。それは、これまでやってきたこと、経験の積み重ねであるこの自分のポジティブなアイデンティティという意味であることもあれば、血縁関係のしがらみが載せられたネガティブなアイデンティティであることもある。

前者の場合には、姓の変更を迫られることは不利益でしかない。同一姓による「家族の一体感」のような臆見・レトリックがしばしば聞かれこともあるが、姓の変更を迫られた側からすれば「一体感」などなく、それはむしろ自分ではない名前に対しての「違和感」としてしか感じられない。また、後者の場合であっても、それは血縁の姓に縛り付けられることから生じる不利益のように思われ、個人の意思で変更することのできる制度であれば、やはりある程度解消可能な問題であるという意見が聞かれた。

同姓を積極的に支持する見解が聞かれなかったため、あらゆる観点を検討したとはいえないが、今回の哲学カフェでは、「非選択的な夫婦同姓」、もっと言うと、「姓」を強制されることに対する違和感や不利益の側面を中心に対話をすることができた。

**哲学対話の意義**

最後に、「ソフィア哲学カフェ」や「シネマ哲学カフェ」も含め、哲学対話を実施することの意義について、簡単に考えたい。いつもカフェの準備や運営の支援をしてくれる IGC の研究補助員の菊地了さんが、「多様性」の回の後で、哲学対話には「認知の主体」の形成と「倫理の主体」の形成という意味があるように思うが、両者の関連に興味がある、との感想をもらった。たいへん心惹かれる問題提起であるので、その観点から考えてみたい。

哲学対話の実践には、確かに、一方では、認識の主体あるいは認識的主体性、他方では、倫理の主体あるいは倫理的主体性、それぞれの形成を促す働きがある。哲学対話の研究者・実践者の中にも、そのいずれか、または両方を強調する人が多い。ぼくは、両者は不可分の関係にあると考える。たとえば子どもの哲学対話の創始者と言われるマシュー・リップマンは「探求の共同体」という概念で哲学対話の意義を表現したが、そこには、認識の主体が正しい認識、つまり真理に近づいていくことができるのは、他の主体との共同的思考によるしかなく、その方法は対話であるという根本的な想定がある。他の主体との共同的思考を規定する規範は、倫理的規範以外の何物でもなく、認識の主体がその目的を達するためには倫理の主体でもなければならないということになる。

では、倫理的主体性を確立しなければ認識的主体性を形成することができないのだろうか。そうではないだろう。両者は、他の人々との相互関係の中で、ともに育っていくもので、つねに形成の途上にあるものだと考えられる。どちらが先、どちらが後、ということはないのではないだろうか。認識の主体として真理を探究することと倫理の主体として善を実践することは常に相伴いあって生じ、育つのである。

さて、そのように真理を探究し善を実践しようとする動機、認識的主体性や倫理的主体性を形成しようとする動機は何だろうか。それは、まず、教育一般の動機と同じく社会的なものであり、主体の外から与えられる。個々人が認識的主体かつ倫理的主体として成長することは、社会的共同のために要請され、教育の目標として課せられる。そして、そのための優れた方法の一つが哲学対話だとすれば、哲学対話はもっと公私にわたる教育に取り入れられるべきである。

しかし、認識的主体性や倫理的主体性を形成する動機は、社会的・外的なものだけではないだろう。個人的・内的な動機もある。その一つは「驚き」である。人間と人間を取り巻く世界、その中で生きる自己と他者をめぐる様々な謎と驚異、その謎と驚異に対する「なぜ？」「なに？」「どのように？」という問い、そして、その問いに対する答えがさまざまであることに対する驚き。そこから認識と倫理の探究が始まる。子どもの哲学対話の研究者・実践者であるスーザン・ガードナーの言葉を借りれば、人間とそれを取り巻く世界、その中で生きる自己と他者の「複雑性」に気づきそこから始まる探求。

その探求は真理を目標とする。むろん探求の最中には何が真理であるかはまだわからない。しかし、探求が真理へと向かっていることを探求に携わる人々は了解している。つまり、今自己と他者がもっている不完全な意見をもとに、もっと完全な意見をつくっていくことができること、よりよい意見をつくっていくことができることを了解している。それは、真理を前提しているということである。その目標としての真理がどのように与えられるのかは、ぼくもまだよくわからない。それは神のような超越的なものだという答えもあるだろうし、我々の探究を可能にする条件であり、超越論的なものだという答えもあるだろう。

いずれにせよ、ここで一つ忘れたくないことがある。それは、認識の主体、倫理の主体として成長することは、快いことだということである。それは一種の解放である。ヨハネによる福音書に言う「真理はあなたがたを自由にする veritas liberabit vos」をその意味に解することもできよう。真理の探究の中でわれわれはともに自由になる。「真理はわれわれを自由にする veritas liberabit nos」のである。なぜなら、真理の探究の中で、われわれは自身が不完全な認識つまり偏見しかもちあわせていないことに気づき、その意味で真理の前に平等であることを知り、真理の探究者として対等であることを認めあい、それにふさわしく遇しあうことによって、不完全な意見から解放されて完全な意見に近づいて行くことができるのだから。

このように、他の自由な主体たちとの交流の中で主体性を形成するのは、どの文化でも同じはずだが、それが、日本では独立した個人の連帯の方に行かずに、馴れあう個人の空気の方に流れてしまうのが、興味深いところだ。丸山真男が「日本文化の執拗底音」と呼んだものに、江戸時代に長く続いた泰平の世の封建体質が加わり、近代の天皇制がそれを強化したのではないか、と推測してみたりするが、これは歴史家の研究をもっと参照して

からでないと明言できない。が、とにかくこのような傾向をもつ日本社会では、哲学対話の意義はいっそう深まるように思われる。

寺田俊郎（てらだ としろう）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学文学部）

# 資料
# 「＃入管被収容者にも生理用品を」プロジェクト
# ～被収容者・被仮放免者とのソーシャル・アクション～

田中 雅子、乾 友菜、川村 ひなの、萩原 千賀

## はじめに

「生理の貧困」（Period Poverty）とは「生理用品、教育、衛生設備および廃棄物管理、あるいは、これらへの複合的なアクセスが欠如している状態」[1]を指す。生理に対する社会的、経済的、政治的、文化的障壁は、世界で約 500 万人に影響を与えていると言われる。ドイツの NGO である WASH United が 5 月 28 日を生理衛生デー[2]と定め、国際キャンペーンを始めた 2014 年頃から、生理が女性や少女に与える影響が世界各地で調べられ、活動にいかされている。

生理に対するタブーやスティグマは日本にもある。生理の貧困が日本のメディアで取り上げられるようになったのは、2019 年当時、大学生だったメンバーが立ち上げたグループ「＃みんなの生理」が「生理用品を軽減税率対象にしてください！」という署名[3]を始めた頃からである。

その後、2021 年 5 月、内閣府男女共同参画局が第 1 回「「生理の貧困」に係る地方公共団体の取組」の調査を行った[4]。その報告として、防災備蓄品や寄付を活用した、学校や生活困窮者支援窓口での生理用品の無料配布の例が多数紹介されている[5]。同年 6 月に策定された「女性活躍・男女共同参画の重点方針 2021」[6]には、「「生理の貧困」にある女性への支援」が盛りこまれ、「生理用品の提供だけでなく、それを一つのきっかけとして、「生理の貧困」にある女性の背景や事情に丁寧に向き合い、きめの細かい寄り添った相談支援を充実するよう促す」としている。しかし、担い手として列記されているのは、地方公共団体や学校、福祉事務所等だけである。欧米諸国の一部で導入されている生理用品への課税の撤廃のような制度変更など、生理のある誰もが裨益する改革には至っていない。内閣府男女共同参画局の WEB サイトが、生理の貧困を「経済的な理由で生理用品を購入できない女性や女の子がいる」とだけ説明していることからも、日本では、社会的、政治的、文化的障壁への着目が不足していることがわかる。日本政府もその実施を推進している持続可能な開発目標（Sustainable Develoment Goals: SDGs）は「誰ひとり取り残さない」ことを理念として謳っている。しかし、出入国在留管理庁（以下、入管）の収容施設に収容されている人（被収容者）は、SDGs に取り組む人たちの視野に入っているだろうか。生理の貧困への諸対応から、取り残されてはいないだろうか。

本稿は、上智大学総合グローバル学部国際協力論演習の 2021 年度履修生有志が取り組んだ「＃入管被収容者にも生理用品を」プロジェクト（以下、プロジェクト）の記録である。前年度は、入管収容後の請求により、収容が停止され、身柄の拘束が解かれた「仮放免」の当事者[7]からの聞き取りをもとに教材作成を行った[8]。今年度は「当事者から学ぶ」から一歩前進して、当事者とつながりながら行動する「ソーシャル・アクション」を目指した。約半年の取り組みによって、入管内での生理用品支給について、一定の成果を得ることができた。

本プロジェクトの実施に先立ち「上智大学学術倫理研究に関するガイドライン」に沿って仮放免の当事者から同意を得てオンラインツールでインタビューを行った。被収容者については、支援者を介して予め趣旨説明をし、同意を得てから面会を申し込んだ。以下、本文で取り上げる被仮放免者と被収容者は、元受刑者などが含まれることから、個人が特定されることを避けるため、出身国や年齢は記さない。本稿は、学生の草稿に教員の田中が加筆・編集した。ソーシャル・アクションの一環として作成した要請書や経過、入管側の文書は、学内外に共有する価値があると考え「資料」として公開する。

## 1. ソーシャル・アクション

近年、様々な分野で使われる「ソーシャル・アクション」とは、社会福祉学の専門用語だったが、一般の辞書にも掲載されている。広辞苑（第七版）は「既存の法や制度の改廃、福祉施設や社会資源の開発･充実､福祉サービスの運営改善等を目指す組織的な福祉活動」と説明している。その担い手は社会福祉専門職には限定されず、一般の市民も、自ら発信し、国家や自治体をはじめとする様々な主体に働きかけながら、社会課題を解決に導くことができる。

2021 年度春学期には、『ソーシャル・アクション　ハンドブック：テーマと出会い・仲間をつくり・アクションの方法を見つける 39 のアイデア』の作成に関わった開発教育協会の八木亜紀子さんをリソースパーソンとして授業に招き、前年度から改良を重ねていた、入管収容問題に関する教材や、学生が検討していた「都議選に向けた候補者情報の拡散」や「実践的性教育の普及」など、ソーシャル・アクションの案に対するコメントをいただいた。入管収容問題に関する教材は、その後、高校や大学等で使用しながら改良を重ねて完成させたが[9]、その他の案は、SNS での発信にとどまり、成果を確認するには至らなかった。その後、前年度は難しかった女性の被仮放免者への聞き取りが実現したことから、入管収容施設における生理用ナプキン入手の難しさを知り、ソーシャル・アクションで扱う社会課題に定めた。

夏以降、東京出入国在留管理局横浜支局（以下、横浜入管）の被収容者から聞き取りを行った。横浜入管では、BOND～外国人労働者・難民と共に歩む会～（以下、BOND）[10]か

ら許可を得て、メンバーの面会活動に同席させていただき、当事者から許可が得られた場合は、本プロジェクトメンバーのみでも面会した。同時に、支援者からも生理用品支給の経験を聞くとともに、2021 年時点で、生理のある被収容者がいた横浜入管の他、名古屋出入国在留管理局と大阪出入国在留管理局にも出かけて調査を行い、学内外から賛同を得ながら、被収容者への生理用品支給に関する要請書を 3 回提出した。

以下、入管収容施設における処遇について直接声をあげることが難しい被収容者とつながりながら、市民として取り組んだ「ソーシャル・アクション」を振りかえる。

## 2. 入管における被収容者の暮らし

新型コロナウイルスの感染拡大前は、「生理のある」被収容者も品川にある東京出入国在留管理局（以下、品川入管）にいた。しかし、2021 年 2 月下旬、施設内で集団感染が見つかったためか、3 月 3 日、性自認が女性の被収容者約 25 名は、横浜入管へ移送された。前日に突然移送について告げられた人がほとんどで、被収容者の精神的苦痛や孤独感が増した。以下、横浜入管の被収容者からの話をもとに、施設内の様子を紹介する。施設内部の名称等は、当事者たちによる呼称を（　）内に記す。

収容施設には、シャワー、洗濯機、公衆電話、歓談用のテーブルなどがある多目的ホール（以下、フリースペース）の周囲に、トイレ付の居室が配置された収容区（以下、ブロック）が複数ある。被収容者がブロック外に出ることができるのは、週数回定められた時間に施設内の屋内運動場を利用する時、来訪者と会うために面会室に行く時、施設内の診療室に行く時、施設内でカウンセリングを受ける時、また例外的に施設外の病院や歯科に行く時だけである。基本的に、別のブロックの被収容者と接触することはできない。

午前 9 時半から 12 時までと、午後 1 時からと午後 4 時半までの開放処遇（以下、フリータイム）の間は、フリースペースで過ごす人が多い。それ以外の時間は、自分の居室で過ごすことが多い。提供される官給食（以下、食事）は、各自の居室でとる。

品川入管では、共用室に多い時には 7 人ほどいたこともあったが、横浜入管では 1 室 1 名となった。ブロック内に 1 人しか収容されていないときは、職員以外の人との接触は少ない[11]。

携帯電話などの所持品は、居室から離れたロッカーに預けることになっている。公衆電話から外部に電話をかけることはできるが、受信はできない。手紙や差し入れ品も受け取る前に、職員による内容確認がある。

1981 年に制定された「被収容者処遇規則」[12]の第 1 条は「被収容者の人権を尊重しつつ、適正な処遇を行うことを目的とする」と述べている。被収容者の出身国の風俗習慣による生活様式の尊重（第 2 条）、被収容者からの意見徴収などを通じた処遇の適正化（第 3 条）にも言及している。

横浜入管の場合、入管局長宛と視察委員会（4.2 参照）宛の 2 種の目安箱[13]が設置されている。被収容者は、日本語だけでなく、母語等でも意見を申出書に書いて入れることができる。前者は数ケ月に 1 度、後者は委員会開催時に合わせて年 2～4 回程度開封される[14]。出入国在留管理庁の Web サイトには、委員会が提出した意見とそれに対して講じた措置や検討結果は掲載されているが、被収容者が出した意見の件数や申出書の記載内容は、そのままの状態では公開されていない。

同規則第 23 条は「必要があると認めるときは、一定の衣類及び日用品を給与する」としているが、支給されるのは、最低限の食事とトイレットペーパー程度である。文房具や嗜好品は、週 1 回配布される自費購入品目の一覧（以下、ショッピングリスト）から選んで注文する。その後、施設内もしくは近隣のコンビニエンスストア（以下、コンビニ）から品物が届いたら、被収容者は各自の所持金で購入する。

刑務所の場合、受刑者は刑務作業を行うことによって作業報奨金を得ることができる。一方、入管では作業に従事することがなく、現金を得る機会はない。したがって、所持金が少ない被収容者は、現金も「差し入れ」てもらうしかない。

面会に関しては、「被収容者の国籍国等の領事官，被収容者の訴訟代理人，又は弁護人である弁護士や，それ以外の面会者でも所長等が立会いの必要がないと認める場合は，入国警備官の立会いを行っていません」[15]と定められている。「面会・物品授与許可申出書」の提出による面会の申し込みと差し入れの手続きは全国共通である。ただし、面会時の職員の立ち会いの有無、食品差し入れの判断は、各地の入管によって若干異なるようだ。さらに、同じ入管内でもルールが変更されることもある。横浜入管で本プロジェクトメンバーが被収容者と面会した際は、職員の立ち会いはなかったが、食品の差し入れは認められなかった[16]。

## 3. 当事者が語る収容施設での生理中の体験

本プロジェクトのきっかけとなったのは、横浜入管に収容された経験がある二人の被仮放免者の証言である。2021 年 7 月に話を聞いた A さんは「収容施設でナプキンをもらえなかったことが辛かった。収容され始めた頃に生理が始まったが、職員はナプキンの提供を拒否した。友人に電話して、差し入れてもらった」[17]と語った。B さんも「収容中に、入管で生理用品をもらうことはなかった。必要な時は、外部の支援者からナプキンをもらった。支援者がいなかったら、頑張れなかったと思う」[18]と話した。日本に家族がいる被収容者は差し入れを頼みやすいが、A さんと B さんは日本に家族がおらず、支援者を頼るしかなかった[19]。

8 月以降は、横浜入管で、計 4 名の被収容者とのべ 13 回面会した。その中のひとりである C さんは次のように語っている[20]。

> 品川入管に収容されたばかりの時、生理になっても頼れる人が誰もいなくてすごく困りました。入管のコンビニに注文してナプキンを買うしかありませんでした。家族に電話するためのテレホンカードが一番大事なので、高いナプキンのためにお金を使うことはとても苦しかったです。ナプキンのためにお金を使うのはもったいないし、子どもに申し訳ない気がしました。
>
> 最初は、生理用品がなくて困っても、他の被収容者に言えませんでした。彼女たちからナプキンを分けてもらった時、涙が出ました。私も、新しく入って来た人には、ナプキンなど必ず分けて、助け合うようにしています。収容施設から出る人が、ナプキンをたくさん置いていってくれたので、今は、それを使っています。

一方、D さんは、入管収容施設内で被収容者自身がすでに声をあげていたことを教えてくれた[21]。彼女からは、支給の方法や受け渡しの際の職員との関係についても助言をもらった。

> （このプロジェクトについて聞いたとき）気づいて下さって、ありがたいと思いました。入管に収容されている人は、いろんな事情がある人が多いので（ナプキンが支給されたら）助かると思います。
>
> 生理用品は、友人の助けで、なんとか手に入れていました。できるだけ節約して「必要な範囲内」でお願いしていました。節約するために、一枚のナプキンを何度も使うこともありました。ナプキンの上に敷いたトイレットペーパーだけを変えて、ナプキンを使い回すのです。そうすると、歩くときにトイレットペーパーがずれてしまって経血が流れ出たり、広がったりして、ナプキンが汚れてしまうことがあるので、あまり歩かないようにしていました。
>
> 他の人も、トイレットペーパーも使いながら、ナプキンを使い回していたと思います。掃除の人がゴミ袋をまとめている時、ゴミ袋の中に経血がついたトイレットペーパーがあったのが見えたことがありました。
>
> 品川入管の中で抗議した時[22]、他の部屋の女性が「ナプキン必要！」と叫びました。掃除のおばさんから「バカだね」と言われました。この時、私たちがナプキンを要求したことを、入管は隠しています。
>
> 入管から必要なものを発注できるコンビニには、２種類しかナプキンがありません。大きいサイズのナプキンはないので、経血量が多い女性は大変でしょう。

ナプキンを支給するなら、箱に入れて置いておけばいいのではないですか。何でも「担当」（職員）に「お願い」して「もらう」というやり方は、良くないと思います。

## 4. 被収容者が指摘した問題点

聞き取りから明らかになったのは、次の 4 つの問題である。

1 つ目は、入管が「生理用品を必要と見なしていない」と思われる点である。被収容者処遇規則第 23 条は「必要があると認めるとき」は日用品を給与するとしているが、当事者から聞く限り、生理用品は支給されていない。品川入管で「ナプキン必要」と叫んだ人がいても、支給されることはなかった。また、同 3 条が、被収容者からの意見徴収による処遇の適正化を謳っているにも関わらず、当事者の声を受けとめていない点も問題である。

2 点目として、家族・友人・支援者などの差し入れや、他の被収容者から融通してもらうなど、他人に頼らないと生理用品が入手できないことによる精神的負担が問題である。差し入れを頼める相手が男性しかいない人、家族や友人に生理の話をしづらい人もいる。ブロック内に他の被収容者がいない場合、融通してもらうこともできない。必需品である生理用品が入手できず、精神的負担を強いることは、その人の尊厳を傷つけているのではないか。

3 点目は、被収容者にとって最後の手段である自費購入が一種の「マイノリティ・ペナルティ」[23]にあたり、選択肢の少なさと、価格が割高で経済的負担になるという二つの不利益をもたらすことである。被収容者は差し入れを頼めない場合、ショッピングリストを使ってコンビニにナプキンを注文する。当事者は、横浜入管のリストに、昼用と特に多い昼用の 2 種類のナプキンしかなく、夜用は入っていないと語っている[24]。夜は 2 枚のナプキンを繋げて使った人もいたというが、経血量が多い人にとって選択肢が少ないことは深刻な問題である。筆者らが、横浜入管内のコンビニで確認したところ、ナプキンは 2 社の 13 種が店頭に並んでいた。形状（羽つき、羽なし）、長さ（20～40 センチ）、厚み（3～7 ミリ）など、様々なナプキンが販売されており[25]、ナプキン以外にタンポンとおりものシートも、店頭では各 1 種ずつ販売されているが、ショッピングリストにはないという。

横浜入管内のコンビニと量販店における同一商品の価格を表 1 に示す。入管内のコンビニにおけるナプキンの販売価格は、一般のコンビニチェーンの店舗と同様に設定されている。コンビニは 1 袋 10 個入りの少量でも販売し、量販店は 28～56 個というように大量に入った商品を主に扱っている。量販店で最も安く入手できるのは Z 社の 1 個あたり 3.8 円のナプキンである。入管内のコンビニでは Z 社の商品を扱っていない。入管のショッピングリストに掲載されているナプキンのメーカーを特定することはできないが、X 社か Y 社の「普通の昼用」（20.5 センチ）と「多い日の昼用」（23～25 センチ）だと推察する。これ

らは、表でグレーに色づけしたもので、いずれも 1 個 20 円以上と割高である。被収容者は、コンビニのショッピングリストを通じて自費購入する場合、選択肢と価格の両面で「ペナルティ」を負わされていることがわかる。

表 1：コンビニと量販店の生理用ナプキン価格の比較

| メーカー | 長さ（cm） | 個数／袋 | 価格（円） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | コンビニ | 量販店 | 1個あたり |
| X 社 | 23.0 | 10 | 207 | 取扱なし | 20.7 |
| | | 30 | 取扱なし | 459 | 15.3 |
| | 25.0 | 19 | 418 | — | 22.0 |
| | | | — | 328 | 17.3 |
| Y 社 | 20.5 | 10 | 207 | 取扱なし | 20.7 |
| | | 28 | 取扱なし | 305 | 10.9 |
| | 25.0 | 19 | 418 | — | 22.0 |
| | | | — | 328 | 17.3 |
| Z 社 | 20.5 | 56 | 取扱なし | 215 | 3.8 |

（出所）筆者らによる横浜入管内のコンビニおよび量販店での調査より[26]

4 点目として、衛生上の問題も指摘できる。差し入れであれ、自費購入であれ、入手しづらいことが理由で、被収容者はナプキンの使用を節約する傾向にある。交換せず複数回使うことで、衛生上の問題や健康への影響が懸念される。適切な医療を受けにくい入管内で、さらに健康を害する可能性のあることは、予防的観点から、極力避けるべきであろう。

## 5. 国内外の規範等にみる生理用品の扱い

入管収容施設で被収容者に生理用品を支給しないことの問題点は明らかだが、入管以外の施設では、どのように対応しているのだろうか。ここでは、類似施設の対応と、要請の根拠となる国内外の規範を紹介する。

### 5.1 日本の刑務所における官給品

法務省の資料によれば刑務所の官給品（施設が給貸与する物品）のうち日用品として、生理用品はちり紙や石けんとともに列記されている[27]。服役経験のある C さんは「刑務所では、1 人が 1 回の生理期間中に使用するナプキン相当数が入った袋を毎月支給されていた」[28]という。刑務所で支給されていたナプキンは市販品より質が悪かったと問題を指摘しつつも、差し入れを頼める人や所持金の有無に関わらず、全員が生理用品にアクセスできるという点で、女子刑務所のほうが入管収容施設よりも生理用品に関する処遇は良かったと証言している[29]。

刑務所と入管収容施設の設立目的は異なるが、いずれも法務省が関与する施設である。したがって、入管収容施設で刑務所と同等の対応を求めることは妥当ではないか。

### 5.2　入管収容施設の視察基準案

2010 年、法務省は、入管施設等の適正な運営のために視察を行い、意見を求める第三者機関として入国者収容所等視察委員会を設置した[30]。東日本と西日本に 1 つずつ設置された委員会は、学識経験者、法曹関係者、医療関係者、国際機関・NGO 関係者のほか、地域住民によって構成されており、入管収容施設や出国待機施設の視察、被収容者との面接や会議を行っている。2010 年度から 2020 年度まで 11 年分の報告において「生理」について言及しているのは、2017 年 1 月 20 日の東京入国管理局における委員会で「給与品目に生理用ショーツを追加する」ことが提案され、同 3 月 7 日に追加措置がなされたという報告 1 件のみである[31]。ナプキンの支給については言及がない。

2015 年、東京弁護士会外国人の権利に関する委員会は、入国者収容所等視察委員会が視察時に参照する文書として「エクスペクテイションズ（期待される状態）日本版：入国管理局被収容者の取り扱いと状況を評価するための基準（案）」（以下、エクスペクテイションズ）[32]を提案した。2014 年の参議院法務委員会において、当時の法務省入管管理局長が、英国の基準は日本にも当てはまる旨の答弁をしたことを受けて、英国王立刑事施設視察委員会が策定した基準をもとに日本の法制度に沿うよう作成された文書である。2016 年、東京弁護士会は、日本の入管収容施設の処遇が国際基準からかけ離れていることや、視察委員会による視察が十分機能していないことなどを理由として、これに沿った視察の実施を要請している。

エクスペクテイションズは、「セクション 2：尊厳」の冒頭で「被収容者は敬意をもってその尊厳を取り扱われ、収容の環境は尊厳を保つようなものであること」と述べている。「居住ユニット」に関する期待される状態「6　被収容者は、自分の身体、居室及び共有スペースを清潔に保つことができること」として「被収容者は、無料で基本的な化粧品類と衛生用品類を利用できること」を求めている。さらに、「セクション 5：短期収容施設」の「居住施設」に関する期待される状態では、「16　被収容者の居住施設は、修繕が施された良好な状態で、清潔で良好な環境のものであること」を指標とし、「女性は、生理用品が無料で入手でき、乳幼児のおむつ替え設備があること」と、生理用品に直接言及している。

この文書は、英国の基準を参考にした提案であり、入国者収容所等視察委員会は、2022 年現在も、同様の基準は策定していない。しかし、2014 年時点で法務省側が、英国の基準は日本にも当てはまる旨の答弁をしていることから、エクスペクテイションズは、生理用品の支給に際して参照すべき文書である。

### 5.3　災害時の避難所における備蓄品と配布方法

生理の貧困への対応として、自治体が無償配布した生理用ナプキンの中には、防災備蓄品が含まれていた。東日本大震災後、各地の自治体が防災備蓄品として生理用ナプキンを備蓄していることがわかる。

内閣府男女共同参画局が 2020 年に定めた「災害対応力を強化する女性の視点～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン～」（以下、ガイドライン）[33]は、「物資の備蓄・調達・配布」の章で「女性と男性のニーズの違いに配慮」し「早期に必要と思われる物資の代表的なもの」として「生理用品」をあげている。また「備蓄チェックシート」には、生理用ナプキン（普通・長時間向け等）や、おりものシートを記載している。

さらに「物資の供給」の章では「物資があるのに受け取りにくい」例として、東日本大震災後の避難所運営が男性リーダーを中心に行われていたことから「生理用品が届いても配布担当が男性であったため、女性はもらいに行きづらいということ」があったことに言及している。「避難所チェックシート」では「運営ルール」として「女性用品（生理用品、下着等）は女性担当者が配布を行っている」ことを指標としている。無償で配布するだけでなく、配布時の留意点は、被収容者の尊厳を守った配布方法を要請する上で参考になる。

### 5.4　人道憲章と人道対応に関する最低基準

内閣府男女共同参画局が策定したガイドラインは「男女の人権を尊重して安全・安心を確保する」ことを 7 つの基本方針のひとつとしている。その背景には、東日本大震災後にジェンダー視点をいかした支援の必要性が具体的に示されたこと[34]、災害援助における人道憲章と人道対応に関する最低基準「スフィア基準」が日本でもようやく周知されるようになったことがあげられる。スフィア基準は、「災害や紛争の影響を受けた人びとには、尊厳ある生活を営む権利があり、従って、支援を受ける権利がある」こと、「災害や紛争による苦痛を軽減するために、実行可能なあらゆる手段が尽くされなくてはならない」ことを基本理念としている。

「スフィア・ハンドブック」2018 年版には、生理について特記した基準がある。「衛生促進基準 1.3：月経と失禁衛生用品の管理」は「月経のある年齢の女性と少女や、失禁症状のある男女が尊厳とウェルビーイングを保ち、安心して生活を送れるように衛生用品と給水、衛生および衛生促進関連の施設にアクセスできる」ことを求めており、その「基本行動」として次の 3 点をあげている[35]。

1）月経と失禁に関する習慣、社会的慣習や迷信を理解したうえで衛生用品や施設を供給する。

2）女性や少女、失禁症状のある人びとと相談しながらトイレ、入浴場、洗濯場、汚物廃棄や給水施設の設計管理と設置場所の決定を行う。
3）適切な生理用品と失禁用品、入浴、洗濯、手洗い用の石鹸やその他の衛生用品へのアクセスを提供する。尊厳を保ち、負のレッテルを軽減する目的で目立たない場所で衛生用品の配布を行う。

生理用品の提供や配布の方法だけでなく、当事者と相談しながら汚物廃棄について決定することを求めている。さらに「基本指標」として、「月経がある年齢の女性と少女のうち、適切な生理用品にアクセスできる割合」だけでなく「生理用品を使用した人の満足度」もあげており、生理用品の入手、使用、廃棄方法を含めて、当事者の尊厳を重視していることがわかる。この基準以外に、トイレや衛生に関する項目においても、生理用品の配布や適切な処分について言及している。

## 6. 要請行動

国内外の規範に照らし合わせると、入管の生理用品支給体制には、問題がある。そこで、2021 年 8 月、入管に対する生理用品の無償支給を求める要請行動を開始した。準備段階で、外国人在留支援センター（Foreign Residents Support Center：FRESC）を訪問し、要請書の内容や提出方法について助言を得た。

### 6.1 無償提供の要請

「生理のある被収容者に生理用品を無償提供することについての要請書」（資料 1、以下、第一次要請）を提出するために入管庁に架電したところ「東京都の緊急事態宣言解除まで外部からの来訪者とは面会できない」と言われた。そこで、8 月 25 日、被収容者がいる横浜支局に提出した。同支局総務課で、経済的負担について表 1 と同じ趣旨の価格表を示して要請内容を説明した。

第一次要請の返信期限であった 9 月 8 日までに連絡がなかったため、同日、横浜入管に電話したところ「検討中」という回答であった。10 月 1 日に再度電話したところ、同日より「夜用と昼用の 2 種のナプキンを常時置くことになり、朝すでに設置した。本庁には報告事項として連絡した」という説明を受けた。「名古屋や大阪の入管には連絡はしていない」とのことだったが、他の入管で同様の対応を求めるために横浜の例を伝えることは構わないと了承を得た。

しかし、10 月 7 日に被収容者と面会したところ、二人とも配布方法について問題を指摘した。D さんは、1 日朝、居室にやってきた職員から、3 種計 7 個のナプキン（夜用 2 枚、昼用羽根つき 2 枚、羽根なし 3 枚）が入った袋を渡され「今日からトイレに置くようにな

った」とだけ、告げられた。翌朝から毎日、補充が必要か聞かれるようになった。なぜ、配布方法について自分たち被収容者に聞かないのか、1 日 7 個の枚数制限があるのかなど疑問がわいたが、担当者は何も説明しなかった。「意味がわからない」し、「毎日、生理について聞かれることは、傷つく」と訴えた。

C さんも、生理用品の補充を「毎日聞かれるのは嫌だ」と言う。新型コロナウイルス感染症対策のため、検温担当、マスク配布担当など計 5 人の職員が毎朝 9 時に居室にやってくる際に「生理なのか」聞かれ、職員らの前で回答を求められることが、新たな精神的な負担になっていた。

生理の経血量や日数は個人差が大きい。人によって必要な生理用品の種類や数量は異なる。しかし、被収容者に同一のセットを配布していることから、「必要な人に、必要な支援を、必要な分だけ」という多様なニーズへの対応がない。職員が月経期間か否かを口頭で確認することも、尊厳を守るやり方とは言えない。さらに、被収容者に対する職員の説明が不十分であることが、被収容者を不安にさせていた。

### 6.2 生理用品の支給方法に関する要請

第一次要請の結果、無償支給が始まったことは、経済的負担の軽減に一定の効果があった。しかし、精神的負担はむしろ増したことから、10 月 15 日、横浜支局総務課に「生理のある被収容者への生理用品支給方法に関する要請書」（資料 2、以下、第二次要請）を提出した。

10 月 7 日の面会で明らかになった問題点を克服すべく、①おりものシートなどを含めた被収容者のニーズに応じた生理用品の支給、②被収容者が「必要なものを、必要な分だけ、必要な時に入手できる」ようシャワールームなど共用スペースへの「生理用品ボックス」の常置、③ナプキン配布に関する意見を口頭または書面で被収容者に聞いた上で支給することの 3 点を提案した。いずれも、被収容者との面会で意見交換を行った上でまとめた案である。

申し入れに対応した担当者からは「検討します」という回答しか得られなかったが、同日申し入れ後に面会した被収容者から、すでに補充方法が変更されていることを知らされた。朝の点呼で補充の要不要を尋ねるのではなく、汚物入れのゴミの有無をもって判断する方法に変わったという。ゴミの有無を確認されることも嫌なので、職員が来る前に、空の汚物入れと中の袋を部屋の入り口に置いて、補充は不要だと示していると D さんは話してくれた。「自分が不安になることを避ける」術だという。ゴミの監視は、口頭で聞かれるより苦痛だと感じる人もいるだろう。賛同団体に報告したところ、「（ゴミまで確認されるのは）プライバシーの侵害だ」というコメントがあった[36]。

10 月 22 日、入管庁が全国の入管施設に生理用品の支給を指示する文書を発出していることがわかった[37]。内部文書であることから、Web サイトでは公開されないため、国会議員を通じて文書を入手することにした。

第二次要請の回答期日であった 10 月 29 日には遅れたものの、11 月 12 日に横浜入管総務課担当者より電話連絡があった。提案した①おりものシートの支給、②個別に手渡しではなくシャワー室など共有スペースへの設置の 2 点とも「回答できない」が、関係部署に申し入れ提案を共有したという報告であった。

### 6.3　他の入管での対応

入管庁が全国の入管に出した指示の実施状況を確認するため、田中は、仮放免者の会（Provisional Release Association in Japan: PRAJ）[38]のエリザベス・アルオリオ・オブエザさんとともに、12 月 1 日に名古屋入管、2 日大阪入管を訪問した[39]。

名古屋では、面会活動を行っている支援者[40]から、女性が 1 人収容されていることを確認していたが、当日までに名前がわからず面会申し込みができなかった。やむを得ず、総務課職員に連絡したところ、処遇担当者に確認の上、電話で次の回答を得た。

・10 月に本庁が出した生理用品の支給に関する文書については周知している。
・女性被収容者全員の部屋にプラスチックの箱を設置し昼用と夜用を常備している（枚数不明）。
・被収容者の申し出に従って補充している。
・使用済みのゴミを確認することはしていない。

また、名古屋で活動する START～外国人労働者・難民と共に歩む会～[41]の関係者や学生メンバーと面会し、今後、生理のある被収容者と面会する機会があれば、支給方法を確認するよう依頼した。

大阪入管では、PRAJ のメンバーである永井伸和さんから女性の被収容者の名前を聞いて面会を申し込んだ。エリザベスさんがやさしい日本語で書いた手紙を添えたが、しばらく支援者との面会を拒否しているそうで、会うことができなかった。

ただし、総務課渉外調整官が、PRAJ の永井さん、エリザベスさん、田中との会合に応じ、応接室で 30 分ほど意見交換を行った。処遇部門の女性区統括官から事前に聞き取った話として、次の点が共有された。

・10 月末から、女性被収容者の部屋に紙箱を置き、昼用 5 枚、夜用 2 枚を入れている。
・プラスチックの箱のほうが良いと思うが、購入が間に合わなかった。

・「無くなったら言ってください」「足りなくないですか」と声をかけているが毎朝ではない。
・すでに出所した人の中に頻繁に足りないと申し出る人がいたが、支給枚数に制限はない。
・要望があれば、他の人より多く支給することもある。
・使用済みナプキンは、共有スペースの黒いビニール袋に各自捨てている。
・誰が捨てたゴミか、わからないようにしている。
・大阪入管では、無償支給前から、使用済みのナプキンなどゴミの確認はしていない。
・被収容者同士が支給品を融通し合うことは問題にならない。
・被収容者同士のトラブルにならないなら、規則違反には該当しない。
・ウィシュマさんの件[42]以来、職員の意識改革を進めている。
・使う側の立場を考えた対応を心がけている。

大阪入管では 30 分程度意見交換ができた。永井さんによれば、大阪入管と PRAJ など市民団体が、長年話し合いを積み重ねて信頼関係を醸成してきた結果、支援者が、処遇担当者と面会して被収容者の要望を直接伝えることもできるようになったという。

横浜入管では、弁護士でない一般市民だけで面会に訪れても、職員による「立ち会い」はない。一方、名古屋入管も大阪入管も、面会中は職員が同席し、被収容者の後方で話を聞いていた。市民グループとの関係が良好な職員は、逐一メモをとることはないようだ。「立ち会い」を「監視」と考えれば、ないほうがよい。しかし、被収容者と支援者の会話を処遇部門の職員が聞くことは、入管側が被収容者のニーズを知る手段になっているのではないか。

### 6.4　指示文書の入手

入管庁が全国の入管施設に出した指示文書は、国会議員事務所を通じて入手することにした。入管収容問題にすでに高い関心を示している議員ではなく、「生理の貧困」について積極的に発言している議員に、まず働きかけることにした。生理の貧困の議論から、入管の被収容者が「取り残されている」現実を知ってもらうこと、その結果、生理の貧困への取り組みに被収容者を包摂し、生理の貧困の運動の中で移民女性の課題を「主流化」していくことを目指した。

最初に連絡した公明党の参議院議員の竹谷とし子事務所を通じて、12 月 21 日に文書を入手できた。「生理用品の支給の在り方について（指示）」（資料 3）と題した文書は「生理のある被収容者が自由に使用できる」こと、また「居室又は収容区域単位で常備する」ことを、速やかに「実施するよう指示」していた。

12 月末、BOND の高沢亜砂代さんが、この文書を横浜入管に提示して配布方法の変更を求めたが、2022 年 1 月 5 日、高沢さんと田中が被収容者と面会したところ、補充の際はナプキンが「手渡し」されていると聞いた。そこで、三度目の要請を行うことにした。

### 6.5 一括月次支給の要請

2022 年 2 月 24 日に横浜入管の総務課に持参した「生理のある被収容者への生理用品の「一括月次支給」への変更を求める要請書（三)」(資料 4、以下、第三次要請）は、提出までに内容を見直した。当初の草案では、本庁からの指示文書どおりでないことを指摘した上で、第二次要請での提案にこだわり、共用スペースへの設置と「尊厳を保つ」ことを強調した。

しかし、草案作成後に仮放免となった C さんと意見交換を行ったところ、次の指摘を得たため、要請内容を再検討した。ブロックに 1 人しか被収容者がいない場合、共用スペースに生理用ナプキンの入ったボックスを置く方法では、職員に生理期間について知られることには変わりない。一方、ブロックに複数名が収容されている場合は、同時に何人かが生理期間になることも考えられるため、必要なものを、必要な分だけ、必要な時に使えるとは限らないことなどが問題である。そこで、国内の刑務所と同様に、1 回の生理サイクル相当分のナプキンを一括で、毎月支給する提案に切り替えることにした。

また、文書のタイトルの言葉を「尊厳を守る」から「一括月次支給」という機能的な用語に改めた。プロジェクトの理念として「生理のある被収容者の尊厳を守る」ことは重要だが、何が尊厳を守り、何が尊厳を害しているのかが、横浜入管側に通じていない。都度の「手渡し」が問題であることを指摘し、生理時期を人に知られることなく「自由に使用できる」ようにする方法として生理用品の「一括月次支給」を求めた。さらに、C さんや D さんから指摘のあった廃棄の方法にも言及して「「一括月次支給」と「不透明ごみ袋」への変更が両方実現してはじめて、被収容者は生理時期を人に知られることなく過ごすことができる」と述べた。

これまで、要請文は横浜入管に持参するだけだったが、入管庁の指示文書も引用したため、入管庁にも CC を入れて要請文を作成し、第一次と第二次要請、ならびに「赤旗」に掲載された本プロジェクトの記事を添えて、入管庁にもこれら一式を郵送した。

### 6.6　横浜入管からの回答

3 月 2 日に横浜入管より電話連絡があり、同 7 日、プロジェクトメンバーは、支局長以下、職員計 4 人と面会した。これまでは、総務課の窓口で要請書を手渡すだけであったが、初めて会議室で 1 時間程度の意見交換を行い、被収容者から得た情報とは異なる点も確認できた。入管側からの説明の要点は、下記の通りである。

① 入管収容施設では、2021 年以前から、経済的困窮状態にある被収容者に、生理用品の無償提供を行っている。
② 2021 年 10 月 1 日から、横浜入管は全被収容者を対象に計 7 個の個別支給を始めた。
③ 同 10 月 4 日の時点で、配布の要不要を口頭で尋ねることはやめ、各居室のトイレに置かれた生理用品が減っていれば補充する方式に切り替えていた。
④ 2022 年 3 月 3 日より、個別配布に加えて、共用スペースであるシャワールームに、昼用 30 個、夜用 10 個を一括で配備し、必要な人が使えるようにしている。巡回する職員が、減った分を補充している。
⑤ ショッピングリストには計 100 以上の品目が日本語と英語で写真つきで記されている。生理用品は 4 種あり、夜用のナプキンも含まれている。
⑥ 使用済みのナプキンは（中が見えないよう）茶色の紙袋に入れてから、透明のビニール袋に入れて個別回収している。
⑦ 過去 1 年間の記録を確認したが、生理用品を繰り返し利用したことに起因する疾患や経血によりシーツを汚したという報告は 1 件もない。
⑧ 全被収容者に職員が対面で「現在ナプキン配布の方法の問題点」「改善案」「ナプキン配布によりストレスを感じているか」の 3 点について聞き取りを行ったが、現在の方法には問題はなく、改善案の希望もなし、ストレスに感じているという回答はなしという回答を得た。
⑨ 50 歳代の被収容者からは「配布はありがたい。「おもてなし」みたいに感じている。必要な時は自分から言える。職員とは女性同士なので、全く問題はない。今はみんな必要ならば言えると思う」という意見を聞いた。
⑩ 支給にあたって、被収容者から「貧乏人扱いするな」と言われたり、必要に応じて配布枚数を変えると、被収容者同士が差別を受けたとクレームしたりしかねない点を懸念した。

本プロジェクトの要請によって実施されたのは、②の全被収容者への個別支給と、④の共有スペースでの一括常備である。

従来からの支給に関する①と、ショッピングリストの内容に関する⑤は、被収容者からの聞き取りとの間に齟齬があった。「入管が必要だと認めていなかった」（問題点 1）わけではなさそうだが、当事者から、支給されたという話を聞かなかった。「生活困窮者」とみなされず、支給されないので、差し入れに頼るしかなかったと推察できる。⑩の「貧乏人扱いするな」という「クレーム」の発生を恐れて「生活困窮者」とみなさなかったのだろうか。

第一次要請の段階で、プロジェクトメンバーがショッピングリストを見ることができていたなら、選択肢の問題など「マイノリティ・ペナルティ」（問題点 3）は、それほど大きな問題ではないことが確認できたであろう。③の口頭での要不要の確認をやめた時期についても、プロジェクトメンバーによる面会での聞き取りと、若干、ズレがあった。面会できる被収容者に日記をつけてもらうといった工夫ができたかもしれない。

⑥のゴミの捨て方に関しては、個別回収では生理期間が人に知られてしまうことには変わりがないため、大阪入管では各自が、共有スペースに持参していることを伝えたが、生ごみと生理用品は、衛生上の問題があるため、共有スペースでの回収はしないという回答であった。

問題点 4 で指摘した健康上の問題は、⑦の事実確認によれば「ない」とされている。問題点 2 として指摘した精神的負担についても、⑧⑨の聞き取りをもって「ない」という説明がなされた。しかし、職員と被収容者という非対称的な力関係の中で行う面談調査は、適切ではないことを伝えた。被収容者からフィードバックを得るなら、職員ではない第三者が行うか、無記名の記述式で、リッカート尺度を用いた 5 段階評価（例：非常に満足している・やや満足している・どちらとも言えない・あまり満足していない・全く満足していない）等を用いることを提案した。

## 7. アクションの振り返り

2022 年 3 月初頭時点では、横浜入管の被収容者と本プロジェクトのメンバーが直接つながっていないため、当事者から見たプロジェクトの評価は得ることができない。ここでは、半年の過程を振り返る。

### 7.1　発信に対する反応

本プロジェクトは「入管収容問題の一つとして生理用品の支給を求める」だけでなく、「生理の貧困への取り組みから「取り残されて」いる被収容者を包摂する」ことを目指した。要請文を発行する際、「#入管被収容者にも生理用品を」のアカウントから Twitter や Instagram で発信するとともに、賛同団体にはメールで報告を行った。第一次要請のみ英訳版を作成したが、英語のみで連絡がくる賛同団体はなかったため、第二次要請からは英語では発信していない。

第一次要請時に 5 つだった賛同団体は、第二次要請の時点で 7 団体、第三次要請では計 8 団体となった。賛同団体を下記に五十音順に列記する。*印の 3 つは学内団体である。

Gender Equality for Sophia*（第二次要請より）
収容ではなく安心安全な暮らしを

Speak Up Sophia*（第二次要請より）
セックスミュージアム設立準備委員会（第三次要請より）
Sophia Refugee Support Group*
＃なんでないの プロジェクト
BOND～外国人労働者・難民と共に歩む会～
＃みんなの生理

まず、学内からは、品川入管での面会を行っている Sophia Refugee Support　Group の他に、ジェンダーの視点で活動している Gender Equality for Sophia と Speak Up Sophia の賛同を得た。

「収容ではなく安心安全な暮らしを」と BOND は、本プロジェクトに当事者の方を紹介してくださった、入管収容問題にすでに関わっている団体である。

生理やリプロダクティブ・ヘルスについて活動している団体として、＃みんなの生理、＃なんでないの プロジェクト、セックスミュージアム設立準備委員会から賛同を得た。生理の貧困について活動しているその他の団体から賛同を得るには、学生からの Twitter や Instagram を中心とした発信だけではなく、各団体やその代表者に、賛同依頼をメールで送るといった発信が必要であったと思われる。また、横浜入管を要請先としていたため、大阪や名古屋など他の地域の団体への働きかけは不足していた。

2021 年 3 月に名古屋入管で亡くなったウィシュマさんの事件後、入管収容問題への関心は高まっている。個人からも賛同を集める仕組みを作れば、反応は多く得られた可能性がある。しかし、プロジェクト側の体制が脆弱であったことから、名簿管理を伴う個人賛同は求めなかった。

賛同団体からの応援コメント以外に、一般の個人からも Twitter で複数の反応が寄せられた。第一次要請後、支給が始まったことに対して「え…逆に今までなかったの？悲しい……人をどこまで馬鹿にすればいいのか」、「いままで生活必需品の生理用品を設置してなかったことに驚いてる…手元にない人はどうやって生活してたんだろう」（ともに 10 月 4 日）という驚きの声が寄せられた。また「このような専門的取り組みに感謝します。いままでいろんな人が指摘していたのに無視していたのはなんだったのかと理不尽に思ってしまいますが.....」（10 月 8 日）という入管の対応に対する怒りのコメントもあった。

要請開始当初から、メディアからの問い合わせや激励があった。2022 年 2 月 3 日には赤旗に「生理用品入管手渡し　入手困難　尊厳にかかわる　再三の要請　改善したが」が、3 月 8 日には BuzzFeed に「「ティッシュを使ったことも」　生理になってもナプキンがない。そんな状況を変えたかった。女性たちの思い」という記事が掲載された[43]。メディアによる注目も、入管に対応を迫る上で、重要な後押しになった。

### 7.2　被収容者との関係

本プロジェクトが取り上げたのは、外部者が立ち入ることができない入管施設内での被収容者の処遇問題である。聞き取りに応じてくれた被収容者の中には、入管収容施設内で声をあげたり、意見を提出したりしても、反応がなく、改善が見られないことにいら立つ人もいた。プロジェクトのメンバーの聞き取りに対して、彼女たちは、当初、懐疑的であったと思われる。

しかし、第一次要請後、配布方法の問題はあっても支給が始まったことによって、彼女たちとの会話に変化があった。面会室に支給された現物をもってきてくれたり、配布時の問題点や改善案を教えてくれたりするようになった。自分の意見が要請に反映されることがわかり、支給を受ける裨益者としてだけではなく、プロジェクトの担い手へと自身の立場が変化したのかもしれない。仮放免になった後も、メディア関係者のインタビューに応じるなど、自分の発言を処遇改善につなげるよう協力してくれた人もいた。

ただし、すべての被収容者にとって、生理用品が最優先課題ではないことも、面会時の発言から理解できた。面会時には、食事やショッピングリストの改善など、多くの問題が提起された。生理用品の問題に限らず、その他の処遇問題も、外部者が共に声をあげることで改善される可能性がある。しかし、外部者は被収容者と面会し、聞き取りができなければ、そもそもニーズの把握ができない。外部者が容易にアクセスできない入管施設への長期収容制度自体の廃止の重要性に改めて気づかされる。

### 7.3　入管側との対話

2022 年 3 月 7 日に、初めて、横浜入管の関係者と意見交換の機会が訪れた。第一次要請後、生理のある全被収容者に対する支給が始まった段階では、本プロジェクトのメンバーも、入管の対応が前向きであると感じていた。しかし、第二次要請で提案した共用スペースでの常備については「回答できない」という返事しかなかった。第三次要請後の 3 月 3 日にこの提案が受け入れられたのは朗報であったが、4 ケ月以上かかっている。

第二次要請では配布をめぐる被収容者と職員のコミュニケーションの不足を指摘しているが、それは、入管側と要請行動を行った本プロジェクトのメンバーとの関係においても言えることではないだろうか。配布方法の変更時期や、ショッピングリストの品目などの情報の齟齬は、入管側と本プロジェクトメンバーの間で直接対話する機会があれば、第三次要請以前に解消することができていただろう。

3 月 7 日の意見交換で、被収容者への聞き取りについて共有されたが、その対象となった被収容者が何人いるかという情報は開示されなかった。入管によっては、支援団体との定期協議に応じ、被収容者の人数や国籍、医療ケアや処遇など収容施設内での対応につい

て、質問に答える形で開示している。例えば、移住労働者と共に生きるネットワーク・九州は、2004 年以来、大村入国管理センターとの意見交換会を行っており、その記録を Web サイトで公開している[44]。

入管と支援団体の定期的な対話の場があれば、本プロジェクトでとりあげた生理用品の支給状況も、被収容者への聞き取りから情報を得るだけでなく、入管側からも説明を受けることが可能だったはずだ。入管側との意見交換の場で、要請に対して「反論したくてもできなかった」という発言があったが「要請に対する反論」という二項対立の構図ではなく、被収容者の処遇について「共に考える」という関係性も築き得たのではないだろうか。

ソーシャル・アクションを行う際、当事者からの聞き取りは、その声を代弁するためにも、最も重要である。同時に、課題解決の方法を検討する段階では、当事者以外のアクターとも対話が不可欠である。本プロジェクトにおいて、入管との対話の実現には時間がかかったが、最終段階で、提案がある程度、受け入れられたことは確認できた。

## おわりに

2022 年に入り、生理の貧困に関する報道は少なくなっている。防災備蓄品などからの無償提供など、一時的な対応が収束を迎えたのか、学校等での支給が制度化されてニュースとして取り上げられることがなくなったのかはわからない。しかし、生理用品への軽減税率は未だ実現しておらず、生理の貧困が解決したとは言えない。入管の被収容者への生理用品の配布という、生理の貧困の中でも「取り残された」課題への取り組みを例に、他にも、声をあげにくい当事者がいないか点検し、その解決のためには、誰と対話するのが有効なのかを考えていきたい。

## 謝辞

まず、入管施設内で面会に応じて下さった被収容者の方、仮放免となってから入管施設での経験を話して下さった被収容経験者にお礼を申し上げます。

次に、本プロジェクトの賛同団体のみなさまに感謝します。入管側からなかなか反応が得られない中、みなさまからいただくメッセージに大いに励まされました。

「BOND～外国人労働者・難民と共に歩む会～」の高沢亜砂代さんが、入管施設での被収容者の方との面会に導いてくださらなければプロジェクトは実施できませんでした。女性の被仮放免者への聞き取りにあたっては「収容ではなく安心安全な暮らしを」のメンバーで、アーティスト・アクティビストの滝朝子さんにご協力いただきました。仮放免者の会のエリザベス・アルオリオ・オブエザさんからは、要請行動にあたっての心構えについて助言と温かい励ましをいただきました。みなさまのご協力と的確なご指導に心より感謝します。

入管庁内の文書を入手してくださった竹谷とし子参議院議員事務所にもお礼を申し上げます。

本プロジェクトの経費の一部は、科研費研究・国際共同研究強化（B）「移住女性と SDGs：セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルスへのアクセス」（18KK0030）から支出しました。

**資料 1**

「生理のある被収容者に生理用品を無償提供することについての要請書」

2021 年 8 月 25 日

貴庁の収容施設に収容されている生理を経験する人は、生理用品を外部から差し入れの形で手に入れたり、貴庁職員を通して施設内のコンビニで割高なナプキンを購入したりしていたと、収容経験のある女性の方からお話をうかがいました。横浜支局には現在女性のみが収容されていますが、生理のある横浜の被収容者は今も、生理用品にかかる費用を節約するために同じナプキンを繰り返し使って対応したりしています。

しかし、生理用品は生理のある人にとって必需品です。収容施設内では、食事の提供や居室の冷暖房の完備、トイレットペーパーの提供といった必需品が無償で提供されているようですが、生理用ナプキンもこれらと同じく必需品として、無償提供することを求めます。

【要望理由】

① 被収容者にとって、生理用品へのアクセスは経済的・精神的負担が大きいため

昨今「生理の貧困」が話題になっておりますが、収入の頼りがない被収容者にとって生理用品を購入することは金銭的に大きな負担となっています。また、疾患の影響で過多月経や経血量の増加といった症状を持つ人は常にナプキンが必要な場合もあり、こうした人々は生理用ナプキンの購入費用を捻出することが難しく、衛生面で不安の残る使用法で使わざるを得なくなります。加えて、自費購入が困難な人は生理用品を入手するために他者に頼まなければならず、そのための精神的負担も大きいと考えられます。生理を経験する被収容者の心身の健康を守るため、生理用品の無償提供を求めます。

② 被収容者の尊厳を守るため

被収容者は、生理用品を手に入れるために外部の支援者等に差し入れを頼んだり、他の被収容者にナプキンを分けてもらったり、施設内のコンビニで割高なナプキンの購入をしなければなりません。このように、常に他者に頼まなければ生理用品のような必需品を得ることができないことは、生理のある人の尊厳を傷つけることにつながります。

人道憲章と人道対応に関する最低基準である「スフィア・プロジェクト」、WHO の定める「難民・移民のための健康ガイドライン」等さまざまな国際規範で、衛生用品として生理用品の提供は必要だと定められています。また、日本の内閣府でも、避難所には生理用ナプキンを複数種類備蓄することが必要とされています。日本の刑務所でも、生理用品は官給品に含まれています。入管収容施設でも、生理のある被収容者の尊厳を守るために、無償で生理用品を提供することを求めます。

以上２つの理由から、被収容者には生理用品を無償で提供し、入管収容施設内の「生理の貧困」をなくしていただけませんでしょうか。お忙しい中大変恐縮ですが、ご検討いただき、【9 月 8 日まで】にご回答を賜りますようお願い申し上げます。

**資料 2**

「生理のある被収容者への生理用品支給方法に関する要請書（二)」

2021 年 10 月 15 日

今年 8 月 25 日、私たちは、貴支局に「生理のある被収容者に生理用品を無償支給することについての要請書」を提出しました。その結果、10 月 1 日より生理用ナプキンを支給することになったと連絡を頂戴しました。

10 月 7 日に、私どものメンバーは、被収容者の方たちと面会し、支給方法を尋ねました。要請理由にあげていた「被収容者にとって、生理用品へのアクセスは経済的・精神的負担が大きい」のうち、経済的側面について一定の改善があったことを確認しました。

しかし、理由の２点目に挙げた「被収容者の尊厳を守る」ことは、実現されていないと感じております。折角の対応が、被収容者の方たちにも受入れられるよう、改めて、生理のある被収容者の方たちの尊厳を守り、生理用品へのアクセスにかかる精神的負担をなくすよう、現在の支給方法の見直しを求めます。

【現在の支給方法の問題点】

① 配布するナプキンの種類と数量が限られている

被収容者の方から現物を見せてもらい、3 種のナプキン（夜用 2 枚、昼用羽根つき 2 枚、羽根なし 3 枚）がセットで支給されていることを確認しました。3 種類のナプキンが配布されていることから、昼夜の異なるニーズへの配慮がわかりました。しかし、人によって必要な生理用品の種類や数量は異なります。経血量や日数は個人差が大きいため、必要だと申し出た被収容者に、毎回、同一のセットを配布することは、合理的だとは言えないのではないでしょうか。

私どもの聞き取りでは、ナプキンではなく「おりものシートが欲しい」という被収容者の方の声も聞いています。ナプキンは支給されていますが、用途が異なるため、ショッピングリストに記載して購入するか、外部の支援者に差し入れを頼むしかありません。

内閣府が発行した「男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン」第 3 部「備蓄チェックシート」（内閣府男女共同参画局 2020：56）には「おりものシート」は、生理用ナプキンとは別に記載されています。「必要な人に、必要な支援を、必要な分だけ」は、同ガイドラインの第 2 部 24 節「物資の供給」で求めている「多様なニーズへの対応」（前掲

書 : 39）の最も重要なポイントです。「必要なものが、必要なだけ、必要なときに」支給されるよう、被収容者に代わって、方法の見直しを求めます。

② 毎朝「生理があるか」を職員から聞かれる

二つ目は、支給の要不要の確認方法です。毎朝 9 時の点呼の際に、生理用品の補充の要不要が聞かれると、被収容者の方から聞いています。職員 5 名ほどが個人の居室で行う点呼の場において、毎朝「生理なのか」聞かれ、応答を求められることは、被収容者の方たちにとって、新たな精神的負担になっているようです。その一人は、「毎日、生理について聞かれることは、傷つく」と話していました。

「生理のある人の尊厳」は、ナプキンの配布だけによって守られるのではありません。人道憲章と人道対応に関する最低基準である「スフィア・プロジェクト」の「衛生促進基準 1.3 : 月経と失禁衛生用品の管理」は、その基本行動として「尊厳を保ち、負のレッテルを軽減する目的で目立たない場所で衛生用品の配布を行う」（Sphere Association 2018: 102）ことを求めています。

現在の支給方法では、残念ながら、被収容者の方たちの尊厳は保てないことを危惧します。被収容者の方たちが、生理であることを職員に告げなくても、必要な時に生理用品を入手できる仕組みへの変更を求めます。

③ 配布をめぐって被収容者と職員の間のコミュニケーションが不足している

三つ目は、配布をめぐる被収容者と職員間のコミュニケーションの不足です。10 月 1 日から、事前の説明なく、毎朝、生理用品の要不要を聞かれるようになったことに、被収容者の方たちは不安を感じたようです。

「スフィア・プロジェクト」の「衛生促進基準 1.3 : 月経と失禁衛生用品の管理」は、「生理用品を使用した人の満足度」（前掲書: 102）を基本指標とすることを求めています。同ガイダンスノートでは「衛生用品の配布とともに、家庭または学校などの施設内での廃棄方法についても当事者に相談することが重要である」（同）と述べています。

入管施設での生理用ナプキンの配布については、当事者である被収容者の方から最適な方法を意見聴取するのが妥当ではないでしょうか。こうしたコミュニケーションも、被収容者の方の「人間としての尊厳」の回復につながるものと考えます。また、配布の「満足度」を定期的に確認することも求めます。

【今後の支給に関する提案】

上記の３つの問題点を踏まえ、私たちは以下のことを要請します。

1. おりものシートを含めた、被収容者のニーズに対応した生理用品を支給すること

2. 被収容者が、必要なものを、必要な分だけ、必要な時に入手できるよう、シャワールームなど共用スペースに、おりものシートも含む「生理用品ボックス」を常時置くこと
3. 生理用品の配布をめぐって被収容者の尊厳が保たれるよう、ナプキン配布に関する意見を口頭または書面で被収容者に聞き、十分コミュニケーションを取った上で支給すること

お忙しい中、大変恐れ入りますが、被収容者の方たちの尊厳を保つため、支給方法の見直しをご検討ください。【10 月 29 日まで】にご回答を賜りますようお願い申し上げます。

**資料 3**

「生理用品の支給の在り方について」（指示）

入管庁警第 165 号
令和３年 10 月 18 日

入国者収容所長殿
地方出入国在留管理局長殿
地方出入国在留管理局支局長殿

出入国在留管理庁出入国管理部長　丸山秀治（公印省略）

「生理用品の支給の在り方について」（指示）

生理用品については、被収容者処遇規則第 23 条第２項に規定する給与品として取扱いがなされていると承知していますが、今後は、生理のある被収容者が自由に使用できるよう、給与品として取り扱わず、居室又は収容区域単位で常備する取扱いに改めますので、本信到着次第実施するよう指示します。

**資料 4**

「生理のある被収容者への生理用品の「一括月次支給」への変更を求める要請書（三）」

2022 年２月 24 日

2021 年８月 25 日、私たちは「生理のある被収容者に生理用品を無償支給することについての要請書」（一）を提出しました。その後、10 月 1 日に生理用ナプキンが支給されるようになったと連絡を頂戴しました。しかし、被収容者の方から、生理用品の要不要を職員に伝えないと受け取れないことが精神的負担になっていると聞き、10 月 15 日に「生理のある被収容者への生理用品支給方法に関する要請書」（二）を提出しました。

私たちは、被収容者の方との面会の折に、横浜支局総務課の方と直接対話をして改善を要望し続けましたが、2022 年 1 月末時点では改善を確認できていません。そこで、第三次となる本要請書を提出する次第です。

私たちは、国会議員を通じて、2021 年 10 月 18 日に、出入国在留管理庁出入国管理部長が、入国者収容所長、地方出入国在留管理局長、同支局長宛に発出した「生理用品の支給の在り方について（指示）」という文書（以下、「指示書」）を入手しました。同文書で下記の指示が出されていることを確認しました。

> 生理用品については、被収容者処遇規則第 23 条第 2 項に規定する給与品として取扱いがなされていると承知していますが、今後は、生理のある被収容者が自由に使用できるよう、給与品として取り扱わず、居室又は収容区域単位で常備する取扱いに改めますので、本信到着次第実施するよう指示します。

しかし、2022 年 1 月末の被収容者との面会では、毎朝の点呼時に生理用品の要不要を尋ねられることはなくなったものの、必要な際に職員から「手渡し」で受け取っていると聞きました。これは、上記の指示書にある「自由に使用できるよう」「常備する取扱い」とは異なります。むしろ「被収容者処遇規則第 23 条第２項に規定する給与品」に記された「給与する衣類及び日用品の品目、数量及び使用期間は、所長等が定める」という取扱いを改める前の給与方法に近いのではないでしょうか。指示書に「本信到着次第実施するよう指示します」とあるにも関わらず、文書発出後３カ月以上経ても指示通りに支給されていないと言わざるを得ません。

「自由」とは「他からの強制・拘束・支配など受けないで、自らの意志や本性に従っている・こと（さま）」（大辞林）であり、「常備」とは「常に備えておくこと。絶やさないようにすること」（同上）です。この２点が考慮されていない「手渡し」による配布は、被収容者の尊厳を守る支給方法とは言えません。

現在、自治体が学校等で行っている生理用品の無償提供は、トイレの個室や更衣室に設置する「非対面方式」です。法務省監督下の収容施設である刑務所では、1 人が 1 回の生理期間中に使用するナプキン相当数を袋に入れて、全被収容者に毎月支給しています。入管収容施設においても、被収容者が、生理時期を人に知られることなく「自由に使用できる」よう、生理用品の「一括月次支給」を求めます。これが「常備」に最も近い方法です。

月１回の支給には、昼用普通サイズだけでなく夜用ナプキン５枚程度を含む計 30 個程度を入れてください。生理の期間や経血量は個人差があり、生理期間外に不正出血がある人もいます。計 30 枚では足りず、追加支給を要望する人がいる場合は、増量などの個別対応によって「自由に使用」できる状態の確保をお願いします。

また、使用済み生理用品を入れる居室のごみ袋を、内容物が見える透明のものから不透明のものに変更していただくこともあわせて要請します。「一括月次支給」と「不透明ごみ

袋」への変更が両方実現してはじめて、被収容者は生理時期を人に知られることなく過ごすことができます。

今後も、私たちは、生理のある被収容者と面会する際、指示書通りに「自由」「常備」の２点を担保し、生理用品の支給方法がされたか確認を続けます。改善が見られるまでは、要請を止めることはありません。

**参考文献**

織田朝日（2021）『ある日の入管～外国人収容施設は”生き地獄“～』 扶桑社

ソーシャル・アクションハンドブック作成チーム（2017）『ソーシャル・アクション　ハンドブック：テーマと出会い・仲間をつくり・アクションの方法を見つける 39 のアイデア』 特定非営利活動法人開発開発教育協会（DEAR）

田中 雅子（たなか まさこ）、乾 友菜（いぬい ゆうな）、
川村 ひなの（かわむら ひなの）、萩原 千賀（はぎわら ちか）、
（上智大学 総合グローバル学部）

---

[1] Geng, Caitlin, 2021. “What to know about period poverty” Medical News Today, https://www.medicalnewstoday.com/articles/period-poverty#in-the-global-south（2022 年 2 月 26 日閲覧）

[2] About Menstrual Hygiene (MH) Day https://menstrualhygieneday.org/about/about-mhday/（2022 年 2 月 26 日閲覧）

[3] ＃みんなの生理　https://minnanoseiri.wixsite.com/website/about（2022 年 2 月 26 日閲覧）

[4] 内閣府男女共同参画局「生理の貧困」 https://www.gender.go.jp/policy/sokushin/kenko/periodpoverty/index.html（2022 年 2 月 26 日閲覧）

[5] 内閣府男女共同参画局 2021「生理の貧困」に係る地方公共団体の取組」（2021 年 5 月 19 日時点） https://www.gender.go.jp/policy/sokushin/kenko/periodpoverty/pdf/1.pdf　（2022 年 2 月 26 日閲覧）

[6] 「女性活躍・男女共同参画の重点方針 2021」https://www.mie-u.ac.jp/danjo/materials/10_1_jyuten2021_honbun.pdf　（2022 年 2 月 27 日閲覧）

[7] 正式には「被退令仮放免者」であるが、以下、団体名等以外は「被仮放免者」とする。出入国在留管理庁「送還忌避者の実態について」 https://www.moj.go.jp/isa/content/930005082.pdf　（2022 年 3 月 6 日）

[8] 尾川知那ほか著 2021「日本の入管制度の課題を学び、伝える―「仮放免」当事者へのインタビューから教材作成まで」、『グローバル・コンサーン』第 3 号、28-45 頁。

[9] 教材「これって「多文化共生」？：日本の入管制度を考えよう」のファシリテーターマニュアルは、次の URL よりダウンロード可。 https://docs.google.com/document/d/1jsu2Iqbo85hseGt_nLm6X15_OK6Mk1me-bX0PVojJuM/edit?usp=sharing（2022 年 3 月 3 日閲覧）

[10] BOND～外国人労働者・難民と共に歩む会～　https://nanmim-bond.amebaownd.com/（2022 年 2 月 27 日閲覧）
[11] 他に、清掃業者、配達に来たコンビニ店員、給食納入業者とも会話は可能だが職員が監視している。
[12] 「被収容者処遇規則」https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=356M50000010059（2022 年 2 月 27 日閲覧）
[13] 「意見箱」等とも呼ばれている。正式名称は確認できなかった。
[14] 2021 年 8 月 11 日被収容者ならびに BOND の高沢亜砂代さんより聞き取り。
[15] 出入国在留管理庁「収容施設について（収容施設の処遇）」https://www.moj.go.jp/isa/applications/guide/tetuduki_taikyo_shisetsu.html（2022 年 3 月 6 日閲覧）。
[16] 同時期に、別の地方の入管では、内容が表記されていて、ガラス瓶に入っていなければ可であるという回答を得たため、食品を差し入れることができた。
[17] 2021 年 7 月 2 日オンラインでのインタビュー。この語りにおける「収容施設」とは、品川入管を指していると思われる。
[18] 2021 年 7 月 8 日オンラインでのインタビュー。
[19] 支援者による書籍にも「特に生理用品は高いので、差し入れはありがたい」と記されている（織田　2021：63）。
[20] 2021 年 8 月 11 日の面会時にインタビュー。
[21] 2021 年 8 月 11 日ならびに 25 日の面会時にインタビュー。
[22] 2020 年 4 月 25 日、品川入管に長期収容されていた女性たちが行った帰室拒否による抗議行動。仮放免許可基準の明確化などを紙に書いて静かに求めていた女性たちを男性職員が制圧し、下着姿の被収容者を連行し、一部を懲罰房に入れた。その様子をビデオ撮影するなど、尊厳を奪う行為が問題になった。弁護士ドットコムニュース 2020 年 5 月 16 日「東京入管、コロナ対応めぐり「女性収容者」へ虐待か…シャワーに乱入、下着のまま独房に押し込める」https://www.bengo4.com/c_16/n_11222/（2021 年 8 月 11 日閲覧）
毎日新聞 2020 年 5 月 18 日「「みんなで裸を見たと言われた」「尊厳失われた」入管収容女性が手紙で訴え　https://mainichi.jp/articles/20200518/k00/00m/040/233000c（2021 年 8 月 11 日閲覧）
[23] 多数派や富裕層には豊富な選択肢があり、大量に買うことで安価なものを買うことができるのに対して、マイノリティや貧困層には与えられる選択肢が少なく、少量ゆえに単価が高いものを買ったり、品質の悪いものしか入手できなかったりという不利益が生じやすいこと。
[24] 後述の横浜入管との面会時に夜用もショッピングリストに含まれていることがわかった。しかし、被収容者からの聞き取りでは夜用は入っていないと聞いていた。
[25] ナプキンの分類については、次の文書を参照した。
日本衛生材料工業連合会（2013）「特集 生理用ナプキンについて知っておきたいさまざまな事柄」、『日衛連 NEWS』No.78　https://www.jhpia.or.jp/pdf/news78.pdf（2022 年 2 月 17 日閲覧）
[26] 横浜入管のコンビニの価格は 2021 年 8 月 25 日、量販店の価格は千葉県市川市ドン・キホーテ本八幡店で 2022 年 2 月 28 日調べ。
[27] 法務省「受刑者が居室内で生活するための物品」https://www.moj.go.jp/content/000002253.pdf　（2022 年 2 月 23 日閲覧）
[28] 仮放免になった C さんに、2022 年 2 月 18 日オンラインでインタビューを行った。
[29] C さんによれば、生理用品一式を受け取った日付を袋に書き、概ね 1 ケ月後に再度一式が支給されたという。高齢の受刑者は、ナプキンを尿漏れパッド代わりに使用していたため全員へのナプキン支給は有効であったと述べている。

[30] 出入国在留管理庁「入国者収容所等視察委員会」
https://www.moj.go.jp/isa/policies/policies/nyuukokukanri02_00028.html（2022 年 2 月 28 日閲覧）
[31] 2017 各入国者収容所等視察委員会の意見に対する措置等報告（概要）一覧表
https://www.moj.go.jp/isa/content/930003724.pdf （2022 年 2 月 17 日閲覧）
[32] 東京弁護士会 2016「エクスペクテイションズ（期待される状態）日本版に沿った視察実施を求める要請書」https://www.toben.or.jp/message/ikensyo/post-454.html（2022 年 2 月 28 日閲覧）
[33] 内閣府男女共同参画局（2020）「備蓄チェックシート」、『災害対応力を強化する女性の視点～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン～』
https://www.gender.go.jp/policy/saigai/fukkou/pdf/guidelene_01.pdf（2022 年 2 月 17 日閲覧）
[34] 東日本大震災女性支援ネットワーク（2012） 『こんな支援が欲しかった！～現場に学ぶ、女性と多様なニーズに配慮した災害支援事例集』 http://gdrr.org/2014/05/149/ （2022 年 2 月 17 日閲覧）
[35] Sphere Association「スフィアハンドブック：人道憲章と人道支援に関する最低基準」2018 https://jqan.info/wpJQ/wp-content/uploads/2020/04/spherehand-book2018_jpn_web_April2020.pdf （2022 年 2 月 17 日閲覧）
[36] 「＃みんなの生理」共同代表谷口歩実さんより。
[37] 入管庁関係者からの電話連絡。
[38] 仮放免者の会（PRAJ）http://praj-praj.blogspot.com/（2022 年 2 月 17 日閲覧）
[39] 2021 年末時点で、横浜、名古屋、大阪以外の入管に女性は収容されていない。
[40] 『ウィシュマさんを知っていますか？名古屋入管収容場から届いた手紙』（風媒社、2021 年）の著者眞野明美さんからの情報。
[41] START~外国人労働者・難民と共に歩む会~https://start-support.amebaownd.com/（2022 年 2 月 17 日閲覧）
[42] 2021 年 3 月 6 日に名古屋入管内で亡くなったスリランカ人女性のウィシュマ・サンダマリさん。
[43] 2022 年 3 月 8 日 BuzzFeed https://www.buzzfeed.com/jp/sumirekotomita/period-pad-38（2022 年 3 月 8 日閲覧）
[44] 移住労働者と共に生きるネットワーク・九州 https://snwm-netwrokkyushu.jimdofree.com/（2022 年 3 月 7 日閲覧）

# 資料
# 「ニュース女子」による人種差別裁判に対する意見書

樋口直人

**解題**

本稿は、令和 3 年（ネ）第 4284 号損害賠償等請求事件に関して、2022 年 2 月に東京高等裁判所に提出した原告側意見書である。表題が示すように、この事件は東京メトロポリタンテレビジョンが放映した「ニュース女子」という番組による名誉棄損を争点としていた。2021 年 9 月 1 日に東京地方裁判所が出した判決は、この種の裁判としてはかなり高額の約 550 万円の損害賠償を被告に命じている。また本件は、テレビ番組による名誉棄損を扱ったこと、原告が著名人であったことから、メディアでも繰り返し取り上げられてきた。

しかしながら、一審で原告が争点の 1 つとした事件の人種差別的性格については、判決で取り上げられなかった。本件に関しては原告、被告とも控訴しており、本稿は一審で扱われなかった当該番組の人種差別的性格について、研究者としての意見を提出したものとなる。ヘイトスピーチ解消法制定以降の人種差別に対する司法判断としては、川崎市在住の中学生に対するブログでの人種差別的書き込み、在日コリアン弁護士に対する懲戒請求事件がある。本件の場合、ブログ事件のような明らかな差別表現が当該番組で用いられているわけではない。それでも、一般視聴者が番組をみて抱く印象を総合的に判断すれば、人種差別的な内容であると主張するところで、「ポストヘイトスピーチ解消法」状況を意識している。

そのため、ポスト公民権運動の人種差別的言説を分析した *Dog Whistle Politics* を参照したが、本件に関して犬笛を吹かれたという理解は、原告である辛淑玉氏のものである。筆者は、その話を聞いて書籍を思い出し利用しただけであり、単に原告のアイデアに乗ったにすぎない。裁判の意見書は、人目に触れる形で公開されることは少ないが、人種差別関連の訴訟と判例が蓄積される時期であることに鑑みて、今後の研究と実践のための資料として掲載することとした。意見書の作成に際しては、長松奈美江、永吉希久子、森啓輔、Ayaka Löschke の各氏にご助力いただいた。記して感謝したい。

## 1. はじめに

私は、排外主義を社会学的に研究する立場から、日本の外国人排斥運動や反移民感情に関する実証的な調査を行ってきた[1]。研究自体は学術目的のものであるが、その知見をもとにして人種差別に関わる裁判への意見書を提出したことがある（樋口 2015, 2021）。本件についても、学術的な見地から事件の人種差別的性格について検証するよう、私に対して要請があった。本件の一審判決で人種差別的性格に何らの言及もないのは、社会科学的な見地から

しても、事例を適切に扱っていないと言わざるを得ないため、最新の研究成果をもとに本件と人種差別の関係を論じていくこととする。

その際、まず第 2 節では在日コリアンに対する人種差別の特質について確認しておきたい。人種差別というと、浜松市の宝石店でブラジル人女性を追い出したような、外国人であることを理由にした不当な扱いを、典型的なものとして想起するだろう[2]。しかし、後述するように在日コリアンに対する人種差別的行為は、「祖国」と関連付ける形で生じることが特徴であり、この点に留意する必要がある。

次に、事件の人種差別性を認定する際に、「目的（動機）」と「効果（結果）」の二側面から論じる必要がある。現に、日本も批准した人種差別撤廃条約は、以下のように「区別、排除、制限又は優先」には「目的」と「効果」の両面があるとみなしている。

> 「人種差別」とは、人種、皮膚の色、世系又は民族的若しくは種族的出身に基づくあらゆる区別、排除、制限又は優先であって、政治的、経済的、社会的、文化的その他のあらゆる公的生活の分野における平等の立場での人権及び基本的自由を認識し、享有し又は行使することを妨げ又は害する目的又は効果を有するものをいう[3]。

本意見書も、目的と効果に分けて人種差別について論じていく。その前に、本件の人種差別的性格を論じる際の前提を、第 2 節で確認しておく。そのうえで、第 3 節では目的の側面――当該番組は、人種差別を目的とはしていなかったのか――について、近年の人種差別研究の成果をもとに検討する。第 4 節では、効果の側面――「ニュース女子」放送がもたらした人種差別思想の拡散状況とその悪影響――について、データを用いて可視化したい。近年では調査技術が急速に発展しており、差別やヘイトスピーチに関して新たな技術を用いた調査も複数なされるようになった。本意見書では、そうした知見を踏まえつつ、実証的に何がいえるのかを論じていく。

## 2. なぜ本件を人種差別事件として扱わねばならないのか

### (1) 在日コリアンへの差別とその帰結

本件の第一審で、原告代理人は事件の人種差別的性格について詳細に論じている[4]。しかし、一審判決では原告の主張としてふれるにとどまり、裁判所としての判断を示すことはなかった（東京地裁、令和 3 年 9 月 1 日）。一審判決は、原告の被った被害を重くみていることから、人種差別にまで言及する必要がないと判断したのかもしれない。だが、人種差別は本件でもっとも重要な論点であり、まずその点について本節で論じておく[5]。

本件原告が「東京生まれの在日朝鮮人」であることは、一審判決でも明記されている。在日コリアン[6]に対する差別には、制度的なものと非制度的なものがある。制度的な差別の多くは国籍条項をめぐるものであり、そのうち社会的権利については国連人権規約や難民条

約の批准に伴いおおむね内外人平等が達成されてきた[7]。

非制度的な差別の代表的なものは就職差別であり、在日コリアンが一般企業で職を得るのは難しかった。それを補ったのがエスニック・ビジネスで、マルハン、ロッテ、モランボンなど一部に成功した企業家を輩出したが、零細自営業がほとんどであることから、日本人との社会経済的格差が明確に存在した。そうした差別が徐々に緩和され、大企業に就職する在日コリアンも増えたこともあって、格差も解消されていく。現在では、社会経済的地位の格差はほぼなくなったとみなしうる（Higuchi, 2016b）。

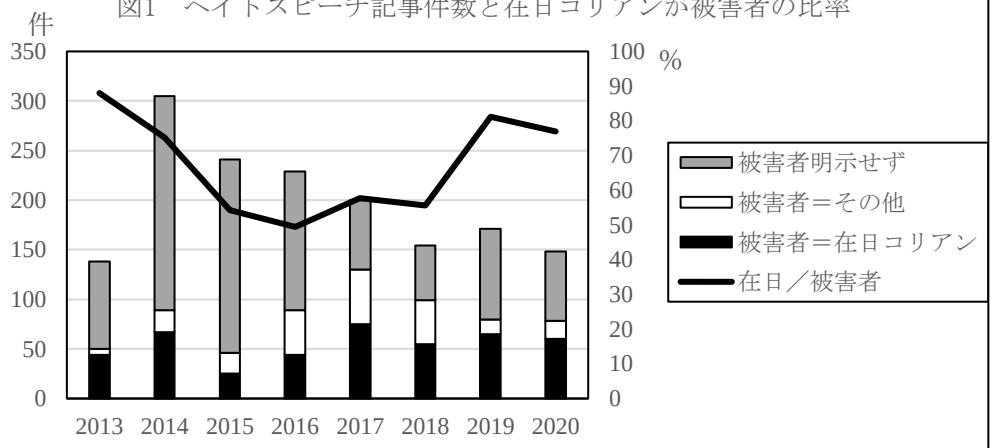
同時に、韓国・朝鮮籍者の人口は 1991 年をピークとして減少し続けている。これは第 1 に帰化者が増加した結果で、1990 年代以降は平均して年 1 万人弱が日本国籍を取得している。第 2 に、8 割以上の在日コリアンが日本人と結婚するようになった結果、在日コリアンの子のほとんどが日本国籍となるため、韓国・朝鮮籍での出生数が激減したことによる。これらは、社会経済的な面で差別が緩和した結果、在日コリアンの同化が進んでいることの証左とみなしうる[8]。

このような、いわば常識といってもよいことを確認したのは、本件に体現される在日コリアンへの人種差別の特殊性を論じるためである。社会経済的同化の進展は、差別の緩和の原因でも結果でもあり、同化が進むと通常は差別の標的にされにくくなる。しかし、在日コリアンに対する人種差別は、そうした通説では説明できない。

第二次世界大戦後に限っても、朝鮮学校生に対するリンチ、チマ・チョゴリの切り裂きなど、在日コリアンに対する直接的な嫌がらせは連綿となされてきた（韓 2006, 2008）。しかし、排外主義＝在日コリアンの排斥を前面に掲げる組織だった動きは、在日特権を許さない市民の会（在特会）による朝鮮学校襲撃など、今世紀に入ってから生じた現象である。

実際、2013 年にヘイトスピーチが社会問題となって以降、報道が言及するヘイトスピーチ被害者の過半数を、在日コリアンが占め続けている（図 1 参照）（Higuchi, 2021）。特にヘイトスピーチという言葉が使われるようになった 2013〜14 年には、京都第一朝鮮初級学校襲撃事件の裁判があったため、在日コリアンを被害者とした記事が 8 割前後に達していた。2015 年以後は比率が低下するが、これは在日コリアン以外の標的が浮上したことによるものではない。この年に人種差別撤廃推進基本法案を野党が提出したことにより、「人種差別とは何か」といった形で被害者が抽象的にとらえられるようになったからである。それがひと段落した 2019 年以降は、再び在日コリアンが被害者となる比率が 8 割前後まで上昇した。実際、ヘイト集団がニューカマー外国人を標的とすることはごく一部でしかなく、女性、障害者、アイヌ、沖縄、性的マイノリティが言及される記事はそれぞれ数本程度にとどまる。

図1　ヘイトスピーチ記事件数と在日コリアンが被害者の比率




出典：朝日新聞データベース聞蔵より「ヘイトスピーチ」でヒットした記事より筆者が計数した。

近年行われた最新の手法を用いた調査は、こうした結果と符合する。この調査によれば、日本の一般市民は在日コリアンに対するヘイトスピーチを容認する傾向すらある（河野・西澤 2019）。すなわち、障碍者など他のマイノリティに対するヘイトスピーチと比べたとき、在日コリアンに対するヘイトスピーチはもっとも容認されやすい。その意味で、在日コリアンがヘイトスピーチに関わる議論の中核にいるとは確実にいいうる。

在日コリアンがヘイトスピーチのターゲットになりやすい日本の現状は、在日コリアンに極めて深刻な影響を及ぼしている。日本で初めて住民台帳によるサンプリングを行った信頼性の高い調査によれば、在日コリアンのメンタルヘルスは在日中国人や在日ブラジル人など、他の国籍集団より悪い状態にある（長松 2021）。そのすべてがヘイトスピーチに起因するわけではないが、差別経験がメンタルヘルスを悪化させることは、データから確実にいえるという。その意味で、原告辛が陳述書で記す精神不調は[9]、在日コリアン全体が今なお経験する人種差別の被害を極端な形で示しているものと考えねばならない。

(2) ヘイトスピーチの構造的背景

在日コリアンが差別されてきた歴史を考えると、ヘイトスピーチの標的となるのは当然のことのように思える。しかし、就職差別も緩和され社会的地位も上昇した近年になって、なぜヘイトスピーチが公然と現れるようになったのかは説明できない。この点を明らかにするには、保守系番組を自認する「ニュース女子」を含む保守論壇が在日コリアンに向けるまなざしを検討する必要がある。

そこで表 1 をみてもらいたい。これは、代表的な保守論壇誌が在日外国人を取りあげた回数を経年的に示したもので、保守派の関心の所在を表している。保守派は、基本的に外国人に対して警戒的・敵対的であるため、これは敵意の程度をみる指標と考えられる。この表か

ら読み取るべき点は 3 つある。

表 1　保守論壇誌における登場回数

| 年 | コリアン | 中国人 | その他移民 |
|---|---|---|---|
| 82-85 | 0 | 0 | 1 |
| 86-90 | 3 | 0 | 19 |
| 91-95 | 12 | 0 | 6 |
| 96-00 | 19 | 0 | 1 |
| 01-05 | 28 | 4 | 1 |
| 06-10 | 39 | 5 | 7 |
| 11-15 | 24 | 10 | 12 |
| 16-20 | 14 | 4 | 31 |
| 合計 | 139 | 23 | 78 |
| 出典：『正論』『諸君！』（2008 年まで）『WiLL』（2009 年以降）の記事から筆者計数 | | | |

第 1 に、(1)2007 年以降は最大の国籍集団である中国人（23 件）、(2)移民・外国人労働者一般（78 件）と比較すると、在日コリアンをめぐる記事件数（139 件）は多い。(2)は欧米の事例が大半を占めるため、日本に限っていえば在日コリアンを保守派が取り上げる頻度は突出して高いといえる。

第 2 に、記事が増えた 90 年代は、韓国・朝鮮籍の人口が減少し始めて以降、かつ同化が進み民族団体も弱体化する最中のことである。その意味で、「昔から住んでいるから」「人数が多いから」記事が多いわけではない。その点で、受入論争や人口増が記事につながる在日中国人や移民・外国人労働者一般とは、取り上げられる論理が相違している。人口規模や影響力（がもたらすとされる脅威）とは異なる要因により、保守派は在日コリアンに敵意を持つとみなさざるを得ない。

第 3 に、旧植民地出身者の権利問題としての外国人参政権、「慰安婦」問題、拉致問題との関連で朝鮮総連（など北朝鮮と関連があるとみなされる団体）を取り上げる記事が、全体の多数を占める。つまり、歴史問題か日韓・日朝関係が在日コリアンへの憎悪を増幅する梃子となってきた。同化が進展する最中で、在日コリアンを敵視する記事が多い最大の理由がここにある。さらに、在日コリアンを取り上げる記事の場合、朝鮮総連のほか、姜尚中（政治学者）、孫正義（実業家）、柳美里（作家）、辛淑玉（実業家）、崔洋一（映画監督）、辛格浩（実業家）といった具合に、具体的な組織や個人をバッシングする傾向が強い。孫正義、辛格浩の 2 人を除いて、歴史や差別問題で発言する著名人が標的となってきた。これは、個

人名がまったく登場しない在日中国人や移民・外国人労働者と大きく異なる。

では、なぜ在日コリアンの同化が進み、国籍集団として減少するなかで、保守派は在日コリアンに強い関心を示すのか。この点について、筆者はアメリカの社会学者であるブルーベイカーの分析枠組みを用いて説明を試みたことがある（図 2 参照、樋口 2014: 8 章）。一般に人種差別というと、マジョリティとマイノリティの二者関係（図 2 の右側の 2 つの楕円）によって説明する傾向が強いが、「日本人」と「在日コリアン」の二者関係では、本件で生じている事態を解明できない。ヘイトスピーチに体現される在日コリアンへの近年の人種差別は、「民族の祖国」との関係＝日韓・日朝関係の悪化（2 つの大きな楕円の関係）により生み出されるからである。

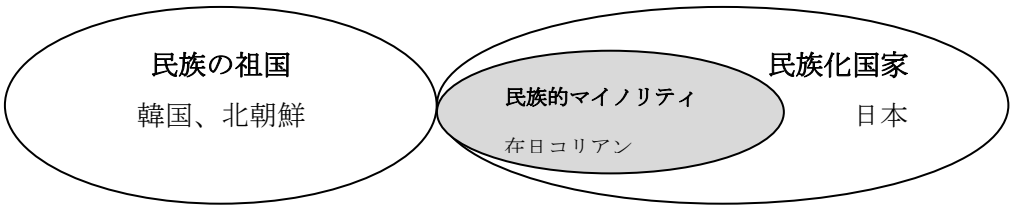



図 2　排外主義をめぐる 3 者関係モデル

出所：Brubaker, 1996 をもとに筆者作成。

この図式のもとでは、在日コリアンはどれだけ日本社会に統合されていようとも、朝鮮半島にルーツがあるという属性のみを理由として敵意を向けられる。一例として、本件一審における被告代理人が、口頭弁論において原告辛淑玉に対して発した以下の質問を挙げておこう。「沖縄の米軍基地反対運動をなさっていると思うんですけれども、あなたの母国である韓国でも、在韓米軍基地の反対運動はなさってるんですか」[10]。この質問は、原告側代理人によって無関係と主張されたため撤回されたが、次のようなねらいにもとづいていたと思われる。

沖縄の基地問題に対する原告辛の関心は、沖縄訪問を重ねるなかで醸成されていったものであり、何ら不自然なところはない[11]。陳述書では、日本でマイノリティとして生まれ育った者として、原告辛が沖縄に共感を抱くようになった過程がつづられている。ここからは、日本社会と民族的マイノリティという二者関係をみてとることができる。しかし、そうした原告の活動が、三者関係の人種差別のもとでは韓国や北朝鮮の代理人として非難される。

つまり、被告代理人の質問は、平和主義にもとづく基地反対ならば、韓国の米軍基地についても反対運動をするはずだ、していないのは他の目的があるからだと主張するためと考えられる。すなわち、原告は日本の米軍基地だけに反対しており、真の目的は日米安保に傷をつける「反日活動」である、と。実際、「ニュース女子」問題を受けて 2017 年 3 月 13 日に開催されたのは、「辛淑玉氏等在日朝鮮人による反日反米工作を糾弾する国民集会」（傍点引用者）だった[12]。また、「ニュース女子」の当該番組で、沖縄側の情報提供者として出演し

た我那覇真子、手登根安則、依田啓示は、連名で「公開質問並びに公開討論申し入れ状」（2017年 2 月 13 日付）を原告辛に送付した。ここでも、「我々は、貴女の一連の言動が反日工作につながるものと解している…外国人の身でこれ程の反日活動を行うとは、驚きである」（傍点引用者）と書かれている[13]。

これらは、原告の活動を「親北派のため、米軍基地の建設を妨害している」[14]とみなし、東アジアの「反日国家」の手先とする三者関係にもとづく人種差別といわざるを得ない。というのも、原告が日本人であればそのような質問はなされず、在日コリアンという民族的出自に基づき区別されるからである（これはまさに、条約の定義する人種差別に該当する）。

### 3. 「ニュース女子」の人種差別的目的

#### (1)「ニュース女子」と戦略的人種差別

本節では、「ニュース女子」の当該番組が持つ目的を論じるに際して、一審での審判にならい、判決文にある以下のような方針をとる。

> 番組によって摘示された事実がどのようなものであるかという点については、一般の視聴者の普通の注意と視聴の仕方とを基準として判断するのが相当である…当該番組により摘示された事実がどのようなものであるかという点については、画面に表示されたフリップやテロップ等の文字情報の内容を重視すべきはもとより、映像の内容、効果音、ナレーション等の映像及び音声に係る情報の内容並びに放送内容から受ける印象等を総合的に考慮して判断すべきである[15]。

ヘイトスピーチといえば、在日コリアンに対して「殺せ」「ゴキブリ」といった言葉の暴力を浴びせる事態を想定しがちだが、現代の人種差別はもっと込み入った論理を用いている。また、人種差別は多義的な概念であり、アメリカの政治学者であるロペスは、構造的人種主義、ヘイト、潜在的バイアス、戦略的人種主義という 4 つのタイプに分けている（Lopez, 2014: 41）。人種差別というと、アメリカにおける白人と黒人の格差のような構造的人種主義を想起するが、本件との関連が深いのはヘイトと戦略的人種主義である。というのも、本件番組は在日コリアンに対してスポンサーや視聴者が持つヘイト感情に訴えることで、番組の商業価値を高める戦略を取っているからである。

すでに述べたように、在日コリアンはヘイトスピーチの主たる標的となってきたが、当該番組自体でヘイトスピーチとみなしうる言葉が用いられているわけではなかった。しかしながら本件に関しては、人種差別と関連づけないと番組のコンセプトを理解できない。政治家やメディアのような、公論に対する影響力が強い行為者は、露骨な人種差別的言辞を用いることはできないが、人種差別を利用して何らかの利益を得ようとすることは珍しくないからである。こうした側面に着目したのが戦略的人種差別という概念で、「物質的な富、政

治権力、ないし社会的地位の上昇を得るために、人種的な敵意を梃子として用いる意図的な取り組み」（Lopez, 2014: 46）と定義される。

なぜ戦略的人種差別が本件と関係するのか。ニュース女子は、「スポンサーが制作費を拠出して制作会社が番組制作を行い…納品された完成品…を放送するいわゆる“持ち込み番組”」[16]であることによる。当該番組に関する放送倫理・番組向上機構（BPO）の検証では、放送した東京メトロポリタンテレビジョンのチェックの杜撰さが問題とされており、制作自体は被告 DHC テレビジョンの手によっていた。その意味で、当該番組は親会社である DHC の意向を直接反映しており、責任も DHC にある。

その DHC の創業者である吉田嘉明・代表取締役会長は、以下のように在日コリアンに対する強い差別意識を繰り返し公にしてきた人物である[17]。

> 裁判官が在日、被告側も在日の時は、提訴したこちら側が 100%の敗訴になります。裁判を始める前から結果がわかっているのです。似非日本人はいりません。母国に帰っていただきましょう[18]。
> 我々は全くの異人種である韓国人と仲良くすることはあっても、そして多少は移民として受け入れることはあっても、決して大量にこの国に入れてはいけないのです[19]。

会長のこうした言動が問題になり、2021 年には同社との連携協定を解約・凍結する自治体が相次いでいる[20]。「ニュース女子」は、会長の確信犯的な人種差別思想に沿うことで予算を確保し、それに共鳴する視聴者向けに番組を制作することで存続してきた。その反面、地上波で放映した時期（当該番組も含まれる）には、放送法及び放送基準を守らねばならないため、露骨な人種差別的内容は許されない。その結果、対外的には人種差別ではないと標榜しつつ、親会社や視聴者の期待に応えるような人種差別的内容を盛り込むようになる。

こうした状況下で作られた当該番組は、戦略的人種差別の典型例と呼んでよい内実を備えている。前出のロペスは、戦略的人種差別にもとづく支持獲得の方法を分析し、『犬笛政治』という著作を公刊した（Lopez, 2014）。犬笛とは、「ある範域では聞こえず容易に否定されるが、異なる範域では強い反応を引き起こすことを理解するための比喩」であり、2 つの水準で作動する。

第 1 に、戦略的人種差別は断固として人種主義であることを否定し、あからさまな人種的冒涜を非難さえする。実際、DHC 会長の吉田嘉明氏は、「私は決して差別主義者でもレイシストでもありません」[21]と言明しており、被告 DHC テレビジョンも番組の人種差別的性格を否定し続けるものと思われる。第 2 に、「犬笛政治」の担い手は自らの人種差別を否定する一方で、受け手の人種差別的感情を焚き付け、人種による分断をもたらすようにアピールする。

このように相矛盾するようにみえる 2 つの要件を充足するため、戦略的人種差別の言説

は、特定の聴衆には理解できるように偽装を凝らした「犬笛」を吹くようなものとなる。本件についていえば、一審を担当した裁判官に対しては、当該番組の人種差別的性格が伝わらなかった。一審判決は、原告が高江ヘリパッド建設反対運動の「黒幕」とされたことについて、以下のように明確に認めている。

> 原告が、暴力や犯罪行為を厭わない者たちによる反対運動に関し、同反対運動において暴力や犯罪行為が行われることを認識・認容した上で、経済的支援を含め、これを煽っているとの事実は、原告の社会的評価を低下させるものであることが明らかである[22]。

一方で、一審判決では原告が「在日朝鮮人」[23]であるとするのみで、在日コリアンであるがゆえに受けた人種差別的被害については何ら言及していない。これは、番組内であからさまな人種差別言辞が用いられるわけではないため、市民運動をテロ扱いしただけの事案と映るからだろう。しかし、戦略的人種差別は一見そう捉えられない体裁をとっているため、順を追って解読する必要がある。在日コリアンへの人種差別を研究してきた私が意見書を執筆する意味はこの点にあり、以下では一審判決が見逃した、当該番組の人種差別性について論じていきたい。

(2) 地元 vs 在日コリアンという構図――「ニュース女子」の論理構造

当該番組の特徴として、「地元」と「よそ者」の対比を用いて対立構造を描いている点が挙げられる。すなわち、番組内では以下のような形で、高江ヘリパッド建設反対運動の担い手像が描かれていく。

・引用 1：地元の人でもああやって襲撃されて（12:00）⇔それのボスは、日本の方ではないってことですか（12:09）
・引用 2：大多数の人は、もう別にそんなね、もう米軍基地反対とかっていう声って聞かないんですよ（12:51）
・引用 3：トップがやっぱりまあ翁長さんだ、っていう話を地元の人はされるんですよ（13:11）
・引用 4：反対している奴は、大阪から来ている奴なんで…地元の人は何を言っているかわからない（13:33）
・引用 5：ある意味沖縄県民の方は蚊帳の外にされてますよね（14:01）
・引用 6：この過激な行動をしている奴らのうち、沖縄の地元の人の割合は、どれくらいいると思いますか（14:35）⇔教職員上がりだとか、労働組合上がりの人間は沖縄の人間として入っているらしいんですけど、地元の人達は、もう全然（14:43）
・引用 7：東京から、そういう反対派の人達、さあ一緒にみんなおいでよ 5 万円あげるから（19:20）

以上の引用部分において、「地元の人」（引用 1、3、4、6）、「大多数の人」（引用 2）、「沖縄県民」（引用 5）は、狭義には高江ヘリパッド建設に、広義には米軍基地（の新規建設）に好意的であると主張される。しかし、過去に行われた選挙や住民投票、幾多の世論調査の結果をみれば、沖縄県民は一貫して基地の新設に反対といってよい。にもかかわらず、「地元」が米軍基地に好意的というのは、反対運動を担うのは地域住民ではないと主張するためだろう。それゆえ、「日本の方ではない」（引用 1）、「大阪から来ている奴」（引用 4）、「教職員上がりだとか、労働組合上がりの人間」（引用 6）、「東京から、そういう反対派の人達」（引用 7）が担い手とされる。

社会運動の実証的な研究を専門分野の 1 つとしてきた者としていえば[24]、米軍基地もいわゆる迷惑施設の 1 つであり、迷惑施設に対する反対運動は全国で常に発生してきた[25]。そうした運動に関する研究蓄積に鑑みれば、特定地域での施設建設反対運動を、よそ者主体で長期間持続できるはずもない。実際、高江ヘリパッド建設反対運動に関する学術研究は、地元住民が反対運動を立ち上げ、その後も主たる担い手であり続けていることを明らかにしてきた（阿部 2011: 66-7; 森 2018: 172-4）。つまり、地元は基地建設に反対ではないという当該番組の前提は、明らかに事実に反した無理があるものと言わざるを得ない。

では、地元＝賛成派とよそ者＝反対派という無理な対比を用いて、当該番組は何を主張したのか。『犬笛政治』が指摘した戦略的人種差別の観点から、番組の進行を読み解く必要がある。

引用 1 で地元の人を襲撃した運動の「ボス」は、「日本の方ではないってことですか」という問いに、レポーターの井上和彦は「もうわからないです」と答える。が、「韓国人はいるわ、中国人はいるわ、という状況」（12:12）と続けることで、外国人が担い手であることを示唆している。つまり、反対派と外国・外国人を結びつける形で番組が進行していく。その結果、番組のテーマは「沖縄基地反対派はいま」[26]でありながら、下記のように朝鮮半島・在日コリアンが 8 回も言及されているのである。

・引用 1：びっくりしたのがね、ここにね、韓国の方ですよね、確かね（8:30）
・引用 2：韓国から活動に来たっていうある男性が奥さんと来て、捕まって中にいたんですよ（09:30）
・引用 3：韓国人はいるわ、中国人はいるわ、という状況になっている（12:12）
・引用 4：「のりこえねっと」の辛さんの名前が書かれたパンフレットがあったじゃないですか（15:04）
・引用 5：この辛さんっていうのは、あれなんですよ。在日韓国・朝鮮人の差別ということに関して戦ってきた中では、カリスマなんですよ（19:39）
・引用 6：韓国がそうやって沖縄にこだわるのは何で（19:50）

・引用 7 : 親北派ですから。韓国の中にも北朝鮮が大好きな人がいる（20:00）
・引用 8 : パククネ反対デモだってチャイナの影響力受けたり北朝鮮の影響力を受けた人達が主力で煽っている（20:06）[27]

基本的な事実を確認しておこう。当該番組では、「反対派の人達、さあ一緒にみんなおいでよ 5 万円あげるから」とし、「お金がガンガンガンガン集まってくる」と、外部からの介入を強く示唆している。「お茶の水で集合、出発？」というテロップもそうした理解を助けている[28]。実際には、のりこえねっとが旅費 5 万円を支給し、16 名が高江を数日間訪問した程度のささやかなものである[29]。これで高江の座り込みに実質的に及ぼした影響があるはずもなく、モラルサポートとしての性格が強い。にもかかわらず、引用 1、4〜8 まで幾度も言及するほどの大きな事件として扱ったことになる。

こうした扱いについて、一審では「原告が、暴力や犯罪行為も厭わない者たちによる反対運動に関し…これを煽っているという事実を摘示」[30]と判断した。しかし、番組が摘示した事実はそれだけにとどまらない。引用 1 では原告の名前こそ出さないものの、「韓国の方」とわざわざ言及している。引用 2〜3 は、原告とは何ら関係ない韓国人の例をわざわざ持ち出すことで、韓国人の関与を印象づけたものと考えられる。そのうえで、引用 4〜5 では原告を名指しして取り上げ、伏線を張っている。

それに続く引用 6〜7 では、原告に直接言及せず一般論を語っているようにみえるが、そうではない。「韓国がそうやって沖縄にこだわるのは何で」という語りには、「韓国人はなぜ反対運動に参加する？」というテロップがついている[31]。これは引用 4〜5 での伏線を回収するためのものであり、ここでいう「韓国人」は実質的に原告を指している。引用 7 の「親北派ですから。韓国の中にも北朝鮮が大好きな人がいる」も、韓国社会を指しているようにみえるが、「親北派のため、米軍基地の建設を妨害している」というテロップが付される[32]。

番組での語りは一般論であるかのような体裁をとっているが、「反対運動」「米軍基地」と限定するテロップをつけることで、原告の関与を示唆しているわけである。これらは一般の視聴者に対して、高江ヘリパッドの建設現場における反対運動を組織する黒幕が原告であり、その背景には韓国の「親北派」、さらに中国ともつながりを持つことを強く印象付けるものといえる。

だが、沖縄のルポを行った企画においてわざわざ一枚のチラシを大げさに取り上げ、それをもとに在日朝鮮人である原告に執拗に言及するのはなぜか。「ニュース女子」は、毎回ほぼ 3 つのトピックからなっており、2015〜16 年までの 90 回のうち 9 回韓国を、5 回北朝鮮を取りあげているからである。重複を考慮しても 7 回に 1 回（13 回）は朝鮮半島がトピックに上がっており、関心の高さがうかがわれる[33]。それに対して、沖縄が登場したのは 3 回にとどまっている[34]。第 91 回目に当たる本件放送は、そうした関心の濃淡を反映している。すなわち、番組にとって朝鮮半島は好まれる材料であることから、沖縄だけでなく「在日」

「韓国」「親北派」を登場させることで、親会社や視聴者を満足させる定番のネタにしたのである。

本節の議論をまとめよう。原告辛の活動は、前述のように沖縄への共感にもとづく市民運動の一環だった。高江ヘリパッド基地建設反対運動も、地元の住民が主体となって行う住民運動の一種だった。しかし、当該番組は原告が在日朝鮮人であるという属性を利用し、活動があたかも韓国、北朝鮮、中国の意を受けた陰謀であるかのように描いていく。これは、原告が在日コリアンであることを利用して、「ニュース女子」の視聴者や親会社の DHC が好むストーリーに仕立て上げた結果である。

このように、原告の民族的属性を攻撃材料として虚偽のストーリーを放映するのは、人種差別撤廃条約がいうところの「民族的…出自に基づく…区別、排除」である。被告 DHC テレビジョンは、原告辛淑玉をことさらに取り上げることで、原告が「人権及び基本的自由を…行使することを妨げ」る目的を持っていたといわざるを得ない。

## 4. 「ニュース女子」放送の人種差別的効果

### (1) 量的な把握

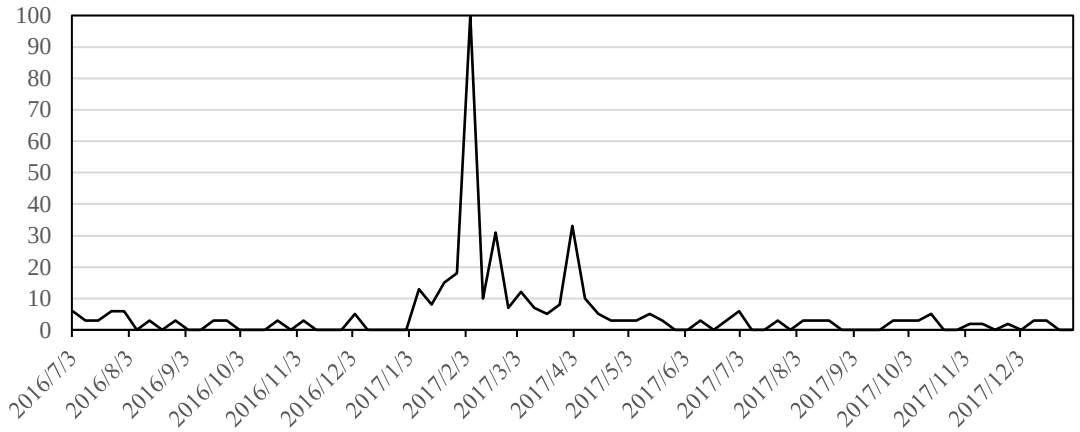
本件の第一審でも、新聞記事など「ニュース女子」当該番組の社会的影響の大きさを示す証拠が、原告側から提出されていた。本節では人種差別的効果という観点から、社会的影響の量的な把握を試みたい。関連する新聞や雑誌記事は、一審ですでに提出されているため、この意見書ではインターネット上の人種差別的効果について検討する。というのは、近年の人種差別的言説は主にインターネット上で流通しており、ヘイトスピーチなどの研究でもインターネットをデータソースとするものが増加しているからである[35]。

露骨な人種差別的発言が難しくなった現代において、マスメディアの言説は差別ではないと装いつつ「犬笛」を吹くことで、一般市民の人種差別意識に呼び掛ける。当該番組内の「韓国人」「親北派」といった人種差別的レッテルは、地上波の番組が報じることで「ロンダリング」され、テレビが認めた言説として流通していく（Klein, 2017）。そこで吹かれた「犬笛」は、匿名の空間であるインターネットにおいて、とりわけ露骨な人種差別的言説として拡散する。その意味で、インターネットは本件番組の人種差別的効果をみる上で最重要な空間といってよい。

そうした前提にもとづき、一般のネットユーザーの関心を示す指標として Google での関連語句の検索履歴（Google trend）を用いて、特定の用語がどの程度検索されたのかを示していこう[36]。検索された件数が少ない語句の場合、そもそもデータをとることができないため、Google trend でデータが得られた時点でかなりの検索件数があったことになる。原告辛は、多数の著作を持ちテレビ出演もある著名人だが、グーグルで検索された頻度をみると、番組放映後の 2017 年 1～4 月の数値は突出している（図 3）。これは放映前後の短期間でのことではなく、2004～2021 年までとった図 4 をみても、2017 年初頭が突出していることが

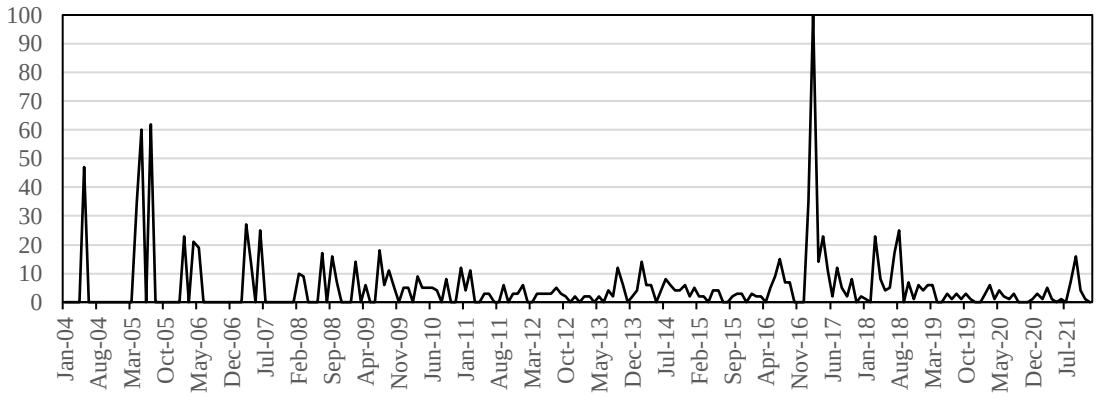
わかる。

図3　グーグルで「辛淑玉」が検索された頻度、2016.7～2017.12



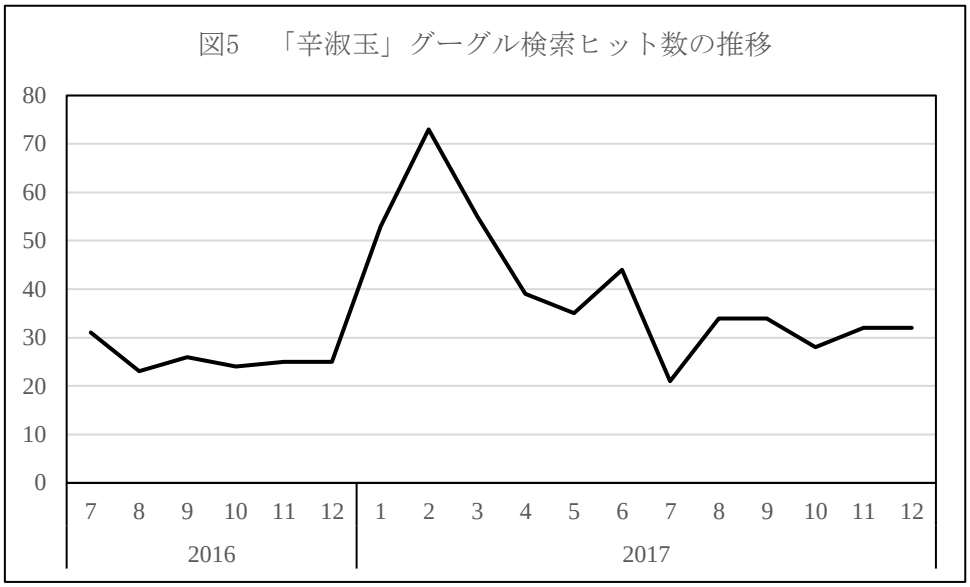

注：Google trendsの検索結果から筆者作成。数値は実数ではなく、ピークを100とした時の相対的な値を示す。

図4　グーグルで「辛淑玉」が検索された頻度、2004-2021




注：Google trendsの検索結果から筆者作成。数値は実数ではなく、ピークを100とした時の相対的な値を示す。

では、件数の増加はどのような言説の流布を伴ったのだろうか。まず、図 5 では「辛淑玉」に言及したホームページの数を示した。これをみると、2016 年には 20 件台で推移していたのが、放映後のピークにあたる 2 月には 3 倍まで増加したことがわかる。元の水準に戻るまでに半年かかっており、この間に「辛淑玉」をめぐるネットコンテンツが生み出され、検索されることで人目にさらされる事態が続いた。表 2 と表 3 は、どのようなコンテンツが作られたのかを垣間見せるものである。当該番組の放映前にあたる 2016 年 12 月、放映後のピークにあたる 2017 年 2 月を比べると、当然のことながら件数は後者の方が多い。




だが、ここで重要なのは件数そのものよりもその内容である。表 2 をみると、12 月時点ではメディア出演や著作に対する中立的な言及がほとんどで、1 度か 2 度ふれる程度の扱いでしかなかった。ネガティブな言及は下線を引いた 2 件のみで、原告も名前を連ねる『週刊金曜日』の編集委員に「パヨクの巣窟ですか？」[37]とコメントしたものにとどまる。ここで原告は、「左翼の一員」とみなされており、在日朝鮮人という属性とは関連づけられていない。

それが 2 月になると、「ニュース女子」放送に伴う記事（表 3）が激増する。表 3 からは、網掛けを付したニュース女子関連記事が圧倒的多数を占めており、「犬笛」に多数が呼応した状況がみてとれる。これらは 3 つの水準に分けることが可能で、第 1 の個人ブログは人目に触れる程度こそ低いものの、「朝鮮女の発言」「バカチョンどもよく聞け、これが沖縄の若者の声だ!」[38]のように、露骨な人種差別表現を用いる傾向が強い。ここで重要なのは、原告の民族的属性が強調され、前節で述べた当該番組の人種差別的意図を忠実に反映していることである。

表2 グーグルでの「辛淑玉」検索結果（2016年12月）

| ホームページタイトル | 概要 |
|---|---|
| 小林よしのり、西部邁VS辛淑玉 誠意ある謝罪、従軍慰安婦で ... | 小林よしのり、西部邁VS**辛淑玉** 誠意ある謝罪、従軍慰安婦で議論 part3. 41,513 views41K views. Dec 25, 2016 ... |
| 夢でワイドショー 永六輔の芸能ジャーナル - Wikiwand | 2016/12/14 — 司会は共同プロデュースした永六輔と**辛淑玉**。「ワイドショー」と銘打たれているがワイドショー番組へのアンチテーゼという色彩が強い番組といえる。両名は大のワイド ... |
| 乗っ取られてドキュメンタリーになった「太陽の下で〜真実の ... | 2016/12/31 — (関連記事:**辛淑玉**(シン・スゴ)さんと脱北女性リ・ハナさんの対談 これが少年団だ). 少年団入団は、北朝鮮の人々にとって最初の公的な通過儀礼である。 |
| 中国美女図鑑--中国の血を引く日本代表 - 香港ポスト | 2016/12/15 — 氏が在日コリアン三世であることは広く知られた事実だが、姉の新井寿枝さんも2011年ミス日本に出場しミス着物に選ばれた美人姉妹だ。ミス日本には過去に**辛淑玉**さんが ... |
| 安田浩一氏が語る ヘイトスピーチと対抗した「カウンター」 | 2016/12/02 — **辛淑玉**さんや、李信恵さんのように、「在日が差別をされている」と、差別と闘う姿勢を示す人がいる一方「辛さんや李さんは余計なことを騒がないでほしい。 |
| がも君のアジア分析 on Twitter: ".@yagananashi 面白いこと ... | 2016/12/21 — アイヌ、反原発、差別、沖縄、教科書、何故これらに北由来の**辛淑玉**が絡む？北には甘い事言ってはだめ ... **辛淑玉**を見ろ。 総連を悪し様には言うが、やってる事は社民党 ... |
| 安宇植（アンウシク） / インパクト出版会 | 2016/12/08 — ... ジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタ, 職場での性的いやがらせと闘う裁判を支援する会, 白川真澄, 新城郁夫, **辛淑玉**, 信原孝子遺稿・追悼文集編集委員会 ... |
| 佐高信 おすすめランキング (616作品) - ブクログ | 2016/12/02 — **辛淑玉** 佐高信. ユーザ数 58. 評価 3.09. レビュー数 5. Amazon.co.jp・本. 感想・レビュー. 辛口論客の二人が、現代日本の問題点を通して「批判」の重要性を語った本 ... |
| 岡崎乾二郎 MODULE ||| ARCHIVE SITE | 2016/12/07 — 加藤周一（評論家）×**辛淑玉**（人材育成コンサルタント）、長谷部恭男（東大教授）×落合恵子（作家）、伊藤真（伊藤塾）×義家弘介（北星余市学園）の異色対談のほか、 ... |
| 【緊急拡散】続！サンデーモーニング終了のお知らせ - Ameba | 2016/12/09 — **辛淑玉**. ・宇都宮健治. ・落合恵子. ・石坂啓. ・雨宮処凛、他. ここって、パヨクの巣窟ですか？ まったくもってため息がでるほどの顔ぶれです。 改めて申し上げます。 |
| 「沈黙の推薦図書」認定と、国際化のための対策。 - 坂東忠信 | 2016/12/01 — が、民団新聞、朝鮮日報、有田芳生先生、**辛淑玉**先生、香山リカ先生など著名な先生方にも謹呈献本したものの、全く何の反応もいただけず誠に寂しい限り、われ泣きぬれて ... |
| 【百田氏・石平氏・虎ノ門ﾆｭｰｽVS毎日新聞社】「毎日新聞社 | 2016/12/13 — ... 虎ノ門ニュース・ニュース女子(DHCシアター)・西日本豪雨・親日国・言論テレビ・豊洲問題(築地)・**辛淑玉**・関西生コン・カンナマ・関ナマ・集団的自衛権関連 ... |
| 吉永みち子のｺﾒﾝﾄ】「福島県の神社の仏像・地蔵破壊 | 2016/12/11 — ... 豊洲問題(築地)・**辛淑玉**・関西生コン・カンナマ・関ナマ・集団的自衛権関連・青木理・靖国問題・韓国、不正関連ニュース・韓国のタブー・韓国の社会問題 ... |
| 井上正大の結婚の問題点 - 算命学占い 鑑定ブログ＆動画説明 | 2016/12/25 — ... 足立康史, **辛淑玉**, 辻井伸行, 近藤サト, 近藤真彦, 近藤麻理恵, 速水もこみち, 進退気法, 道場六三郎, 道端アンジェリカ, 遠藤要, 部分格, 酒井法子, 里美ゆりあ ... |
| 「日本死ね」の何が悪いんだ。クソくらえなんだよこんな国は ... | 2016/12/04 — ... 共同代表］の**辛淑玉**らと共にシバキ隊の刺青チンピラ高橋直輝（添田充啓）らが代表として多数のサヨクが無断で道路封鎖したり等の犯罪行為を繰り返しているし、 |
| 佐辺良和 | M.A.P.after5 - FC2 | 2016/12/30 — はん家 JudoChop **辛淑玉** 濱田ひろみ 中真茂 ヤモリ君 墓碑銘 岡村しん 教室生徒外部活動 比嘉賢多 菊地さん 沖縄の旅_2009年9月 海ぶどう 沖縄の旅_2008年10月 木津 ... |
| 女流棋士総合スレッド第54局 [無断転載禁止]©2ch.net | 2016/12/31 — 日本人の奴隷化と強制移住; 741 ：名無し名人：2017/02/10(金) 13:44:58.64 ID:JAJMm4c8: のりこえ（沖縄独立）させるな！ >**辛淑玉** @shinsugok 2016年9月17日 |
| 170絢香ファンayakaスレPART75 (709) - 2ちゃんねる ... | 2016/12/11 — 誇らしい」 **辛淑玉**「ここは戦場だ」 2ch.net 元スレ http://mint.2ch.net/...ews4plus/1470420988/ 李信恵 8月5日 沖縄の高江に、友だちがいっぱい行ってる。 |
| 2016年12月 | 2016/12/31 — ... 足立康史, 軍事オタク, 軍事クーデター, 軍事侵攻, 軍事力, 軍事法廷, 軍事研究, 軍人, 軍隊, 奥石東, 辛ラーメン, 辛坊治郎, **辛淑玉**, 辰, 農心, 辺野古, 辻元清美 ... |
| イケメンの感覚が日本人と違うんだよな 〜 星野源など…ゴツ ... | 2016/12/24 — **辛淑玉** (24) ... 人虐殺オール沖縄用日望月イソ子河野談話津田大介共同通信マスゴミK－POP慰安婦訴訟ラサール石井DHCサッカー**辛淑玉**産経新聞ワクチン戦犯ロケット ... |
| カテゴリ雑談]【水溜り】長靴の想い出【雨】 - びんたん | 2016/12/31 — 今まで左翼界隈が「ネトウヨのデマだ」と否定していたことだが、**辛淑玉**氏ら本人の口で語られているのだから、もう言い訳はできまい。 また、この講演には現職国会議員 ... |
| 【チャンピオン】近物レックスpart26【No.1】 [無断転載禁止 ... | 2016/12/14 — 「サード配備の真の目的は日本防衛」. 488国道774号線2017/02/05(日) 10:34:35.60ID:vmmgSK5o. これが朝鮮左翼の指導者 **辛淑玉**(しんすご)さんです 子分は福島みずほ |
| 日本中央大學 - 華人百科 | 2016/12/24 — **辛淑玉**（朝鮮民族運動家） 鴨桃代（労働運動家） 三上治（活動家、評論家） 鈴木尚之（元鉄道労働組合（鉄労）書記長、新しい歴史教科書をつくる會事務局長） |

こうした書き込みの集積は、第 2 に挙げられるウェッブニュースのトピックともなる。その 1 つであるガジェット通信の見出しは、以下のように人種差別的な言辞を用いているわけではない。「2 ちゃんねる「ニュース速報＋」板で歴代 7 位にランクイン！辛淑玉氏の沖縄基地反対運動動画」[39]。しかし、次項でみるように 2 ちゃんねるでの書き込みそのものは、人種差別的な攻撃に満ちている。そうした内容の掲示板が紹介されることで、人種差別思想が拡散されていったことは、図 3〜5 が示す通りである。

第 3 に、「ニュース女子」の当該番組は、有名人や公職者による人種差別的攻撃も引き起こした。たとえば沖縄県南城市長は、「日本人の名字に辛は見たことないけどなぜ！？　沖縄県の政治的活動の先頭に立っているの！？」[40]と発言した。これは、のりこえねっとの取り組みではなく、原告の民族的属性をあげつらうものである。

表3 グーグルでの「辛淑玉」検索結果(2017年2月)

| | |
|---|---|
| ゲストに辛淑玉さんを迎えて - 日本共産党 | 2017/02/16 — 市民団体「のりこえねっと」共同代表の**辛淑玉**（シンスゴ）さん（人材育成コンサルタント）が14日、日本共産党のインターネット番組「生放送！ とことん共産党」に ... |
| 「辛淑玉氏の抗議行動は言論弾圧」「ニュース女子」出演の ... | 2017/02/26 — のりこえネット共同代表の**辛淑玉**氏が講演で「爺さん、婆さんは嫌がらせをしてきて下さい」と話している場面の動画＝24日、東京都千代田区（三枝玄太郎撮影）. |
| 副主幹の懲戒解雇を 「のりこえねっと」共同代表・辛淑玉さん | 2017/02/03 — ニュース女子：報道全体の信用失墜、副主幹の懲戒解雇を 「のりこえねっと」共同代表・**辛淑玉**さん. 2017年2月3日 07:13有料. ニュース女子. 東京MXの番組「ニュース ... |
| 在日と沖縄を同一視する「辛淑玉」という狂気:トラネコ日記 | 2017/02/16 — TOKYO MXの「ニュース女子」番組に抗議している「のりこえねっと」共同代表の**辛淑玉**氏の発言がネットで関心を集め2月6日の夜から大炎上に発展しています（画像は ... |
| 辛さんの活動「なぜ」 南城市長がFB投稿 「日本人の名字で ... | 2017/02/06 — 【南城】古謝景春南城市長が3日、フェイスブックで市民団体「のりこえねっと」共同代表の**辛淑玉**（シンスゴ）さんの政治活動について「日本人の名字に辛は見たことない ... |
| 辛淑玉の経歴や活動とは?犯罪教唆で逮捕の噂や家族,夫を調査 ... | 2017/02/07 — 反日主義者として、知る人ぞ知る存在の**辛淑玉**（シンスゴ）さんですが、現在ネット上では**辛淑玉**さんが上げたある動画の発言内容が、過激だと物議を呼んでいます。 |
| 辛淑玉氏の「若者は死ね 年寄りは捕まれ」の沖縄 ... - エキサイト | 2017/02/07 — 2月7日に放送された、『真相深入り！虎ノ門ニュース』に松井一郎・大阪府知事が出演。作家の百田尚樹さんや居島一平さんたちと現在話題のニュース記事について語った。 |
| 東京新聞「深く反省」 副主幹司会「ニュース女子」問題 - 沖縄 | 2017/02/02 — 東京新聞はこれまで、番組の問題点を何度も報じてきたが、長谷川氏については触れていなかった。番組内で「反対派の黒幕」などと名指しされた人権団体の共同代表・**辛淑玉**（ ... |
| 【辛淑玉】動画流出ジジババは沖縄行って嫌がらせをして ... | 2017/02/06 — **辛淑玉**の指南動画流出「若者は死ね年寄りは捕まれ」福島瑞穂も登壇**辛淑玉**、若者は死んで、年寄りは逮捕、私は稼ぐのりこえねっと代表の**辛淑玉**(シンスゴ)氏が講演で「私 ... |
| 辛淑玉問題発言 - ニコニコ動画 | 2017/02/06 — **辛淑玉**問題発言 [社会・政治・時事]「私は稼ぎます、若い者には死んでもらう、爺さん婆さん達は嫌がらせをして捕まってください」「山... |
| 辛淑玉問題発言 - ニコニコ動画 | 2017/02/07 — **辛淑玉**問題発言 [社会・政治・時事] ようべつから転載あ、だから共謀罪を必死で阻止したんだ |
| 辛淑玉という在日3世で既に帰化してる反日朝鮮人の精神病理。 | 2017/02/01 — **辛淑玉**という在日3世で既に帰化してる反日朝鮮人の精神病理。母親にも＜＜オマエは、ろくな死に方はしない、、、＞＞と、見放され、、、多くの在日にも忌み嫌われる ... |
| 辛淑玉氏に見る＜在日＞という病 | 2017/02/11 — **辛淑玉**氏が登場したので、今までまったくふれたことがなかった在日韓国・朝鮮人について少しふれておきましょう。 あまり気の進まないテーマなので棚上げしていました ... |
| 辛淑玉氏の「若者は死ね 年寄りは捕まれ」の沖縄基地反対 ... | 2017/02/07 — **辛淑玉**氏の「若者は死ね 年寄りは捕まれ」の沖縄基地反対運動について 百田尚樹氏や松井一郎・大阪府知事が語る. |
| 「ニュース女子」問題 ②～辛淑玉という人 - Ameba ブログ | 2017/02/07 — 下左は琉球新報の**辛淑玉**氏の記事と、下右は基地反対運動を交通費5万円を出してまで支援する「のりこえねっと」のチラシです。 日本の沖縄の人が ... |
| 【緊急拡散】辛淑玉の犯罪 | 戦後体制の超克 - Ameba ブログ | 2017/02/10 — **辛淑玉**「やんばるの森もいいよ、でもね、あそこに置かれてるのは戦争の道具ですよ。戦争は世界最大の環境破壊であってね、人を殺すことなのね。だから、それをなんとかして ... |
| 米軍基地に朝鮮人 #辛淑玉 ～アパホテルにウイグル人トゥール ... | 2017/02/07 — 「在日琉球人」と名乗っているせいで誤解されやすいが、私は、**辛淑玉**という韓国人女性を、政治的にはまったく評価していない。 逆に「同じく、巨大な日本に対峙する異民族 ... |
| いまスゴく話題のシンスゴ、シンにスゴ過ぎ(笑) | 2017/02/11 — いまスゴく話題のシンスゴ(笑) **辛淑玉**オンニ 「日本人が強姦して生ませた子供が在日韓国朝鮮人ですよ」 例によって、むちゃくちゃな表現やな。いかにも、... |
| 生協が「のりこえねっと」に対し資金援助 | 紋別総合サイト | 2017/02/15 — **辛淑玉**(のりこえねっと共同代表) 玖島穂高(全日本建設運輸連帯労働組合) 元山仁士郎(SEALDs RYUKYU). ＜特別報告＞ 金平茂紀(TBS テレビ「報道特集」キャスター). |
| 辛淑玉「爺婆は沖縄行ったら嫌がらせをしてみんな捕まれ」 | 2017/02/07 — **辛淑玉**の指南動画流出「若者は死ね年寄りは捕まれ」福島瑞穂も登壇 2017/02/03 **辛淑玉**、若者は死んで、年寄りは逮捕、私は稼ぐ のりこえねっと代表の**辛淑玉**(シンスゴ) ... |
| ニュース女子問題、東京新聞が「深く反省」 長谷川幸洋 ... | 2017/02/01 — さらに、ヘイトスピーチや人種差別への反対運動をする「のりこえねっと」共同代表で人材育成コンサルタントの**辛淑玉**さんを名指しし、「のりこえねっと"**辛淑玉**"とは何者 ... |
| TOKYO MXが沖縄基地問題のデマを放送し ... - BLOGOS | 2017/02/05 — ... は2月3日、人権侵害の申し立てをした市民団体「のりこえネット」共同代表の**辛淑玉**（シンスゴ）さんに、「まずは当事者同士で話し合ってほしい」と連絡した。 |
| 「ニュース女子 出演者 女子」の検索結果 - Yahoo!ニュース | 2017/02/09 — **辛淑玉**さん「悪質なフェイクニュースだった」 ... ニュース女子」で、名誉を傷つけられたとして、市民団体「のりこえねっと」共同代表の**辛淑玉**（シン・スゴ）さんが制… |
| メラ速報 on Twitter: "動画書き起こし】のりこえねっと辛淑玉 ... | 2017/02/05 — 動画書き起こし】のりこえねっと**辛淑玉**「あなた達が強姦して産ませた子供が在日韓国朝鮮人ですよ」だいぶ若いころ・朝生(朝まで生ﾃﾚﾋﾞ)にて 比喩・暗喩だーなどの擁護 ... |
| 2ちゃんねる「ニュース速報＋」板で歴代7位に ... - Infoseek | 2017/02/11 — 先日、ガジェット通信の**辛淑玉**氏の「若者は死ね年寄りは捕まれ」の沖縄基地反対運動について百田尚樹氏や松井一郎・大阪府. |
| TOKYO MXが沖縄基地問題のデマを放送し ... - 週刊金曜日 | 2017/02/05 — ... は2月3日、人権侵害の申し立てをした市民団体「のりこえネット」共同代表の**辛淑玉**（シンスゴ）さんに、「まずは当事者同士で話し合ってほしい」と連絡した。 |
| 大発狂！福島みずほ「LINEでも共謀罪が成立する - JC-NET | 2017/02/27 — 沖縄で防衛局職員に全治2週間のけがを負わし逮捕されたしばき隊の添田充啓も社民党の福島瑞穂や**辛淑玉**らと行動共にしている。 福島氏が凶暴罪を恐れるのも当然である ... |
| 「IWJの報道が間違っている」!? 東京新聞論説副主幹・長谷川 ... | 2017/02/11 — 「笑いながら私を名指しし、沖縄の人々を侮辱した」～**辛淑玉**氏がBPOに人権侵害申し立て！「ニュース女子」ヘイトデマで問われているのは日本のマジョリティー「こんな ... |
| 在日派遣部隊の高江ゲリラ戦…墓穴の底でBPOが足掻く | 2017/02/28 — 我那覇さんは、**辛淑玉**側の真の狙いを短いセンテンスで叩き斬った。連中を驚愕させた地上波放送。そして、“沖縄差別”というBPO申し立ての核心が偽りであることを我那覇さん ... |
| 東京新聞と長谷川副主幹、非難応酬の異常事態…「メディア ... | 2017/02/09 — 「のりこえねっと」は放送に抗議するとともに、共同代表の**辛淑玉**氏は1月27日、「（放送内容は）事実に反している」「虚偽・不公正」と、BPO（放送倫理・番組向上機構） ... |
| MC勤めた東京新聞副主幹が「言論の自由」を主張 - BuzzFeed | 2017/02/09 — 共同代表の**辛淑玉**さんは1月27日、放送内容は「事実に反している」「虚偽・不公正」と、BPOに人権侵害を申し立てた。 一連の問題は、BuzzFeed Newsや東京新聞などが他 ... |
| 前田日明氏MXデモの前で「天皇陛下万歳！」パヨクから ... | 2017/02/11 — **辛淑玉**さんを攻撃し、良識ある市民団体に当てつけるように「天皇陛下万歳」と発言するネトウヨ在日の前田日明をしばき隊全員で攻撃していこう！ |
| 1月16日の今日は何の記念日 | 2017/02/14 — ... 1948年 ジョン・カーペンター（映画監督） 1948年 須田哲夫（アナウンサー） 1948年 星セント（漫才師） 1948年 堀内恒夫（野球） 1959年 **辛淑玉**（評論家） 1959年 ... |
| 2017年 2月の人気記事ランキング一覧 - まとめアンテナZ | 2017/02/26 — **辛淑玉**氏の指南動画が流出「爺さん婆さんたちは沖縄行ったら嫌がらせをしてみん 02/06, 583 user · 痛いニュース(ﾉ∀`). star! 高知の山奥から東京で消耗と煽るプロ ... |
| 今政肇 / インパクト出版会 | 2017/02/14 — ... ジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタ, 職場での性的いやがらせと闘う裁判を支援する会, 白川真澄, 新城郁夫, **辛淑玉**, 信原孝子遺稿・追悼文集編集委員会 ... |
| Download 【衝撃】辛淑玉シン・スゴ氏の指南動画「若者は ... | 2017/02/13 — Name, 【衝撃】**辛淑玉**シン・スゴ氏の指南動画「若者は死ね年寄りは捕まれ」福島瑞穂も登壇. Channel. japan000beautiful. Views, 16,195. Like, 67. Duration, 21:06. |

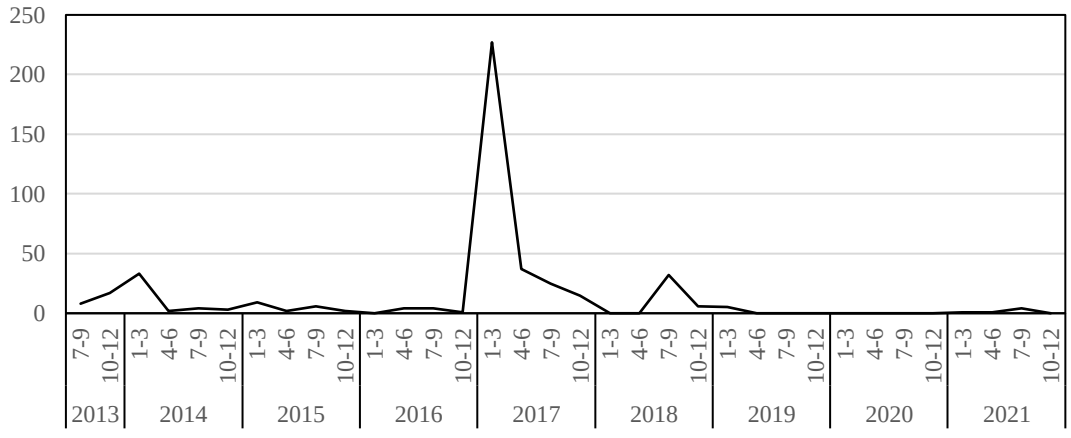
表3 グーグルでの「辛淑玉」検索結果（2017年2月）続き

| | |
|---|---|
| セキュリティホール memo - 2017.02 | 2017/02/28 — 「ニュース女子」方面. 「ニュース女子」沖縄報道でBPOに人権侵害申し立て 「放送局の体をなしていない」と**辛淑玉**さん (ハフィントンポスト, 1/27). |
| 東京新聞は謝罪も本人は…『ニュース女子』司会・長谷川幸洋 ... | 2017/02/02 — 1月27日には反対運動を煽動しているなどと名指しされた「のりこえねっと」の**辛淑玉**共同代表が記者会見を行い、BPO（放送倫理・番組向上機構）の放送人権委員会への ... |
| 金正恩の生母(ｺ･ﾖﾝﾋ)が、大阪鶴橋生まれの「在日」というのは ... | 2017/02/17 — ... トップページ | 沖縄在住の「ﾆｭｰｽ女子」ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ出演者3人(我那覇真子さん・手登根安則さん・依田啓示さん)、**辛淑玉**氏に『公開質問並びに公開討論』申し入れ » ... |
| 左翼によって迫害されてしまった言論の自由 - インターエデュ | 2017/02/12 — のりこえねっと**辛淑玉**氏等による東京MXテレビ『ニュース女子』報道弾圧に抗議する 沖縄県民東京記者会見 若者の我那覇さんの毅然とした態度は本当に尊敬に値します。 |
| 【宇宙の不思議】宇宙の95%は正体不明！未だ解明されてい ... | 2017/02/09 — 講師は**辛淑玉**氏や浜矩子氏で、塾費は1万円ですぅ」〈2chエクサワロス〉・ハイチとかいう闇が深すぎる国wwwwwwwwwwwww〈ねむ速〉・【バックエロ画像】 ... |
| 心霊スポット最恐が慰霊の森という風潮 - ぶろにゅー | 2017/02/07 — 見る〉・**辛淑玉**氏の指南動画が流出「爺さん婆さんは向こう(沖縄)行ったら嫌がらせをしてみんな捕まってこい」〈ちょっとアレなニュース〉・【素人】今月ピンチだから ... |
| 【栃木県・宇都宮城址公園】韓国籍の黄茂男(68)が知人の中野 ... | 2017/02/08 — のりこえねっと代表の**辛淑玉**(シンスゴ)氏が講演で「私は稼ぎます、若い者には死んでもらう、爺さん婆さん達は嫌がらせをして捕まってください」「山城(博治)には病気で死ぬ ... |
| 2012年ご挨拶 - おんな組いのち | 2017/02/19 — 「解説」の著者、シンスゴ（**辛淑玉**）も「おんな組いのち」の同志であり友だちだ。彼女は友岐子とは正反対、もっぱら社会人の面でモノを書く。（ちなみに、私見によれ ... |
| 「私のパンティかぶった警視総監候補」ゲス不倫ばらされ出世 ... | 2017/02/10 — また、在日コリアン3世の**辛淑玉**がいることに「韓国人がなぜ反対運動に参加するのか」などと報じた。当然ながら、それに市民団体などから抗議の声が上がった。 |
| 男組副長石野雅之、共産党と犯罪 | 2017/02/09 — 沖縄県の高江などでテロ活動を展開している**辛淑玉**共同代表らの「のりこえねっと」の資金源の一つは生協（パルシステム）だった。 生協（パルシステム）は、近年では ... |
| 【しばき隊の正体】（中） 2つの民事訴訟提起の経緯と概要 | 2017/02/20 — 辛は2015年1月27日、加害者ら5名に宛てて『Mさんリンチ事件に関わった友人たちへ』と題した文書を認めている。後に“**辛淑玉**文書”と呼ばれる書簡で、エル金・李信恵・凡に ... |
| 2017-02-05 - ニュピク | 2017/02/05 — **辛淑玉**の指南動画流出「若者は死ね年寄りは捕まれ」福島瑞穂も登壇 **辛淑玉**、若者は死んで、年寄りは逮捕、私は稼ぐ のりこえねっと代表の**辛淑玉**(シンスゴ)氏が講演で |
| ニュース女子の沖縄反基地報道で墓穴を掘る左翼達 - 徒然日記 | 2017/02/05 — と思った矢先、この活動の中心人物である**辛淑玉**氏がこのニュース女子を放送しているTOKYOMXをBPOに申し立てしたというニュースが飛び込み、BPOからは当人同士で ... |
| 金正男の腹部にあった刺青がない！？影武者疑惑の真相が気に ... | 2017/02/24 — **辛淑玉**（シンスゴ）の経歴がスゴい！結婚や夫は？国籍も気になる！ プロフィール. 男の子. なまえ：ボジ♂. かわいい ... |
| 玉木議員「麻生大臣、調査した方がいいと思う ... - 黙翁日録 | 2017/02/23 — 過去記事の「野中広務・**辛淑玉**「差別と日本人」を読む」をご参照のほどを こういうのも. 青木理氏の安倍晋三評。「失礼ながら、恐ろしくつまらない男だった。 |
| 「戦争ヘンタイ」沖縄基地抗議にヤバすぎる活動家『AKO ... | 2017/02/14 — 番組内で取り上げたチラシを発行している、反レイシズム団体のりこえねっと共同代表の**辛淑玉**（シン・スゴ）氏は、自身のツイッターで、 |
| つかこうへいが描いた「強制連行」 | 2017/02/07 — 資料・**辛淑玉**氏が語る在日の来歴 （1990年代前半） 資料・宮台真司 （在日の強制連行問題＠2006） 資料・原口一博 （強制連行されてきた在日に参政権を認めるべき）. |
| アニメ：「暗殺教室」のアブないエロ画像まとめ：二次 | 2017/02/05 — **辛淑玉**さん「『韓国人がなぜ日本の政治に口をだすのか』って言う人。ケント・ギルバードには… ぴろり速報2ち…《艦これ エロ漫画》ろーちゃん知ってるよ？ |
| 【Fate】遠坂凛のエロ画像 その8 - ぴっくんあんてな | 2017/02/07 — のりこえねっと**辛淑玉**のヤバイ動画が流出「若い子に死んでもらう。老人は(沖縄で)嫌がらせを… ぴろり速報2ち…《アイドルマスター カラーエロ同人誌》美嘉の笑顔を見 ... |
| 上野千鶴子氏「平等に貧しくなろう」へ心を傾けてはいけない | 2017/02/13 — **辛淑玉**「若者は死んで。年寄りは嫌がらせを」 内田樹「もう成長しなくてよいではないか」 上野千鶴子「みんなで貧乏になろう」 まさかそういうあれなのか。 |
| 豊中市教育問題、かつて「君が代」の代わりに北朝鮮の民衆歌 ... | 2017/02/28 — http://www.labornetjp.org/news/2012/1121shasin レイバーネットTV 「築地市場移転問題」「のりこえねっと」をテーマに出演した**辛淑玉** sin0925-21.jpg |
| 【共謀罪】「ﾃﾛ等準備罪」の解説。岸井「戦前の『治安維持法 ... | 2017/02/05 — 「日本人は、黙って殺されろ」と言っている**辛淑玉**が野放しで、至極まっとうに、祖国に帰って、自分の国のために働いてくださいということが、ヘイトスピーチなんて、 ... |
| 東京新聞1面で謝罪～MXテレビの沖縄報道めぐり - みんカラ | 2017/02/06 — DHC!/ naruu · **辛淑玉**さん、「ニュース女子」制作会社と .../ ritsukiyo · 「ニュース女子」をBPOが強く批判/ Thomas_. 今あなたにおすすめ. |
| 2 - 自動ニュース作成G | 2017/02/28 — 「**辛淑玉**氏の抗議行動は言論弾圧」「ニュース女子」出演の沖縄県民らが会見 基地反対派の「暴力動画」に息をのむ会場18512 2気になる 0興味無い. http://www.sankei.com/ ... |
| 水島社長とNHK叩きの背後 その続報 ＃チャンネル桜 ＃水島 ... | 2017/02/19 — **辛淑玉**に対し 水島総） ・相手を攻撃したんだから、（我那覇氏らの）公開質問に 答えなさい。沖縄ヘイトスピーチの担い手なんだから （34:40～ 水島総） |
| gackt氏の宿命 - 算命学占い 鑑定ブログ＆動画説明 | 2017/02/03 — ... 足立康史, **辛淑玉**, 辻井伸行, 近藤サト, 近藤真彦, 近藤麻理恵, 速水もこみち, 進退気法, 道場六三郎, 道端アンジェリカ, 遠藤要, 部分格, 酒井法子, 里美ゆりあ ... |
| なぜ安倍政権は盤石なのか。 - 算命学占い 鑑定ブログ＆動画説明 | 2017/02/12 — ... 足立康史, **辛淑玉**, 辻井伸行, 近藤サト, 近藤真彦, 近藤麻理恵, 速水もこみち, 進退気法, 道場六三郎, 道端アンジェリカ, 遠藤要, 部分格, 酒井法子, 里美ゆりあ ... |
| 他人事でない「金正男」暗殺 疑心暗鬼での軍拡競争は - 六日の ... | 2017/02/15 — **辛淑玉**（シンスゴ）（著）2003解放出版社（単行本） 『絞首刑』 オウム死刑囚の執行が近いといわれる中で、果たして事件の“真相”や“全体像”は明らかになったのか？ |
| 【ワンパンマン】ONE総合part234【モブサイコ100】[無断 ... | 2017/02/02 — 【沖縄】**辛淑玉**氏の指南動画が流出「爺さん婆さんたちは向こう行ったら嫌がらせをしてみんな捕まってください」☆8 [無断転載禁止] ニュー速＋板でこの深夜に勢い4万 ... |
| 「日本軍が慰安婦を集団殺害」 韓国国定歴史教科書に記述へ | 2017/02/21 — 沖縄の基地外活動にコリアンが多いことを自白したのりこえねっと**辛淑玉**氏 - YouTubewww.youtube.com. ☆20160909 「ないちゃー大作戦！全員集合！ |
| 安倍晋三首相の昭恵夫人「韓国は大事な国」 韓国紙・東亜 ... | 2017/02/25 — 【衝撃】**辛淑玉**が共同代表の「のりこえねっと」に生協が資金提供していたwwwwwwwwwwww ｜ 保守速報hosyusokuhou.jp. |
| #SEALDs の皆様へ、やっぱり就職できなくて震えた ... | 2017/02/18 — のりこえねっと代表の**辛淑玉**が講演で「私は稼ぎます、若い者には死んで ... 独裁者様は、重々承知の上で若者を利用しているからこそ、うっかり**辛淑玉**が講演で「私は ... |
| 【訃報】 アイドル『私立恵比寿中学』 松野莉奈さん（18） 死去 | 2017/02/08 — 476 名前： 名無しオレ的ゲーム速報さん 2017年02月08日 15:08 返信する: こんな美少女が若死にし、福島みずほや**辛淑玉**や小池百合子のような日本に害しかもたらさ ... |
| 清水富美加（千眼美子）父親5000万円借金の形で幸福の科学 ... | 2017/02/15 — 渡辺宜嗣=靖国キャスター小谷真生子=中国高官様の靴の裏を舐める婬売キャスター 高木健一朝鮮人**辛淑玉신숙옥**ニュース女子ガー！BPO沖縄タイムズ異常反日犯罪朝鮮人読売 ... |
| 【動画】通名廃止に向けた施策が効いてる効いてる！在日朝鮮 ... | 2017/02/28 — **辛淑玉** (24) ... 虐殺関東大震災オール沖縄用日望月イソ子河野談話津田大介共同通信マスゴミK－POP慰安婦訴訟ラサール石井DHCサッカー**辛淑玉**産経新聞ワクチン戦犯 ... |
| |∀゜）彡＜事件、事故、ニュースを語ろう！848 - 2ch BBS .. | 2017/02/01 — 後 **辛淑玉**のように、在日および帰化したばかり、2世は政治活動禁止にする した場合は強制帰国、再び入国はさせない！ くらいが必要だね。トランプならやってくれそう ... |
| 相談してパスポート取得した変な生き物3 - 2ちゃんねる | 2017/02/08 — 8位 2017年 .133スレ **辛淑玉**氏が犯罪教唆「年寄りは嫌がらせをして捕まれ」(沖縄デモ) ☆ 9位 2017年 .124スレ「森友学園」安倍夫人、名誉校長辞任 |

(2) 「沖縄問題」が「在日コリアンヘイト」に変わるまで

一審において原告が提出した証拠書類の多くは、当該番組が引き起こした人種差別的効果に関する新聞記事やネットでの書き込みだった[41]。本項では、そうした個別の事例を超えて、当該番組が全体としてどのような効果をもたらしたのか、日本最大のウェッブ掲示板である 2 ちゃんねるへの書き込みから論じてみたい。前述のように、当該番組をきっかけに立てられた「辛淑玉」関連のスレッドは、歴代 7 位に入る膨大な数にのぼっている。図 6 が示すように、2013～2021 年に立った「辛淑玉」関連の 448 スレッドのうち、半数強にあたる 227 スレッドが、放送直後の 2017 年 1～3 月に集中していた。当該番組のもたらした影響の大きさがうかがわれる。

図6　2ちゃんねるで立った「辛淑玉」関連のスレッド数




注：２ちゃんねるニュース速報＋ナビより作成
（https://www.2nn.jp/word/%E8%BE%9B%E6%B7%91%E7%8E%89）

これらのスレッドは、原告を憎悪し罵声を浴びせる書き込みを基調としているが、それが人種差別的であるかどうかをここでは検討する。そのため、テキストマイニングという手法を用いて、2 ちゃんねるの関連スレッドでどのような言葉が頻繁に使われているかを分析した結果が表 4 である[42]。表の一行目には、スレッドが立った日付を示しており、1 月 8 日に最初のスレッドが立ち、27～29 日にはいくつものスレッドが立って書き込みが集中したことがわかる。

ここで本件の出発点を確認しておこう。ニュース女子＃91 のタイトルは「沖縄基地反対派のいま」であり、基地問題を保守派の観点から報じることを目的としていたはずである。しかしながら、前節で論じたように番組では「韓国人」に不必要な言及を繰り返し行うことで、原告の民族的属性を攻撃することが隠れた主題となっていた。沖縄問題をだしに、在日コリアンを攻撃せよという犬笛が吹かれたわけである。

では、その効果はどうだったのか。番組放送直後の 1 月 8～12 日をみると、2 ちゃんねる

の関連スレッドでもっともよく使われた言葉は、表 4 で網掛けを付した「沖縄」であった[43]。同時に、この時点ですでに「韓国」「在日」「朝鮮」といった言葉も上位にあらわれている。１月 8 日の時点でも、「半島人がいたよな」「黙ってろよ 糞チョン死ね！」といった書き込みが示すように[44]、原告に対する人種差別的発言は一貫して多数に上る。当該番組が吹いた犬笛は、この時点ですでに多くの共鳴を引き起こしていたといえるだろう。

表4　2ちゃんねるスレッドでの頻出語順位

| | 108 | 109 | 110 | 111 | | 112 | | 127 | | | | | 128 | | | | | | | | 129 | | | | | | | | | 130 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | |
| 1 | 沖縄 | 韓国 | 沖縄 | 沖縄 | 沖縄 | | 沖縄 | | 沖縄 | 沖縄 | | | 韓国 | | | | | 在日 | | | 沖縄 | 朝鮮 | 朝鮮 | 朝鮮 | 朝鮮 | | 沖縄 | 沖縄 | | 韓国 |
| 2 | 韓国 | | | | | 沖縄 | 朝鮮 | | 朝鮮 | | | | | 朝鮮 | 朝鮮 | 沖縄 | 朝鮮 | | | 沖縄 | 韓国 | 韓国 | 沖縄 | 沖縄 | | 沖縄 | | | | |
| 3 | | 在日 | | | 韓国 | | 韓国 | | | 朝鮮 | 在日 | 在日 | 沖縄 | 在日 | 韓国 | 韓国 | 在日 | | 沖縄 | 朝鮮 | 朝鮮 | | | | | 朝鮮 | 韓国 | 朝鮮 | 朝鮮 | |
| 4 | 在日 | 沖縄 | | 韓国 | | 韓国 | 在日 | | 在日 | | | 朝鮮 | 朝鮮 | 韓国 | 在日 | 在日 | 韓国 | 韓国 | 朝鮮 | | 在日 | 沖縄 | 在日 | 在日 | 在日 | 韓国 | 在日 | 在日 | | 沖縄 |
| 5 | | | | | 在日 | | | 朝鮮 | | | 韓国 | | 在日 | | | 朝鮮 | 沖縄 | 朝鮮 | | | | | | | 沖縄 | | 朝鮮 | 韓国 | 沖縄 | 朝鮮 |
| 6 | | 朝鮮 | | 在日 | | | | 在日 | 韓国 | 在日 | | | | 沖縄 | | | | | 韓国 | | | 在日 | | | | | | | 在日 | 在日 |
| 7 | 朝鮮 | | 韓国 | 朝鮮 | | 在日 | | | | | 朝鮮 | | | | 沖縄 | | | | | | | | | | 在日 | | | 韓国 | |
| 8 | | | 朝鮮 | | | | | | | 韓国 | | 沖縄 | | | | | | 沖縄 | | | | | | | | | | | | |
| 9 | | | | | 朝鮮 | | | | | | | 韓国 | | | | | | | | 韓国 | | | | | | | | | | |
| 10 | | | | | | 朝鮮 | | | | | 沖縄 | | | | | | | | 在日 | | | | | | | | | | | |

その後の展開は、人種差別的犬笛が吹かれて拡散してしまうと、被害者による対応がきわめて困難であることを示す。BPO への申し立てが報じられた 1 月 27 日の途中から、沖縄ではなく韓国、朝鮮、在日といった言葉が上位に並ぶようになった。ここで原告が申し立てした論点は、「人種差別」についてではなく、「テロリスト」「日当」など虚偽報道をめぐるものだったことに留意しておきたい[45]。つまり、本来であれば報道の真偽や基地反対運動の評価が論点になるはずである。しかし、当該番組が原告辛の民族的属性を執拗に取り上げたことにより、スレッドで人種差別的な書き込みを誘発する構造が作られた。こうした性格は、原告の抗議が伝えられることで強まり、原告が在日コリアンであることを攻撃するヘイトコメントが増加していった。あらためて確認しておくが、スレッドの冒頭に示された元ニュースは以下のとおりである。

> 沖縄の米軍ヘリパッド建設に抗議活動をする人々は「日当をもらっている」などと報道したテレビ番組「ニュース女子」に人権を侵害されたとして、「日当を払っている団体」として名指しされた市民団体「のりこえねっと」が 2017 年 1 月 27 日、会見を開き、放送倫理・番組向上機構（BPO）の放送人権委員会に申し立てをしたと発表した。

同団体の辛淑玉（シン・スゴ）共同代表は会見で、「（番組によって）一方的に攻撃されました。公開処刑です」と怒りをにじませた。

17 年 1 月 2 日に TOKYO MX で放送された「ニュース女子」は、沖縄・高江の米軍ヘリパッド建設について取り上げ、「過激な反対派の実情を現地取材」との触れ込みで放送された。その中で、反対派を「テロリスト」と表現したほか、「のりこえねっとが建設反対派の人々に日当 2 万円[46]を支払っている」などと指摘した。

放送後の 5 日、のりこえねっとはウェブサイトで番組に対して抗議声明を発表。番組内容を「虚偽報道」とし、「私たち『のりこえねっと』関係者は同テレビ局から事前にまったく取材を受けておらず、意見の聴取はおろか単純な事実確認すらされていません」「同番組によって傷つけられた人権と名誉の回復と補償を求めるため、必要なあらゆる手段を講じます」と表明した（傍点引用者）。

ここで記されているのは、一審判決が名誉棄損と認定したことばかりであり、法的な正統性を持つ内容である。にもかかわらず、この抗議を原告の民族的属性に関連付け、「ニュース女子」に加勢する差別的コメントが大量に生み出された。具体的にどのような書き込みがなされたのか、表 4 の右端にある 1 月 30 日のスレッドから関連する語句を抜き出したのが、表 5 となる[47]。スレッドのタイトルは、「【社会】辛淑玉氏、日当報道に激怒　TOKYO MX に補償を要求 ★7 [無断転載禁止]©2ch.net」（傍点引用者）[48]だった。抗議主体である「のりこえねっと」ではなく在日朝鮮人たる「辛淑玉」が、記事では枝葉の情報でしかない「補償」が、スレッドの前面に掲げられていたこととなる。これに関しては、団体の活動そのものではなく原告の民族的属性を、補償という言葉から日韓の歴史問題に結び付けて、差別的な書き込みを引き出しているとしか評価しようがない。

その結果を示した表 5 では、934 件の書き込みのうち 297 件は人種差別的なものとみなしうる。つまり、書き込みの 3 割以上が人種差別目的であり、これらは大きく 5 つのタイプに分けられる。第 1 に、「なぜ在日朝鮮人が日本の防衛基地建設を妨害するの？」「在日外国人の政治活動は違法」など、「ニュース女子」の論調をそのまま書き込むものがある。第 2 に、「チョン」という古典的な差別語を用いるものから、「からし、辛子」と原告の韓国語名を揶揄するもの、「ニダ」「火病（ファビヨ）」など韓国・朝鮮人を蔑視するネットスラングがある。第 3 に、「とても在日朝鮮人らしい」「韓国民の代表的な心情」「賤しい民族だよ」といった形で、原告の民族的属性が貶められる。第 4 に、「謝罪と賠償は朝鮮人の習性」のように、「慰安婦」や徴用工のような日韓の歴史問題＝前述の三者関係へと結び付け、嫌韓感情を煽るものがある。第 5 に、「強制送還させればよい」「半島へ帰れ」といった形で、追放を唱えるものがある。これらはすべて、ヘイトスピーチ解消法が以下で定義するところの「本邦外出身者に対する不当な差別的言動」の典型例をなす。

本邦の域外にある国若しくは地域の出身である者又はその子孫…に対する差別的意識を助長し又は誘発する目的で公然とその生命、身体、自由、名誉若しくは財産に危害を加える旨を告知し又は本邦外出身者を著しく侮蔑するなど、本邦の域外にある国又は地域の出身であることを理由として、本邦外出身者を地域社会から排除することを煽動する不当な差別的言動[49]。

表 5 では 6 頁にわたってそうしたコメントを抜き出したが、これは「不当な差別的言動」のほんの一部にすぎない。2 ちゃんねるだけとっても、本件に関連して 200 を超えるスレッドがたてられている。ヘイトスピーチの問題は、「のりこえねっと」という一団体の取り組みを原告の民族的属性に還元し、それが人種差別の材料として広く利用されることにある。すなわち、上記の抗議は在日コリアン全体への不当な差別的言動を大量に発生させ、異議申し立てに対する恐怖心を増すこととなった。これは、差別に抗議する被告をトラブルメーカーとして孤立させ、在日コリアンを分断する結果をももたらす。陳述書が示すように、原告辛は「ニュース女子」事件を恐れる在日コリアン社会から疎外され、孤立する結果をも生み出したのである[50]。

つまり、人種差別に対する抗議→外部からの攻撃→攻撃を恐れる内部からの非難へと至るわけで、抗議そのものに対するきわめて強い委縮効果、在日コリアン社会全体に対する沈黙効果を持つ。一方で、米軍基地問題にかこつけて在日コリアンを差別した「ニュース女子」番組を放置すれば、周辺諸国の意を受けた在日コリアンが黒幕であるというデマが真実であるかの如く受け入れられる。他方で、それに対して抗議したところで、原告の民族的属性が差別の材料として消費され、大量の人種差別的言動を生み出してしまう。結果的に、「ニュース女子」が持っていた人種差別的目的は、どのような行動をとろうと人種差別的効果を引き起こす形で達成されたわけである。

表5　原告辛に対する2ちゃんねる上でのヘイトコメント

| No | スレッド | 関連フレーズ |
|---|---|---|
| 1 | 5 | 人権ヤクザのチョン女w |
| 2 | 6 | やっぱりチョンは事実を指摘されると火病で喚き散らすんだな |
| 3 | 7 | 日当だとだめなんですか？からしさん |
| 4 | 8 | 韓国民の代表的な心情だよこれは |
| 5 | 9 | 政治活動して色々めちゃくちゃにさせようとしてるんだからさっさと強制送還させれば良い |
| 6 | 10 | 激怒してるのは貴様ら朝鮮人じゃない、日本国民だ |
| 7 | 13 | とても在日朝鮮人らしいなと思いました（小並感 |
| 8 | 14 | どろぼう朝鮮人を日本から叩き出そう |
| 9 | 16 | 互いに入国禁止が良い |
| 10 | 17 | 賤しい民族だよホント一秒でも早く死んでほしい |
| 11 | 19 | 将軍様からきつーいお叱りが来たんだなww |
| 12 | 20 | コイツらのせいでまともな在日も嫌われる世の中になる |
| 13 | 22 | 日本人なら「カネは要らない。事実を明らかにせよ。これは私の名誉の問題だ」という所ですよね |
| 14 | 25 | 謝罪と賠償を要求するニダ |
| 15 | 27 | それを差別だヘイトだと騒いで誤魔化すなよザイニチ共。 |
| 16 | 36 | 在日韓国・朝鮮人を追い出すなんて簡単なことだろ |
| 17 | 38 | 「出てけ」とか「帰れ」と言われる。「ハイわかりました。朝鮮人はみんな帰ります。天皇つれて帰ります」と |
| 18 | 41 | 何でチョン婆が日本で政治活動してんだよ　死ねよチョン婆 |
| 19 | 49 | 仏像よりも、こいつを韓国人は盗んでやれよw |
| 20 | 52 | ま、安倍と同じ恥知らずのミンジョクの類なんだろうけど。 |
| 21 | 56 | 鮮人はみごとな基地外の集合体です |
| 22 | 61 | 謝罪と賠償は朝鮮人の習性だな |
| 23 | 62 | チョンは本当のことを言われると火病を起こす |
| 24 | 68 | 朝鮮人が謝罪と賠償、差別を言い出したときは反論できないくらい追い込まれてる時 |
| 25 | 70 | 火病発症、精神病院へ行きなさい！ |
| 26 | 80 | シンスゴとかいう『パヨンフ像』建てられるぞ。全テレビ局前に |
| 27 | 81 | ﾁｮﾝはしね |
| 28 | 82 | この人って、日本国籍持ってるの？ |
| 29 | 83 | 沖縄工作にウリスト教も参戦したらしいな |
| 30 | 84 | 謝罪と賠償を要求するダニ |
| 31 | 85 | こいつ自身が日本人に対して行ってきた言動はスルーですか |
| 32 | 87 | 帰化はしてるっぽい |
| 33 | 92 | 辛淑玉は帰化は却下されてるぞww |
| 34 | 94 | 在日韓国人が嫌いになったよ |
| 35 | 95 | 事実を言ったらなぜか「サベツニダー」「ヘイトニダー」「バイショウスルニダー」 |
| 36 | 98 | 気化すればいいのに |
| 37 | 101 | 国防に関わる問題の反対運動を指揮している人物が外国人 |
| 38 | 104 | 寧ろ、「シンスゴって誰？」と調べて、韓国人嫌いが増えるだけ。 |
| 39 | 105 | チョンが日本で騒がないでくれる？ |
| 40 | 107 | 韓国なの？北朝鮮ではなく |
| 41 | 108 | まあ元から精神病大国自認してた国だけどね、今更w |
| 42 | 111 | とにかく日本人の金を欲しがる在日韓国人(笑) |
| 43 | 112 | 謝罪と賠償ニダ！！！！！！！！！！！！！ |
| 44 | 117 | 沖縄の活動家やっぱ在日だったんだw |
| 45 | 119 | こんな酷い国に韓国人を住まわせるのかわいそうだから全員帰してあげようよ！ |
| 46 | 124 | こんな国にいないで愛と正義の国に帰ればいいと思います |
| 47 | 127 | なんで日本にいる　国へ帰れ |
| 48 | 132 | 辛金玉が沖縄の活動家は在日と認めたってのが流れてるけどマ？ |
| 49 | 133 | まじで売春婦ババアたちとやってる事一緒だもんなあ |
| 50 | 135 | シナ→北→北シンパの流れじゃね。習自身はカリアゲが嫌いなようだが。 |

| No | スレッド | 関連フレーズ |
|---|---|---|
| 51 | 138 | 要求ニダ |
| 52 | 139 | なんでシンスゴを日本で養わないといけないのか？韓国に帰れ |
| 53 | 143 | チョンってすぐファビョって補償要求するなwww |
| 54 | 146 | バカチョン手口 |
| 55 | 147 | 仏像返せ！壊した仏像補償しろ！ |
| 56 | 148 | キチガイ朝鮮人が騒ぎ立てる |
| 57 | 157 | シンスゴさん、外国人でしょ |
| 58 | 158 | あーやっぱ日当云々はガチなんだな、核心突かれて火病ってんだなって普通の人なら思うな |
| 59 | 162 | だから朝鮮人は日本人全員に嫌われてるんだよｗ |
| 60 | 166 | 胡散臭い韓国人が沖縄でデモ活動していている事実はどんどん報道されろ |
| 61 | 170 | 相変わらず朝鮮人の言い分は詐欺的だなｗ |
| 62 | 172 | 韓国人は生きるために嘘つくんじゃなくて嘘つくために生きてるからな |
| 63 | 176 | 朝鮮人が政治運動やってる時点でおかしいわな。 |
| 64 | 177 | 支那人朝鮮人の得意技() |
| 65 | 178 | 辛淑玉、高江の活動家は在日だと認める。・・・・この人マジ在日にとってもヤバいんじゃないの？ |
| 66 | 181 | また日当払ってMX前で抗議デモするニダ |
| 67 | 186 | アイヌ協会朝鮮人混入事件もこの人が首謀者なの？ |
| 68 | 187 | 全力で在日朝鮮人がカスだと宣伝してるな |
| 69 | 189 | 日本人に対する恐喝でどんどん嫌韓増やしちまえ |
| 70 | 190 | さすが辛淑玉擁護する人はぶっ飛んでるね、仏像返さない国民みたいに世界が違うね |
| 71 | 192 | やっぱ朝鮮人はアホ |
| 72 | 202 | これが朝鮮人 |
| 73 | 206 | 辛淑玉の凄いところは、全身全霊で日本・日本国民に対する恨み（逆恨み）しか感じられないところだな |
| 74 | 210 | なんでもやって黙っていると思ったら大間違いだぞ外国人 |
| 75 | 214 | あれじゃ反在日を宣伝しまくってるそのものｗ |
| 76 | 217 | 朝鮮人は直ぐ金、金って言うって。 |
| 77 | 219 | ウソと捏造にまみれた人種 |
| 78 | 221 | 朝鮮人が補償や賠償を求める時は、事実を言われた時 |
| 79 | 223 | 精神病と人格障害に伝統の火病を併発してると思うな、たぶん逆恨みの民族霊 |
| 80 | 229 | 煽動してる黒幕が在日韓国人っていうことがTVで放送されたことが余程痛かったようだなぁ(笑) |
| 81 | 230 | 辛子玉が最初にすべき事は報道が嘘だという証明なのに |
| 82 | 232 | 本土から行く奴は全員在日だろ |
| 83 | 236 | 日本から出てけよ |
| 84 | 244 | 国際法無視・人治国家である無法者韓国人が、他国で法を楯に叫んでも「何逝ってんだ？」しか思わんよ |
| 85 | 248 | 今のままでは在日達は居場所を失う事になりかねないぞ！ |
| 86 | 251 | これだから物乞いチョンは関わったらダメなんだ |
| 87 | 255 | 金、金、言うなら祖国に帰れ！ |
| 88 | 256 | ●世界中で嫌われ暴行殺害される韓国人。実は最も差別主義な民族 |
| 89 | 259 | 朝鮮人は外人の癖にやたらと日本の問題に口も顔も出してくる　最低 |
| 90 | 261 | 外国人は政治活動するなよ |
| 91 | 264 | あの国全面無視で |
| 92 | 265 | こういう在日朝鮮ロジックで自己正当化しているだけ |
| 93 | 267 | 在日コリアンの生活保護需給率は異常 |
| 94 | 271 | やっぱチョンは謝罪と倍賞求める民族なんやなって |
| 95 | 274 | 芸人さん観てるよりも韓国人の慰安婦ネタとか観てる方がよっぽど面白いね。ほんとに笑える。 |
| 96 | 280 | 事実暴かれてファビヨる朝鮮人かｗ |
| 97 | 281 | バレてファビョーンなの？ |
| 98 | 285 | カネくれねっと 代表 カラシ玉です |
| 99 | 301 | ↑政府がパブリックコメント募集中。中韓人増やしたくない奴は急げ。2月16日まで。 |
| 100 | 302 | 外国人が政治活動に関与しているんだからさっさと逮捕して日本から叩き出せ |

| No | スレッド | 関連フレーズ |
|---|---|---|
| 101 | 305 | 逆効果なのがバカチョンには理解できない |
| 102 | 311 | 確かに我々は交通費は支給しているセヨ・・・日当を渡している証拠はあるニダか！！！！ |
| 103 | 321 | まともな在日がいるならこいつ黙らせろよ |
| 104 | 325 | 在日死ね |
| 105 | 326 | そもそも外国人が国防案件の妨害をするのはダメだろ |
| 106 | 328 | 俺在日だが、帰ろうと思うんだ |
| 107 | 329 | その賠償金で東京ＭＸ本社前に慰安婦像を設置してやればいいw |
| 108 | 330 | ぱよちん界隈は韓国人みたいに「ドキュメンタリー(笑)が歴史的証拠だ！」とか言い出しそうｗ |
| 109 | 344 | ナマポはむしろ朝鮮人とかフィリピン人だろ |
| 110 | 345 | 糞チョンはすぐに謝罪と賠償を要求してくるな、死ねよ |
| 111 | 346 | 事実を指摘され火病発症 早く祖国に帰れよ馬鹿朝鮮人 |
| 112 | 359 | まったくのチョン気質 |
| 113 | 360 | 向こうの人は「証言だけでも充分、ハルモニが嘘をつくわけが無い」とか言っちゃう人たちだから |
| 114 | 368 | くそ朝鮮人はさっそと朝鮮にかえれ |
| 115 | 370 | 恨むなら帰れるのに朝鮮に帰らなかった親を怨めよ |
| 116 | 373 | 朝鮮人が火病ってるのかよw |
| 117 | 374 | まともな奴なら前世紀中にさっさと帰化してもう日本人と同化してる |
| 118 | 375 | 辛淑玉ってあのシンスゴか！帰化申請したけど通らなかったんだよな |
| 119 | 376 | 帰化申請落ちた。日本死ね？ |
| 120 | 379 | 祖国で活動しろ。 |
| 121 | 381 | 謝罪と賠償を請求するのは慰安婦の仕組みと同じだな |
| 122 | 386 | 何で朝鮮人が沖縄基地問題で騒いでるの？ |
| 123 | 389 | こいつ北の工作員だろ |
| 124 | 393 | なんで外国にゆすられないといけないんだよ |
| 125 | 396 | 本当のことを言ったら切れるのが朝鮮人 |
| 126 | 399 | こいつみたいな北朝鮮の工作員は強制送還しろよ |
| 127 | 407 | 正しいことを言うと補償を要求するのが朝鮮人。 |
| 128 | 416 | ほんと朝鮮人の行動って、わかりやすいわー |
| 129 | 417 | からしだま大先生や　李信恵さんのような韓国愛あふれる愛国者を |
| 130 | 429 | 要はなんで反日の外国人が発狂してるの？ってことだよね |
| 131 | 438 | チョンによるたかりから、そろそろ脱却する時だ。 |
| 132 | 441 | 韓国人は文句いって金にするの本当にうまいよなー！ |
| 133 | 442 | 一緒に帰るﾆﾀﾞ。 |
| 134 | 443 | そうなんだけどなんでこの韓国人怒っているの？金にするためでしょ |
| 135 | 454 | ハゲにハゲを指摘するように、朝鮮人に朝鮮人と指摘するように |
| 136 | 455 | ほんと朝鮮人は狂ってるわ |
| 137 | 456 | どこの民族かモロバレだな |
| 138 | 457 | 辛淑玉って国籍は日本？朝鮮？ |
| 139 | 458 | あのキチガイ民族って好きだね |
| 140 | 463 | 朝鮮人が米軍基地反対してる時点でスパイ確定だろ。 |
| 141 | 466 | ＭＸ、糞チョン辛に帰国を要求 |
| 142 | 467 | 韓国人の犯罪自慢は今更だしなぁ |
| 143 | 469 | 帰化申請落ちてますw |
| 144 | 473 | そもそもさ、こいつは日本になぜいるのだ。 |
| 145 | 475 | 普通に強制送還だと思うけどなぁ |
| 146 | 476 | 金ニダ！！！金よこすニダ！ |
| 147 | 482 | そもそもなんで外国人が日本の軍事関係に口出ししてるんだよ |
| 148 | 483 | なんで干ョンが基地反対運動してんの？ |
| 149 | 485 | 今は韓国人にひどいことされてるから言われる筋合いはないね |
| 150 | 488 | 宮沢賢治のツェねずみのモデルって、絶対朝鮮人だと思う。 |

| No | スレッド | 関連フレーズ |
|---|---|---|
| 151 | 490 | 賢治って批判は鋭いとこあるしな、諭吉も扱き下ろした朝鮮人を批判しないわけがないと思う |
| 152 | 495 | 首相夫人が乗り込むと、火病おこしそうだったしね |
| 153 | 497 | これは朝鮮人による沖縄県民イジメでしかない。 |
| 154 | 499 | 外国人のクセに日本に内政干渉するなんてテロリストと変わらない |
| 155 | 500 | 北朝鮮の意を受けてのものと思われてもしたかないのに、堂々と活動するとか、なんか変だよな。 |
| 156 | 503 | 因縁つけて金を要求するのが得意な民族だからな |
| 157 | 509 | 朝鮮人が日本の沖縄で違法な政治活動を暴力行為まで伴って行っている |
| 158 | 511 | これが朝鮮人 |
| 159 | 513 | おかわりニダ<｀∀´#> |
| 160 | 517 | 辛ラーメンやるから、半島に帰ってほしいわ。 |
| 161 | 518 | 何で朝鮮人と沖縄県民を一緒にするんだ |
| 162 | 526 | バレてキレるのはあっちの人の十八番 |
| 163 | 528 | そもそも韓国人が沖縄独立運動やってることが異常と思わんか |
| 164 | 530 | 日本は韓国は朝鮮人と朝鮮半島に関わらないことだ。 |
| 165 | 537 | チョン火病ｗｗｗ |
| 166 | 538 | 高江騒乱を主導する最高幹部の実名はパク・ホンギュ |
| 167 | 541 | チョンなんてキチガイ劣等民族相手にするだけ日本は時間の無駄だ |
| 168 | 549 | 外国人が日本の国内問題にガッツリ首を突っ込むってどう言うことよ |
| 169 | 550 | それじゃ引き分けで朝鮮人が金貰えないじゃないかｗ |
| 170 | 553 | タカリ屋民族。 |
| 171 | 556 | キチガイ朝鮮人 |
| 172 | 557 | アホか、帰国しろや |
| 173 | 558 | そもそも在日韓国人が日本で政治活動するなよ |
| 174 | 565 | ファビョン |
| 175 | 566 | 日当じゃない、交通費ニダ！ |
| 176 | 567 | 本国が滅びようとしてる時に、日本で工作員活動ですか。 |
| 177 | 568 | 強制送還あるのみ！ |
| 178 | 571 | なぜ在日朝鮮人が日本の基地建設の反対 |
| 179 | 572 | 在日に参政権与えたら、こりゃ一危険だよね。 |
| 180 | 573 | 本当の事がばれてファビョーン |
| 181 | 592 | 辛ちゃん、自ら動画で高江の反対派が在日であることを証言wwwwww |
| 182 | 595 | 辛淑玉が火病だって？ |
| 183 | 598 | 韓国籍の韓国人によるテロ行為だろ |
| 184 | 599 | 本国韓国が市民団体の度を越えた活動のせいで瀕死状態だというのに |
| 185 | 602 | 自分は韓国人でもなく在日人という特殊な存在だと言ってるのテレビで見たけど頭おかしいよね |
| 186 | 603 | チョンが必死になるって事は事実という事だろな |
| 187 | 608 | 朝鮮人は平気で嘘を吐くな　w |
| 188 | 614 | そもそもなんでこの外人が日本で張り切ってんだ？？？ |
| 189 | 625 | 金かね金かね金かね、韓国人 |
| 190 | 633 | 日本中の在日朝鮮人に対しては、「帰れ！来んな」なんて言わないだろ？ |
| 191 | 636 | 本当のことを言われると怒るチョン |
| 192 | 637 | 韓国人の悪事がまたバレた |
| 193 | 638 | また韓国人の犯罪 |
| 194 | 639 | 韓国人が日本人と沖縄人をケンカさせようと画策 |
| 195 | 640 | 在日韓国人は沖縄を乗っ取るとの情報 |
| 196 | 643 | 在日韓国人が日米安全保障条約を破壊しようとしている |
| 197 | 644 | 在日韓国人はテロリストだった |
| 198 | 647 | 日本が嫌なら出て行けばいいやん |
| 199 | 648 | チョンの思考回路って |
| 200 | 650 | 謝罪と賠償言い出すのは遺伝子に組み込まれてるんだろうな |

| No | スレッド | 関連フレーズ |
|---|---|---|
| 201 | 655 | チョン高校生12人が抗議として辺野古ゲート前でテコンドーを披露 |
| 202 | 656 | 奇形ブサイクがふぁっびょんwww |
| 203 | 659 | 金目的ニダw |
| 204 | 666 | 原資は何処だ、北か？中華か？ |
| 205 | 668 | チョン反対キチガイブサヨ屋パヨク、MX前のバカ丸出しな抗議モドキ。 |
| 206 | 674 | またキムチかよ |
| 207 | 676 | 朝鮮なのか中国なのか、あるいは両方の工作 |
| 208 | 678 | これがチョーセン893の手口です。 |
| 209 | 681 | 何で朝鮮人が在日米軍で暴れてるの？ |
| 210 | 686 | 放火・殺人・泥棒・詐欺・売春何でもありの在日は帰国してください |
| 211 | 687 | 朝鮮人が何で怒ってますんや？また金ですか？ |
| 212 | 688 | すぐカネの話になるなこの民族は |
| 213 | 696 | どろぼう朝鮮人を日本から叩き出そう。 |
| 214 | 707 | 「のりこえねっと」38度線をのりこえろ |
| 215 | 710 | 韓国みたいに罪を犯しても大きな声で相手を非難すればまかり通る国だと、国民もこんなヤツだらけ |
| 216 | 720 | この朝鮮ババァ金好きだなぁw |
| 217 | 721 | そんなに差別がいやなら、なぜ帰らない？ |
| 218 | 723 | なんでこんな反日朝鮮ゴロがのさばるようになったんだろう |
| 219 | 725 | 朝鮮人はなんでもかんでも金を強請る材料にするな |
| 220 | 726 | なぜ韓国籍の韓国人が日本国沖縄の米軍ヘリパッド建設に |
| 221 | 728 | 朝鮮人の自作自演じゃないの？ |
| 222 | 729 | これをファビョると言うのか? |
| 223 | 736 | 糞チョンTBSが「土人発言」テーマに |
| 224 | 737 | 自分の国の心配してろよチョン |
| 225 | 738 | バレて火病（逆ギレ）は典型的な韓国人気質ですな。 |
| 226 | 739 | 本当どうしようもねえ民族 |
| 227 | 740 | 朝鮮人の基本動作を忠実に実行してるね。辛さん。 |
| 228 | 742 | 謝罪と日当を要求するニダ |
| 229 | 743 | ばれちゃって火病www、とことんチョンコロ性質 |
| 230 | 745 | 分断工作に失敗した哀れな在日 |
| 231 | 746 | 今も昔も手口が変わってねーわ密航鮮人 |
| 232 | 747 | コイツらのせいでまともな在日も嫌われる世の中になる。 |
| 233 | 756 | 「謝罪と賠償を要求するニダ！」　実にわかりやすいｗｗｗ |
| 234 | 757 | 在日朝鮮人がやってることは日本の防衛基地建設の妨害であり |
| 235 | 758 | 日本人とはメンタル違うから |
| 236 | 761 | 朝鮮人って、何かにつけて賠償だのなんだの |
| 237 | 764 | チョンの思考過程が本当に理解できないよ |
| 238 | 765 | BBQは韓国起源だからな |
| 239 | 767 | 半島DNAはマジでどうにかしろ。 |
| 240 | 771 | 朝鮮人は本当にこればっかｗｗｗｗｗｗｗ |
| 241 | 773 | 痛いところを突かれてファビョッてるとしか思えない笑 |
| 242 | 782 | 日韓犯罪者引き渡し協定についての説明も日本語で出ています。 |
| 243 | 783 | ルーシーブラックマン事件の犯人の在日も |
| 244 | 786 | やはり朝鮮人は思考回路が完全に異なるな。なんで、日本に住んでるんだろうな。 |
| 245 | 788 | お仲間に背中から撃たれるのがいかにもあの国のDNA |
| 246 | 789 | 火病 |
| 247 | 793 | チョンの世論操作 |
| 248 | 795 | まさに朝鮮人。 |
| 249 | 797 | 面白い韓国系朝鮮民族だな？ |
| 250 | 798 | 何故こいつらの祖国韓国の米軍基地でデモやらないのか？ |

| No | スレッド | 関連フレーズ |
|---|---|---|
| 251 | 804 | ニュージャージーで韓人（コリアン）を含む売春婦が大量に摘発されたw |
| 252 | 805 | ほんと、朝鮮人って金金金！だな。 |
| 253 | 812 | 在日工作員が激怒すると大騒ぎｗｗｗ |
| 254 | 814 | 『　謝罪　と　日当　を　要求するニダ！　』 |
| 255 | 815 | 「のりこえねっと」などと称する特亜の間接侵略の為の不逞在日団体の共同代表たち |
| 256 | 818 | 外国人が日本の防衛拠点の整備を妨害してるんだ、捕まえて水責めにすべき。 |
| 257 | 819 | いかにも朝鮮人だな |
| 258 | 827 | 事実を指摘されて火病か。 |
| 259 | 834 | 公安はよ強制送還しろや！ |
| 260 | 836 | 辛淑玉、沖縄の活動家は在日コリアンが主導していると認める |
| 261 | 837 | こいつは北朝鮮つながりで公安が目つけてるから |
| 262 | 838 | あ、チョウセンヒトモドキかｗ |
| 263 | 839 | 朝鮮人っていつも激怒してるじゃん。 |
| 264 | 841 | 流石朝鮮人 |
| 265 | 843 | 日本人は日本国内の安全保障問題に、外国人が介入することを怒ってるよ。 |
| 266 | 846 | 朝鮮人には出ている模様 |
| 267 | 850 | 在日でも母国と同じこと言うんだねチョン公は |
| 268 | 852 | 立ち上がって「韓国に対する愛はないのかーーーーー！」って叫べばいいのに |
| 269 | 853 | チョンババア、日本で政治活動するのやめろ。 |
| 270 | 855 | 祖国韓国の米軍基地でデモやったら？ |
| 271 | 856 | 名誉の為に祖国に帰してやらんとねｗｗｗ |
| 272 | 857 | 彼ら自身の祖国韓国は戦争中だが、韓国系帰化チョンや在日は韓国の兵役就かず米軍基地デモだしな。 |
| 273 | 859 | チョンコ根性丸出しなのねw |
| 274 | 867 | この朝鮮ババア気持ち悪い |
| 275 | 869 | 韓国の兵役就かず米軍基地デモやっている帰化チョンや在日 韓国民団みたいなスパイテロリスト団体 |
| 276 | 870 | 捏造してファビョる、事実を突かれるとファビョる |
| 277 | 871 | 何故か帰化チョンや在日は日本では態度がでかく |
| 278 | 872 | なんでこのチョンババアが切れるん？ |
| 279 | 874 | このBABA、典型的なチョウセン人だよなあ(嘆 |
| 280 | 877 | 朝鮮民族右翼と朝鮮民族左翼の争いなんだろ |
| 281 | 879 | 何で外人が日本の国防に口出す業務やってるの？ |
| 282 | 880 | 日当のうえに賠償ももらうニダ |
| 283 | 886 | <ヽ｀∀｀>謝罪と補償を請求するﾆﾀﾞ |
| 284 | 891 | 愛は無いニカー！ |
| 285 | 892 | 問題なのは「なぜ韓国人、中国人が沖縄基地反対運動をしてるのか」って所だろ！！！ |
| 286 | 897 | 強制送還してもらいたい(´・ω・｀)辛子玉と信恵は |
| 287 | 899 | 金払って朝鮮人を沖縄に集めてたことがバレて相当都合悪かったんだねｗ |
| 288 | 902 | なぜ在日朝鮮人が日本の防衛基地建設を妨害するの？ |
| 289 | 903 | お前ら在日朝鮮人は日本人の敵だよ　さっさと半島に帰れ |
| 290 | 906 | どろぼう朝鮮人を日本から叩き出そう。 |
| 291 | 908 | チョン死ね |
| 292 | 910 | 朝鮮の売春婦みたいだな |
| 293 | 917 | コイツらのせいでまともな在日も嫌われる世の中になる。 |
| 294 | 920 | BPOは朝鮮人に汚染されていなかったのね |
| 295 | 921 | 武田邦彦「在日外国人の政治活動は違法」 |
| 296 | 933 | バカチョンの得意技『謝罪と賠償』 |
| 297 | 934 | またまた、在日韓国人が被害者面して金要求かよ、うんざりするなぁ |

## 5. おわりに

テロリスト呼ばわりされたことと同程度あるいはそれ以上に、人種差別の問題が原告を苦しめたことは、陳述書をみれば明らかである[51]。そこで本意見書では、「目的」と「効果」の両面から、「ニュース女子」の当該番組が持つ人種差別的性格について検討してきた。本件は、公共の電波を用いた放送が起こした事件であることに鑑み、戦略的人種主義という概念を用いて被告番組の内容を分析した。

本件番組の出演者は、原告に対して明らかな敵意を持っていたが、あからさまな人種差別表現を用いて原告を罵倒したわけではない。にもかかわらず、当該番組は高江ヘリパット建設反対運動を、「外国勢力の意を受けた原告らの活動」として提示し、それを原告の民族的属性と関連づけた。テロップなども用いて「韓国人たる原告」に執拗に言及したのは、人種差別的なストーリーを提示するのが制作上の方針だったことによる。このような番組の性格は、直接的には「保守派」のスポンサーや視聴者に対して、人種差別的なストーリーを提示することで番組を存続させようという戦略的人種主義にもとづいている。これは、視聴者の人種差別感情に訴えることで製作費を得ようという目的によっており、公共の電波を用いて差別を意図的に利用した番組を放映した点で、悪質だと評価せざるをえない。

その結果が、第 4 節でみた人種差別的効果である。被告 DHC テレビジョンは、ニュース女子＃92（2017 年 1 月 9 日）、＃101（2017 年 3 月 13 日）、虎ノ門ニュース（2021 年 9 月 1 日）で本件について繰り返し取り上げ、原告辛淑玉に対する攻撃をさらに誘発している。番組制作会社が、原告に対する人種差別的攻撃の噴出を認知していないはずがない。にもかかわらず、その後も本件を取り上げ続けていることから、本件番組の人種差別的効果に関して、被告には少なくとも未必の故意があったと評価しうる。

本件の持つ人種差別的効果で問題なのは、原告側が対抗手段をとるのが非常に難しいことにある。4 節の最後で述べたように、本件で原告が沈黙を貫けば、近隣諸国の悪意を受けて基地建設反対を主導するのは原告であるという人種差別的デマが定着してしまう。抗議をすれば、それに乗じて原告の民族的属性を標的とするヘイトスピーチの集中砲火を浴びることとなる。これは、在日コリアンは社会問題に関与せず息を殺して耐え忍べと強迫するに等しく、直接の被害者だけでなく在日コリアン全体が声を上げられなくなる沈黙効果をもたらす。さらに、抗議の声を上げた原告がトラブルメーカーとみなされることで、原告は他の在日コリアンからも疎外されることとなる。このように内外から攻撃を受けた結果、気丈さで知られる原告が鬱病を発症するまで追い込まれることとなった[52]。

こうした事件の再発を防ぐにはどうすればよいか。本件を人種差別であると司法が認定することで、人種差別的な番組が制作されないような抑止効果を持たせることが必要であると考える。本控訴審は、当該番組の人種差別的性格に対して司法判断を下す重要な場であり、その社会的影響の大きさを踏まえた審理を願うものである。

[1] 関連する主な著作として以下がある（樋口直人 2014; Higuchi, 2016a, 2018, 2020a, 2020b, 2021; 樋口ほか 2019; 小熊・樋口 2020）。
[2] 平成 10 年（ワ）332 号損害賠償請求事件判決（静岡地裁浜松支部、1999 年 10 月 12 日）。これは日本で人種差別撤廃条約が参照された初めての判決である。
[3] あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約、第 1 条第 1 項（外務省訳）。
[4] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件原告第 16 準備書面（東京民事第 5 部、2019 年 8 月 7 日）。
[5] 特に断りがない限り、本節の議論は樋口直人（2014）にもとづく。
[6] アカデミズムの世界では、「在日コリアン」という呼称が広く定着しているため、本意見書でも引用部分以外は在日コリアンという言葉を用いる。
[7] 生活保護に関しては、今なお不服申し立ての権利を持たないが、行政措置による準用の扱いで当初から適用されてきた。政治的な権利については、公務就任権、直接請求権の一部を除いては認められていない。
[8] 日本は、帰化申請者に対して改名を強要するなど、同化主義的な政策をとってきた。その意味で同化という言葉はネガティブな含意を伴うが、本稿では国際的な移民研究の動向に従い、「類似性が高まる過程」を記述する中立的な概念として同化を用いる（Alba and Nee, 2003）。
[9] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件原告陳述書（甲第 27 号証、東京民事第 5 部、2020 年 11 月 6 日）。
[10] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件第 9 回口頭弁論調書（東京民事第 5 部、2021 年 3 月 17 日）、18 頁における、被告（DHC テレビジョン）代理人から原告に対してなされた質問。
[11] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 27 号証での原告の陳述書による（東京民事第 5 部、2020 年 11 月 6 日）。
[12] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 23～25 号証（東京民事第 5 部）。
[13] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 19 号証（東京民事第 5 部）。
[14] 「ニュース女子」での上念司の発言（20 分 0 秒）に合わせて出されたテロップ（平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件判決、78 頁（東京民事第 5 部、2021 年 9 月 1 日）。
[15] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件判決、22-23 頁（東京民事第 5 部、2021 年 9 月 1 日）。
[16] 放送倫理検証委員会「東京メトロポリタンテレビジョン『ニュース女子』沖縄基地問題の特集に関する意見」放送倫理・番組向上機構[BPO]（放送倫理委員会決定第 27 号）、2017 年、1 頁。
[17] より詳しくは、平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、原告第 16 準備書面（東京民事第 5 部、2019 年 8 月 7 日）、10 頁以下を参照。
[18] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 13 号証（東京民事第 5 部）、4 頁。
[19] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 14 号証（東京民事第 5 部）、7 頁。
[20] 『毎日新聞』2021 年 6 月 23 日付。
[21] 産経デジタルが運営する iRONNA に吉田嘉明氏が寄せた手記（平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 14 号証）。
[22] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件判決、28 頁（東京民事第 5 部、2021 年 9 月 1 日）。
[23] 同 29 頁。
[24] 私が社会運動に関して刊行した著作として以下がある（樋口・松谷 2020; 久保田・樋口・矢部・高木 2008; 曽良中・長谷川・町村・樋口 2004; 大畑・成・道場・樋口 2004）。
[25] これは日米安保そのものへの反対ではなく、迷惑施設としての性格を持つ米軍基地の立地が沖縄に集中することが問題とされている。この点についてまともに検討せず、一足飛び

に日本の安全保障上の問題に結びつけるのは、あまりに粗雑な議論である。
[26] DHC テレビのホームページより（https://dhctv.jp/movie/100690/、2022 年 1 月 2 日閲覧）。
[27] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件判決、77-78 頁（東京民事第 5 部、2021 年 9 月 1 日）。
[28] 同 77 頁。
[29] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 27 号証（東京民事第 5 部）、8 頁における原告の陳述。
[30] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件判決、26 頁（東京民事第 5 部、2021 年 9 月 1 日）。
[31] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、丙第 26-2 号証（東京民事第 5 部）。
[32] テロップについては、平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件判決（東京民事第 5 部、2021 年 9 月 1 日）、78 頁より引用。
[33] DHC テレビのホームページより筆者計数（https://dhctv.jp/、2021 年 12 月 25 日閲覧）。「韓国問題／竹島・慰安婦」（第 3 回）、「朝鮮総連」（第 7 回）、「韓国で MERS 感染拡大」（第 11 回）、「折れた韓国との今後の付き合い方」（第 13 回）、「韓国“朴槿恵大統領一家”とは」（第 21 回）、「韓国 vs 北朝鮮」（第 23 回）、「日中韓首脳会談」（第 31 回）、「日韓慰安婦問題合意」（第 42 回）、「北朝鮮への制裁強化」（第 46 回）、「北朝鮮の新体制」（第 60 回）、「韓国次期大統領!?藩基文という男」（第 68 回）、「慰安婦問題」（第 73 回）、「韓国慰安婦問題の 10 億円拠出」（第 78 回）、「朝鮮半島は被害者なのか」（第 79 回）、「韓国大統領の悲惨な末路」（第 85 回）が該当する。
[34] 「沖縄基地問題」（第 5、27 回）、「沖縄米軍基地反対派の活動実態」（第 80 回）が該当する。
[35] たとえば以下の書籍でも、有力な方法としてネット上の言説分析が紹介されている（Ashe et al., 2021）。日本のネット上のヘイトスピーチに関する研究としては、たとえば以下がある（Fuchs & F. Schäfer, 2021; Hall, 2021; Schäfer, Evert & Heinrich, 2017）。
[36] 以下から検索できる（https://trends.google.co.jp/trends/?geo=JP）。図の縦軸の数値は絶対値ではなく、検索件数がもっとも多い月が 100 になるようにした相対的な値である。
[37] 「戦後体制の超克」と題するブログの記事、2016 年 12 月 10 日投稿（https://ameblo.jp/nihonkaigi-yachiyo/entry-12227318087.html）。パヨクとは、左翼を揶揄するネットスラングを指す。下線を付したもう 1 件は歌手のファンのための掲示板に対する書き込みで、放映後に書き込まれたものであるため、ここで言及する必要はないだろう。
[38] トラねこ日記と題するブログ、2017 年 2 月 16 日投稿（https://ryotaroneko.ti-da.net/e9353630.html）。
[39] ガジェット通信、2017 年 2 月 11 日付（https://news.infoseek.co.jp/article/gadget_1626233/）。
[40] 『琉球新報』2017 年 2 月 6 日付。
[41] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、甲第 17～26 号、第 29～44 号証（東京民事第 5 部）が該当。
[42] 数字、助詞、「言う」といった動詞などは内容と関係ないため、ここでは名詞に限定して出現頻度を測定した。頻出語の抽出にあたっては、KH Coder というソフトを用いている（樋口耕一 2014）。
[43] 表 2 で空欄になった部分にはさまざまな名詞が登場しており、たとえば左端にあたる 1 月 8 日のスレッドでの頻出語は、多い順に沖縄、韓国、活動、在日、日本、反対、朝鮮、新聞、東京となる。煩雑さを避けるため、ここでは沖縄、韓国、在日、朝鮮に限定して表示している。
[44] 「【沖縄問題】「沖縄ヘイト蔓延」名指しされた団体「辛淑玉を誹謗中傷する虚偽報道に対する抗議声明」を公表　東京新聞　[無断転載禁止]@2ch.net」（https://karma.5ch.net/test/read.cgi/seijinewsplus/1483885150/-100）。

[45] 関連する 2 ちゃんねるスレッドの最初の投稿で提示される情報源をみても、のりこえねっとが団体として虚偽報道に申し立てするとしか書かれていない（J-cast ニュースなどネットニュース、https://www.j-cast.com/2017/01/28289211.html?p=all）。
[46] 2 万円は拾ったという封筒に書かれていた金額であり、当該番組では日当 5 万円であるかのような表現がなされていた。その意味で、日当 2 万円という記述は正確ではないことを付言しておく。
[47] 1 月 30 日のスレッドは単なる例示として取り上げたもので、他のスレッドを取り上げたとしても結果は変わらない。
[48] https://daily.5ch.net/test/read.cgi/newsplus/1485724890/。
[49] 平成 28 年法律第 68 号「本邦街出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律」第 2 条。
[50] 令和 3 年（ネ）第 4284 号損害賠償等請求事件原告陳述書（甲第 63 号証、18 頁）。
[51] 令和 3 年（ネ）第 4284 号損害賠償等請求事件原告陳述書（甲第 63 号証）。
[52] 平成 30 年（ワ）第 24721 号損害賠償等請求事件、原告の診断書（甲第 48 号証、東京民事第 5 部、2021 年 5 月 21 日）。

文献

阿部小涼(2011)「繰り返し変わる――沖縄における直接行動の現在進行形」（『政策科学・国際関係論集』13 号）61-90 頁。
小熊英二・樋口直人編(2020)『日本は「右傾化」したのか』慶応義塾大学出版会。
大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編(2004)『社会運動の社会学』有斐閣。
久保田滋・樋口直人・矢部拓也・高木竜輔編(2008)『再帰的近代の政治社会学――吉野川可動堰問題と民主主義の実験』ミネルヴァ書房。
河野勝・西澤義隆(2019)「ヘイトスピーチ規制への賛否はどう決まるのか」（『中央公論』133 巻 4 号）166-180 頁。
曽良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編(2004)『社会運動という公共空間――理論と方法のフロンティア』成文堂。
長松奈美江(2021)「移民のメンタルヘルス――移住後のストレス要因と社会関係に注目して」（永吉希久子編著『日本の移民統合――全国調査からみる現況と障壁』）明石書店、163-185 頁。
韓東賢(2006)『チマ・チョゴリ制服の民族誌――その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎。
_____(2008)「社会的関係と身体的コミュニケーション――朝鮮学校のケンカ文化から」（『思想地図』1 号）345-375 頁。
樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析――内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
樋口直人(2014)『日本型排外主義――在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会。
_____(2015)「在特会による徳島県教組襲撃事件に対する意見書」（『徳島大学社会科学研究』29 号）209-238 頁。
_____(2021)「『余命ブログ』による弁護士大量懲戒請求事件に対する意見書」（『グローバル・コンサーン』3 号）291-306 頁。

_____ほか(2019)『ネット右翼とは何か』青弓社。
_____・松谷満編(2020)『3・11 後の社会運動――8 万人のデータからわかったこと』筑摩書房。
森啓輔(2016)「統治と挑戦の時空間に関する社会学的考察――戦後沖縄本島北部東海岸をめぐる軍事的合理性、開発、社会運動」一橋大学博士論文。
Alba, R. & V. Nee. 2003. *Remaking the American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration.* Harvard University Press.
Ashe, S. D. et al. ed. 2021. *Researching the Far Right: Theory, Method and Practice.* Routledge.
Brubaker, R. 1996. *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*. Cambridge University Press.
Fuchs, T. & F. Schäfer. 2021. "Normalizing Misogyny: Hate Speech and Verbal Abuse of Female Politicians on Japanese Twitter." *Japan Forum*, Vol.33, No.4, pp.553-579.
Hall, J. 2001. *Japan's Nationalist Right in the Internet Age: Online Media and Grassroots Conservative Activism.* Routledge.
Higuchi, N. 2016a. *Japan's Ultra-right.* Trans Pacific Press.
_____ 2016b. "Dynamics of Occupational Status among Koreans in Japan: Analyzing Census Data between 1980-2010." *Seoul Journal of Japanese Studies,* Vol.2, No.1, pp.1-25.
_____ 2018. "The Radical Right in Japan." *The Oxford Handbook of the Radical Right* ed. J. Rydgren, 681-697. Oxford University Press.
_____ 2020a. "When Hate Becomes Illegal: Legislation Processes of the Anti-Hate Speech Law in Japan." In *Hate Speech in Asia and Europe: Beyond Hate and Fear* eds. M. Kang, M.-O. Rivé-Lasan, W. Kim and P. Hall, 112-126. Routledge.
_____ 2020b. "The Pro-establishment Radical Right: Japan's Nativist Movement Reconsidered." In *Civil Society and the State in Democratic East Asia: Between Entanglement and Contention in Post-High Growth* eds. D. Chiavacci, S. Grano and J. Obinger, 117-140. Amsterdam University Press.
_____ 2021. "Japan's Postcolonial Hate Speech." In *Hate Speech in Japan: The Possibility of a Non-regulative Approach* eds. Y. Nasu and S. Higaki, 365-380. Cambridge University Press.
Klein, A. 2017. *Fanaticism, Racism, and Rage Online: Corrupting the Digital Sphere.* Palgrave Macmillan.
López, I. H. 2014. *Dog Whistle Politics: How Coded Racial Appeals have Reinvented Racism & Wrecked the Middle Class.* Oxford University Press.
Schäfer, F., S. Evert & P. Heinrich. 2017. "Japan's 2014 General Election: Political Bots, Right-Wing Internet Activism, and Prime Minister Shinzo Abe's Hidden Nationalist Agenda." *Big Data,* Vol.5, No.4, pp.1-16.

樋口直人（ひぐち　なおと）（早稲田大学人間科学学術院 / higuchinaoto@waseda.jp）

# 上智大学グローバル・コンサーン研究所活動報告（2021 年度）

## 1. 組織

※2022 年 3 月 31 日現在

| | | |
|---|---|---|
| 所長 | 下川 雅嗣 | 総合グローバル学部 総合グローバル学科 教授 |
| 副所長 | 三浦 まり | 法学部 地球環境法学科 教授 |
| 所員 | 稲葉 奈々子 | 総合グローバル学部 総合グローバル学科 教授 |
| | ホアン・アイダル | 神学部 神学科 教授 |
| | 幡谷 則子 | 外国語学部 イスパニア語学科 教授 |
| | 中野 晃一 | 国際教養学部 国際教養学科 教授 |
| | 澤田 稔 | 総合人間科学部 教授 |
| | 田村 梨花 | 外国語学部 ポルトガル語学科 教授 |
| | 田中 雅子 | 総合グローバル学部 総合グローバル学科 教授 |
| | 寺田 俊郎 | 文学部 哲学科 教授 |
| | 吉川 恵美子 | 外国語学部 イスパニア語学科 教授 |
| | 丸山 英樹 | 総合グローバル学部 総合グローバル学科　教授 |
| | 出口 真紀子 | 外国語学部 英語学科 教授 |
| | 岡本 菜穂子 | 総合人間科学部 看護学科 准教授 |
| 準所員 | | |
| | 濱田 江里子 | 立教大学コミュニティ福祉学部 准教授 |
| 客員所員 | | |
| | 阿部 るり | 文学部 新聞学科 准教授 |
| | 辰巳 頼子 | 清泉女子大学 文学部地球市民学科 准教授 |
| | 中野 佳裕 | 早稲田大学 地域・地域間研究機構 次席研究員 |
| | ワグナー ルイーズ クレア | パリ第 10 大学 博士課程 |
| | 田中 治彦 | 上智大学 名誉教授 |
| | 上條 直美 | 認定 NPO 法人開発教育協会 顧問 |
| | 堀越 耀介 | 東京大学大学院 教育学研究科 博士後期課程 |
| | 小田川 華子 | 東京都立大学 人文社会学部　非常勤講師 |
| 名誉所員 | | |
| | 保岡 孝顕 | 教皇庁正義と平和評議会 顧問 |
| 研究補助員 | | |
| | 菊地 了 | 哲学研究科 博士後期課程 |

## 2. 活動

※肩書等、当時のまま

**ソフィア哲学カフェ no. 19「姓（名前）」**

日時：2021 年 6 月 4 日（金）17:30-19:00

場所：オンライン開催

進行：堀越耀介（IGC 客員所員、東京大学）

**ソフィア哲学カフェ no. 20「スポーツ」**

日時：2021 年 7 月 16 日（金）17:30-19:00

場所：オンライン開催

進行：寺田俊郎（IGC 所員、上智大学）

**連続セミナー「地域発：脱グローバル経済の未来」**

**第 1 回「海でつながる地域づくり ── 山口県室積半島のコミュニティ経済」**

日時：2021 年 7 月 6 日（火）18:15-20:00

場所：オンライン開催

登壇者：中野佳裕（IGC 客員所員、早稲田大学）

木村明美（室積市場ん代表）

磯部登志恵（同副代表）

**三浦まり教授叙勲記念 トークイベント 「どう進める、女性・若者の政治参加」**

日時：2021 年 7 月 27 日（火）19:00-21:00

場所：オンライン開催

登壇者：三浦まり（IGC 所員、上智大学）

濱田江里子（IGC 準所員、立教大学）

**コロナ対策をジェンダー視点から評価する：現場からのリレートーク**

日時：2021 年 9 月 4 日（土）14:00-16:30

場所：オンライン開催

進行：三浦まり（IGC 所員、上智大学）

登壇者：大沢真理（東京大学名誉教授）

竹信三恵子（ジャーナリスト、和光大学名誉教授）

森崎めぐみ（俳優、全国芸能従事者労災保険センター理事長）

藤原千沙（法政大学大原社会問題研究所教授）

北仲千里（広島大学ハラスメント相談室准教授、NPO 法人全国女性シェルターネット共同代表）
中島かおり（助産師、特定非営利活動法人ピッコラーレ代表理事）
小松廉則（大阪府関係職員労働組合委員長）
稲葉奈々子（IGC 所員、上智大学）
町田ひろみ（保育士）
佐々木貞子（DPI 女性障害者ネットワーク、DPI 障害者差別解消ピアサポート相談員）

**ソフィア哲学カフェ no. 21「多様性」**
日時：2021 年 10 月 22 日（金）17:30-19:00
場所：オンライン開催
進行：寺田俊郎（IGC 所員、上智大学）

オンライン上映会「カランコエの花」
日時：2021 年 10 月 30 日（土）14:00-16:00
場所：オンライン開催
登壇者：出口真紀子（IGC 所員、上智大学）

**パネルディスカッション**
**社会的養護出身の若者の困窮リスクと支援制度～住まい・仕事・支援者とのつながり～**
日時：2021 年 10 月 30 日（土）14:00-16:00
場所：オンライン開催
登壇者：前川礼彦（自立援助ホーム湘南つばさの家ホーム長）
矢野茂生（NPO 法人おおいた子ども支援ネット専務理事・事務局長）
小田川華子（IGC 客員所員、公益社団法人ユニバーサル志縁センター事務局長）
濵田江里子（IGC 準所員、立教大学コミュニティ福祉学部准教授）

**連続セミナー「地域発：脱グローバル経済の未来」**
**第 2 回「都会と田舎の壁を超える里山コモンズ―房総半島・釜沼集落の共感経済」**
日時：2021 年 11 月 6 日（土）
場所：オンライン開催
登壇者：林良樹（NPO 法人うず代表理事、一般社団法人小さな地球代表理事）
下郷さとみ（ジャーナリスト）

**連続企画「社会のなかのカリタス」**

**第 1 回 カリタス学とは何か？**

日時：2021 年 11 月 18 日（木）18:00-19:30

場所：オンライン開催

登壇者：クラウス・バウマン（ドイツ・フライブルク大学神学部教授）

**第 41 回　IGC-SSRI 国際シンポジウム**

**「差別と心理学：マイクロアグレッションを理解し、日本社会の変革につなげる」**

日時：2021 年 12 月 4 日（土）9:30-16:10

2021 年 12 月 5 日（日）9:30-16:00

場所：オンライン開催

基調講演者：リサ・スパニエルマン

（アリゾナ州立大学カウンセリング・カウンセリング心理学部教授）

モニカ・ウィリアムズ（オタワ大学社会科学部准教授）

講演者：金友子（キムウヂャ）（立命館大学国際関係学部准教授）

朴希沙（パクキサ）（立命館大学人間科学研究科）

朴利明（パクリミョン）（在日本朝鮮人人権協会）

上川多実（BURAKU HERITAGE メンバー）

森永康子（広島大学大学院人間社会科学研究科教授）

中村　正（立命館大学産業社会学部/人間科学研究科教授）

朴希沙（立命館大学人間科学研究科）

丸一俊介（ZAC:在日コリアンカウンセリング＆コミュニティセンター所長）

中島潤（NPO LGBT 家族をつなぐ会、レインボーすみだ）

ケイン樹里安（昭和女子大学特命講師）

**ブックフェア「マイクロアグレッション～差別と心理学～」**

期間：11 月 2 日（火）～12 月 17 日（金）

場所：上智大学中央図書館 1F 展示スペース

**LGBTQ+と居場所**

日時：2021 年 12 月 22 日（水）17:30-19:00

場所：四ツ谷キャンパス 6 号館 401 号室＋Zoom

登壇者：鈴木茂義（プライドハウス東京レガシー）

千代田区男女共同参画センターMIW 職員

遠藤真之介

（上智大学教職協働「LGBTQ へのダイバーシティ構築のための研究」チーム共同代表）
学内サークル Gender Equallity for Sophia　メンバー

**『映画 太陽の子』上映会・トークイベント**
**～過去を描く映画のレンズを通して、現代の核兵器について考える～**
日時：2021 年 12 月 19 日（日）13:30-17:00
場所：四ツ谷キャンパス 6 号館 101
登壇者：黒崎博さん（監督）
浜野高宏さん（プロデューサー）
徳田悠希（上智大学２年、上映会実行委員）
中村涼香（上智大学３年、上映会実行委員・司会）

**オンラインセミナー**
**みんなでつくる「被災者とコミュニティ」を中心にした支援入門！スフィア・スタンダード**
**～人道支援の国際基準を知る～**
日時：2022 年 1 月 15 日（土）13:30-16:00
場所：オンライン開催
ファシリテーター：勝井裕美（シャプラニール・ネパール事務所長）
福田紀子（IGC 職員、スフィア・トレーナー）
担当所員：岡本菜穂子（IGC 所員、上智大学総合人間科学部）

**ソフィア哲学カフェ no. 22「映画『太陽の子』をめぐって」**
日時：2022 年 1 月 17 日（月）17:30-19:00
場所：オンライン開催
進行：寺田俊郎（IGC 所員、上智大学）

**連続セミナー「地域発：脱グローバル経済の未来」**
**第 3 回「現代的共同体のデザイン」内山節 講演会**
日時：2022 年 1 月 19 日（水）18:30-20:30
場所：オンライン開催
登壇者：内山節（哲学者、NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

**シネマ哲学カフェ「ドキュメンタリー映画『ハーフ（Hafu）』」**
日時：2022 年 2 月 24 日（月）17:30-19:30

場所：オンライン開催
進行：寺田俊郎（IGC 所員、上智大学）

**連続企画「社会のなかのカリタス」**
**第 2 回 人道危機後の赦しと信仰**
日時：2022 年 3 月 3 日（木）18:00-19:30
場所：オンライン開催
登壇者：デオグラシアス・マルフキロ（カトリック司祭、Rapred-Girubuntu 代表、
ドイツ・フライブルク大学研究員）
アンドリヤナ・グラヴァス（医師、ドイツ・フライブルク大学研究員）

『グローバル・コンサーン』第 4 号

ISSN 2434-5814

2022 年 3 月 31 日発行(年 1 回)

編集代表者 澤田稔

発行所　上智大学グローバル・コンサーン研究所

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話 03(3238)3023

表紙デザイン：小田マサノリ